

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第4集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 3

箱崎遺跡

—HZK1802・1803・1805・1902 地点—



2020

九州大学埋蔵文化財調査室

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第4集

九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 3

箱崎遺跡

—HZK1802・1803・1805・1902 地点—



2020

九州大学埋蔵文化財調査室



HZK1805地点 石積み遺構 SF00



HZK1805地点 大溝 SD11・石積み遺構 SF00



HZK1802地点 石積み遺構 SF130・大溝 SD131



HZK1803地点 石積み遺構 SF01



HZK1803地点 大溝 SD01・石積み遺構 SF01



HZK1902地点 石積み遺構 SF03・SF05・SF02

序 文

2015年に九州大学統合移転事業の一環として箱崎キャンパス売却予定地の埋蔵文化財調査が必要となり、助教2名を配置し九州大学埋蔵文化財調査室を再整備して、箱崎キャンパスでの埋蔵文化財調査を実施することとした。その後、2017年度からは整理調査を専業とする学術研究員1名を配置し、発掘報告書を刊行してきた。また、2019年度からは、箱崎キャンパス売却予定地の埋蔵文化財調査を加速させるため、助教1名を増員して助教3名体制で発掘調査を実施し、2021年度内に箱崎キャンパス売却予定地の埋蔵文化財調査終了を目指している。

この間、『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡』（九州大学埋蔵文化財調査室報告第2集）の発掘報告書を2019年6月に刊行することにより、HZK1604地点からHZK1805地点までの石積み遺構ならびに大溝の出土地点を面的に繋ぎ、国の指定史跡「元寇防塁」の追加指定が可能になった。2016年の旧中央図書館南のHZK1603地点の発掘調査以来、これまで不明であった箱崎地区の元寇防塁を発見できたとともに、元寇防塁が大溝を伴いながら箱崎キャンパス一帯に存在する可能性が高まった。その中でも、旧中央図書館南地点から旧理学部2号館前南地点まで元寇防塁の石積み遺構が点的に存在することが明らかになり、それらを面的に国指定史跡として保護できたことは、九州大学埋蔵文化財調査室を再整備した最大な成果である。この度の発掘調査報告書は、国指定史跡として追加指定した地点の内、HZK1802地点、HZK1803地点、HZK1805地点、HZK1902地点の発掘調査の成果をまとめたものであり、遺跡の価値を周知できるものとなるであろう。

2020年度には、旧中央図書館北側の旧農学部地区の発掘調査を行い、元寇防塁遺構の探索を行うとともに、地蔵松原元寇防塁遺跡とどのように接合していくのかを確かめて行きたい。また、国指定史跡「元寇防塁」の追加指定範囲が、さらに増えることを期待したい。

令和2（2020）年1月25日

九州大学埋蔵文化財調査室長
宮本 一夫

例 言

1. 本書は、九州大学箱崎キャンパス跡地において2018・2019年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の成果報告書である。「跡地」までが正式名称だが、本書では煩瑣を避け、「箱崎キャンパス」と表記する。
2. 本書には、2018年度に実施した HZK1802地点、HZK1803地点、HZK1805地点ならびに、2019年度に実施した HZK1902地点の調査成果を掲載する。
3. 調査主体は九州大学埋蔵文化財調査室である。
4. 発掘調査・整理作業の担当者・参加者は、それぞれの報告箇所に記した。
5. 検出遺構および土層の実測は三阪一徳、齋藤瑞穂、福永将大が行い、株式会社パソコが測量支援を行った。製図は三阪、齋藤、福永、石井若香業が行った。
6. 出土遺物の実測および製図は、谷直子と福永が行った。
7. 遺構写真は三阪、齋藤、福永が、遺物写真は福永が撮影した。
8. 本書で使用した地形図は、2020年1月に調製した電子地形図25000「福岡」である。
9. 遺構図等における X・Y の数値は平面直角座標第Ⅱ系（原点：北緯33度0分0秒、東経131度0分0秒）における座標値（m）を、方位は同座標系の座標北を表す。標高値は東京湾平均海面を基準とする海拔高（m）で表す。
10. 土層の色調は、『新版標準土色帖』（2010年度版、農林水産省農林水産技術会議事務局監修／財団法人日本色彩研究所色票監修）に準拠して表現した。
11. 本書で使用する遺構記号は、次のとおりである。
SD：溝、SF：石積み、SK：土坑・火葬土坑、SP：ピット、SX：その他性格不明遺構等、
ND：自然流路・川跡
12. 本書の執筆は宮本一夫、三阪、齋藤、福永、谷が分担し、担当部分を末尾に記した。
13. 樹種の同定と年代測定は株式会社パレオ・ラボに依頼し、第Ⅵ章にその結果を記載した。また、舟橋京子氏（本学比較社会文化研究院）・米元史織氏（本学総合研究博物館）・石川健氏（埋蔵文化財調査室）からは出土した人骨の整理・分析結果を、足立達朗氏（本学アジア埋蔵文化財研究センター）には岩石学的分析の成果を、岩永省三氏（本学総合研究博物館）には元寇防塁に関わる学史的検討の成果をそれぞれ御寄稿いただいた。これらも、第Ⅵ章に記載した。
14. 表紙デザインは、石井が担当した。
15. 成果の一部は、2019年1月発行の『九州大学アジア埋蔵文化財研究センターニュースレター』No.18、6月発行の『九州大学埋蔵文化財調査室報告』第2集、11月発行の『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』で速報されているが、本書をもって正式報告とする。数値等の事実記載に齟齬がある場合は、本書を正とする。
16. 本書に掲載した調査記録・写真および出土遺物は、九州大学埋蔵文化財調査室が収蔵保管する。
17. 発掘調査・整理作業にあたり、次の方々・部局から御指導・御教示ならびに格別なる御高配をたまわった。御芳名を記して、謝意を表する次第である（敬称略、五十音順）。
赤坂 亨、浅野啓介、足立達朗、板倉有太、井上 晋、井上満子、岩永省三、内海泰弘、大塚紀直、大庭康時、近江俊秀、笠松金次、片桐昭彦、川西宏幸、木下尚子、藏富士寛、齋藤慶史、佐伯弘次、下山正一、白石典之、末次大輔、普波正人、杉原敏之、田代和則、中尾祐太、舟橋京子、堀 賀貴、本田浩二郎、宮地聡一郎、松崎友理、桃崎祐輔、安田 稔、矢田俊文、米元史織、九州大学施設部、九州大学統合移転推進部、文化庁、福岡県教育庁、福岡市文化財活用部埋蔵文化財課、齋藤友里恵
18. 本書の編集は、宮本の監修のもと齋藤が担当した。

目次

巻頭図版	
序文	
例言	
目次	
挿図・表目次	
写真図版一覧	

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について	
1. 2019年度埋蔵文化財調査の概要	1
2. 元寇前夜の北部九州・概観	7
3. 元寇時における箱崎の諸相	11
II HZK1902地点（中央図書館前南地点第4次調査）	
1. 調査の経緯	19
2. 遺構と出土遺物	20
3. 小 結	25
III HZK1803地点（中央図書館前南地点第3次調査）	
1. 調査の経緯	27
2. 層 序	31
3. 遺構と遺物	32
4. 小 結	39
IV HZK1802地点（理学部二号館前南地点第2次調査）	
1. 調査の経緯	42
2. 層 序	44
3. 遺構と遺物	48
4. 小 結	66
V HZK1805地点（理学部二号館前南地点第3次調査）	
1. 調査の経緯	74
2. HZK1805地点の遺跡形成プロセス	76
3. 防塁廃絶後の遺構と遺物	79
4. 元寇防塁	91
5. 防塁築造以前	114
6. 小 結	115
VI 分析と考察	
箱崎遺跡 HZK1803・1805地点出土炭化材の樹種同定	小林 克也 121
HZK1803・1805地点の年代測定結果	パレオ・ラボ AMS年代測定グループ 125
箱崎遺跡 HZK1805地点出土人骨について	舟橋 京子・米元 史織・石川 健 135
箱崎遺跡出土礎石の岩石学的分析	足立 達朗 139

中山平次郎収集の元寇防塁構築石材の岩石学的分析……………	足立 達朗	145
中山平次郎の元寇防塁踏査と石材収集……………	岩永 省三	151
箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論……………	岩永 省三	164
Ⅶ 箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題		
1. 調査の成果と到達点……………		175
2. 文永の役の経過と戦役後の防衛戦略……………		176
3. 裏加佐小考……………		178
4. 箱崎先端部の石築地と律宗……………		188
Ⅷ 調査のまとめ ……………		196

写真図版
報告書抄録

挿図・表目次

I 箱崎遺跡について			
第1図 箱崎遺跡とその周辺……………	2	第19図 HZK1803地点 ND03出土遺物……………	37
第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド……………	4	第20図 HZK1803地点遺構外出土遺物(1)……………	38
第3図 2019年度の発掘調査地点……………	6	第21図 HZK1803地点遺構外出土遺物(2)……………	39
第4図 九州における守護の配置変遷……………	8	第4表 HZK1803地点出土遺物観察表……………	40
第5図 箱崎遺跡群における墨書陶磁器の分布状況……………	10	IV HZK1802地点	
第6図 箱崎遺跡群における境土の分布状況……………	12	第22図 HZK1802地点全体図……………	43
第7図 博多の埋め立てと都市の拡大……………	13	第23図 HZK1802地点調査区壁面断面図……………	45
第8図 元寇防塁の位置と分担図……………	14	第24図 HZK1802地点 SF130平面・立面図……………	49
第9図 箱崎地区の元寇防塁の構造模式図……………	15	第25図 HZK1802地点出土遺物(1)……………	50
第1表 2019年度の埋蔵文化財調査……………	5	第26図 HZK1802地点 SD131平面図……………	52
II HZK1902地点		第27図 HZK1802地点出土遺物(2)……………	53
第10図 HZK1902地点全体図……………	20	第28図 HZK1802地点 SK101～SP108平面・断面図……………	55
第11図 HZK1604地点 SF03・HZK1902地点 SF05・HZK1603地点 SF02遺構平面・立面および土層断面図……………	23	第29図 HZK1802地点 SK109～SP116・SK118・SK119平面・断面図……………	56
第12図 HZK1902地点出土遺物……………	25	第30図 HZK1802地点 SK117・SK120・SK121・SP123～SP125平面・断面図……………	57
第2表 HZK1604地点 SF03・HZK1902地点 SF05・HZK1603地点 SF02築石観察表……………	22	第31図 HZK1802地点 SD122・SP126・SX127・SP128・SX201・SK202平面・断面図……………	58
第3表 HZK1902地点出土遺物観察表……………	25	第32図 HZK1802地点出土遺物(3)……………	59
III HZK1803地点		第33図 HZK1802地点出土遺物(4)……………	61
第13図 HZK1803地点全体図……………	28	第34図 HZK1802地点出土遺物(5)……………	62
第14図 HZK1803地点サブトレンチ土層断面図……………	29	第35図 HZK1802地点出土遺物(6)……………	63
第15図 HZK1803地点 SF01・SX01平面・立面図……………	33	第36図 HZK1802地点出土遺物(7)……………	64
第16図 HZK1803地点 SD01平面図……………	34	第37図 HZK1802地点出土遺物(8)……………	65
第17図 HZK1803地点 SD01出土遺物……………	35	第5表 HZK1802地点の放射性炭素年代測定結果……………	47
第18図 HZK1803地点 SD02・ND03平面・断面図……………	35	第6表 HZK1802地点遺構観察表……………	59
		第7表 HZK1802地点出土遺物観察表……………	67

V HZK1805地点					
第38図	HZK1805地点石積み確認面遺構分布図	75	第68図	分析資料の岩石タイプの判別図	142
第39図	HZK1805地点石積み埋没進行面遺構分布図	77	第69図	分析資料から抽出したジルコンのコンコーディア図	142
第40図	HZK1805地点SK08・09周辺出土遺物	80	第70図	中国南東部ににおける花崗岩類の分布	143
第41図	HZK1805地点SP01・SP02・SK04・SP05・SK06平面・断面図	82	第71図	分析資料の顕微鏡写真	146
第42図	HZK1805地点SK04・SK06出土遺物	82	第72図	TAS区分図にプロットした分析資料の全岩化学組成	148
第43図	HZK1805地点SK12・SK14平面・断面図	83	第73図	地球化学的判別図にプロットした分析資料の全岩化学組成	148
第44図	HZK1805地点SK03平面・断面図および出土遺物	83	第74図	元寇防塁の位置と周辺地域の地質図	149
第45図	HZK1805地点SK07平面・断面図および出土遺物	84	第75図	博多から多々良川に至る地域の元寇防塁推定線	152
第46図	HZK1805地点SK10平面・断面図および出土遺物	86	第76図	伊崎から長垂山に至る地域の元寇防塁推定線	153
第47図	火葬土坑の類別	88	第77図	中山平次郎採集の防塁石材	158
第48図	HZK1805地点SD13・SD15平面・断面図	90	第78図	元寇防塁推定線の変更	165
第49図	HZK1805地点SD13・SD15出土遺物	91	第79図	工学部及び工学部南外の元寇防塁推定線	167
第50図	HZK1805地点元寇防塁全体図	92	第80図	医学部内の元寇防塁推定線	169
第51図	HZK1805地点SF00平面・立面図	93	第81図	福岡県伊達郡国見町阿津賀志山防塁	172
第52図	HZK1603地点SF01平面・立面・断面図	102	第10表	箱崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果	121
第53図	HZK1805地点SF00周辺出土遺物	103	第11表	箱崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧	124
第54図	HZK1805地点SD11断面図	105	第12表	測定試料および処理	129
第55図	HZK1805地点トレンチ4出土遺物	108	第13表	放射性炭素年代測定および暦年校正の結果	130
第56図	HZK1805地点トレンチ7出土遺物①	110	第14表	礎石石材の全岩化学組成	141
第57図	HZK1805地点トレンチ7出土遺物②	111	第15表	中山平次郎採取石材の全岩化学組成	147
第58図	HZK1805地点トレンチ7および周辺の遺物	112	VI 箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題		
第59図	HZK1805地点トレンチ6出土遺物	113	第82図	元寇防塁生の松原地区	179
第8表	HZK1805地点SF00築石観察表	101	第83図	相田(1934)・相田(1958)が参照し得た「遺蹟による石築地の知識」	182
第9表	HZK1805地点出土遺物観察表	117	第84図	HZK1803・1805地点における防塁の構造	185
VI 分析と考察			第85図	春日権現験記絵にみられる挿物の構造	187
第60図	箱崎遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真	122	第86図	箱崎キャンパスと博多遺跡群の元寇防塁正面観	188
第61図	マルチプロット図	127	第16表	表加佐に関する言説とその系譜	180
第62図	暦年校正結果(1)	132	第17表	「日葡辞書」による関係語句の意味	187
第63図	暦年校正結果(2)	133	VII 調査のまとめ		
第64図	暦年校正結果(3)	134	第87図	箱崎キャンパスの元寇防塁遺構	197
第65図	HZK1702地点出土の礎石	139	第88図	追加指定範囲	198
第66図	分析対象資料の顕微鏡写真	140			
第67図	SiO ₂ (Na ₂ O+K ₂ O)に基づく火成岩の分類				

写真図版一覧

巻頭図版1	HZK1805地点SF00 HZK1805地点SD11・SF00	巻頭図版3	HZK1803地点SD01・SF01 HZK1902地点SF03・SF05・SF02
巻頭図版2	HZK1802地点SF130・SD131 HZK1803地点SF01	写真図版1	HZK1902地点1 (1)石積み遺構SF03/(2)石積み遺構SF05

	／(3)石積み遺構 SF05博多湾側堆積状況	写真図版16	HZK1805地点7 (19) (20)トレンチ4 大溝 SD11／(21)ト レンチ4 自然流路 ND18
写真図版2	HZK1902地点2 (4) (5)石積み遺構 SF05／(6)石積み遺構 SF02	写真図版17	HZK1805地点8 (22) (23)トレンチ7 大溝 SD11／(24)ト レンチ6 大溝 SD11・自然流路 ND16
写真図版3	HZK1803地点1 (1)調査区全景／(2)小礫集中 SX01・石積 み遺構 SF01／(3)基底石と小礫集中とのレ ベル差	写真図版18	HZK1805地点9 (25)大溝 SD11の検出／(26)大溝 SD11／ (27)調査区全景
写真図版4	HZK1803地点2 (4)サブトレンチ西側断面／(5)サブトレン チ中央部断面／(6)サブトレンチ中央部大 溝 SD01断面	写真図版19	HZK1805地点10 (28)ビット SP01／(29)ビット SP02／(30) ビット SP05／(31)土坑 SK04／(32)土坑 SK06／(33)土坑 SK12／(34)土坑 SK14／ (35)溝 SD13
写真図版5	HZK1803地点3 (7)石積み遺構 SF01検出状況／(8)石積み 遺構 SF01／(9)大溝 SD01／(10)自然流路 ND03検出状況／(11)溝 SD02／(12)自然 流路 ND03／(13)銭貨出土状況／(14)土師 器伏銅出土状況	写真図版20	HZK1805地点11 (36)溝 SD15／(37) (38)火葬土坑 SK03
写真図版6	HZK1802地点1 (1)博多湾側から見た石積み遺構 SF130・ 小礫集中 SX129／(2)石積み遺構 SF130／ (3)石積み遺構の後背	写真図版21	HZK1805地点12 (39) (40)火葬土坑 SK07／(41)火葬土坑 SK10
写真図版7	HZK1802地点2 (4) (5)調査区北壁断面／(6)調査区南壁断 面	写真図版22	HZK1902地点・HZK1803地点出土遺物 第12図1・3／第17図1～第20図6
写真図版8	HZK1802地点3 (7) (8) (9)調査区南壁断面	写真図版23	HZK1803地点・HZK1802地点出土遺物 第20図5～第21図4／第25図1～10
写真図版9	HZK1802地点4 (10)調査区北壁断面／(11) (12)調査区南壁 断面／(13)溝 SD122／(14) (15)石片散布 SX127／(16)第1遺構面／(17)調査区全景	写真図版24	HZK1802地点出土遺物2 第25図11～第32図3
写真図版10	HZK1805地点1 (1) (2)石積み遺構 SF00・礫散布 SX08 (上層)／(3)石積み確認面	写真図版25	HZK1802地点出土遺物3 第32図4～第33図13
写真図版11	HZK1805地点2 (4)石積み前面の地積／(5)礫散布 SX08・ 09と伏銅／(6)埋没進行面	写真図版26	HZK1802地点出土遺物4 第33図14～第34図4
写真図版12	HZK1805地点3 (7) (8) (9)石積み遺構 SF00	写真図版27	HZK1802地点出土遺物5 第34図5～第36図5
写真図版13	HZK1805地点4 (10) (11)石積み遺構 SF00／(12)茶石の落下	写真図版28	HZK1802地点出土遺物6 第36図7～第37図11
写真図版14	HZK1805地点5 (13) (14) (15)石積み遺構 SF00	写真図版29	HZK1805地点出土遺物1 第40図1～7
写真図版15	HZK1805地点6 (16) (17) (18)石積み遺構 SF00	写真図版30	HZK1805地点出土遺物2 第40図6～第46図4
		写真図版31	HZK1805地点出土遺物3 第45図4～第55図6
		写真図版32	HZK1805地点出土遺物4 第53図12～第56図5
		写真図版33	HZK1805地点出土遺物5 第56図6～第57図11
		写真図版34	HZK1805地点出土遺物6 第58図1～第59図15

I 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

1. 2019年度埋蔵文化財調査の概要

(1) 2019年度の体制

九州大学埋蔵文化財調査室では、九州大学のキャンパス統合移転事業にともなって、箱崎キャンパス¹⁾に残る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を進めている。

箱崎キャンパスは、博多湾と、同湾に注ぐ宇美川との間に発達した砂州の先端に建つ。すでに100次を越えた福岡市文化財活用部の発掘調査は、この地で砂礫とともに積み重なった先人の活動ぶりをいまに甦らせてきた。箱崎遺跡の名で知られるこの一帯には筥崎宮・筥崎宮寺を中核とする都市があったが、発掘調査の成果がその実像をいっそう立体的に復原しつつある。

箱崎キャンパスは筥崎宮の北方800mの地に存するが、すぐ南で中世前半代の木棺墓や井戸や貝塚が検出されており（今井編 2010、本田 2004、2010）、キャンパス内まで遺跡が達するであろうことはもとより予測されていた。そうして2012年11月、福岡市文化財部（当時）が、箱崎キャンパス処分後の跡地利用を見据えて範囲確認調査を実施した結果、南側エリアに包蔵地が広がっていることが確実なところとなる。その結果を受けて、九州大学は埋蔵文化財調査室を再編し、研究教育機関としての社会的責任を果たしていく方針を策定したのであった²⁾。

以来、2016年度に3地点、2017年度に6地点、2018年度に5地点の本調査が実施されている。これらの調査で、中世箱崎遺跡の北縁部分や近世の墓地（宮本ほか 2019、齋藤ほか 2019）、そしてキャンパスを縦貫すると推測されていた元寇防塁が姿を現すに到った（福田・森編 2018、三阪・谷編 2019）。2019年度は、2018年9月のキャンパス移転完了を経て更地化が加速し、発掘作業を2021年度中に終了する為、助教1名を増員し、3名体制で発掘調査を行うこととした。その為、4月に福永将大を助教として採用した。2019年度の九州大学箱崎地区の埋蔵文化財調査は次の体制で実施することになった。

九州大学埋蔵文化財調査委員会

委員長	安浦 寛人	理事・副学長
副委員長	宮本 一夫	副学長
委員	坂井 猛	副理事
	佐伯 弘次	人文科学研究院長
	和田 裕文	理学研究院長
	中村 誠司	歯学研究院長
	中野 等	比較社会文化研究院長
	中島 英治	総合理工学研究院長
	岩永 省三	総合研究博物館教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	田尻 義之	比較社会文化研究院准教授
	清廣 哲之	総務部長
	佐藤 哲康	財務部長

1 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第1図 箱崎遺跡とその周辺 (自：25000電子地形図「福岡」を改変)

山本 聖一郎	施設部長
中本 浩司	統合移転推進部長

九州大学埋蔵文化財検討ワーキンググループ

WG長	岩永 省三	総合研究博物館教授
委員	宮本 一夫	人文科学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室運営委員会

委員長	宮本 一夫	埋蔵文化財調査室長
委員	岩永 省三	総合研究博物館教授
	坂上 康俊	人文科学研究院教授
	佐伯 弘次	人文科学研究院教授
	堀 賀貴	人間環境学研究院教授
	溝口 孝司	比較社会文化研究院教授
	辻田 淳一郎	人文科学研究院准教授
	田尻 義了	比較社会文化研究院准教授

九州大学埋蔵文化財調査室

室長	宮本 一夫	
助教	三阪 一徳	
	齋藤 瑞穂	
	福永 将大	
学術研究員	石川 健	
	谷 直子	(宮本一夫・齋藤瑞穂)

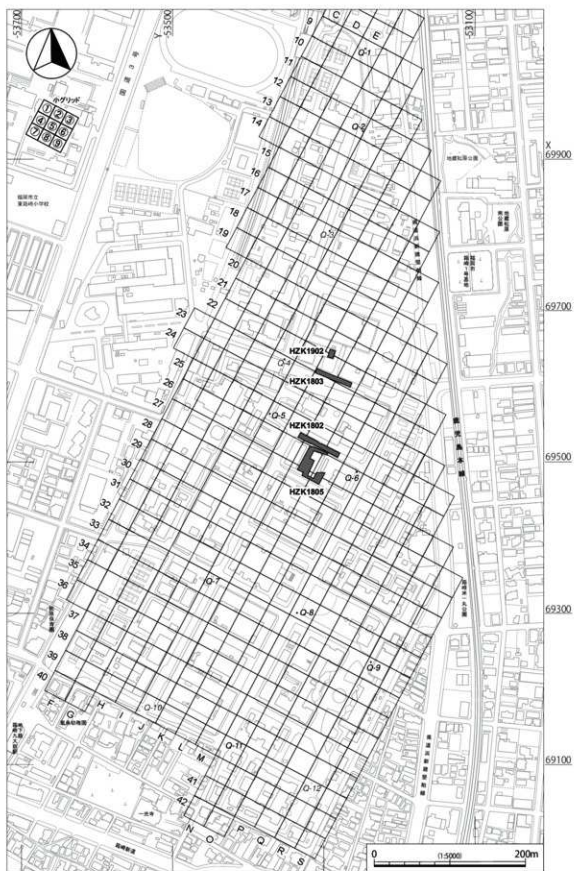
(2) 調査対象範囲と調査地点

調査の対象となるのは箱崎キャンパス東側の、理系地区と呼ばれたエリアである(第2図)。この範囲にはすでに、2級基準点3点(Q-1、Q-10、Q-12)と、3級基準点9点(Q-2、Q-3、Q-4、Q-5、Q-6、Q-7、Q-8、Q-9、Q-11)が確保されており、今年度の埋蔵文化財調査も、これらを用いて位置の正確な記録につとめた。

この理系地区に、西鉄貝塚駅の北東に原点をおく30mメッシュの大グリッドが設定されている。グリッドは、座標北から東に27.767385°傾いた縦のラインと、それに直交する横のラインとで形作られ、原点から順に東へA～Sの記号を、南へ1～42の数字をあたえている。調査を行う地点の平面位置は、この記号と数字とを組み合わせた大グリッド名で把握されるわけである。

大グリッドは10mメッシュの小グリッド9つに分割される。北西を起点として上段に①・②・③区を設け、同じく中段に④・⑤・⑥区を、下段に⑦・⑧・⑨区をそれぞれ置く。以下、位置を説明する場合、R36-⑨区、R37-③区のように表現することを諒とされたい。

I 箱崎道路—九州大学箱崎キャンパス地区—について



第2図 九州大学箱崎キャンパス 発掘調査グリッド

調査地点名はこれまで、箱崎遺跡九州大学箱崎キャンパス地区の略号 HZK を頭文字とし、事業年度の下 2 桁と、各年度の調査番号 2 桁の計 4 桁からなる名称をあたえている。この慣例にならって、2019年度最初の新規調査地点を HZK1901地点と呼ぶ。また、2018年度までは解体前の建物群としての位置関係を別称として添えることで、学内関係部署や関心ある識者の便を図ってきた。これも踏襲することとして、HZK1901地点の別称を工学部二号館地点第2次調査とする。

(3) 箱崎キャンパスにおける2019年度の埋蔵文化財調査

2019年度の実績は、工事立会17件、試掘調査16件、本調査7件である³⁾。

試掘調査 試掘調査は、元寇防塁ラインの特定と遺存状況の把握を目的としたものがほとんどで、本書第三章で報告される HZK1803地点 (J22・K22区) と、キャンパスに隣接する国指定史跡元寇防塁地蔵松原地区⁴⁾ (昭和六年文部省告示第百十六号) との間が主な対象となった。キャンパスの北半にあたる。

このうち、J21・22区と I19区で実施した試掘調査では、元寇防塁に関わる遺構が新たに発見された。J21・22区では2016年度に HZK1603・1604地点を調査し、両地点を縦断する石積み列を検出していたが (福田・森編 前掲)、この時点では両地点間に使用中の建物があったため、建物部分の遺存状態は明らかでなかった。今般、上屋の解体を経て試掘調査を実施した結果⁵⁾、床下部分から石積み遺構の一部が検出されるに到る。次章で報告する HZK1902地点は、この試掘調査の結果を受けて9月に行った本調査である。

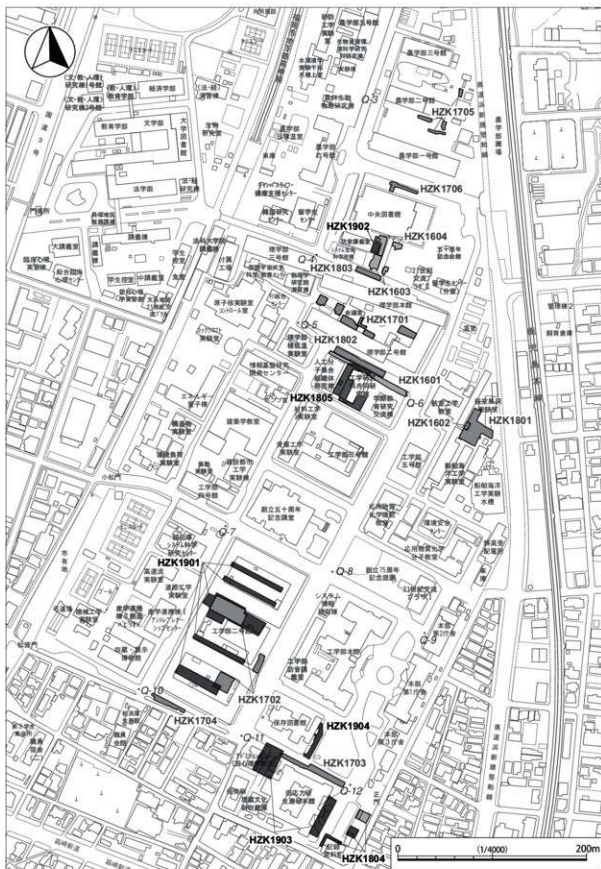
I19区でも、2017年度の HZK1706地点で石積み遺構を確認していた。同地点に北接する道路部分で試掘調査を実施した結果、16m 超の石積み列が姿を現した⁶⁾。

本調査 (第1表) 2018年度に着手した HZK1805地点 (理学部二号館南前3次、本書第V章) の調査を5月に、HZK1804地点 (記録資料館) の調査を7月に了え、6月から新しく HZK1901地点 (工学部二号館2次) の調査を開始した (第3図)。この地点は、2017年度に HZK1702地点として調査が一度行われているが (三阪・谷編 前掲)、当時は工学部二号館の建設廃材やコンクリート床の撤去が進んでおらず、調査しうる箇所が制約されていたためである。撤去の済んだ今年度は調査区を広く設けて精査し、キャンパス南半の元寇防塁ラインをより詳細に把握することをめざした。

9月には先掲の HZK1902地点に加え、HZK1903 (応力研究生産研本館2次)・HZK1904 (保存図書館) の両地点を調査した。中世都市箱崎の外縁部と推測されるエリアにあたり、都市の拡大過程や空

第1表 2019年度の埋蔵文化財調査

調査地点名	調査原因	担当者	期間	面積	内容	備考
HZK1804 記録資料館	学術研究 (記録保存)	福永・齋藤	2019.3.11～ 2019.7.29	400㎡	中世箱崎遺跡	(福岡市) 1839 箱崎遺跡第93次調査
HZK1805 理学部二号館南前3次	学術研究	齋藤・福永	2019.3.15～ 2019.5.10	800㎡	元寇防塁	(福岡市) 1840 箱崎遺跡第94次調査
HZK1901 工学部二号館2次	学術研究 (記録保存)	三阪・福永・齋藤	2019.6.12～ 2020.2.21	2500㎡	元寇防塁	(福岡市) 1922 箱崎遺跡第98次調査
HZK1902 中央図書館南前4次	学術研究	齋藤	2019.9.10～ 2019.9.27	100㎡	元寇防塁	(福岡市) 1943 箱崎遺跡第103次調査
HZK1903 応力研究生産研本館2次	学術研究 (記録保存)	福永・齋藤・三阪	2019.9.18～ 2020.4.1	1170㎡	中世箱崎遺跡	(福岡市) 1923 箱崎遺跡第99次調査
HZK1904 保存図書館	学術研究 (記録保存)	三阪・齋藤	2019.9.17～ 2019.11.6	300㎡	中世箱崎遺跡	(福岡市) 1945 箱崎遺跡第104次調査
HZK1905 中央図書館北2次	学術研究	福永	2020.2.25～	申請 2400㎡	元寇防塁	(福岡市) 1967 箱崎遺跡第106次調査



第3図 2019年度の発掘調査地点

間構造の復原を目的とする調査である。また現在、I19区の試掘調査で検出した元寇防塁遺構の本調査を、2020年2月から開始している。

その他特記事項 2016年以来、本キャンパス内で発見を重ねてきた元寇防塁関係遺構が、令和二年文部科学省告示第十七号にて国指定史跡元寇防塁に追加指定されるところとなった。

本書は、この追加指定される箱崎キャンパス部分に関して、既刊報告書では概要のみにとどめざるを得なかったHZK1802・1803・1805地点の成果と、HZK1902地点のそれとを正式に報告するものである。(齋藤瑞穂)

2. 元寇前夜の北部九州・概観

(1) 元寇前夜の九州中世社会

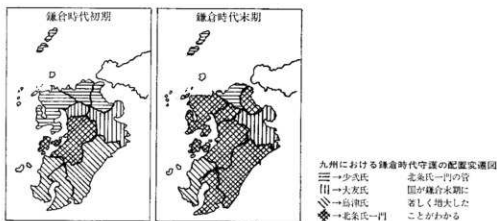
九州は、日本列島の最西南端に地域的完結性をもって位しており、その地理的環境は当該地域の歴史を考える上で重要である。それは中世という時代を考える上でも例外ではない。中央より僻遠の地にあり、内政的には他と異なり、特殊な地位に立つものであったし、その位置が大陸・半島などの海外との最短距離を占めていたため、対外政策上最も重要な地域であった(森 1948など)。

九州中世史を考える上で、この地が古代末に平家の金城湯池であったことはおさえておかなばならない。鎌倉幕府創設に際して、源頼朝は九州が平家王国であったという認識に立ち、断固たる基本方針を以て九州施策に臨んだとされている(外山 1979)。その施策の一端は、御家人の配置の仕方に表れている。九州の守護職は、東国出身の御家人である武藤氏・大友氏・島津氏の3氏が占拠されており⁷⁾、また、多くの東国御家人が九州各地の所領所職を給付されている(瀬野 1975、外山 前掲、三木 2011など)。この東国御家人の九州への配置は、政治的意図に基づいており、鎌倉幕府の東国御家人に対する優遇策の一環であり、かつ、平家の地盤であった九州に東国御家人を配置することで、鎌倉幕府の全国統一を推進しようとしたものと考えられる(瀬野 前掲)⁸⁾。

一方、九州在地領主の多くは、鎌倉幕府創建期に平家追討に協力したことに対して、彼らがこれまで世襲的に領有してきた本領を安堵され、地頭御家人に取り立てられたが、場合によっては種々の口実のもとにこれを追放、ないし滅亡に追い込まれ圧迫された(外山 前掲)。また、同じ鎌倉御家人であっても東国御家人と九州在地御家人との間には、支配する所領の大小だけでなく、その存在形態や性格などの面で大きな隔たりが存在したことも指摘されている(瀬野 前掲、外山 前掲など)。

こうした鎌倉御家人制度に大きな影響を与えたのが元寇である。文永8年(1271)、九州に所領をもつ東国御家人に対して、早くその所領に赴き、守護の命令下に異国防衛し、領内の悪党を鎮めよとの命令が出される。九州在地御家人、および九州に下向してきた東国御家人の指揮にあたったのは鎮西西方奉行・武藤氏と鎮西東方奉行・大友両氏である。武藤氏は早くから九州に下向・土着していたが、大友氏の惣領家が直接九州に根拠を置くようになったのはこの頃からである(川添 1994)⁹⁾。このように東国御家人の九州への下向が促進されたことによって、東国勢力による九州への重圧が一層加わったものと考えられる(外山 前掲)。

文永11年(1274)の文永の役後、幕府は一挙に防衛態勢を強化している。建治元年(1275)、異国警固の体制が整えられ、1年の春夏秋冬の約3か月間を、九州各国がそれぞれ順次分担して博多湾沿岸を防備することになった。武藤・大友両氏に加えて、島津氏もその指揮にあっている(川添 前掲)。さらに同年、多数の守護交替を敢行し、武藤氏・大友氏・島津氏らの有する九州の守護職の一部を削いで、北条氏一門に与えている(第4図)。元寇を契機として、北条氏得宗一門が勢力を西



第4図 九州における守護の配置変遷 (外山 1979)

国に飛躍的に伸ばしたことがうかがえる (川添 1994、2008、外山 前掲など)。

また、元寇の非常事態に対処するため、御家人・非御家人を問わず、異国警固番役を課し、勤功を立てた者には恩賞を支給する方針を打ち出した。文永11年(1274)、それまで幕府の支配外であった荘園公領の非御家人も応戦のために駆り出されている。こうした方針が、文永の役・弘安の役を通して継続されたことで、異国警固番役に勤仕した非御家人層が、この実績を根拠に独立した鎌倉御家人と称するに至った。さらに、庶子たちの惣領に対する独立的な傾向を強めることにもなり、鎌倉幕府の支配基盤である惣領制の崩壊を促すことになった (川添 前掲、瀬野 前掲、外山 前掲など)。

(2) 九州中世における対外交渉と地域社会

森克己氏の研究成果 (森 1948、1950、1975など) をまとめることで、古代末から鎌倉時代における日宋貿易の推移について概観する。

9世紀末以降、律令制崩壊による国家財政の緊縮や遣唐使廃止を受けて、日本の支配者層は海外との通交に対して消極的・鎖国的になる。10世紀になるとその傾向はますます強まり、唯一の開港地であった鴻臚館での交易は、中央政府の直接管理ではなく、大宰府による間接管理になり、中央政府による貿易統制は弛緩する。一方、中国商人たちも、鴻臚館で貿易を行うと、優品は政府の先買権によって、しかも政府の一方的な価格で優先的に買い上げられていたため、思うような利益を上げることができていなかった。

こうした国内の政治的状況と、中国商人の思惑とが相まって、11世紀頃から、特に九州の荘園で密貿易が盛んに行われるようになる。様々な制約を被る中央政府管理下での貿易を嫌った中国商人と、唐物に対する熱烈な欲求をもっていた貴族・寺社などの荘園領主とが結びつき、大宰府官吏の立ち入り禁止の特権、いわゆる不入権をもった九州方面の荘園内の港津に船を着けて、大宰府の管理を避け、荘園領主や荘官たちと自由かつ公然と密貿易を行うようになった。この自由貿易は、平氏政権下において、平家の積極的対外政策に支持されて飛躍的な発展を遂げた。そして、鎌倉幕府もその初期においては、民間自由貿易を容認するという無干渉主義の態度をとっている。

以上のような森氏の学説に対して、様々な視点から批判がなされている。特に、森氏の学説の根幹の一つである11世紀以降の密貿易盛行に対する批判が、考古学分野からなされていることは注目される。

11世紀後半、貿易拠点であった鴻臚館が廃絶され、当該期の遺構・遺物の出土が皆無に近くなる一

方、博多遺跡群では当該期以降、遺構・遺物が爆発的に増加することがわかっており、鴻臚館に滞在して交易を行っていた中国商人らが、博多に博多津唐房と呼ばれるチャイナタウンを形成して住み始めたことで、急速に都市化が進んだことが指摘されている（大庭 2008、2013など）。そして、輸入陶磁器の大量出土などから、平安・鎌倉期を通して、博多が国内最大の対中国貿易拠点であったことは明らかであり、森氏が主張する荘園内密貿易の盛行は支持できないとする見解が出されている（大庭 1994、2013）。

また、文献史の研究成果で、大宰府の管理貿易は12世紀前半までは確実に機能していたことが明らかになったことも（山内 1989）、森氏の学説に対する批判が強めることになった。佐伯弘次氏は、永承2年（1047）に大宰府鴻臚館が放火にあって焼失したことを踏まえ、当時、大宰府は焼失した鴻臚館を再建することなく、貿易拠点を博多に移すことで、12世紀まで貿易の管理を行ったという仮説を提示している（佐伯 2003）。

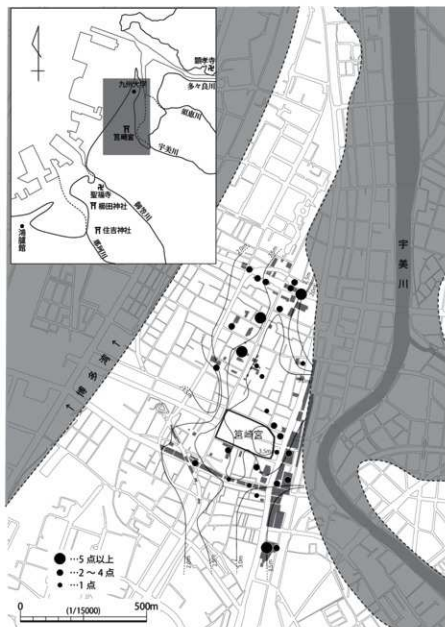
そうした批判に対して、桃崎祐輔氏は、森氏の論考には細部に荒さがあるとは言え、荘園公領制の展開とすり合わせたモデルの提示は、各地の中世遺跡を景観的に捉える手掛かりを示しており、考古地理学データと組み合わせれば、さらなる研究の深化や充実を図ることができると評価した。その上で、福岡平野後背部、糟屋郡、糸島郡の古代から中世の遺構・遺物を検討した結果、11世紀末から12世紀初頭頃に山岳宗教権門の納経や建造物造営が開始されており、鴻臚館の終末と博多遺跡群が隆盛する時期と一致することから、両者は連動した現象であると指摘する。そして、山岳宗教権門が大量の高級貿易陶磁器を保有し、瓦葺を含む堂舎の建築や多数の寺社大衆を擁し得た背景として、鴻臚館廃絶後に法的保護と規制から離脱した中国商人との関係構築を想定した（桃崎 2008a）。

桃崎氏が指摘するような宗教権門と中国商人との関係を考える上で、福岡県糟屋郡久山町所在の首羅山遺跡における発掘調査成果は重要である。首羅山遺跡は平安時代後期から鎌倉時代を最盛期とし、12世紀前半と13世紀後半頃の二つのピークを持つ山岳寺院跡である。山頂地区からは、「天仁二年」（1109）の線刻や底部に「徐工」の墨書が書かれた白山神社経筒、薩摩塔2基、そして宋風獅子一對が見つかっており、これらの背後に首羅山と中国商人との強い関係性が指摘されている（井形 2008a、2008b、2010、2012、大庭 2012、桃崎 2008a、2000b、2012）。

12世紀末から13世紀初頭、博多に拠点を置いた中国商人（＝博多綱首）は、大宰府・博多周辺に拠点をもつ寺社権門との間に、神人・寄人として帰属関係を結び、寺社権門がもつ日本国内の多様なネットワークへの接触を図っていたとされている（伊藤 2018、榎本 2008）。首羅山遺跡で出土する多くの中国商人関連遺物も、こうした博多綱首と寺社・権門の交易ネットワーク構築の産物と理解することができる。

この点について、首羅山遺跡と宮崎宮の関係は興味深い。首羅山が所在する久原郷には、遅くとも13世紀前半には宮崎宮領が存在していたことがわかっており（大庭 2012、貴田 2018、服部 2012、服部・貴田 2008）、首羅山遺跡で特徴的な連巴文軒平瓦が箱崎遺跡でも出土する（大庭 2012）など¹⁰、首羅山と箱崎の地の密接な関係性が伺える。また、首羅山と箱崎をつなぐ多々良川の流域に所在する福岡県糟屋郡粕屋町戸原麦尾遺跡では、11世紀後半と考えられる湖州六花鏡が副葬された屋敷墓や水利遺構、中国瓦、墨書陶磁器が出土しており、多々良川流域の開発に中国商人が介在していたことが指摘されている（桃崎 2008b）¹¹。この戸原麦尾遺跡は、宮崎宮領戸原村に比定されている。

なお、宮崎宮と中国商人の関係は史料から何うことができ、中国商人は宮崎宮に帰属関係をもち、宮崎宮領の領主として同宮の所役を負担するなど、両者は保護と奉仕の関係で結ばれていたことが指摘されている（川添 1988、川添・瀬野編 1977など）。また、仁平元年（1151）の宮崎・博多の大迫



第5図 箱崎遺跡群における黒書陶磁器の分布状況 (中尾 (2018) を参考に作成)

捕事件も、宮崎宮と中国商人との関係を示すものとして有名である。

箱崎遺跡の考古学的調査によって、宋人との関係が想定される遺構や遺物が見つかった。中でも箱崎遺跡内における黒書陶磁器の分布の偏在に着目した中尾祐太氏の論考は興味深く、遺跡の中心部と考えられる南東部からも一定数出土するものの、遺跡北西部にその出土が特に集中するという(第5図、中尾 2018)。黒書陶磁器の出土量は博多に次ぐものであること、そして、中国人名とみられる文字が書かれた黒書陶磁器も出土することなどから、遺跡北西部が宋人の居住区であった可能性が指摘されている。箱崎に大唐街が存在していたかどうかについては議論があるが(伊藤 前掲、佐伯 1988、服部 2013など)、箱崎に宋人がいたことは間違いないだろう。

以上より、多々良川流域から首羅山にかけて宮崎宮領が広がりをみせており、中国商人たちが、宮

箱崎の神人・寄人として帰属関係を結びながら、多々良川流域の寺社領の開発や首羅山遺跡の形成に関与していたことがわかる(桃崎 2012)。当時の九州北部における地域社会のあり方を考える上で、こうした宗教権門と中国商人が果たす役割を無視して語ることはできないことを明示する重要な事例と言えよう。(福永将大)

3. 元寇時における箱崎の諸相

(1) 文永の役・弘安の役における箱崎

文永の役・弘安の役の推移については、これまで多くの研究者によって論じられてきた(網野 1974、川添 1971、1977、黒田 1965、服部 2014、2017など)。ここでは箱崎という地に焦点を当てて、概略をまとめてみたい。

『蒙古襲来絵詞』から、肥後御家人竹崎季長が初めに箱崎の地に参陣したことがわかる(佐伯 2001、堀本 2013)。堀本一繁氏は、箱崎の場面では、文永の役で大宰少武武藤覚恵とともに日本軍を指揮した大友頼泰の軍勢が描かれている一方、その後向かった博多息浜では、「日の大將」(当日先陣を任せられた大將)武藤景資との対面が描かれていることから、「日の大將」が陣を固める博多に対して、より上級の指揮官が箱崎にいたこと、すなわち、文永の役において、博多息浜は箱崎に対してその前線基地という位置づけであったと推察する(堀本 前掲)。また、源平合戦時から戦国期に至るまで、箱崎津が軍事的拠点だった可能性を示す史料も確認されており(佐伯 2001)、当該期において箱崎は重要な場所であったことが伺える。

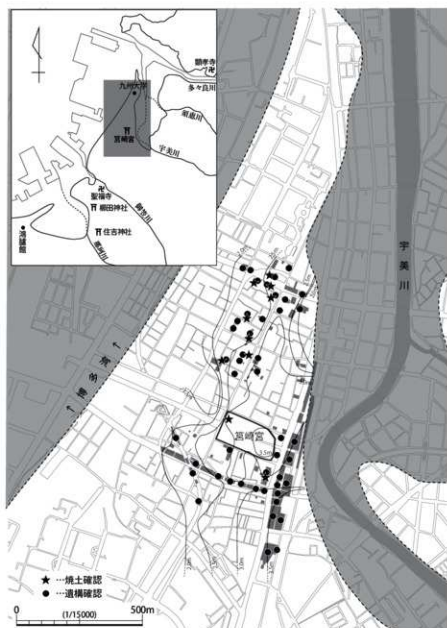
文永11年(1274)10月20日、蒙古軍が博多湾沿岸に上陸し、鳥飼・赤坂・箱崎・博多などで戦火を交えることとなった。この合戦時に、箱崎宮は被災し炎上しており、その後、亀山上皇の命によって、箱崎宮の再建が促されている(廣渡 2003)。

文永の役後の建治元年(1275)、異国警固の体制が整えられ、1年の春夏秋冬の約3か月間を、九州各国がそれぞれ順次分担任して博多湾沿岸を防備することになった。あわせて、建治2年(1276)には各国御家人に対して「石築地」の築造にあたるよう命令を下している。なお、箱崎の異国警固番役は、嘉元2年(1304)に制度変更があるまで、石築地と同様に薩摩国の御家人が担当した。

弘安の役における箱崎の状況はよくわかっていないが、宋希環『老松堂日本行録』の「倭人言う、辛巳東征の時、高麗人戦亡の地なり」という記述から、辛巳年=弘安4年(1281)の弘安の役において、箱崎松原の石築地を挟んで日本軍と蒙古・高麗軍の攻防があったことが推察される(伊藤 前掲)。

また、薩摩国の御家人である、渋谷有重、致重、重高のいわゆる「渋谷(入来院)三兄弟」は、弘安の役において戦死している(岩川 2011など)。戦死した具体的な場所はわからないが、薩摩国の御家人が箱崎の異国警固番役を課されていたことから想像すれば、箱崎周辺での交戦の結果、戦死した可能性も考えられる。この渋谷氏は、正応元年(1288)に元寇の恩賞として筑前国早良郡比耶郷地頭職を与えられており、福岡市早良区粕原K遺跡はこの恩賞地に比定されている(佐伯 1987、1988)。

松原の状況も、当時の箱崎の様子を伺える貴重な資料になりうる。「八幡宮造営材木目録」によると、弘安4年(1281)閏7月1日に発生した大風の影響で各地の樹木などが多く倒れた。生の松原で転倒した松数百本のうち、大木の松10本を譲り受けて、朽ち倒れて久しい箱崎宮の南・北鳥居の三鳥居を建て替えたという(林 2013)。箱崎松原の松と生の松原の松は、ともに神功皇后に関わる神木とされている。両者ともに神木であるにも関わらず、箱崎宮の鳥居再建に際して、近隣の箱崎松原の松を用いず、わざわざ生の松原の松を用いていることに違和感を覚えるを得ない。想像を逞しく



第6図 箱崎遺跡群における焼土の分布状況（佐藤（2013）を参考に作成）

すれば、文永の役での被災により、宮崎宮付近の松原が焼失してしまい、利用したくてもできなかった可能性も考えられるが、それを検証する術はいまのところない。

次に、箱崎遺跡の発掘調査成果をもとに、元寇時における箱崎周辺の様相を概観しておきたい。注目されるのは、13世紀後半から14世紀頃のもと考えられる焼土の広がりである。砂丘の北西側南北300m、東西100mの範囲を中心に焼土層が確認され（第6図）¹²、被熱し表面がただれた陶磁器も多くみられるという。これらは、文永の役における被災の痕跡と推定されることが多い（榎本 前掲、佐藤 2013、中尾 前掲など）。しかし、箱崎は、建武3年（1336）の多々良浜の戦いにおいても被災しており、焼土層などがこの時の被災によるものである可能性も否定できない。

13世紀前半から14世紀前半にかけて、遺跡の砂丘西側緩斜面の活発な利用が見受けられることも興味深い。北西部では細かい水平堆積層が確認されており、海側へ整地を進めながら生活域を拡張した

ものと推測され、小規模ながら同様の造成は砂丘北東端部でも確認される。北西部の整地層には焼土や炭化物を含むことが多く、被焼した出土遺物や整地後の遺構の時期から13世紀後半代にその多くが位置づけられている(榎本 前掲)。文水の役に被災した箱崎を再興するために行った整地痕跡の可能性がある。

この点を考える上で、博多遺跡群における発掘調査成果は興味深い情報を提供してくれる。13世紀後半において、砂丘の埋め立てによる都市域拡大や(第7図)、街区が出現し、ほぼ一斉に道路を整備した一大事業が行われたことが明らかになっている(大庭 1993、2013)。この道路の直下に見られる焼土層は、文水の役における被災の痕跡と推定され¹⁰、こうした一大事業を計画し実行したのは、この頃博多に設置された鎮西探題であったと考えられている(大庭 1993前掲)。上述した箱崎遺跡北西部における整地の痕跡を解釈する上で、示唆に富む見解と言えよう。なお、博多では元寇防塁を挟んで陸側には鎌倉時代の生活痕跡が見られるが、元寇防塁の海側は15世紀後半～16世紀にならないと遺構が出現しないという。

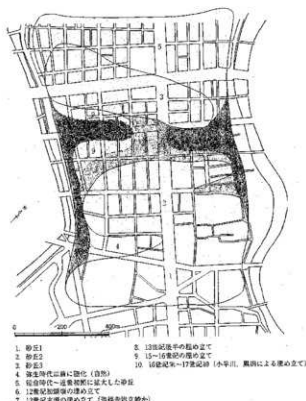
以上、元寇時における箱崎の様相について概観してきたが、未だ不明瞭な点が多い。特に、文水の役時の箱崎の被災状況や再興のプロセス、また元寇後の箱崎の土地利用のあり方については、新資料の増加を待ちつつ今後検討を深めていかねばならない。

(2) 箱崎の元寇防塁と薩摩

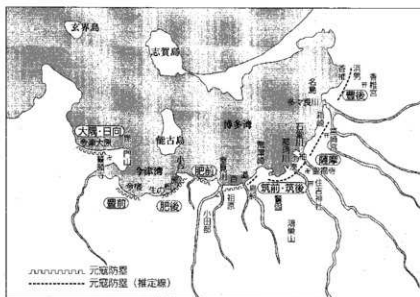
建治2年(1276)、各国御家人に対して「石築地」の築造にあたるよう命が下されている。いわゆる元寇防塁であり、博多湾沿岸一帯に、およそ半年間という非常に短い期間で築造された。幕府は文永9年(1272)、守護に大田文の調達を命じて、寺社・荘・公領の田畠・員数・領主の名簿を注進させており、その大田文記載の田数をもとに所領1段につき長さ1寸の基準で防塁を築かせた。さらに防塁の上に立て並べる櫓や旗を始め、矢などの武器・武具類も所領に応じて賦課している。防塁の築造や修理は、幕府の支配下にはない公領・寺社領・いわゆる本所一円地の非御家人にもその負担が及んだという(川添 1977、2008など)。

防塁築造の特徴は、国ごとに分担地域が決まっていたことである(第8図)。東から見ていくと、香椎は豊後、箱崎は薩摩、博多は筑前・筑後、姪浜は肥前、生の松原は肥後、今宿は豊前、今津は日向・大隅である。防塁の築造・修理の手順としては、守護が、その管轄内の領主に築造や修理の命令を出し、命令を受けた領主は、指定された分担の場所に人夫などを連れていき、作業に従事する、というものであったようだ(川添 前掲など)。

防塁の築造・修理の実態を考える上で注目されるのが、各地域によって防塁の構造に差異が見られ



第7図 博多の埋め立てと都市の拡大(大庭 2013)



第8図 元寇防塁の位置と分担国 (川添 2008)

ることである。今津、生の松原、西新などの地区間、あるいは同じ今津地区の中でも一定の単位ごとに石材の産地や築造法が異なることが明らかになっている(大塚 2013、川添 2008、藏富士編 2019、柳田 1984、1988など)。こうした差異は築造・修理を負担した国の違い、あるいは同国内での担当御家人の違いを反映したものと考えられる。それに加えて、石材や粘土の採取地などの地理的な制約や(柳田 前掲など)、各地区の地政学的な差異(大塚 前掲)が影響していることも想像される。

2016年から九州大学埋蔵文化財調査室で継続的に調査している、箱崎キャンパス内出土の元寇防塁も、他の地区に比べて特異な構造を有していることがわかってきた(福田・森編 2018、三阪・谷編 2019、三阪ほか 2019)。箱崎地区の元寇防塁の諸特徴を模式図化したのが第9図である。これら諸特徴の中でも、他の地区と比較して特に特筆すべきものは以下の諸点である。

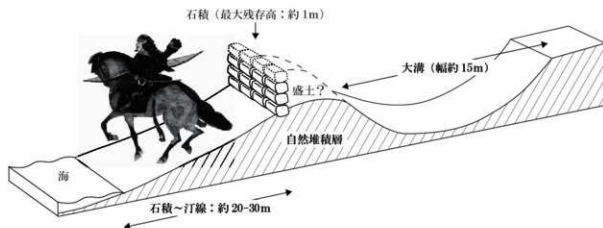
- a. 石積みが海側前面の1列しか存在しない点
- b. 砂層のみで構成され、粘土層や版築構造は確認されていない点
- c. 石積みの陸側に大溝が付随している点

a・bの特徴から、箱崎地区の防塁は非常に簡素で脆弱であり、張りはて状の構造のように見えることが指摘できる(三阪ほか 前掲)。

また、cの石積み陸側の溝は、他の地区には見られない箱崎地区の元寇防塁の特質である。石積み陸側に施設が設けられている事例としては、西新地区において、砂・粘土が版築状に互層をなした状態で構築された幅約1.5m、残存高約1.3mの土塁遺構が見つかった(大塚編 2002)、箱崎地区のそれとは全く異なる構造体である。そもそも西新以外の地区では石積み陸側に施設を設ける事例を確認することはできず、箱崎地区の大溝は極めて特異な事例であるといえる。

問題となるのは、この石積みと大溝からなる構造体の技術承襲である。福島県所在の国史跡阿津賀志山防塁は、二重の堀と三重の土塁からなる防御構造で、文治5年(1189)の阿津賀志山の戦いに際して築造されたものである(木本編 2015)。これは、元寇以前の日本に、防衛施設として土塁と堀からなる構造体が存在していたことを示す事例であり、箱崎地区の元寇防塁の構造との関係性が注目されている(三阪・谷編 2019)。

箱崎地区の防塁築造・修理を担当したのは、薩摩国の御家人である(川添 1977、2008、佐伯



第9図 箱崎地区の元寇防壁の構造模式図

2018a、2018b など)。石積み+大溝という防御施設の技術系譜を、薩摩国の中に見出すことはできるのだろうか。

中世の南九州には、群郭式と呼ばれる中世城郭が存在する（上田 2017 など）。シラスの火山灰台地の縁辺にある自然の侵食谷を利用して、空堀や堀切を挟んだ小島状の連なる曲輪で構成されるのが特徴であり、14世紀後半から15世紀中頃には成立していたと考えられている¹⁴。しかし、近年、鹿児島県薩摩郡さつま町に所在する那答院渋谷氏の居城・虎居城の発掘調査によって、空堀内出土の木製品および掘立柱建物の柱の年代測定が行われた結果、13世紀後半にはすでに空堀が築造されていたことが明らかになった（黒木ほか 2018、永濱 2017）。

防御施設として空堀を築造する点は、箱崎地区の元寇防壁との類似性が指摘できる可能性もあるが、群郭式城郭の空堀は基本的に深く、地上から30mを超える深さのものもあり、構造的な類似性を見出すことはできない。また、土塁や横堀をもって空間を遮断するような思想は、南九州に限らず、先述した阿津賀志山防壁の例も含めて、日本国内で広く確認することができる（宮武 2017）。これらの点を踏まえると、箱崎地区の元寇防壁の技術系譜を、薩摩国内に求めることができるデータや根拠は、現状では無いと言わざるを得ない。

一方、こうした土塁や横堀をもって空間を遮断するような思想を、グスタフや朝鮮式山城、万里の長城などの例を挙げながら、アジアの防衛思想から理解する必要性を説く宮武正登氏の見解（宮武 前掲）は、注目すべきである。この点に関して、13世紀末における肥前国河内郡の河尻干拓に伴う銭塘の築堤に際して、入宋僧・寒巖義伊を介して中国浙江省銭塘江の築堤法が導入された事例があることは重要である（三浦 1993）。現状の史資料では検証は難しいものの、当時博多湾沿岸地で活発に活動していた中国商人や入宋僧、来日宋僧などをインフォーマントとして、大陸の土木技術の情報・知識を得て、元寇防壁の築造・修理に臨んだ可能性もあろう。三浦圭一氏は、元寇防壁の石積みの技術に言及しつつ、中世における土木工事上の工法は、古代から継承されながら、中国の技術的影響・刺激を受けて徐々に発展していったものと理解している（三浦 前掲）。

ちなみに、時の執権・北条時宗は、蘭溪道隆・大休正念・無学祖元をはじめとする多くの禅僧と交わりがあったことがわかっている。元寇防壁の築造技術との関係性は不明であるが、中国商人、入宋僧、来日宋僧が、大陸情報の貴重な提供源であったことは間違いなく、彼らの提供する情報が中世日本の社会・文化に多大な影響を与えたことも、また事実であったと考える。（福永将大）

註

- 1) 2018年9月に伊都キャンパスへの移転が完了し、同年10月以降は「箱崎キャンパス跡地」と呼び慣わしている。ただし本書では、煩瑣を避けるために「跡地」を省き、「箱崎キャンパス」と表記する。
- 2) この間の詳しい経緯は、福田・森編(2018)を参照されたい。
- 3) 工事立会・試掘調査は福岡市文化財活用部埋蔵文化財課と合同で実施したものを含んでいる。本調査は前年度からの継続分を含む。
- 4) 第2回の発掘調査グリッドで表現するならば、J列延長先のJ12区、K列延長先のK11区的位置にあたる。
- 5) 九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：立試1912。
- 6) 九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：立試1913・1928。
- 7) 武藤氏は筑前・豊前・肥前・志岐・対馬、大友氏は筑後・豊後・肥後の守護職であった。ちなみに後述の島津氏は大隅・薩摩の守護職。
- 8) 東国御家人の配置に対して、鎌倉幕府の政治的意図の存在に否定的な見方も出されている(外山1979)。
- 9) ちなみに、島津氏は大友氏のあとの建治元年(1275)に downward している(川添1994)。
- 10) なお、箱崎遺跡第84次調査で、13世紀に廃棄されたと考えられる薩摩塔の破片が出土している。
- 11) こうした開発の実態については、九条家領和泉国日根郡日根荘の事例が参考になる(三浦1981)。この事例では、西大寺の僧・実専が開発を推進し指揮する現場での最高責任を負う開発請負業者となり、朝廷・幕府の権力・權威と直接つながりをもちつつ、在地領主や農民と競合し対立しながら開発を行ったとされている。実際の労働は、農民諸階層や「坂之物」(いわゆる非人)を編成して行われた。多々良川流域の開発事業の実態も、この日根荘に見るような開発のあり方が想定されよう。
- 12) 福岡市教育委員会による箱崎遺跡第2・5・11・16・21・24・31・34・35・38・42・44次調査にて検出されている(佐藤2013)。
- 13) 元応2年(1320)に「博多炎上」「博多焼失」が起こったことが明らかになっており、この焼土層に関して、文永11年(1274)の文永の役と、元応2年の「博多炎上」「博多焼失」のどちらに起因するものか現状では判断できないとする考えもある(佐伯1994)。
- 14) 群郭式は南九州に特徴的な中世城郭とされてきたが、近年、こうした構造は日本各地で確認でき、南九州特有のものではないとする意見も出されている(宮武2017)。

引用文献

- 網野善彦 1974 『蒙古襲来』小学館
- 井形 進 2008a 『山の神仏と海』『九州の中世学—交易・開発・信仰—子稿集』七隈史学会 35-44頁
- 井形 進 2008b 『首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔』『首羅山遺跡—福岡平野周辺の山岳寺院—』久山町教育委員会 65-83頁
- 井形 進 2010 『薩摩塔について』『首羅山遺跡発掘調査概要報告書』久山町教育委員会 70-83頁
- 井形 進 2012 『薩摩塔とその周辺』『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会 182-196頁
- 伊藤幸司 2018 『中世の箱崎と東アジア』『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会・勉誠出版 36-53頁
- 今井隆博(編) 2010 『箱崎39—箱崎遺跡第61次調査報告—』福岡市教育委員会
- 岩川拓夫 2011 『近世・近代に描かれた中世済谷氏』『中世薩摩の雄 済谷氏』南方新社 203-231頁
- 上田 耕 2017 『南九州拠点城郭の到達点』『南九州における中世城郭研究の問題点 発表要旨集』九州考古学会・鹿児島県考古学会 35-54頁
- 江上智恵 2012 『北部九州の山岳寺院と首羅山』『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会 197-206頁
- 榎本義嗣 2008 『箱崎』『中世都市・博多を掘る』海鳥社 52-55頁
- 榎本 渉 2008 『日宋・日元貿易』『中世都市・博多を掘る』海鳥社 70-81頁
- 大塚紀宜 2013 『元寇防塁と博多湾—防塁の構造とその戦略的機能について—』『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 302-317頁
- 大庭康時 1993 『聖福寺前—丁目2番地—中世後期博多における街区の研究(1)—』『法尚』第2号 博多研究会 1-28頁

- 大庭康時 1994 「博多綱首殺人事件—中世前期博多をめぐる雑感—」『法哈囉』第3号 博多研究会 13~26頁
- 大庭康時 2012 「中世における福岡平野周縁の山岳寺院と博多」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会 207~218頁
- 大庭康時 2013 「中世博多の地割りと地形変遷」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 232~241頁
- 川添昭二・瀬野精一郎(編) 1977 『九州の風土と歴史』山川出版社
- 川添昭二 1988 「海にひらかれた都市—古代・中世の博多—」『よみがえる中世』第1巻 平凡社 8~39頁
- 川添昭二 1994 『九州の中世世界』海鳥社
- 川添昭二 2008 「中世・近世博多史論」海鳥社
- 貴田 潔 2018 「葛崎宮と荘園制」『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会・勉誠出版 54~66頁
- 木本元治(編) 2015 「阿津賀志山防塁史跡指定調査報告書」国見町教育委員会
- 黒木梨絵・永濱功治・浦 博司・本高謙治 2018 「南九州中世城郭における虎居城跡」『鹿児島考古』第48号 鹿児島県考古学会 17~26頁
- 黒田俊雄 1965 『蒙古襲来』中央公論社
- 齋藤瑞穂・三阪一徳・舟橋京子・石川 健・谷 直子・富田啓貴・宮本一夫 2019 「近世斐館と七星板—福岡市箱崎遺跡(九州大学箱崎キャンパス HZK1801地点)の調査成果—」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』日本考古学協会 62~63頁
- 佐伯弘次 1988 「大陸貿易と外国人の居留」『よみがえる中世』第1巻 平凡社 102~119頁
- 佐伯弘次 1994 「中世博多の火災と焼土層」『法哈囉』第3号 博多研究会 27~36頁
- 佐伯弘次 2001 「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』第9号 博多研究会 33~36頁
- 佐伯弘次 2003 『モンゴル襲来の衝撃』中央公論新社
- 佐伯弘次 2018 「箱崎の元寇防塁」『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会・勉誠出版 72~75頁
- 佐藤一郎 2013 「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて—」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 242~247頁
- 瀬野精一郎 1975 『鎮西御家人の研究』吉川弘文館
- 外山幹夫 1979 『中世の九州』教育社
- 中尾祐太 2018 「考古学からみた箱崎」『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会・勉誠出版 10~23頁
- 永濱功治 2017 「虎居城の調査」『南九州における中世城郭研究の問題点 発表要旨集』九州考古学会・鹿児島県考古学会 59~66頁
- 服部英雄 2012 「首羅山、背景の宋人社会と禪宗化」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会 229~233頁
- 服部英雄 2013 「チャイナタウン唐房—福岡市内及び周辺トウボウ地名所在地の歴史的環境—」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 280~301頁
- 服部英雄 2014 『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017 『蒙古襲来と神風』中央公論新社
- 服部英雄・貴田 潔 2008 「地名と伝承・久原の景観と暮らし」『首羅山遺跡—福岡平野周縁の山岳寺院—』久山町教育委員会 141~159頁
- 林 文理 2013 「博多湾の松原—松原が語る福岡の歴史—」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 340~361頁
- 廣渡正利 2003 『宮崎八幡宮史』文献出版
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018 「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—」九州大学埋蔵文化財調査室
- 堀本一繁 2013 「中世博多の風景」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 318~339頁
- 本田浩二郎 2004 「箱崎遺跡第36次調査(HKZ-36)」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.17 福岡市教育委員会 76頁
- 本田浩二郎 2010 「箱崎遺跡第65次調査(HKZ-65)」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.24 福岡市教育委員会 44頁
- 三浦圭一 1981 『中世民衆生活史の研究』思文閣出版
- 三浦圭一 1993 『日本中世の地域と社会』思文閣出版
- 三木 靖 2011 「史料と史跡からみた渋谷一族」『中世薩摩の雄 渋谷氏』南方新社 17~44頁

1 箱崎遺跡—九州大学箱崎キャンパス地区—について

- 三阪一徳・齋藤瑞穂・福永将大・谷 直子・宮本一夫 2019「箱崎地区における元寇防塁の構造と立地環境」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会 80～89頁
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—」九州大学埋蔵文化財調査室
- 宮武正登 2017「九州の中世城館の基本的特徴」『南九州における中世城郭研究の問題点 発表要旨集』九州考古学会・鹿児島県考古学会 21～33頁
- 宮武正登 2018「南九州地方の中世城郭に対する歴史的再評価」『鹿児島考古』第48号 鹿児島県考古学会 5～9頁
- 宮本一夫・三阪一徳・齋藤瑞穂 2019「箱崎キャンパスの元寇防塁と近世豊楢墓」『九州大学アジア埋蔵文化財研究センターニュースレター』No.18 九州大学アジア埋蔵文化財研究センター 1～2頁
- 桃崎祐輔 2008a「鴻臚館体制の崩壊から中世社会へ—遺跡に遺された中国商人の活動とその遺物—」『九州の中世学—交易・開発・信仰—予稿集』七隈史学会 5～34頁
- 桃崎祐輔 2008b「経塚と瓦からみた首羅山の歴史」『首羅山遺跡—福岡平野周辺の山岳寺院—』久山町教育委員会 41～64頁
- 桃崎祐輔 2012「首羅山遺跡の白山神社経塚について」『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会 169～181頁
- 森 克己 1948『日宋貿易の研究』国立書院
- 森 克己 1950『日宋文化交流の諸問題』刀江書院
- 森 克己 1975『増補日宋文化交流の諸問題』国書刊行会
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」『古代の博多』九州大学出版会 365～394頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世』第1巻 平凡社 180～194頁
- 山内首次 1989「日宋の荘園内密貿易に関する疑問—11世紀を中心として—」『歴史科学』第117号 大阪歴史科学協議会 11～24頁

II HZK1902地点（中央図書館前南地点第4次調査）

1. 調査の経緯

(1) 調査地点の位置と調査の経緯

HZK1902地点はJ21・22区に位置する。中央図書館の南側に建っていた防音講義室の床下部分にあたり、2016年度に調査されたHZK1604地点（中央図書館前南第2次）とは本地点の北で、HZK1603地点（同第1次）とは本地点の南でそれぞれ接する¹⁾。

このHZK1603地点では、13.7mに及ぶ石積み遺構SF01が検出された。角礫が博多湾側（西）で面を揃え、最も遺りの良い箇所です。ほかに3石が並んだSF02があり、HZK1604地点にもSF03とSF04が存する。これらは同一直線上にあり、石材にも共通性をみとめる点から、本来は防音講義室部分を貫く一連の遺構で、薩摩国御家人の手で築造された元寇防塁の可能性が指摘された（福田・森編 2018）。同種の石積み遺構は、翌2017年度以降も次々発見されていく（三阪・谷編 2019）。

その間、2018年9月にキャンパスの統合移転事業が完了して、箱崎キャンパス跡地の建物解体工事は本格化し、防音講義室の上屋も解体される。同建物がHZK1603・1604両地点の中間に位置することから、福岡市文化財活用部埋蔵文化財課は、基礎の撤去工事に進む前に石積みの存否を確認する必要があると判断、同課と九州大学埋蔵文化財調査室は遺存状況確認を目的とする試掘調査を2019年8月20日に実施した²⁾。

結果、大ぶりの角礫が並んだ状態で検出される。本調査に切り替えて遺存状況を把握することとなり、九州大学埋蔵文化財調査室は、令和元年8月26日付の福岡県教育委員会あて「九大統第37号」にて埋蔵文化財発掘届を提出した。これに対して、福岡県教育委員会より9月2日付「1教文第706号」にて許可通知があり、同10日に現地調査を開始した。

(2) 調査要項

遺跡名	箱崎遺跡
地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK1902地点（中央図書館前南地点第4次調査）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK1902 福岡市調査番号：1943、箱崎遺跡第103次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	100㎡
調査原因	学術研究（史跡予定地内）
調査期間	令和元年9月10日～9月27日
遺物量	コンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）1箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当	齋藤瑞穂
調査作業員	城野勝彦、定永靖史、節政善憲、田中悦子、中村高美、中山大輔、永瀬太平、西田和廣、宮原ゆかり、山田幹裕、吉田辰義
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉



第10図 HZK1902地点全体図

2. 遺構と出土遺物

試掘調査の結果と本調査の目的 試掘調査では、列状に並んだ3石が確認された。現地表からの深度は約80cmで、防音講義室建物を支持する地中の繋ぎ梁に接している。これらが、2016年度に行われた HZK1603・1604両地点の調査で検出された石積み遺構と同一直線上にあることはほぼ確実であ

るものの、基底石か上部に積まれた築石かは詳らかでなく、また他にどの程度遺っているかもこの時点では明らかでなかった。本調査では、それらの点の解明が要請されたわけである。

石積み遺構 SF03 防音講義室建物は外周にコンクリート土間（犬走り）を設けている。このうち、講義室北側の土間下から、礫岩3石が検出された（第11図）。これは、HZK1603・1604両地点の報告において、「防音講義室北側に接する廊下（コンクリート製の犬走り）の下部、防音講義室北東隅から西側へ3.5m離れた地点で検出された」というSF03に相当する。現存している講義室建物側壁面で検出したために、空容を解明するには到っていないものの、石が奥に続いていく様子は把握されていたらしい。調査を担当した福田正宏は、「廊下コンクリートの下部には、基底石と考えられる石材が3石以上、南側の防音講義室に向かって並んでいる」（福田・森編 2018：58頁）との見通しを述べた。

ところが、今次の調査で「廊下コンクリート」を剥ぎ、全面的に掘削した結果、石の並びは福田らが見出した3基のみで、それ以上は奥に続いていないことが判明した。建物外壁が載る布基礎のフーチング（逆丁字形）が土間下に大きく張り出していたためである。第11図最下段に、築石番号を付したものを掲げておいたが、フーチングはこれという2の築石を巻き込むように打設されていた。

SF03の区間長は、過去の調査で検出された部分をあわせて1.04mになる¹⁾。基底石が2石並ぶが（築石1・2）、これまで知られている基底石のなかでは小型の部類に属し、面幅は40cmに満たない。2段目に載る築石3は石面（正面）が真っ直ぐ博多湾方向を向いているものの、基底石1・2は角礫の稜線が前に出て、平坦な面の一方はやや上方を、もう一面はやや下方を向く。そのため2段目の3は安定性に欠けるが、本来の状態ではおそらくあるまい。講義室建設の際に¹⁾、裏側（陰側）から力が加わったのであろう。上方を向いた側で1・2の面が揃い、かつ、間に石を詰めてあるのに対し、下向きの側でそうでない点からみて、本来の石面は上方を向いた側であると推測される。

石積み遺構 SF05 防音講義室建物の床下部分からは、30～40cm幅の角礫が5石並んだ区間と、60cm前後の角礫を3石並べた区間とが検出されている。総じてSF05の遺構名をこれらにあて、北側を区間①、南側を区間②と呼ぼう。

区間①はSF03から3.4m南に位置し、区間長は2.32mを測る。基底石の設置標高は2.3mで、平坦な面を博多湾に向けて据える。若干前のめりになり、あるいは築石8のように前方に飛び出しているケースがあるのは、講義室建設の際に裏側（陰側）から力が加わったからであろう。8の傾きぶりは、叙上の1・2とよく似ている。

築石4～8が基底石にあたり、9の間詰石で充填しつつ、10～14を2段目に配する。現存部分における最大高は66cmである。目地は通っておらず、荷重を分担する工夫を凝らしたようでない。

区間②は、区間①の南端の1.1m南で検出された。3石並び、区間長は1.64mである。築石15の石面幅は58cm、16は60cmを測り、SF03や区間①と較べて材は大ぶりである。直上に繋ぎ梁を架してあるため基底石ばかりが遺り、2段目以上は失われている。検出時には、梁と築石の間に川原石が詰めてあった。基底石の設置標高は、築石15・17で2.3mを測る。間の16のみ2.2mだが、サイズが一際大きく、かつ、すぐ真上に梁が渡っている点からすると、本来は両隣と同じレベルにあったとみて差し支えないだろう。

SF05の前庭には、黄褐色砂が厚く堆積していたらしい（第11図：右下枠内）。遺物などはほぼあたらぬものの、基底石の設置レベル付近で礫岩の小片が多く混じる点は注意しておいてよい。部分的に集中するわけでなく、意図的に蒔いたようではない。

第2表 HZK1604地点SF03・HZK1902地点SF05・HZK1603地点SF02築石観察表

遺構名 区分	調査地点	築石番号 (順11回)	位置	岩種	重層 (cm)	重高 (cm)	幅×高 (m ²)	石面の 特徴	備考
SF03	HZK1604	1	基礎石	礫岩	16	—	—	自然面	本来の設置角度を維持していない
		2	基礎石	礫岩	38	—	—	自然面	本来の設置角度を維持していない
		3	2段目	礫岩	22	22	4.8	新築	
SF05①	HZK1902	4	基礎石	砂岩	38	24	9.1	新築	
		5	基礎石	礫岩	44	38	16.7	自然面	
		6	基礎石	礫岩	38	28	10.6	新築	本来の設置角度を維持していない
		7	基礎石	礫岩	24	18	4.5	新築	本来の設置角度を維持していない
		8	基礎石	砂岩	32	16	5.1	新築	本来の設置角度を維持していない
		9	間詰め	礫岩	—	—	—	新築	
		10	2段目	礫岩	34	16	5.4	新築	上面も新築
		11	2段目	砂岩	54	26	14.0	新築	
		12	間詰め	砂岩	—	—	—	新築	
		13	2段目	礫岩	30	25	7.5	新築	
		14	2段目	砂岩	44	24	10.6	新築	
		SF05②	HZK1902	15	基礎石	砂岩	58	22	12.8
16	基礎石			砂岩	60	48	29.8	新築	本来の設置標高でない可能性あり
17	基礎石			砂岩	28	22	6.2	新築	
18	間詰め			砂岩	—	—	—	新築	
SF02	HZK1902 HZK1603	19	基礎石	砂岩	38	26	9.9	新築	
		20	基礎石	砂岩	41	30	12.3	新築	福田・森編(2018) 回20石付 No.1
		21	基礎石	砂岩	65	41	26.7	新築	福田・森編(2018) 回20石付 No.2

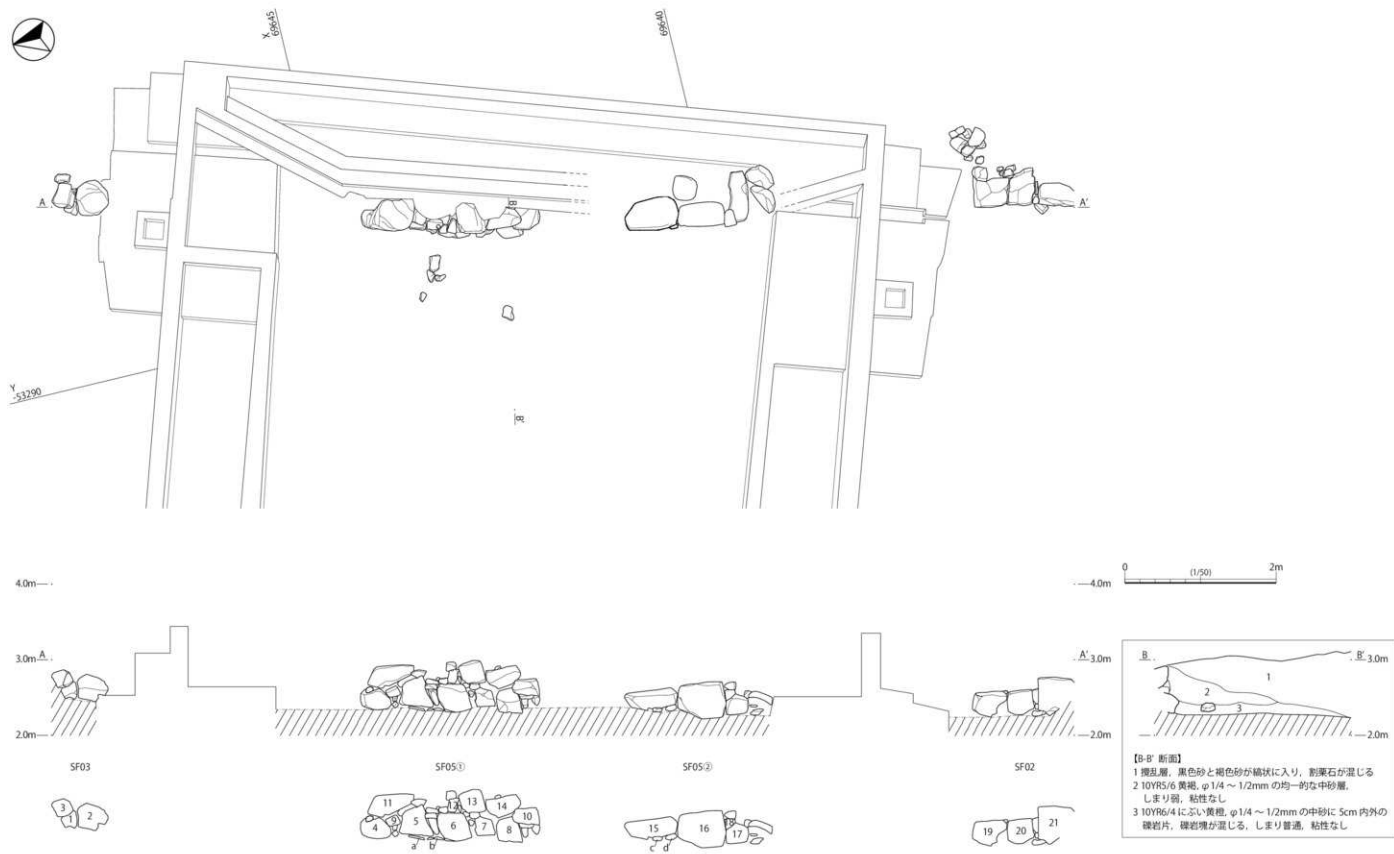
石積み遺構 SF02 講義室南側の土間下からも、礫岩の並びが検出されている。SF05の区間②の南端から2.9m 南の地点である。このうち築石20・21は、HZK1603・1604地点SF02として報告されていた築石であり、19が今次の調査で加わって区間長は221m となった。基礎石1段のみ遺っており、設置標高は2.3m である。

石積みの長さと向き 石積みの一部は防音講義室建設の際に撤去され、若干乱されたようだが、幸いにも本来のように並んでいたかは把握し得た。福田や森貴教が検出したSF02・03間が、今次のSF05で填まったことで、一体性がより確かさを増したわけである。石積みの走向はN19°Eを取り、現存する箱崎宮建物ならびに箱崎の町割りとはもちろん並行しない⁵⁾。

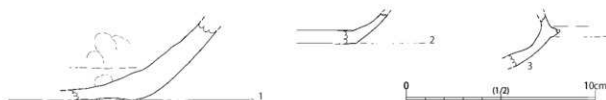
採石と石積みの行動論 今次新しく検出したSF05の石材は、立方体ないし直方体を呈する。HZK1603・1604地点に関する森の報告内容とも総合的で、大きな違いはみあたらない。砂岩や礫岩といった軟質で脆い石材を用い、前面にのみ築石を積むらしい⁶⁾。石材の大きさは必ずしも揃っていないものの、人力運搬は可能である。これは、箱崎以外の元寇防壁とも共通する（山内ほか 1972）。

石を積み上げるうえで第一に要請されるのは、簡単に崩壊しない安定角度の保持である。南接するHZK1603地点を参照すると、石積みは80度前後で組みあげていったようだが（三阪ほか 2019）⁷⁾、浜堤の場合、石材の運搬はもちろんのこと、傾斜や凹凸は足を踏ん張るだけでさえ生じるから、角度の管理は容易でなかったに違いない。この点で注意されるのは、区間①の築石5・6の下に敷かれたa・bである。築石と同種の礫岩片で厚みはなく、角度調整のために噛ませたのであろう。すなわち築石5を水平に置いた場合、上端は左に大きく傾斜してしまう。a・bを噛ませても5の左側の嵩を上げることで、傾斜を和らげ、2段目の11を積みやすくした。区間②の丸石c・dもまた、同様の効果を企図したものである。総じて、角度の管理は築石そのものの形を整えるのではなく、端材を詰めることによって行われたとみて大過ない。

多くの築石は、平坦な剖面（剝離面）を正面に向ける（第2表）。⑦四周を掘り割った後、岩盤と接していた最後の面が、あるいは⑧運搬しやすいサイズ等に断ち割った面であろう。矢を用いた形跡はみあたらない。割り放しで、調整を特に加えず⁸⁾、稜は明瞭である。



第11図 HZK1604地点 SF03・HZK1902地点 SF05・HZK1603地点 SF02遺構平面・立面および土層断面図



第12図 HZK1902地点出土遺物

第3表 HZK1902地点出土遺物観察表

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
12-1	SF05外側 2層	五葉式器 握鉢		[4.2]	緻密、φ1mm大の彩粒を含む	良好	外：S/S/1 灰 内：S/S/1 灰	外：ナデ 内：ナデ、釉オサエ	
12-2	SF05外側 3層	土師磁 坏		[1.6]	緻密、赤色粒子をわずかに含む	良好	外：7.5YR7/4 に近い糖 内：7.5YR7/4 に近い糖	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
12-3	SF02周辺	須恵器 坏		[2.8]	緻密、φ1mm大の彩粒を含む	良好	外：5Y6/1 灰 内：5Y4/1 灰	外：ナデ 内：ナデ	TK43型式

() は標準値、[] は測定値を表す

石面の面積（幅×高さ）にもまともではなく、散らばりをみせる。直方体の材であれば、広い面を控えに使用して安定性を高めることも可能だが、しかしそうはしていない（11・15）。広い面を博多湾に向けて石面とし、距離を稼ぐのを優先したらしい。

割面の作り出される場面として、いま、㉞・㉟の候補を示したが、仮に㉞のような採石手法をとっていたならば、形やサイズにはもう少しまともがあるに違いない。そうではなく、かつ、自然面を広く残した築石5の存在などを勘案すると、露頭に転がる転石を集め、箱崎の浜堤に運んできたと考えるのが穏当なところでないかと思う。転石の場合、築石にふさわしい石材もあれば、そのままでは積み上げにくい石材もある。しかしながら礫岩の脆さはサイズ調整に最適で、石同士を打つけるだけで良い。施工地であるこの地点で割ったならば、端材も散らばるはずである。築石の下に敷き、あるいは間を充たした礫岩の端材は、このようにして生じたのではなかろうか。（齋藤瑞穂）

出土遺物 第12図1は、石積み外側の2層（第11図：右下枠内）で出土した瓦質土器の握鉢である。底部の小片で時期の絞り込みは難しいが、13世紀後半から15世紀中葉頃のものと考えられる（山本・山村 1997）。立ち上がりがゆるく、東播系の握鉢に形状が似る。2は、外側3層出土の土師器の坏底部である。小片であり摩滅が激しく、時期の特定にいたらなかった。3はSF02の周辺で出土した古墳時代の須恵器坏で、かえりを持つ坏身である。口縁部の立ち上がりの角度や坏部の深さなどから、TK43型式の前後に位置づけられる。（谷 直子）

3. 小 結

HZK1902地点（中央図書館前南地点第4次）は、2016年度のHZK1603地点（同第1次）とHZK1604地点（同第2次）に挟まれたエリアで実施された発掘調査である。

今次の調査により、HZK1603地点の石積み遺構SF02と、HZK1604地点の石積み遺構SF03の延長部分が検出され、それぞれ1石ずつ加わった。また、本地点の中央部分から新たに石積み遺構SF05が発見された。

SF05は、これまで知られていた石積み遺構の中間を埋め、HZK1604地点のSF04からHZK1603地点のSF01まで一連なりに並ぶことがより確かになった。走向はN19°Eを取り、断続的ながら34.65mに及ぶ。（齋藤瑞穂）

註

- 1) 福田・森編（2018）図18に掲げられた遺構配置図は、遺構と座標の関係が正確でない。第10図をもって正とされたい。
- 2) 九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：立試1912。
- 3) 福田・森編（2018）の巻頭図版4（2）「HZK1604地点西地区防音講義室犬走下石積み遺構 SF03」をみると、SF03には第11図の礎石1・3の北側にもう1石存在していたことがわかり、これについては「調査中、基礎石と考えられる長径約60cm、短径30cmの石材が崩落した」（58頁）との真摯な報告がある。本文に掲げた区間長は、写真の様子をふまえ、礎石3の北端から2の南端までの距離に、この石の「短径30cm」を加えて算出した。なお、基礎石と評価されているが、高さは礎石3に等しく1・2より1段高い。基礎石ではなく2段目であろう。
- 4) 防音講義室は1958年に竣工された。
- 5) 井上満子も、博多の石畳遺構を元寇防塁と判断しうる理由の一つに、「石畳遺構が延びる方位が博多の町のいずれの町割の方位にも合わないこと」（井上 2008：50～51頁）を挙げている。
- 6) 現在のところ、前面のみ石を積み重ねた例は箱崎キャンパス以外に知られていないらしい（大塚 2013、蔵富士編 2019、三阪ほか 2019）。
- 7) HZK1603地点SF01のC-C'断面が80度を測る（福田・森編 2018）。
- 8) 堀貫貴教授の御教示をたまわった。また、和田晴吾や川西宏幸の論考に多くを学んだことを明記しておく（和田 1991、川西 2005、Kawanishi 2006、川西 2007）。

引用文献

- 井上満子 2008「博多の元寇防塁」『中世都市・博多を掘る』海鳥社 48～51頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修福岡市史特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市史編集委員会・福岡市 302～317頁
- 川西宏幸 2005「古代世界の石材加工」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越哲志先生退官記念事業会 839～856頁
- Kawanishi, H. 2006 The Development of Stone Processing in East Asia. *Proceedings of the International Conference of East Asian Architectural Culture, Kyoto 2006, Proceedings I*. 東アジア建築文化国際会議京都2006実行委員会 pp.335-344
- 川西宏幸 2007「東アジアの石工技術—線刻技法の展開—」『日中交流の考古学』同成社 278～290頁
- 蔵富士寛(編) 2019「元寇防塁—調査総括報告書—」福岡市教育委員会
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—」九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・齋藤瑞穂・福永将大・谷 直子・宮本一夫 2019「箱崎地区における元寇防塁の構造と立地環境」『令和元年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会 80～89頁
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—」九州大学埋蔵文化財調査室
- 山内豊徳・巻内勝彦 1972「元寇防塁構造の土木工学的考察」『九州大学工学集報』第45巻第3号 九州大学工学部 363～369頁
- 山本信夫・山村信崇 1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第79集 国立歴史民俗博物館 237～310頁
- 和田晴吾 1991「石工技術」『古墳時代の研究』第5巻 雄山閣出版 127～143頁

Ⅲ HZK1803地点（中央図書館前南地点第3次調査）

1. 調査の経緯

(1) 調査地点の位置と調査の経緯

本調査地点は箱崎キャンパス北部に所在する中央図書館の南側に位置する。既往調査では、本地点の北側に隣接するHZK1603・1604地点（福田・森編 2018）をはじめ、HZK1706・1701・1802地点において元寇防塁の主体となる石積み遺構が発見されている。これらは南北の方向ではほぼ直線上に延びることが判明し、さらにHZK1701・1802地点では石積み遺構のすぐ東側に溝状遺構も検出された。こういった状況の下、元寇防塁の残存範囲を確認するとともに、溝状遺構の位置づけを行うことを目的とし、本発掘調査を実施した。

九州大学埋蔵文化財調査室は、平成30年8月2日付の福岡県教育委員会あて「九大統第20号」にて、HZK1802・1803両地点の埋蔵文化財発掘届を提出した。これに対して、福岡県教育委員会より同月17日付「30教文第1301号」にて許可通知があり、10月17日に現地調査を開始した。

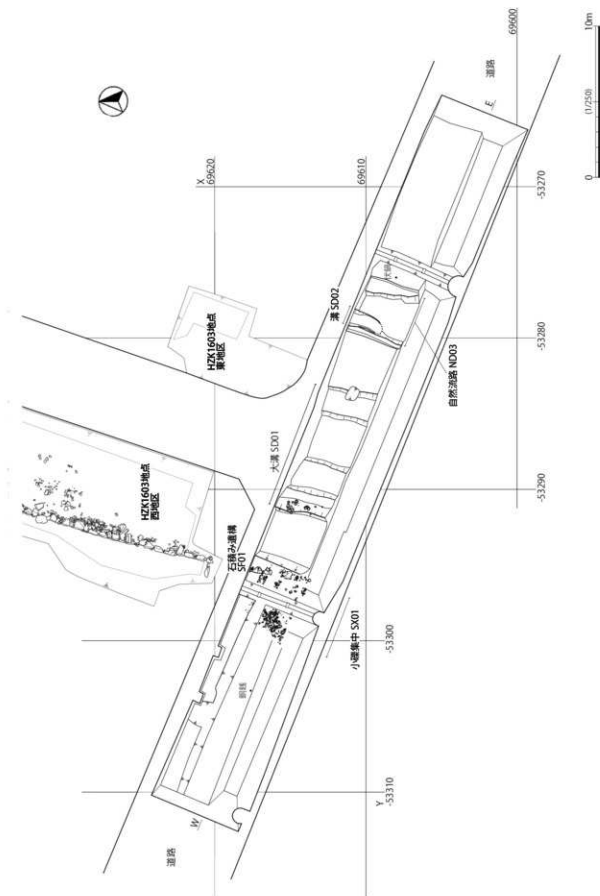
(2) 調査要項

遺跡名	箱崎遺跡
地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK1803地点（中央図書館前南地点第3次調査）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK1803 福岡市調査番号：1829、箱崎遺跡第91次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	300㎡
調査原因	学術研究
調査期間	平成30年10月17日～平成31年1月18日
遺物量	コンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）4箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当	三阪一徳、齋藤瑞穂
調査作業員	穴井和子、伊藤未紀、井上光江、内山圭子、浦崎てい子、大浦旗江、大園英美、奥敦子、門脇高子、城野勝彦、高武奈美、小林敏子、定水靖史、真田文字、篠崎繁美、節政善憲、竹本葉子、田代 薫、田中悦子、田中ゆみ子、田野和代、堤 末子、中島秀司、永濱弘子、仲前富美子、中村尚美、中山大輔、西浦喜久子、西田和廣、原田由佳、東嶋 茜、東島真弓、松下さゆり、松下由希子、三辻香奈子、宮原ゆかり、宮元亜希世、武藤マリ子、安里由利子、山田幹裕、山本加奈子、横谷明美、吉田辰義
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉、犬山真弓、小名真理子、坂口由美子、富田代、富田麗子、濱古賀美和

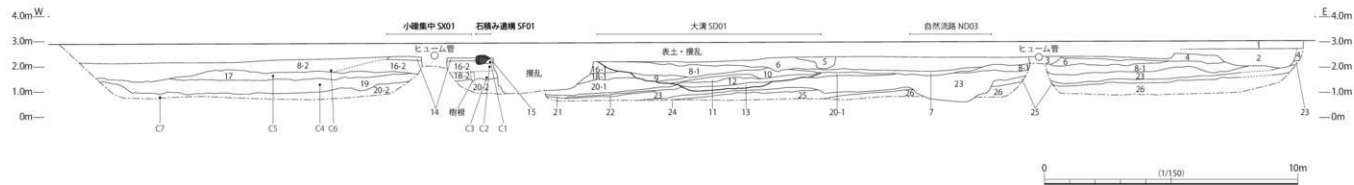
(3) 調査の経過

本地点では、東西約50m、南北約6mの調査区を設定した。キャンパス全体の発掘調査グリッドでは（第2図）、J22・K22区に相当する。工事および調査工程の都合上、調査区を西側と東側に分けて

Ⅲ HZK1803地点（中央図書館南南地点第3次調査）



第13図 HZK1803地点全体図



【HZK1803サブトレッチW-E断面】*()は調査時の層位名

- | | | | | | |
|------------|---|-------------|---|-----------|---|
| 1 (e1) | アスファルト直下に敷かれた砕石の層 | 13 (e13) | 5YR5/6 明赤褐、中砂を含んだΦ3mmほどの小礫層、しまり強、粘性なし、大溝SD01の直下層 | 20-2 (w6) | 5Y6/1 灰、7.5YR5/6 明黄 (鉄分沈着部分)、粗砂 (中砂含む) および 7.5Y7/1 灰白、シルト～細砂) が互層になる、しまり弱、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む |
| 2 (e2) | 2.5Y6/3 に近い黄、細砂、しまり強、粘性なし、砕石が混じる、工事時の埋地層 | 14 (w1-1) | 10YR5/6 黄褐、中砂 (粗砂含む)、～15cmの砂質・礫岩片を多量に含む、しまり普通、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | 21 (e17) | 5YR4/4 に近い赤褐、極細砂を混じらせた中砂～細砂、しまり普通、粘性なし、自然堆積層 |
| 3 (e3) | 5Y4/2 灰オリーブ、硬質じりの中砂、しまり強、粘性なし、配管の埋め土 | 15 (w1-2) | 10YR5/6 黄褐、中砂 (粗砂含む)、～20cmの砂質・礫岩片を多量に含む、しまり普通、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | 22 (e18) | 2.5Y6/2 灰黄、細砂～極細砂、しまり強、粘性なし、自然堆積層 |
| 4 (e4) | 10YR5/4 に近い黄褐、極細砂を含む粗砂、しまり強、粘性なし、灰をやや含む、近代遺構の層解らない土造成土 | 16-1 (e14) | 10YR4/4 褐、極細砂を含む粗砂、しまり普通、粘性なし | 23 (e19) | 2.5Y3/2 黄褐+10YR6/4 に近い黄褐、Φ3mm以上の小礫、Φ14mmの黒母粒を含む中砂層、しまり強、粘性なし、遺物あり、自然堆積層であるが、一部24～26層を深く挟んでいる部分がある(自然流路ND03) |
| 5 (e5) | 2.5Y5/2 暗灰黄、細砂、しまりなし、粘性なし、古い配管の埋め土、鉄管のまわりにモルタルの層いがある | 16-2 (w2-2) | 10YR5/6 黄褐、中砂 (粗砂含む)、しまり普通、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | 24 (e20) | 2.5Y6/2 灰黄、Φ3mm程度の小礫層、しまり弱、粘性なし、自然堆積層 |
| 6 (e6) | 10YR3/3 暗褐、粗砂置じりの中砂、しまり強、粘性なし、炭化物を含んだ腐植土層 | 17 (w3) | 10YR5/6 黄褐、中砂 (粗砂多量に含む)、しまり普通、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | 25 (e21) | 10YR5/3 に近い黄褐、博多湾寄りでΦ5mm程度の小礫が、宇美川寄りで中砂が堆積する、しまり普通、粘性なし、遺物あり、自然堆積層 |
| 7 (e7) | 10YR4/3 に近い黄褐、細砂、しまり普通、粘性なし、腐植土層だが炭化物はあまりみあたらない、8-1層を切る | 18-1 (e15) | 10YR5/3 に近い黄褐、Φ3mm程度の粒子で構成される小礫層、しまり弱、粘性なし、自然堆積層 | 26 (e22) | 7.5YR5/6 明褐、Φ3～7mmの小礫層、しまり弱、粘性なし、自然堆積層 |
| 8-1 (e8) | 10YR5/6 黄褐、径の均一的な中砂、しまり強、粘性なし、大溝SD01を含め広く覆う | 18-2 (w4) | 10YR5/8 黄褐、中砂 (粗砂含む)、しまり弱、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | C1～C7 | 炭化物採取位置 |
| 8-2 (w2-1) | 10YR5/6 黄褐、中砂 (粗砂少量含む)、しまり普通、粘性なし、炭化物少量含む、遺物少量含む | 19 (w5) | 10YR5/6 黄褐 (上半)、5Y7/1 灰白 (下半)、5YR4/8 赤褐 (鉄分沈着部分)、シルト～粗砂、しまり弱、粘性なし、炭化物少量含む、遺物含む、17層と20-2層が複雑された状況か | | |
| 9 (e9) | 10YR6/4 に近い黄褐、中砂～粗砂、しまり強、粘性なし、大溝SD01の覆土 | 20-1 (e16) | 2.5Y6/2 灰黄、中砂をわずかに含む極細砂、しまり普通、粘性なし、所々鉄分を含んで赤化している、自然堆積層 | | |
| 10 (e10) | 2.5Y6/4 に近い黄、細砂～粗砂、しまり普通、粘性なし、大溝SD01の覆土 | | | | |
| 11 (e11) | 10YR5/6 黄褐、極細砂～粗砂、しまり普通、粘性なし、大溝SD01の覆土 | | | | |
| 12 (e12) | 10YR4/4 褐、極細砂～細砂、しまり強、粘性強い、大溝SD01の覆土 | | | | |

第14図 HZK1803地点サブトレッチ土層断面図

調査を実施することとした。まず、西側約28mの区間を対象に、平成30年10月17日～11月7日の日程で調査を行った。

現代の表土と近代以降の攪拌層・造成土を重機掘削により除去し、8-2層上面で遺構検出を行った結果、石積み遺構 SF01と小礫集中 SX01を検出した。これ以外に遺構は検出されなかった。調査区南辺には共同溝が東西方向に横断しており、その敷設深度は地表下3m以上に及ぶ。そのため、共同溝埋設時の掘方に伴う攪乱を地表下約2mまで除去した。そうして当該部分をサブトレンチと称し、その北壁で土層の観察を行った。遺構・土層断面の記録を終えた後、遺構面を土嚢で保護し、11月7日に西側部分の調査を終了した。

12月15日に再開して、東側部分に着手する。まずは西側で設けられたサブトレンチを東に拡張し、土層断面の観察を通して遺構の存否を確かめた。結果、調査区のはほぼ中央で大溝 SD01が、その東方で自然流路 ND03が、それぞれ検出されている。

次いで、サブトレンチの北側を層に沿って剥ぎ、サブトレンチで検出し得た遺構のプランの把握につとめた。この作業を通じて、大溝 SD01が石積み遺構 SF01にほぼ並行することを8層（8-1層）で確認するとともに、溝 SD02を新たに検出している。

SD01・02の精査・記録の後、ND03付近を25層上面まで掘り下げ、同流路の走向の把握と内部の精査にあたった。以上をすべて終えて、SD01を将来の検証にそなえて養生し、調査区を埋め戻した。調査は平成31年1月18日に終了した。

（三阪一徳・齋藤瑞穂）

2. 層 序

第14図をもとに層序の特徴を整理するとともに、出土遺物の年代、採取炭化物の放射性炭素年代測定値および既往調査の成果をふまえ、各層の形成時期について検討する。なお、放射性炭素年代測定値については第VI章パレオ・ラボ AMS年代測定グループの報告にもとづき、2σ暦年代範囲を示した。

4層 近代以降の攪拌層あるいは造成土と考えられる。九州帝国大学設置に伴って敷設された造成土を含むと推定される。

6・7層 暗褐色中砂で構成された腐植土層である。調査区東側でのみ確認される。遺物はごく少量包含される。遺構は検出されていない。6層からは12世紀中頃～後半とみられる白磁碗（第20図2）、6層を切り込む近現代の攪乱である5層からは近世と推定される陶器が出土している（第20図1）。本地点の約80m南側に位置するHZK1802地点（第IV章）の調査成果にもとづくと、中世～近世の包含層と推定される。

8・17・18層 黄褐色中砂で構成される。砂丘層・攪乱層¹¹に相当する。8層上面およびこれと同じ標高に遺構検出面を設定し、石積み遺構 SF01、小礫集中 SX01（14層）、溝 SD02を検出した。遺物はごく少量包含され、8層上面で13世紀後半～14世紀頃の土師質の鍋が出土している（第20図5）。8-2層からは14世紀末頃の高麗末～朝鮮王朝陶器碗（第20図6）、8-2層と17層の境から13世紀初頃～前半の龍泉窯系青磁碗（第20図10）が出土している。

炭化物の年代値は、8-2層採取試料（第14図C6、第12・13表試料 No.6、PLD-38840）が^{1207-1266 calAD} (95.4%)、17層採取試料（C5、試料 No.5、PLD-38839）が^{1038-1164 calAD} (95.4%)、18-2層採取試料（C3、試料 No.3、PLD-38837）が^{1191-1263 calAD} (95.4%)である。以上から、8・17・18層の形成は、11世紀～14世紀を中心とした時期と推定される。

19・20層 後述する21～26層と類似した堆積物で構成され標高も同程度であるが、互層構造が不明瞭である。自然もしくは人為作用による攪拌を一定程度伴っている可能性がある。炭化物の年代値は、19層採取試料（第14図 C4、第12・13表試料 No.4、PLD-38838）が680-770 calAD（95.4%）、20層採取試料（C7、試料 No.7、PLD-38841）が1039-1185 calAD（95.4%）である。年代測定値と上層の年代を勘案すると、形成年代は12世紀以前と推定される。

21～26層 粗砂とシルト～細砂が互層をなす。自然堆積層であり、海浜層・砂丘層もしくは洪水層²⁾に相当する。遺物が少量含まれる。26層からは6世紀後半～7世紀初頭の須器杯身（第21図4）が出土している。19・20層と同じ由来の堆積物である可能性が高く、同様に12世紀以前に形成されたと推定される。（三阪一徳）

3. 遺構と遺物

(1) 石積み遺構 SF01・小礫集中 SX01（第15図）

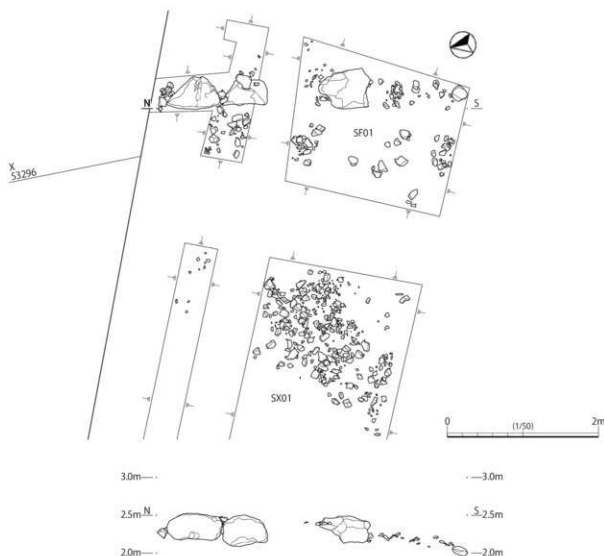
2016年5月19日、ガス管切替工事に伴って、福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課（現・文化財活用部埋蔵文化財課）および九州大学埋蔵文化財検討ワーキンググループ・埋蔵文化財調査室の立会調査が実施された³⁾。その結果、元寇防塁の基底部の可能性がある大型石片2点が確認されている（福田・森編 2018）。今回の調査ではこの2石を再度露出させるとともに、その南側にさらに1石を検出した。

本地点の石積みは、HZK1603地点の石積み南端から約25m南に位置する。両者はわずかに陸側に湾曲しつつも連続して並んでいる点から、同一遺構と考えられる。なお、本地点南側に位置するHZK1701地点の北端と本地点の南端の石積みの距離は約50mである。そして、両者はほぼ直線上に並ぶことから、やはり同一遺構とみて相違なからう。

北側2石と南側1石の間約70cmは埋設管によって破壊されているが、本来はその間に1ないし2石の大型石片が充填されていたと推定される。大型石片3石は西側に面を揃え南北方向に並んでおり、全長約2.7mである⁴⁾。3石の下層に大型石片は認められず、これらが石積み最下段（基底石）と考えられる。基底石のサイズは幅（南北）60～70cm、奥行（東西）40～50cm、高さ30～40cm、下端の標高2.1～2.2m、上端の標高約2.5mである。石材は既往調査で検出された石積みと同様、礫岩・砂岩である。基底石の西側は平滑面が利用されているが、石材の性質上、明確な加工痕は確認できず、どの程度の加工がなされたかは不明である。

石積み周辺の堆積物が基本的に砂層であることに加え、築造後の崩落や補修、後世の削平などを勘案すると、盛土や整地層を含む遺構全体の構造を明確に把握することは難しいが、この点について若干検討しておく。まず、基底石の上半は表土・攪乱で覆われているが、下半は14層から16.2層上に位置する。14層は5～15cmほどのサイズの礫岩・砂岩小片が、基底石中に相当する標高2.3mを前後して、10～15cmの厚さで集中して堆積している。平面的には石積みの西側最大約4.4mの範囲に分布するが、その密度は均一ではない。これを小礫集中 SX01とした。15・16層の位置づけは難しいが、石積みとの位置関係から、15層は石積みの盛土、16層は整地層の可能性ある。17・18層は防塁築造以前に堆積したと推定される。なお、15・16層と17・18層は類似した堆積物で構成され、15・16層は人為的な攪拌を受けているとみられるが、元来は17・18層に由来すると考えられる。

年代 放射性炭素年代測定値および遺物にもとづき、遺構の年代を検討しておく。上述のように、17・18層は防塁築造以前、8層は築造以降に形成されたと推定され、これら砂丘層・攪乱層の



第15図 HZK1803地点 SF01・SX01平面・立面図

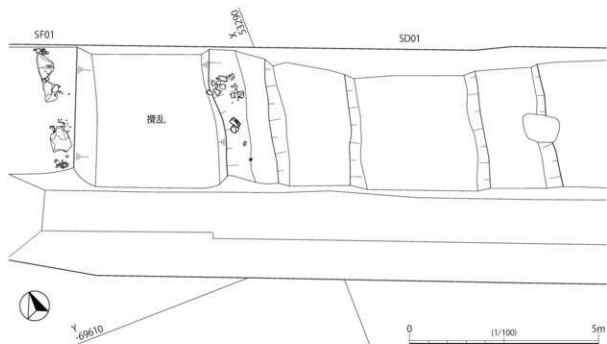
形成時期は11世紀～14世紀、さらに下層の19・20層の形成時期は12世紀以前と推定した。また、石積みみの盛土や整地層の可能性を含む層の炭化物の年代値は、15層（第14図 C1、第12・13表試料 No.1、PLD-38835）が1184-1265 calAD（95.4%）、16-2層（C2、試料 No.2、PLD-38836）が974-1023 calAD（95.4%）である。

石積みは11世紀～14世紀に形成された砂丘層・攪乱層の上半に位置しており、この点は1276年という元寇防塁の築造時期と矛盾しないといえる。なお、盛土や整地層の炭化物からは、防塁築造と同時期かそれより古い年代値が得られている。これについては築造時に下層の砂を掘って利用した可能性などが想定される。

（三阪一徳）

（2）溝状遺構 SD01→大溝 SD01（遺構名変更、第16図）

名称の変更 サブトレンチ北壁断面の観察により検出した溝で、石積み遺構 SF01の東方に位置する。概要報告では「溝状遺構 SD01」の名をあたえたが（三阪・谷籾 2019）、下で述べるように海成



第16図 HZK1803地点 SD01平面図

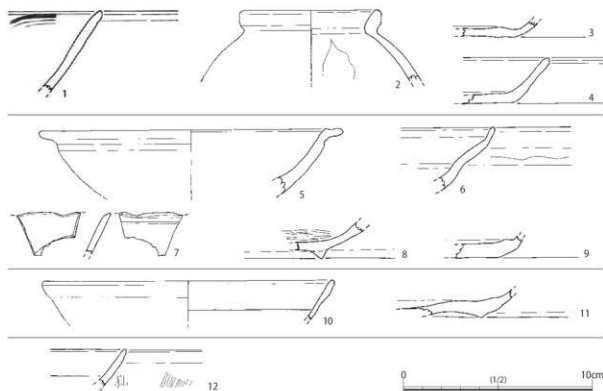
層・砂丘層を人為的に掘り込んで作ったことは確実であるから、溝「状」と呼び措くのは適切でない。以後、大溝 SD01 と称する。

特徴 石積み遺構 SF01の石面（博多湾側正面）から東方4.8mの地点で落ち込みが始まり、13.6m地点で立ちあがる。検出面における幅は8.8mを前後する⁵¹。ただし、東側の立ち上がりは腐植土層（6・7層）に切られており、本来の上面幅はもう少し上回るであろう。

大溝は、海浜層・砂丘層／洪水層20-1層、21層、22層、23層を掘り込んで構築された。走向はN11°Eを取り、石積み遺構と並行する。HZK1802地点（本書第IV章）やHZK1805地点（第V章）でも、石積み遺構と並行して走る大溝が検出されており、両遺構は対をなすとみてよい。2つの段を作り出しつつ、溝底から緩やかに立ちあがる。溝底の幅は、2.9mではほぼ一定している。段が、構築当初からあったか、あるいは再掘削を重ねるなかで生じたか、いまはその判断が難しい。最も深い箇所の高さは1.07mで、石積みの設置標高との比高差は1.06mである。

第14図に掲げた土層断面図でいうと、8-1～13層が大溝の覆土にあたり、おおよそ中砂・粗砂で構成される。10層以深を観察すると、下層はまず陸側（東側）から動いてきた砂で埋まったことがみてとれる。埋積が進むと、砂は一転して石積み側（西側・博多湾側）から流れ込んだ（8-1・9層）。石積み側の立ち上がりには礫岩も散らばる。8-1層の堆積は、石積みの崩れとも深く関わっているらしい。
(齋藤瑞穂)

出土遺物 第17図1～4は8-1層の出土品で、1は青磁碗である。櫛刀による内面分割線の一部分が口縁部下に見える。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗I-4類で、12世紀中頃～後半に属する（宮崎編2000）。2は、口縁部が「く」の字に外反する短頸の壺。胎土に黒色斑点を含む点から大宰府編年の壺IV類に相当し、13世紀前半代に位置づけられる。3は土師器の皿である。小片で摩滅が激しい。4は糸切り底の土師器の坏である。



第17図 HZK1803地点 SD01出土遺物

1～4 (8-11層), 5～9 (10層), 10・11 (12層), 12 (13層)

5～9は10層から出土した。5は中国陶器の鉢である。口縁部が短く屈折し、内外面とも軸は薄い。6は陶器の碗である。軸に黒色粒子が混ざることから、朝鮮王朝陶器の可能性もある。7は青磁碗である。口縁端部に輪花を施し、内面には細い片彫りで施文する。龍泉窯系青磁碗I類に似る。12世紀後半～13世紀初頭か。8は高台付きの瓦器碗である。内面に多方向のミガキを施す。9は糸切り底の土師器の坏である。

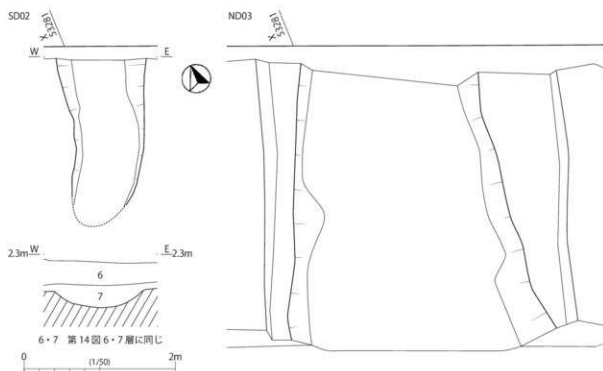
10・11は12層出土。10は青磁碗である。口縁部はやや肥厚するが玉縁ではない。同安溪系青磁碗の口縁部かもしれない。11は糸切り底の土師器の坏である。

12は13層出土である。外面に細かい縦方向の櫛目文を有する青磁碗で、同安溪系青磁碗I-1b類である。12世紀中頃～13世紀初頭の年代があたえられている。(谷 直子)

年代 溝内出土品だけをみれば、磁器の年代は、12世紀中頃から13世紀前半でまとまりをみせ、最深部の13層から最上部の8-1層まで年代差もみられない。ただし、8-1層は溝内だけでなく周囲まで覆った砂であり、溝の東側では同層中に13世紀後半ないし14世紀代の伏鍋がみられた(第20図5)。大溝が機能していた年代は、この鍋のそれに従うのがもっとも適切であろう。(齋藤瑞穂)

(3) 溝 SD02 (第18図)

特徴 腐植土層(6・7層)を測いだ際に検出した断面椀形の溝である。調査区北壁から南西方向に延びていくが、2.2m先より南で確認できなくなり、サブトレンチの土層断面(第14図)には現れない。走向はN22°Eを取る。検出した23層上面での幅は最大1.2mを測り、溝底までの深さは30cmである。溝底の標高は1.6mで、大溝のそれより50cm余高い。溝内に7層が嵌入している点か



第18図 HZK1803地点 SD02・ND03平面・断面図

ら、大溝の埋没後に形成され、かつ、7層の堆積によって埋没したものと推測される。

年代 土師器の皿や坏が出土しているが、図化に基え、年代の特定に資するものはない。7層がSD01の最上部を覆う8-1層を切り、かつ、近世の染付などは含まれていない点から、ひとまず中世後期の遺構とみておきたい。（齋藤瑞穂）

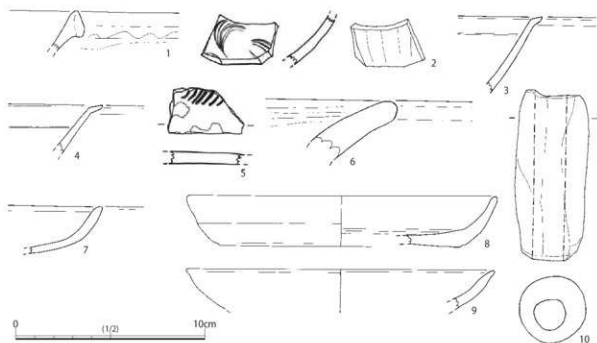
(4) 溝 SD03→自然流路 ND03（遺構名変更、第18図）

特徴 サブトレンチ北壁断面の観察により検出した溝で、海浜層・砂丘層／洪水層23層が、先に堆積していた海浜層・砂丘層／洪水層25・26層を削るように抉っている。調査区北壁から南西に延び、確認し得た長さは3.8mである。走向はN24°Eを取る。プランを捉えた25層上面での最大幅は3.5mで、底までの深さは最大78cmを測るが、立ちあがりの角度は場所により直立的な部分も、緩い傾斜の部分もあって均一でない。底の標高は0.62mである。

名称の変更 概要報告では、本遺構を「溝 SD03」の名で報告した（三阪・谷堀 前掲）。しかし、幅は部分ごとに違って、南側で次第に広がっていく。そうして、断面によく表現されているとおり兩岸のレベルが異なり（第14図）、かつ、直立的に立ちあがる箇所は浸食のようになって、人為的に掘削された遺構とは考えがたい。以上の理由から、自然流路 ND03と呼び替えることとする。宇美川から派生した網状流路の1本であろう。

流路の内部は海浜層・砂丘層／洪水層23層のみで覆われており、一度で埋没する出水イベントがあったことを想像させる。大溝 SD01は23層を掘り込んで構築された遺構であることから、ND03が古く、SD01は新しい。（齋藤瑞穂）

出土遺物と年代 第19図1～4は白磁碗である。1は肉厚な玉縁口縁部に、軸も厚く施すもので大宰府編年の白磁碗Ⅳ類である。11世紀末～12世紀中頃の年代があたえられている。2は内面に短い櫛目で花文を描いたV-4c類の碗で、12世紀中頃に属する。3・4はV-4a類である。口縁部が屈折し、



第19図 HZK1803地点 ND03出土遺物

端部が嘴状に尖る。内面口縁部下には沈線が1条めぐり、これも12世紀中頃の例である。

5は黄軸鉄絵盤の底部である。黄軸葉や粗くザラザラした胎土がみられる磁窯産の製品である。11世紀後半～12世紀中頃に属する。6は土師器の甕と思われる。小片であり、甕の底の可能性もある。7～9は土師器の坏である。いずれもナデ調整で、8は糸切り底である。10はかなり大型の土鍾で、円筒形を呈する。

以上、ND03の出土品は12世紀中頃を下限とする。SD01との新旧関係とも調和的である。

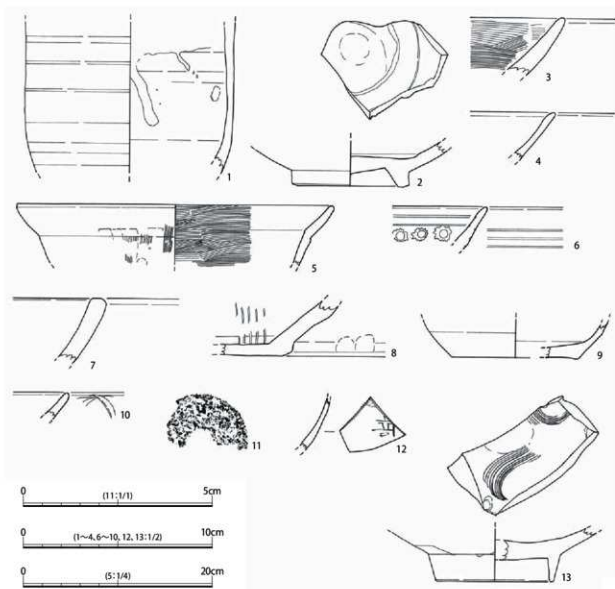
(谷 直子)

(5) 遺構外出土遺物

防壁以後 第20図1は5層(攪乱)出土の陶器の小型甕である。混和材の少ない胎土や均一な回転ナデ調整、軸調などから近世とみてよい。2・3は6層の出土で、2は白磁碗である。ケズリ高台で、内面見込みの軸を環状に掻き取る。白磁碗Ⅱ類で、12世紀中頃～後半に属する。3は土師質の鍋の口縁部である。外面にスガが付着する。

4は8-1層出土の瓦器碗である。グリッド K22-8区で、自然流路 ND03の上方から出土した。口縁部外面が黒色を呈する。5も K22-8区・8-1層の出土で、土師質の鍋である。伏せた状態で検出され、同じく8-1層に覆われる大溝 SD01の年代的定点となる資料である。体部下半は、6層が掘り込まれた際に失われたのであろう。内外面ともスヤコグは付着しておらず、鍋として使われていない。口縁部がゆるく屈曲しており、内面に残がつく。13世紀後半から14世紀の所産である(山本ほか 1997)。

6～11は、石積みの外側に堆積した8-2層から出土した。6は高麗末～朝鮮王朝陶器の碗で、内面に2条の横線と花文を、外面に3条の横線を白色粘土で象嵌する。14世紀末頃の所産である。7は土師質の鍋の口縁部で、口縁端部を面取りする。8は瓦質土器の播鉢である。スリ溝が摩滅している。9は糸切り底の土師器坏である。体部中央に稜線をもつ。10は8-2・17両層の境付近から出土した青磁碗である。外面に連弁文を施し、軸調は黄色味がかかる。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、13世



第20図 HZK1803地点遺構外出土遺物（1）—防塁以後—

紀初頭～前半に位置づけられる。11は銭貨である。鋳出しが悪く、文字も判然としない。裏面は平坦であり、模倣銭であろう。

12はJ22.9区で出土した近代の染付。大溝SD01を切る7層と20・1・23層の境でとりあげているが、上方から入り込んだものであろう。藍色の顔料を使い、手書きで「部」と書く。九州大学の食器である。13は一括でとりあげた白磁碗。細く高く直立するケズリ高台で、内面に短い罫目で花文を書く。大宰府編年のV-4b類。12世紀中頃にかけて量が増す。

防塁築造以前 第21図1～3は土師器の小皿である。1は23層から、2は24層から、3は25層からそれぞれ出土した。1は糸切り底である。2や3は摩耗が著しい。4は26層出土の須恵器坏で、かえりを持つ坏身と判断した。立ち上がりの角度や坏身の深さなどからTK43型式ないしTK209型式と考えられる。

（谷 直子）



第21図 HZK1803地点遺構外出土遺物 (2) —防塁築造以前—

4. 小 結

HZK1803地点（中央図書館前南地点第3次）は、2016年度のHZK1603地点（同第1次）の25m南で実施された発掘調査である。

本地点では、石積み遺構 SF01として基底石3石を検出した。これらはHZK1604・HZK1902・HZK1603の石積み遺構群と直線的に並んでおり、一連のものと考えられる。石積み遺構の東側では大溝 SD01を検出した。

先行して行われたHZK1802地点の調査において、防塁が石積みと人工的に掘り込んだ大溝とで構成されることが確かになった（第四章）。それを別地点で検証・追認し得た点に本地点の意義がある。

本地点には、①自然流路 ND03が形成されていたが、②海浜層・砂丘層／洪水層23層の堆積で埋没した。この23層を掘りこんで③大溝 SD01が作られる。並行する石積み遺構 SF01は、同時に作られたものである。やがて④大溝が埋没したのち、溝の東側が掘り込まれ、⑤溝 SD02が形成された。SD02の出土品は小破片であるが、中世の範疇にとどまるものと推測される。（三阪一徳・齋藤瑞穂）

註

- 1) 下山正一・三阪一徳・市原季彦「HZK1802地点における土層の概要」（三阪・谷編（2019）所収）。
- 2) 下山正一・三阪一徳・市原季彦、前掲註1。
- 3) 九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：立試1603。
- 4) 概要報告では「3石の南北長は約5.3mである」（三阪・谷編 2019：115頁）としたが、これは誤りであり、正しくは本書の通り約2.7mである。
- 5) 概要報告において、竪堀は検出面における大溝の幅を「75m前後とみて大過ない」（三阪・谷編 2019：115頁）と報告した。これは、防塁が崩壊・埋没していく過程をめぐって、石積みの内外面を覆う8層（第14図、黄褐色中砂層）の評価に慎重を期したゆえである。しかしながら防塁の維持・管理が放棄された後、大溝を崩して溝が埋まることはあっても、新しく掘り直す行為があったとは考えにくい。そこで本書では、大溝の西端を西に延長し、幅の値をあらためて算出した。それにもない、石積みと大溝の距離も変更を加えている。

引用文献

- 大川 清・鈴木公雄・工業善通(編) 1996『日本土器辞典』雄山閣
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 宮崎亮一(編) 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』大宰府市教育委員会
- 山本信夫・山村信榮 1997『九州・南西諸島』『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 237～310頁

Ⅲ HZK1803地点（中央図書館前南地点第3次調査）

第4表 HZK1803地点出土遺物観察表

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	地味	色調	文様・調整	備考
17-1	SD01 8層	青磁 碗			[4.3]	緻密	良好	7.5Y6/2 灰オリーブ	外：無釉 内：無釉、捺文	大宰府編年 藤原朝系1-4期
17-2	〃	陶磁 短輪香	(7.4)		[3.7]	緻密、茶褐色粒子を多く含む	良好	7.5YR4/2 灰黒	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉	大宰府編年 中国陶器Ⅳ期
17-3	〃	土師器 皿			[0.9]	緻密、φ1mm 大の砂粒、赤褐色粒子を多く含む	良好	7.5YR6/4 に近い橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
17-4	〃	土師器 坪			2.4	緻密、φ1~3mm の砂粒をわずかに含む	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：指ナデ	糸切り底
17-5	10層	陶磁 鉢	(16.0)		[3.4]	緻密、φ1mm 程度の白色粒子、茶褐色粒子を含む	良好	2.5Y7/2 灰黄	外：無釉、回転ナデ 内：無釉、回転ナデ	
17-6	〃	陶磁 碗			[3.7]	緻密、黒褐色の粒子を含む	良好	輪：10Y6/1 灰 露胎：10YR6/3 に近い黄緑	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉	
17-7	〃	青磁 輪花碗			[2.2]	緻密	良好	10Y7/1 灰白	外：無釉、捺文 内：無釉、捺文	藤原朝系
17-8	〃	瓦器 鉢			[1.9]	緻密、φ1mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	5Y7/1 灰白	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、モリ	
17-9	〃	土師器 坪			[1.2]	緻密、茶褐色粒子を含む	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：ナデ、摩滅	糸切り底
17-10	12層	青磁 碗	(15.4)		[2.1]	緻密	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉	
17-11	〃	土師器 坪			[1.4]	やや緻密、φ1~3mm の砂粒を含む	良好	5.7YR8/4 浅黄橙	外：ナデ、糸切り 内：ナデ、摩滅	
17-12	13層	青磁 碗			[1.9]	緻密	良好	2.5GY7/1 黄灰オリーブ	外：無釉、捺文 内：無釉、捺文	同安朝系
19-1	ND03	白磁 鉢			[2.1]	緻密	良好	2.5Y8/2 灰白	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉	大宰府編年 白磁Ⅳ期
19-2	〃	白磁 鉢			[2.7]	緻密	良好	5Y7/2 浅黄	外：無釉、捺文 内：無釉、捺文	白磁ⅣV-4c 期
19-3	〃	白磁 碗			[4.1]	緻密	良好	10Y8/1 灰白	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉、露胎	白磁ⅣV-4a 期
19-4	〃	白磁 碗			[2.6]	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外：ナデ、無釉 内：ナデ、無釉	白磁ⅣV-4a 期
19-5	〃	陶磁 盤			0.6	粗い、φ1~3mm の黒色・白色の砂粒を含む	良好	外：2.5Y7/1 灰白 内：5Y7/3 浅黄	外：無釉 内：無釉	福徳 磁胎磁粒
19-6	〃	土師器 甕?			[3.15]	やや粗い、φ1~2mm の砂粒・赤色粒子を含む	良好	5YR6/6 橙	外：ナデ 内：ハケメ、ナデ	甕の底か?
19-7	〃	土師器 坪			[2.5]	緻密、φ1mm 大の砂粒、赤褐色の粒子を含む	良好	10YR8/4 浅黄橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
19-8	〃	土師器 坪	(16.4)	12.8	2.7	緻密、赤色粒子を含む	良好	5YR5/6 明赤橙	外：ナデ 内：ナデ	糸切り底
19-9	〃	土師器 坪	(16.2)		[2.1]	やや緻密、φ1~2mm の砂粒・赤色粒子を含む	良好	7.5YR7/6 橙	外：摩滅 内：ナデ	
19-10	〃	土師 9 型	底 3.8	厚 3.5		緻密、φ1mm 大の砂粒を少し含む	良好	5YR6/6 橙	外：ナデ	100.8g
20-1	遺構外 5層	陶磁 小壺	(11.1)		[8.0]	緻密、φ1mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	外：5Y6/3 オリーブ黄 内：2.5Y6/2 灰黒	外：回転ナデ、無釉 内：回転ナデ、無釉	近世陶器
20-2	6層	白磁 6層	(10.0)	6.2	[2.4]	緻密	やや 粗	輪：10Y6/2 オリーブ灰 露胎：2.5YR6/2 灰黒	外：ケズリ、露胎 内：無釉、掻き取り	大宰府編年 白磁破砕期
20-3	6層	土師器 鉢			[3.0]	やや緻密、φ1~3mm の砂粒を含む	良好	外：7.5YR2/1 黒 内：5YR4/3 に近い赤黒	外：ヨコハサ	スズ付蓋
20-4	J22-8区 B-1層下半	瓦器 鉢			[2.55]	緻密、φ3mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	5Y7/2 灰白~ 7.5Y5/1 灰	外：ナデ 内：ナデ	
20-5	J22-8区 B-1層上半	土師器 鉢	(33.4)		[6.4]	緻密、φ1~3mm の砂粒・管殻片を含む	良好	2.5Y6/6 橙	外：タテハサ、ナデ 内：ヨコハサ	
20-6	遺構外 8-2層	陶磁 碗			[2.2]	緻密	良好	7.5Y7/1 灰白	外：無釉、捺文 内：無釉、捺文	朝鮮王朝陶器
20-7	〃	土師器 鉢			[3.4]	緻密、φ1mm 大の砂粒を含む	良好	7.5YR7/6 橙	外：ナデ 内：ナデ	
20-8	〃	瓦質土器 鉢			[2.9]	緻密、φ1~2mm の砂粒を含む	良好	外：5Y5/1 灰 内：2.5Y7/2 灰黒	外：タテ、指オサエ 内：摩滅	
20-9	〃	土師器 坪	(9.8)	6.6	[2.0]	緻密、φ1mm 大の砂粒・赤色粒子を含む	良好	5YR7/6 橙	外：指ナデ 内：指ナデ	糸切り底

4. 小 結

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	形状	色調	文様・調整	備考
20-10	8-2/17層	青磁 碗			[1.35]	細密	良好	5Y6/3 オリーブ黄	外：捺輪、捺文 内：捺輪	大学の編年 鑑家蔵系朝日器
20-11	8-2層	模倣磁	長 [2.1]	幅 [1.2]	厚 0.2					[1.35g]
20-12	7層現在?	染付 片			[2.8]	細密	良好	N6 白		
20-13	濃橋外 一括	白磁 碗	(10.8)	6.2	[2.6]	細密	良好	7.5Y7/1 灰白	外：ケズリ、捺輪 内：捺輪、捺文	大学の編年 白磁碗 V-4b 類
21-1	自然堆積層 23層	土師器 皿	(8.8)	6.5	1.1	細密、精良	良好	7.5YR6/4 濃黄橙	外：ナデ 内：指ナデ	糸切り底
21-2	24層	土師器 坪			[1.3]	細密、φ1~3mmの砂 粒を含む	良好	10YR6/3 濃黄橙	外：ナデ、摩滅 内：指ナデ	
21-3	25層	土師器 皿			[1.0]	やや粗い、φ1~3mm の砂粒を含む。赤色 粒子を多く含む	良好	7.5YR7/4 灰白	外：摩滅 内：摩滅	
21-4	26層	土師器 坪			[2.3]	やや細密、φ1~2mm の砂粒を含む	良好	7.5Y6/1 灰	外：ナデ 内：ナデ	TK43~209型式

() は底厚値、[] は底径を表す

IV HZK1802地点（理学部二号館前南地点第2次調査）

1. 調査の経緯

(1) 調査地点の位置と調査の経緯

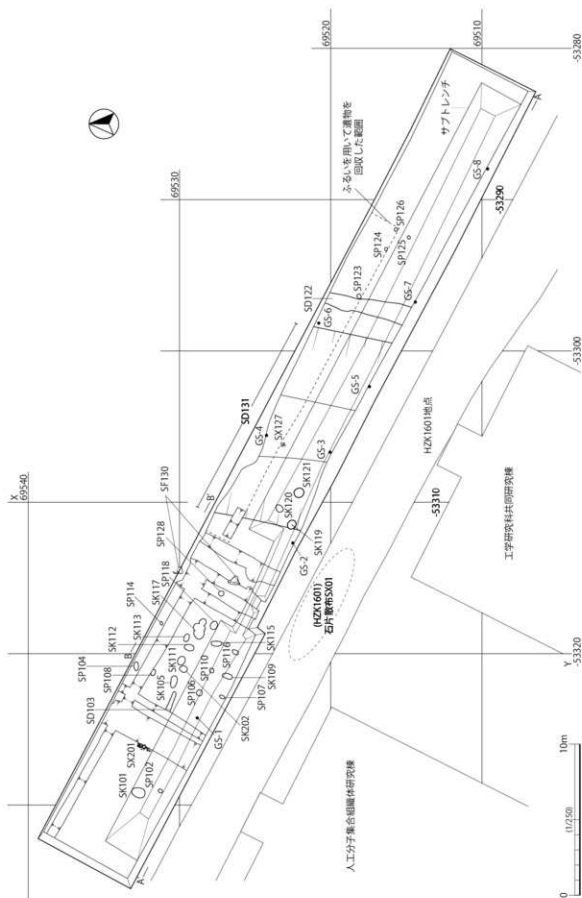
本地点は箱崎キャンパス中央部の理学部二号館南側の道路部分に位置する。既往調査では、本調査地点より北側のHZK1706・1604・1603・1701地点において元寇防塁に関連する石積み遺構が発見され、これらは南北方向にほぼ直線上に延びることが判明している。さらに本地点の南に隣接するHZK1601地点では、石積み遺構の存在を示唆する石片散布とその東側に溝状遺構が確認された。また、本地点北側のHZK1701地点では石積み遺構の東側に溝状遺構が検出された。

こういった状況を受け、元寇防塁の残存範囲を確認するとともに、溝状遺構の位置づけを行うことを目的とし、本発掘調査を実施した。また、遺構が立地する砂州や海岸砂丘（浜堤）をはじめとする自然堆積環境やその形成年代を解明するため、ジオスライサーを用いた地質学的調査（定方位地層連続採取法）もあわせて実施することとなった。

九州大学埋蔵文化財調査室は、平成30年8月2日付の福岡県教育委員会あて「九大統第20号」にて、HZK1802・1803両地点の埋蔵文化財発掘届を提出した。これに対して、福岡県教育委員会より同月17日付「30教文第1301号」にて許可通知があり、9月3日に現地調査を開始し、11月16日に調査を終了した。

(2) 調査要項

遺跡名	箱崎遺跡
地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK1802地点（理学部二号館前南地点第2次調査）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK1802 福岡市調査番号：1824、箱崎遺跡第89次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	400㎡
調査原因	学術研究
調査期間	平成30年9月3日～11月16日
遺物量	コンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）8箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当	三阪一徳
調査作業員	穴井和子、伊藤未紀、井上光江、内山圭子、浦崎てい子、大浦旗江、大園英美、奥敦子、門脇高子、城野勝彦、河野さやか、高武奈美、小林敏子、定永靖史、真田文子、篠崎繁美、節政善憲、竹本葉子、田代 薫、田中悦子、田中ゆみ子、田野和代、堤末子、永濱弘子、仲前富美子、中村尚美、中山大輔、西浦喜久子、西田和廣、原田由佳、東嶋 茜、東島真弓、松下さゆり、松下由希子、三辻香奈子、宮原ゆかり、宮元亜希世、武藤マリ子、安里由利子、山田幹裕、山本加奈子、横谷明美
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉、犬山真弓、小名真理子、坂口由美子、富田文代、富田麗子、濱古賀美和
地質学的調査	市原季彦（堆積環境リサーナ）、下山正一（西南学院大学）、復建調査設計株式会社



第22図 HZK1802地点全体図

（3）調査の経過

本地点では、南北の元冠防塁推定線に直交する、東西約59m、南北約7mの調査区を設定した（第22図）。調査区はキャンパス全体の発掘調査グリッドJ25・K25・L25区に位置する。

まず、調査区西側から東側に向け重機掘削により、現代の表土と近代以降の機拌層や造成土（1層）を除去した。調査区西部と東部では、2層上面において明確な遺構が確認されなかったため、2・6層を除去した後、標高2.5m前後の20層上面で遺構検出を実施した。その結果、石積み遺構SF130、小礫集中SX129、溝SD122を検出した。ほかにも密度はまばらであるが、調査区全域において土坑・ピット・溝などを検出した。これを第1遺構面と称し、検出遺構には100番台の遺構名を付した。

一方、調査区中央部のSF130東側約20mの範囲には、1層を除去した標高2.5m付近の第1遺構面に相当する標高において20層が存在せず、腐植が顕著な褐色砂層である3層が堆積していることが判明した。3層は近世以降の遺物が含まれるとともに、遺構も検出されなかったため、3層を除去し4層上面を検出した。南に隣接するHZK1601地点では、石積み遺構の存在を示唆する石片散布SX01とその東側に溝状遺構が発見されており、本地点でも石積み遺構や溝状遺構の存在が予想されていた。この段階で、4層以下を溝状遺構埋土と想定し、4層が分布する範囲を仮に溝状遺構SD131と称した。

SD131の断面形状を明らかにするため、まず遺構南半部分（東西幅約3m）の埋土と想定される堆積物を、遺物を回収しながら除去し、遺構の基盤層と推定される黄褐色砂層（20層）まで掘り下げることにした。その結果、20層と類似した黄褐色砂層（17・18層）が検出されたため、この段階では17・18層および自然堆積層22層の上面が遺構の輪郭であると推定した。溝状遺構SD131の存在は確かめられたものの、はっきりとした断面形状や埋土がどの層に相当するのかについては、未だ不明瞭であった。なお、溝状遺構の形成時期を検討するため、SD131北半についてはベルトを残し、分層した後、層ごとに遺物を取り上げた。その際、遺物が少量で大半が小片であったことから、ふるいをういでできるだけ多くの遺物を回収することとした。

第1遺構面の記録を終えた後、調査区のSF130より東側において20-2層をさらに掘り下げ、遺構の有無を確認した。2遺構のみであるが、20-2層中から石片散布SX201と土坑SK202を検出した。これを第2遺構面とし、検出遺構には200番台の遺構名を付した。

次いで、市原季彦氏、下山正一氏に依頼し、SD131・SF130の築造時期や性格、および周辺の堆積環境を把握するためのジオスライサー調査を実施した。SD131とその東西に設けたGS-1～8の8地点からジオスライサーコアの採取を行っている。さらに、遺構検出面以深の土層を観察することを目的として、調査区南壁沿いに長さ約56m、南北幅約3mのサブトレンチを設けた。そうして、湧水直上の標高1.0～1.5m（地表下約2m）まで掘り下げ、地質・考古の両側面から検討を行った。

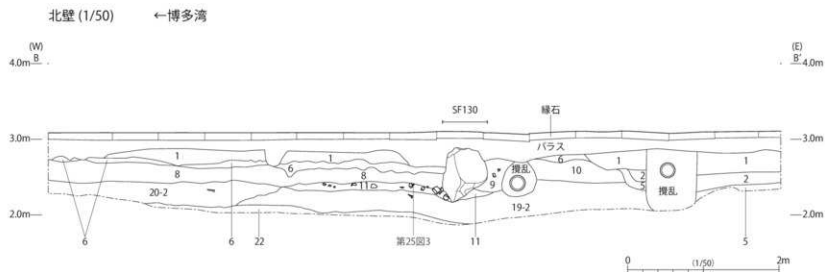
調査終了後、SX129・SF130・SD131等を土壌で保護したうえで調査区を埋め戻した。

なお、この調査においては、主要な層位や遺構、ジオスライサーコアなどから炭化物・貝殻等を採取し、株式会社加速器分析研究所に放射性炭素年代測定を依頼している。それらの結果については、報告書第2集を参照されたい（三阪・谷編 2019）。

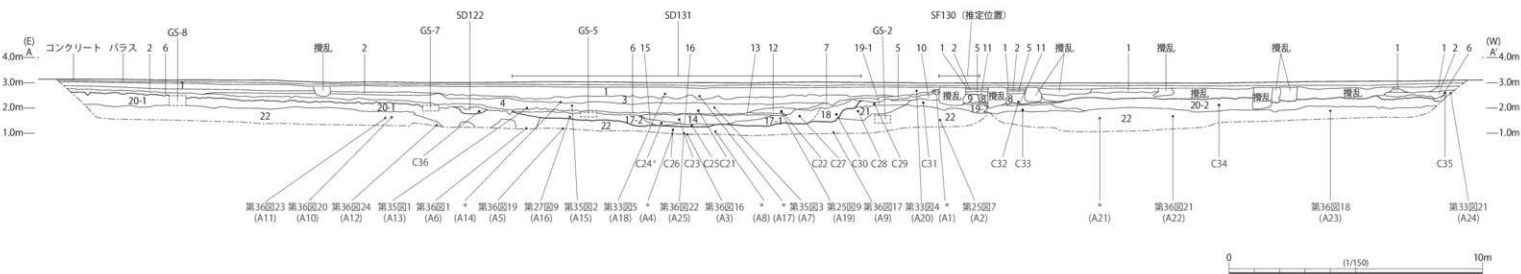
（三阪一徳）

2. 層序

出土遺物の年代と、放射性炭素年代測定値および既往調査の成果をふまえ、各層の特徴や形成時期について検討した（第23図）。なお、放射性炭素年代測定値については、報告書第2集にて既に報告しているが（三阪・谷編 2019）、本章の議論に特に関わる部分を第5表に抜粋した。以下で掲げた放



南壁 (1/150) 博多湾→



【順序】 * () は調査時の層位名

- 1 (1) 10Y2/2 黒褐、中砂(粗砂含む)、強くしまる。炭化物(石灰か?)多量に含む、遺物含む、腐植土層
- 2 (20) 10YR3/3 暗褐、中砂(粗砂含む)、強くしまる。炭化物含む(一部1層の炭化物(石灰?)混入)、遺物含む、腐植土層
- 3 (2) 10Y2/3 黒褐、中砂(粗砂含む)、強くしまる。炭化物含む(一部1層の炭化物(石灰か?)が混入)、遺物含む、腐植土層
- 4 (3) 7.5YR3/3 暗褐、中砂(粗砂含む)、しまる。炭化物少量含む、遺物含む、腐植土層
- 5 (13) 10YR4/3 に近い黄褐、中砂(粗砂含む)、しまる。炭化物含む、遺物含む、上下層の漸移層
- 6 (4,21) 10YR4/3 に近い黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物含む、遺物含む、上下層の漸移層
- 7 (11) 10YR4/3 に近い黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物少量含む、遺物含む、上下層の漸移層
- 8 (17) 10YR5/6 黄褐、細~中砂(粗砂ごく少量含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 9 (19,24) 10YR5/6 黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む、~20cmの礫岩・砂岩片多量を含む

- 10 (14,25) 10YR4/6 褐、中~粗砂、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 11 (18) 10YR4/6 褐、中砂(粗砂多量を含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む、~5cmの礫岩・砂岩片多量を含む
- 12 (5) 7.5YR3/4 暗褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物少量含む
- 13 (4) 10YR4/3 に近い黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物少量含む、遺物含む、上下層の漸移層
- 14 (6) 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 15 (7) 10YR5/3 に近い黄褐、中砂、非常に弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 16 (8) 10YR4/2 灰黄褐、中砂(粗砂含む)、しまりなし。炭化物多量を含む、遺物含む
- 17-1 (9) 10YR5/4 に近い黄褐、細~中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 17-2 (22) 10YR5/6 黄褐、細~中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 18 (16) 10YR4/4 褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 19-1 (15) 10YR5/4 に近い黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 19-2 (23,26) 10YR5/6 黄褐、中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む

- 20-1 (22) 10YR5/6 黄褐、細~中砂(粗砂含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 20-2 (23) 10YR5/6 黄褐、中砂(粗砂ごく少量含む)、弱くしまる。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 21 (12) 22 (10) 層と同質であるが互層構造がやや乱れる。しまりなし。炭化物ごく少量含む、遺物含む
- 22 (10) {10YR6/6 明黄褐、粗砂}と{2.5Y6/2 灰黄、シルト~細砂}が互層になる。しまりなし。炭化物ごく少量含む、統合含む、遺物含む

凡例

- ジオスライサーコア採取位置、GS-1 ~ GS-8
- 遺物採取位置、「探頭番号○-遺物番号○」と表記。*は未図化。(A1) ~ (A25)は調査時の取上番号
- 放射性炭素年代測定試料採取位置。C21 ~ C36、*C24は測定不可

第23図 HZK1802地点調査区壁面断面図

第5表 HZK1802地点の放射性炭素年代測定結果 (三阪・谷編 2019)

測定番号	試料名	採取場所	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
			Age (yBP)	ρ (‰)			
IAAA-181151	C21	4層	480 \pm 20	94.19 \pm 0.24	470 \pm 21	1426-1445calAD(68.2%)	1417-1450calAD(95.4%)
IAAA-181152	C22	12層	600 \pm 20	92.78 \pm 0.26	593 \pm 22	1315-1356calAD(54.5%) 1389-1399calAD(13.7%)	1301-1368calAD(70.7%) 1381-1410calAD(24.7%)
IAAA-181153	C23	14層	890 \pm 20	89.51 \pm 0.25	837 \pm 22	1169-1224calAD(68.2%)	1164-1254calAD(95.4%)
IAAA-181155	C25	16層	650 \pm 20	92.24 \pm 0.25	617 \pm 22	1300-1324calAD(27.9%) 1345-1369calAD(28.9%) 1381-1393calAD(13.4%)	1295-1399calAD(95.4%)
IAAA-181187	C26	22層	960 \pm 20	88.75 \pm 0.23	938 \pm 21	1039-1050calAD(10.4%) 1083-1127calAD(42.8%) 1135-1151calAD(15.0%)	1031-1155calAD(95.4%)
IAAA-181156	C27	17-1層	980 \pm 20	88.47 \pm 0.23	925 \pm 21	1045-1095calAD(43.0%) 1120-1142calAD(19.5%) 1147-1154calAD(5.7%)	1035-1160calAD(95.4%)
IAAA-181157	C28	21層	870 \pm 20	89.72 \pm 0.24	850 \pm 22	1169-1217calAD(68.2%)	1167-1250calAD(95.4%)
IAAA-181158	C29	19-1層	960 \pm 20	88.74 \pm 0.25	897 \pm 22	1049-1085calAD(34.8%) 1124-1137calAD(9.4%) 1150-1183calAD(24.2%)	1042-1105calAD(43.2%) 1117-1121calAD(52.2%)
IAAA-181185	C30	18層	930 \pm 20	89.10 \pm 0.23	841 \pm 21	1170-1176calAD(7.2%) 1181-1222calAD(61.0%)	1163-1251calAD(95.4%)
IAAA-181159	C31	19-2層	900 \pm 20	89.41 \pm 0.26	883 \pm 23	1058-1075calAD(12.7%) 1154-1207calAD(55.5%)	1046-1093calAD(25.3%) 1120-1140calAD(6.6%) 1147-1219calAD(63.6%)
IAAA-181160	C32	8層	850 \pm 20	89.94 \pm 0.25	811 \pm 23	1218-1256calAD(68.2%)	1185-1268calAD(95.4%)
IAAA-181161	C33	19-2層	740 \pm 20	91.17 \pm 0.24	708 \pm 21	1273-1290calAD(68.2%)	1264-1299calAD(94.2%) 1373-1377calAD(1.2%)
IAAA-181154	C34	20-2層	890 \pm 20	89.55 \pm 0.24	857 \pm 21	1168-1212calAD(68.2%)	1059-1063calAD(0.5%) 1154-1248calAD(94.9%)
IAAA-181188	C35	2層	42,530 \pm 360	0.50 \pm 0.02	42,516 \pm 359	44155-43466calBC(68.2%)	44560-43144calBC(95.4%)
IAAA-181162	C36	SD12	870 \pm 20	89.75 \pm 0.26	861 \pm 23	1165-1210calAD(68.2%)	1052-1080calAD(5.3%) 1152-1247calAD(90.1%)

放射性炭素年代測定値は、2 σ 暦年代範囲を示す。

1層 黒褐色中砂で構成され、強く締まる。近世～近代を中心とした遺物のほか、石炭の可能性がある炭化物が非常に多く含まれる。近代以降の造成土もしくは堆積層と考えられる。

2・3層 黒褐色・暗褐色中砂で構成され、腐植が顕著に認められる。また炭化物を多く含み、強く締まる。2層は調査区の東西に確認されるのに対し、3層は調査区中央のSD131の上部付近に厚く堆積している。3層に13世紀～近世の遺物が含まれる。2層から採取した炭化物C35 (IAAA-181188) の測定値は44560-43144 calBC (95.4%)である。石炭などであろう。以上から、2・3層の形成時期は近世～近代と推定される。なお、これらの層で遺構は検出されなかった。

4層 暗褐色中砂で構成され、腐植が顕著に認められる。SD131の上部から東側に堆積している。11世紀末～15世紀の遺物が少量包含される。なお、4・6層一括で取り上げた遺物の時期は、13世紀後半～14世紀後半が中心となる。同層で採取した炭化物C21 (IAAA-181151) の測定値は1417-1450 calAD (95.4%)である。本層の主な形成時期は14・15世紀であろうか。

20層 黄褐色砂層で構成される。下層の22層とは異なり、自然堆積層にみられる堆積構造をもたないため、人為的もしくは動植物による攪拌を一定程度受けていると考えられる。浜堤・人為攪拌層¹⁾もしくは砂丘層・攪乱層²⁾に相当する。調査区東半の20-1層と西半の20-2層では若干粒度が異なるが、同じ層の可能性が高い。遺物はごくわずかであるが、20-1層から12世紀中頃～後半の白磁が出土している。同層から採取した炭化物C34 (IAAA-181154) の測定値は1059-1063 calAD (0.5%)、1154-1248 calAD (94.9%)であり、11～13世紀代である。20層上面を第1遺構面とした。SF130、SX129、SD122以外にも土坑・ピット・溝が多数検出されるが、遺物があり含まれず、時期不明のものが多い。後述するように、本層中または上面には、13世紀後半に築造された元寇防壁に比定されるSF130・

SD131、12世紀後半～13世紀前半の遺物が出土したSD122、14世紀頃の遺物が出土したSD103が形成されている。以上から、本層の形成時期は11世紀～14世紀頃と考えられる。

22層 浜堤・人為攪拌層～海浜・砂州堆積物²³⁾もしくは海浜層・砂丘層～洪水層⁴⁾に相当する。なお、地質学的には海浜層・砂丘層と洪水層を区分可能であるが、肉眼観察では区分が困難であるため、ここでは一括して22層とした。粗砂とシルト～細砂が互層となる。12世紀中頃～後半の遺物が少量包含される。同層から採取した炭化物C26 (IAAA-181187)の測定値は1031-1155 calAD (95.4%)である。洪水層については、11世紀前半～中頃の大規模な出水に伴って堆積した可能性が高いとみられる。これ以降、洪水層をベースとして、13世紀後半頃までの短期間のうちに砂州(海浜層・砂丘層～砂丘層・攪乱層)が発達したと推定されている^{3) 6)}。以上から、本層の形成時期は11世紀～13世紀頃までと推定される。(三阪一徳)

3. 遺構と遺物

(1) 石積み遺構 SF130・小礫集中 SX129 (第24図)

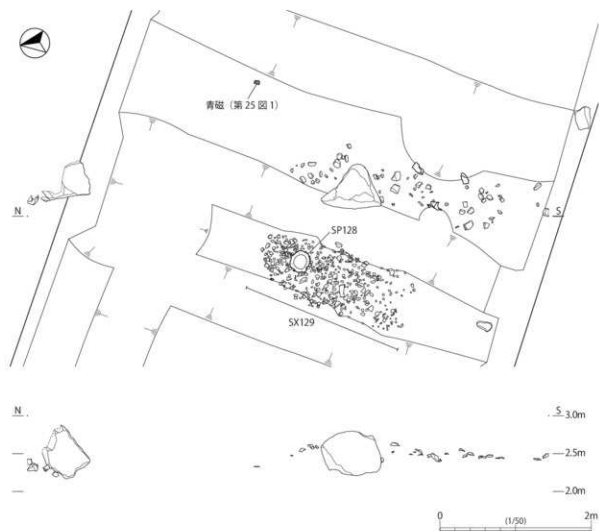
特徴 SF130は調査区の中央部西側で検出した石積み遺構である。調査区の中央に1石と北壁中に1石、石積み最下段(基底石)と考えられる計2石の大型石材を検出した。2石は約3m離れており、中間に存在したであろう基底石は、南北方向に延びるヒューム管の敷設時に撤去・破壊されたと考えられる。残存する2石の周辺にも複数の埋設管が存在しており、敷設工事の際に多少は動いているかもしれないが、しかし、2石とも西側(博多湾側)に面を揃えてほぼ直線的に並んでおり、原位置かそれに近い位置をとどめているとみてよい。

南側の築石のサイズは幅約80cm、高さ約60cm、奥行き約60cmである。北壁中の築石は、全体を検出していない。サイズは幅約70cm、高さ約70cm、奥行き45cm以上である。2石とも既往調査で発見された石積み遺構と同様、礫岩・砂岩である。この礫岩・砂岩の西側の面は平滑であるが、明確な加工痕は観察できない。

本地点の北30mのHZK1701地点でも、石積み遺構が発見されている。本地点のそれとほぼ直線的に並ぶ点から、同一の遺構と考えられる。なお、南に隣接するHZK1601地点では、最大で20cmほどの礫岩・砂岩が散布する状況が確認されている(第22図、石片散布 SX01)。本地点の基底石の検出位置に基づくと、この石片散布の中央付近に基底石が並んでいた可能性が高い。

基底石2石の直下に位置する19-1・19-2層は20層と類似するが、色調や粒度が僅かに異なる。石積みの直下に位置し、水平に堆積している点から、一定程度整地された層である可能性が想定されるが、どの程度人為的な変化が加えられていたかは不明である。浜堤頂部付近の高まりを一定程度平坦にし、その上に築石を築造した可能性は高いであろう。19層には版築の痕跡などの明確な変化が認められない。19層が人為的に積まれた層であるのか、上部が削平される程度の変化であったのかなど、石積み遺構に関する地業の実態解明については課題となる。

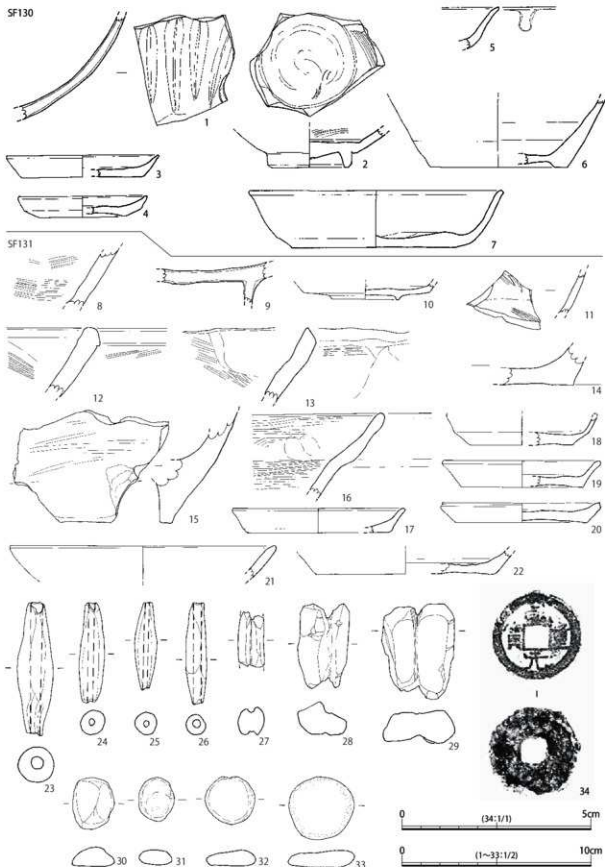
11層には、礫岩・砂岩の小片が多く含まれる。平面的には基底石の直下から博多湾側約2mの範囲に認められ、これを小礫集中 SX129と称した。小礫の密度は、とくに調査区中央で高く(第24図)、南北に離れるにつれ低くなり、調査区両壁面部分で再び高くなる。小礫の密集度は均一ではない。サイズは最大15cmであるが、5cm以下が中心となる。分布する高さは、基底石の下半から直下までの標高22～24mにまとまる。後述する石積み東側の9層に含まれる石片とは、サイズや密度、堆積状況が異なっている。



第24図 HZK1802地点SF130平面・立面図

SX129の形成要因について次の可能性を提示しておく。一つ目は、基底石の地中への沈み込みを避けるため、基底石の直下周辺に小礫を敷設した可能性である。二つ目は、基底石や裏込石の一部もしくは破片が崩落し、当時の地表面直上に散布した可能性である。三つ目は、石積み西側の平坦面の加工が遺構周辺でなされ、生じた石片がそのまま当時の地表面に残った可能性である⁷⁾。SX129(11層)と同様の堆積は、HZK1706・1803地点で確認されている。

基底石の東に接して9層が堆積している。その堆積位置から、盛土の可能性が想定される。9層にも5~20cmほどの石片が含まれるが、石積み前方のSX129に比べてサイズが大きく、一方で密度は低い。標高も2.3~2.7mの間に散らばり、SX129のようにまとまってはいない。これらの小礫は築石の一部と推定される。裏込石の可能性も想定されるが、今のところ九州大学箱崎キャンパス内では、確実に裏込石と認定できる事例はみつからない。同じく基底石の東側に堆積する10層も、その堆積位置から盛土の可能性がある。一方、基底石の前面(西側)には8層が堆積している。南壁では3m以上、北壁では5m以上西に続いている。標高は基底石下半に相当する。8層の位置づけは下記の2つが考えられる。まず遺構築造後の堆積である可能性があげられる。一方、8層を築造後の堆積とみた場合、基底石の前面(西側)の下部1/4は11層で固定されているが、3/4以上が露出している



第25図 HZK1802地点出土遺物 (1)

ことになる。こういった状況から、8層は基底石前面の1/2の高さを埋めて固定した人為層と考えることもできる。17-1層と18層と自然堆積層22層は明瞭な境界をなしており、17-1・18層が攪拌作用を受けていることは明らかである。ここでは、後述するように、両層をSD131の埋土と捉えた。ただし、これらが石積み背部の盛土である可能性や、盛土がSD131に流れ込んだものである可能性も棄却できない。

(三阪一徳)

出土遺物(第25図) 1は10層の出土で、外面に鈎連弁文を施す青磁碗である。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、13世紀初頭～前半に位置づけられる(宮崎編 2000)。2は9層出土の同窯系青磁碗。12世紀中頃～13世紀初頭に位置づけられる。3は11層(SX129)から出土した土師皿である。糸切り底と思われ、板状圧痕がみられる。4は8～11層出土の土師皿である。糸切り底で体部下半に稜線がみられる。5～7はSF130周辺の8～11・19-2・22層(第23図北壁参照)から出土した。5は白磁の皿で、口縁部に厚く施軸する。小片で型式の特定には至らなかった。6は中国陶器の甕である。内外面とも化粧土様の釉が薄くかかる。7は、糸切り底の土師器の坏で、直線的に立ち上がる。

(谷 直子)

年代 石積み遺構SF130の盛土と推定される9層と10層から、12世紀後半～13世紀前半の青磁碗が出土している。また、SF130周辺から採取した炭化物の測定値は、8層のC32 (IAAA-181160) が1185-1268 calAD (95.4%)、19-1層のC29 (IAAA-181158) が1042-1105 calAD (43.2%)、1117-1210 calAD (52.2%)、19-2層のC31 (IAAA-181159) が1046-1093 calAD (25.3%)、1120-1140 calAD (6.6%)、1147-1219 calAD (63.6%)、C33 (IAAA-181161) が1264-1299 calAD (94.2%)、1373-1377 calAD (1.2%)、21層のC28 (IAAA-181157) が1157-1250 calAD (95.4%) であり、11～13世紀代にまとまる。

年代がわかる遺物はごくわずかであるが、13世紀後半の元寇防塁築造よりもわずかに古い年代を示す。いずれも青磁であり、一定の使用期間を想定すれば、防塁築造時期と大きく矛盾するものではない。一方、放射性炭素年代測定値は防塁の築造年代を前後する年代がでてくる。以上から、SF130は13世紀後半に築造された元寇防塁に伴う遺構と考えるのも問題なかろう。

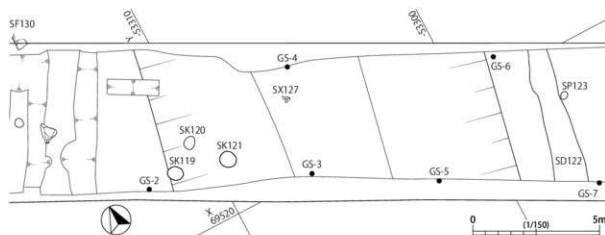
(三阪一徳)

(2) 溝状遺構SD131→大溝SD131(遺構名変更)・石片散布SX127(第26・31図)

名称の変更 地質学的調査の結果、本遺構のような溝状構造は、自然作用で形成されたとは考え難いと指摘された^{*)9)}。すなわち、自然にできた鞍部ではなく、人為的に掘り込んだ遺構であることを意味する。概要報告では溝状遺構と呼んでいたが、以後、大溝SD131と呼ぶ。

特徴 SD131は、石積み遺構SF130と並行して南北に延び、調査区内で南北長約6mを検出した。ただし、遺構周辺の堆積物が類似した砂層である点や、後世の改変を考慮すると、やはり遺構の輪郭や埋土を明確に把握することは難しい。一方、第23図南壁断面で示したように、SF130の東側において、互層状となる自然堆積層22層とこれが攪拌された層の境界が、溝状に窪んだ形状をなす状況が明確に観察される。具体的には、太線で示した22層と17-2・15・16・14・17-1・18層の境界に相当する。当該部分が大溝の輪郭の有力な候補となる。

12～16層の色調は褐色味を帯び、上層から下層にかけて締まりが弱くなっている。基盤層である22層や20層とは明らかに性質が異なっている。この点から、同層は遺構埋土と考えて相違なかろう。また、溝底の14～16層で、最大15cmの礫岩・砂岩4石ほどが散布する状況(石片散布SX127)が認められた(第31図)。SF130の石材が溝内に落ち込んだものと推定され、14～16層が遺構埋土であることを裏づける。



第26図 HZK1802地点SD131平面図

17-1・17-2層と18層は、20層と類似するが若干色調や粒度が異なる。これらの層は、22層のように自然堆積層にみられる堆積構造をもたず攪拌を受けており、遺構埋土と解釈することが可能である。遺構埋土でないとしても、石積み背部の盛土や、人の歩行など何らかの攪拌を受けた人為攪拌層と考えられるであろう。

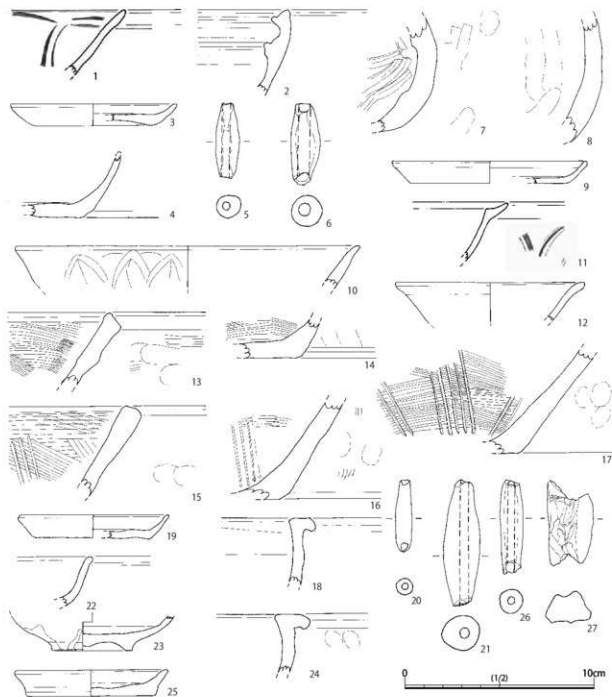
12～18層を遺構埋土とした場合、石積み遺構SF130の正面（博多湾側）からSD131西端までの距離は土層断面で約4.7m、平面で約4.5mである。東西幅は土層断面では約13.9m、平面では約13.3mとなる。溝底にあたる15層下面の標高は1.3m、現在残っているなかでは最も高い18層上面の標高は2.3mで、深さは1.0mである。当時の地表面はもちろん現状の遺構検出面より高く、幅も本来は13m以上あったものと推定される。

（三阪一徳）

出土遺物（第25・27図） 第25図8は12層の出土である。土師質の鍋の胴部で、外面にススが付着している。9～34は14層の出土である。9は青磁碗で、ケズリ高台で内外面とも厚く施軸する。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅲ類である。13世紀後半の例と考えられる。10は青白磁。低い高台が付き、高台内面にはぶい橙色（7.5YR7/4）の化粧土が塗付されている。11は白磁碗である。大宰府編年の白磁碗Ⅴ4類で、12世紀中葉に属する。12～14は瓦質土器の鉢。13は口縁部に片口が付くが、片口の部位境は明瞭でない。13世紀後半から14世紀前半の例とみておく（山本ほか 1997）。15は瓦質土器の火鉢の脚部である。16は土師質の鍋。口縁部と体部の境はゆるく屈曲しており、14世紀後半に取まるものであろう。17～20は土師皿で、いずれも糸切り底である。21・22は土師器の坏。22は糸切り底である。

23～26は土鍾。細身で紡錘形を呈する。27～29は滑石製の石鍾。中央部に溝を彫って糸掛けとする。30～33は円盤状石製品である。いずれも扁平で、下面が平坦になっている。34は乾元重賞の模範銭。本銭は758年初鑄の唐銭で、博多では唐銭が出土銭貨の8%を占める（小畑 2008）。

第27図1～8は15・16層の出土である。1は分削線を施した青磁碗で、大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅳ1類。12世紀中頃～13世紀初頭に属する。2は中国陶器の鉢である。口縁内面に1条の突起を有するが、口唇部もせり出して2条にみえる。大宰府編年の陶器鉢Ⅰ-1b類にあたり、13世紀代に位置をあたえうる。3は土師皿で糸切り底と思われる。4は土師器の坏で底部外面に板状圧痕がみられる。5・6は土鍾である。紡錘形で中央が膨らむ。7・8は飯蛸壺と考えられる例で、内面の調整が粗い。9は17-2層出土。土師皿で、内外面とも摩滅が著しく、鬚歯類の噛み跡がつく。



第27図 HZK1802地点出土遺物(2)

1~27 SD131

10~21は、大溝覆土(12~16層)内の遺物を一括してとりあげた例である。10・11は龍泉窯系青磁である。10は筒蓮弁の碗で青磁碗Ⅱ類、11は筒のない蓮弁の坏Ⅲ類である。前者は13世紀前半、後者は13世紀中頃~14世紀初頭に位置づけられている。12は白磁碗で口縁端部の軸を掻き取り、口禿げとする。13世紀後半~14世紀初頭の白磁碗Ⅲ類である。13~17は瓦質土器。13・14は控鉢、15~17は播鉢である。18は土師器の甕。口縁部が逆L字形を呈する。19は糸切り底の土師皿である。20・21は土錘。20は小型、21はやや大型で、いずれも中央が彫らむ。

22～27は、大溝以降に堆積した3・4・6層と、大溝覆土(12～16層)の出土品とを一括してとりあげた例である。22は白磁の小碗。23は朝鮮王朝陶器の碗底部である。低いケズリ高台で、灰色に白色軸で刷毛目状に施軸する。見込みにメアトを残す。24は土師器の甕。口縁部が逆L字形を呈する。25は糸切り底の土師皿である。26は円柱状の土鉢。27は滑石製の石鉢である。(谷 直子)

年代 まず、出土遺物の時期を確認する。確実にSD131の埋土といえるのは12～16層である。14層では13世紀後半～14世紀後半、15・16層では12世紀後半～13世紀前半の遺物が含まれる。12～16層一括で取り上げた遺物は13世紀～14世紀の時期幅をもつ。したがって12～16層全体の遺物の時期幅は12世紀後半～14世紀後半といえ、下層の15・16層から上層の14層にかけ年代が新しくなる傾向を読み取ることができる。なお、17～20・22層を一括して取り上げた遺物には、13世紀中頃～14世紀初頭の青磁が含まれる。これらの層は、大溝SD131の埋土の可能性のある17・18層、整地層の可能性のある19層、遺構形成以前の20・22層を含み、SD131形成を前後する時期の堆積物である。

炭化物の測定値は、12層のC22 (IAAA-181152) が1301-1368 calAD (70.7%)、1381-1410 calAD (24.7%)、14層のC23 (IAAA-181153) が1164-1254 calAD (95.4%)、16層のC25 (IAAA-181155) が1295-1399 calAD (95.4%) であり、12～14世紀代にまとまる。これらの測定値も、遺構埋土とすることを裏づけている。17・18層については、17-1層のC27 (IAAA-181156) が1035-1160 calAD (95.4%)、18層のC30 (IAAA-181185) が1163-1251 calAD (95.4%) で、11～13世紀代の値を示し、遺構埋土としても大きな齟齬がない結果である。

以上、SD131埋土に含まれる遺物の年代は、13世紀後半における元寇防塁の築造と符合する年代を示す。また、放射性炭素年代測定値もこれと矛盾しない年代が得られている。(三阪一徳)

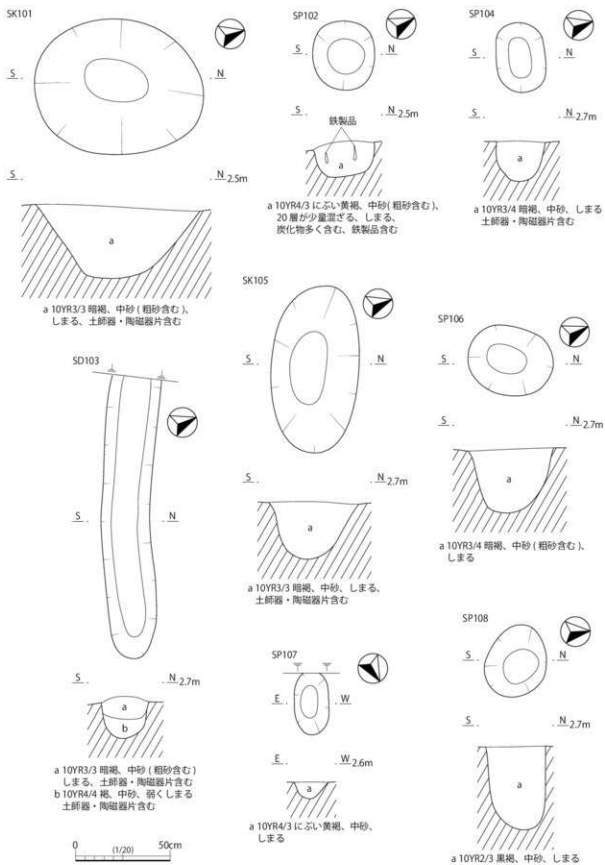
(3) 溝SD122 (第31図)

特徴 調査区東半の20-1層上面で検出した。SD131の東端から約15m 東に位置し、SF130およびSD131に並行して南北方向に延びる。遺構の上端が明瞭ではなくやや不整形で、東西幅0.8～1.3m、南北長5.3m 以上である。断面は碗形を呈し、深さ20～30cm である。埋土は単層で暗褐色中砂により構成される。

出土遺物 第32図1～3は龍泉窯系の青磁碗で、1は笠状工具で細い片彫蓮花文を施す。大宰府編年の碗Ⅰ類で、12世紀後半～13世紀初頭。2は口縁部外面に稜をもつ。3は鎗蓮弁文を施した例で、碗Ⅱ類である。13世紀前葉に属する。4・5は同安窯系青磁で、4はⅠ類の碗。ケズリ高台で内面に櫛の先端で押したジグザグ状の点描文を有する。5はⅠ-2類の皿で、これも点描文で飾る。内外面とも施軸したのち底部外面の軸を掻き取る。両例とも12世紀後半～13世紀初頭の年代があたえられている。6は白磁碗Ⅶ類の例。体部が直線的に開き、口縁部は屈折する。12世紀中頃。7は磁器の小型壺である。内外面とも露胎で、ナデの跡が強く残る。

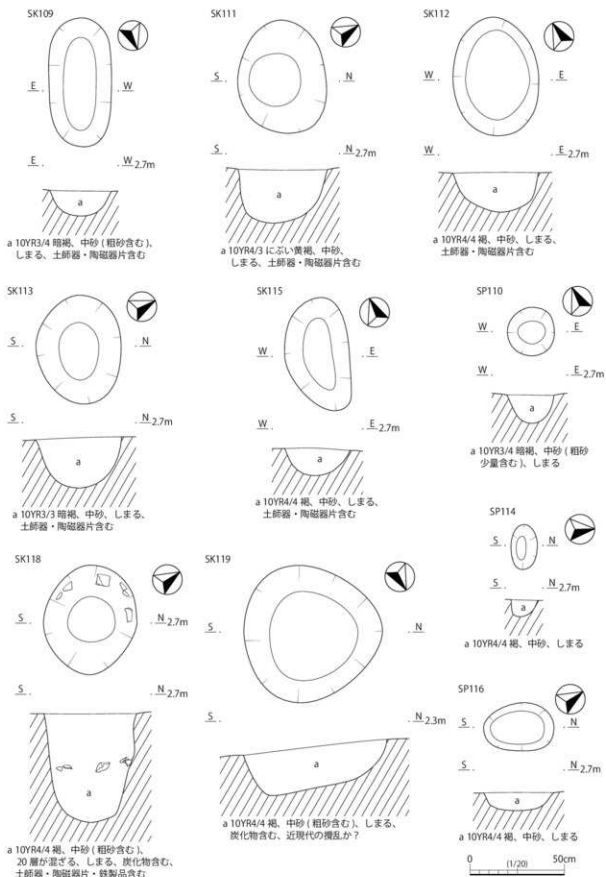
8は磁甕の黄釉鉄絵陶器盤である。底部から斜めに立ち上がる。11世紀後半～12世紀前半。9は陶器の鉢である。胎土は均質で、正直に言うと中国陶器か、近世の陶器かを迷う。ただ、この遺構の出土品には、図化していない小片にも、近世の染付は含まれていないことを明記しておこう。10・11は瓦器碗、12・13は土師皿である。13は糸切り底で、スガが付着する。灯明皿として使用されたものとみてよい。14は口縁部が肥厚した土師器の坏である。(谷 直子)

年代 遺物は、12世紀後半～13世紀前半が中心時期となる。なお、近世の可能性を残す遺物を1点含むが、SD122は14・15世紀頃に形成された4層で覆われている点をあわせて考えれば、総じて中世前半代とみてよいだろう。炭化物の測定値は、C36 (IAAA-181162) が1052-1080 calAD (5.3%)、

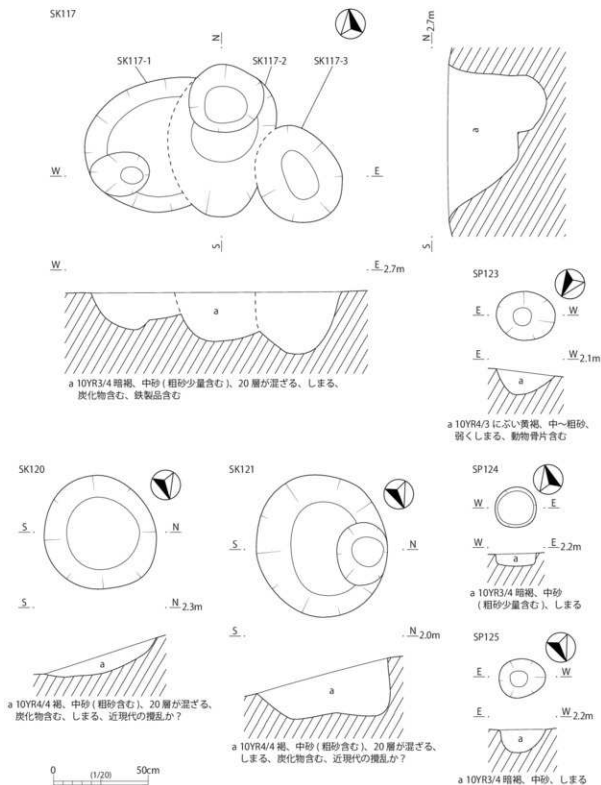


第28図 HZK1802地点 SK101～SP108平面・断面図

IV HZK1802地点 (理学部二号館前南地点第2次調査)

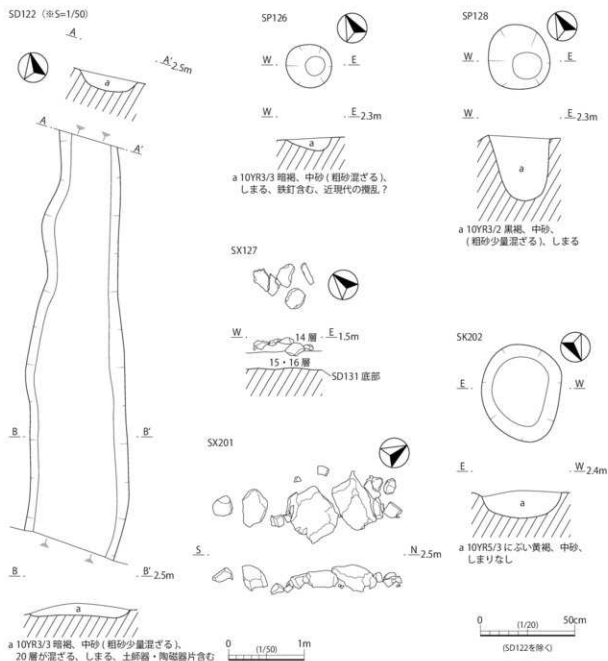


第29図 HZK1802地点 SK109～SP116・SK118・SK119平面・断面図



第30図 HZK1802地点 SK117・SK120・SK121・SP123～SP125平面・断面図

1152-1247 calAD (90.1%)である。遺物と年代測定値ともに試料数が僅かであるが、13世紀後半の元寇防塁築造年代よりやや古い年代を示す。一方で、SF130とSD131にほぼ並行して南北に延びており、SD122も防塁築造と同時期に構築された遺構である可能性も十分残される。(三阪一徳)



第31図 HZK1802地点 SD122・SP126・SK127・SP128・SK201・SK202平面・断面図

(4) 第1遺構面 (20-1・20-2層上面) で検出された遺構 (第28~31図)

石積み遺構西側の20-2層上面でSK101、SP102、SD103、SP104、SK105、SP106~108、SK109、SP110、SK111~113、SP114、SK115、SP116、SK117・118を、東側の20-1層上面でSD122とSP123~126を検出した。上の(3)で報告したSD122以外の遺構のサイズや形状を第6表に示し、ここでは年代を決め得る遺構など特徴ある例について解説する。

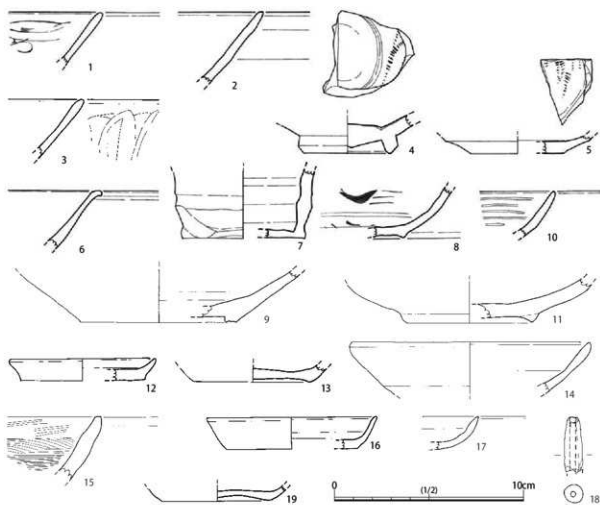
溝SD103 (第28図) 西側は攪乱により切られている。幅26cm、長さ1.49m以上、深さ22cmである。埋土は2層に分かれ、暗褐色・褐色中砂で構成される。土師質の鍋が出土している (第32図15)。口縁端部内面を強くナデて、稜が付く。13世紀後半~14世紀前半に位置づけられる。

土坑SK109 (第29図) 楕円形で、長軸68cm、短軸33cm、深さ13cmである。土師器の坏が出土

第6表 HZK1802地点遺構観察表

遺構名	図版番号	様出面	平面形態	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	遺構名	図版番号	様出面	平面形態	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
SK101	第28図	第1遺構面	楕円形	90	72	38	SP116	第29図	第1遺構面	楕円形	37	25.5	9.5
SP102	*	第1遺構面	円形	37	33	18	SK117-1	第30図	第1遺構面	楕円形	44-	69	19.5
SD103	*	第1遺構面	溝状	149-	26	22	SK117-2	*	第1遺構面	楕円形	80.5	56-	26
SP104	*	第1遺構面	楕円形	37	26	21	SK117-3	*	第1遺構面	楕円形	53.5	44	32.5
SK105	*	第1遺構面	楕円形	88	47	30	SK118	第29図	第1遺構面	楕円形	58	49	57
SP106	*	第1遺構面	楕円形	46	36	34	SK119	*	SD131確認面	不整楕円形	73.5	72.5	22
SP107	*	第1遺構面	楕円形	32.5-	18	9	SK120	第30図	SD131確認面	円形	60	59	9
SP108	*	第1遺構面	楕円形	39	32	44	SK121	*	SD131確認面	楕円形	75	69	26
SK109	第29図	第1遺構面	楕円形	68	33	13	SD122	第31図	第1遺構面	溝状	530-	130	20-
SP110	*	第1遺構面	円形	25.5	25	15	SP123	第30図	第1遺構面	楕円形	31	26	12
SK111	*	第1遺構面	楕円形	60	47	28	SP124	*	第1遺構面	円形	22	21.5	6.5
SK112	*	第1遺構面	楕円形	62.5	45	21	SP125	*	第1遺構面	楕円形	24.5	20	12
SK113	*	第1遺構面	楕円形	57	45	26.5	第31図	第1遺構面	円形	24	23	7	
SP114	*	第1遺構面	楕円形	24	14	9	SP128	*	第1遺構面	円形	34	33	33
SK115	*	第1遺構面	不整楕円形	60	34	14.5	SK202	*	第2遺構面	円形	51	41.5	14.5

第1遺構面：20層上面、第2遺構面：20-2層中



第32図 HZK1802地点出土遺物(3)

1~14 SD122、15 SD103、16・17 SK109、18 SK113、19 SP123

した。第32図16は糸切り底である。坏部がまっすぐ立ち上がり、口径に比して深い。17は小片。

土坑 SK113 (第29図) 平面は楕円形を呈し、長軸57cm、短軸45cm、深さ26.5cmである。やや細身で紡錘形の土錘が出土している (第32図18)。

土坑 SK117（第30図）当初、平面が不整形なひとつの遺構と認識した。しかし、遺構掘削後、遺構底面の凹凸から、少なくとも3基の遺構（SK117-1～3）が重複した状況を想定し得た。構築順序はSK117-1→2→3と考えられる。すべて平面は楕円形を呈す。SK117-1は長軸44cm以上、短軸69cm、深さ19.5cmである。SK117-2は長軸80.5cm、短軸56cm以上、深さ26cmである。SK117-3は長軸53.5cm、短軸44cm、深さ32.5cmである。なお、SK117-1は西端部、SK117-2は北端部にビット状の窪みが確認され、これらは別遺構の可能性も想定されるが、埋土が同一であり区分できない。

土坑 SK118（第29図）平面は楕円形を呈し、長軸58cm、短軸49cm、深さ57cmである。標高2.35m付近で10cm以下の礫岩・砂岩の散布がみられた。小礫集中SX129から西側1.5mの位置にあり、小礫の分布する標高も近い。この点からSX129に関連する遺構の可能性がある。

ビット SP123（第30図）楕円形の小ビットである。糸切り底の土師皿が出土している（第32図19）。
(三阪一徳・谷 直子)

(5) SF130周辺およびSD131上部17・18層上面（第1遺構面相当）検出の遺構（第24・29・30図）
SK119～121は17・18層上面で検出した土坑である。これらは大溝SD131を切っており、大溝より後の時期に形成されたと考えられる。ただし、時期を示す出土遺物はない。SP128は、石積み遺構の前に散らばる礫散布SX129を切る（第24図）。

(6) 第2遺構面（20-2層中）で検出された遺構

SX201とSK202は石積み遺構SF130より西側の20-2層中で検出された遺構である。第1遺構面の遺構より古い時期の所産と考えられるが、時期を示す遺物は出土していない。

石片散布 SX201（第31図）石積み遺構SF130より約12m西側で礫岩・砂岩の散布が認められた。石片が分布する範囲は長さ1.0m、幅40cm、標高2.3～2.45mである。石片のサイズは5～30cmほどである。SX201とSF130は同一石材であるが、両遺構の関係は不明である。

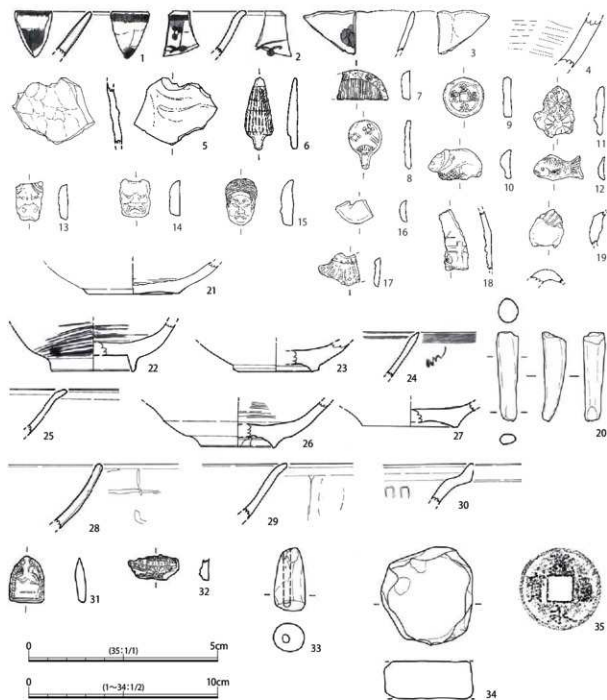
土坑 SK202（第31図）平面は円形を呈し、長軸51cm、短軸41.5cm、深さ14.5cmである。埋土は単層でふい黄褐色中砂により構成され、締まりが弱い。第1遺構面の遺構の埋土とは特徴が異なる。
(三阪一徳)

(7) 遺構外出土遺物

1層（表土、近代以降の攪拌層・造成土）第33図1～3は近世から近代にかけての磁器である。1は碗で、ふい赤色の釉に、ふい黄色の釉を重ねる。2は染付碗。植物文様を描く。3は輪花碗。外面を花卉状に成形し、内面は薄い藍色で絵付けする。4は瓦質土器の鍋。5は土人形である。手握ねで、内面に指オサエの痕跡を多く残す。6～17は泥面子（芥子面）である。胎土中の混和物は少なく、型押しで作る。6は傘、7は櫛、8は団扇、9は新寛永、10は猫がモチーフである。首に鈴をつける。11は菊、12は魚、13は般若、14は鬼、15は役者がモチーフで、16・17はわからない。18は型押し製の土製品である。十字架のようにも、窓のようにもみえる。19・20は土人形と考えられる。20は混和材を加えてない均質な胎土で、丁寧に調整する。

2層（近世～近代）21は糸切り底の土師器の皿で、内面には回転による強い指ナデの痕跡がある。近世か。

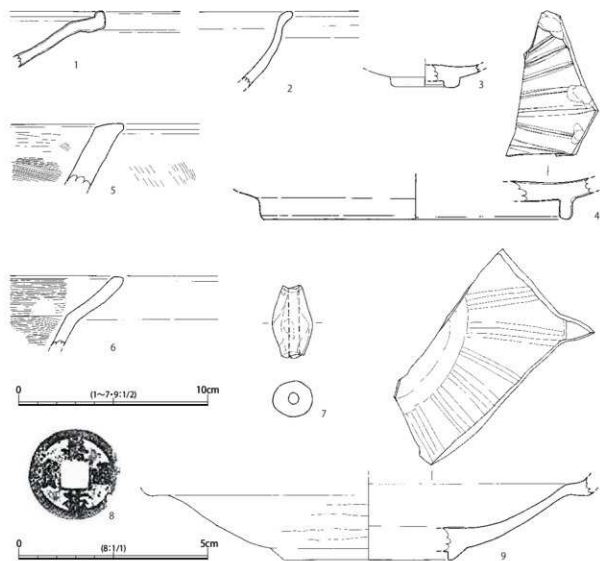
3層（近世～近代）22～25は近世の陶磁器で、22は白色釉で刷毛目を施した磁器碗。23は碁箱底気味の低い高台の付いた陶器碗で、薄い釉をかける。24は呉須による手描きの染付碗である。25も磁



第33図 HZK1802地点出土遺物(4)

器碗で、釉は灰色味である。

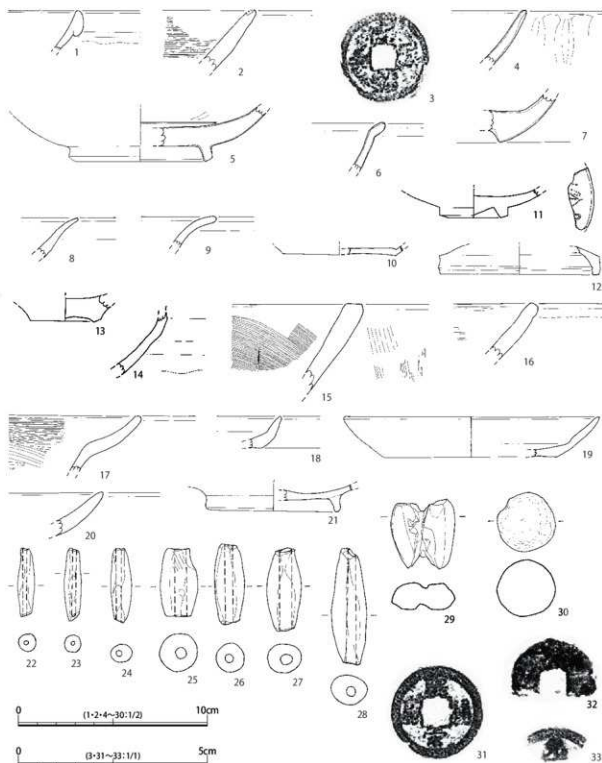
26・27は朝鮮王朝陶器の碗である。高台が低く、畳付と見込みにメアトが残る。28～30は龍泉窯系青磁である。28は厚く施釉する碗で、外面に片彫で施文する。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、13世紀中頃～14世紀初頭に属する。29は外面に鏽のない蓮弁文を施す。口縁部は小さく反し、釉は不透明である。碗Ⅳ類で、14世紀初頭から後半の所産である。30は坏。口縁部が短く屈折し、甕状の工具で内面に施文する。器形は坏Ⅲ類に近いが、釉調は29の例に似る。坏Ⅲ類にあてえられた13世紀中頃～14世紀初頭の年代より新しくなろう。



第34図 HZK1802地点出土遺物 (5)

31・32は泥面子(芥子面)である。31のモチーフはわからない。32は蒸気船である。33は紡錘形の土錘である。34は瓦玉。平瓦の破片を粗く打ち欠いて円形に整える。35は古寛永である。

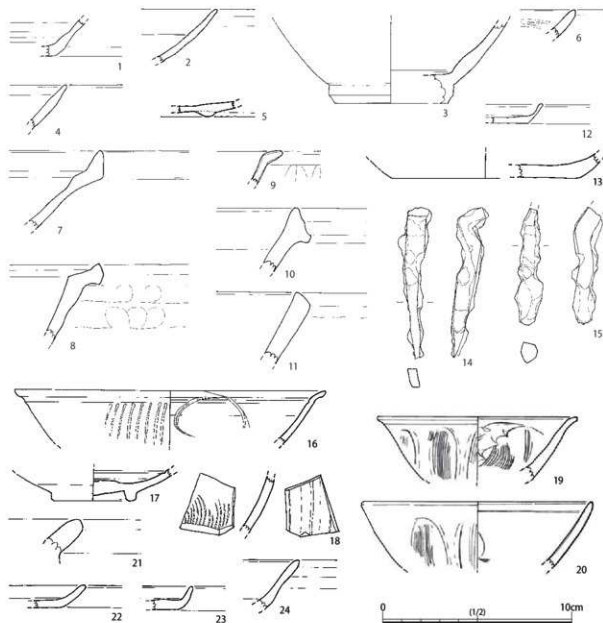
3・4・6層一括(中世～近世・近代) 第34図1は青磁の坏である。龍泉窯系青磁とみられるが、釉の発色が鈍く、貫入している。口縁部を横に長く屈折させ、端部が上方に屈曲する。大宰府編年の龍泉窯系青磁坏Ⅲ類の形をもつが、13世紀中頃～14世紀初頭前後より新しい。2・3は白磁碗である。2は口縁部が外側に屈曲し、体部は丸みを帯びる。3はケズリ高台で、ケズリは浅く、畳付に軸が付く。高台内面及び高台脇は露胎。外面に施軸したのち軸を掻き取る。4は龍泉窯系青磁の大型坏である。ケズリ高台の底部で、厚く施軸し、見込みに鑄蓮弁文を施す。高台部内面は軸葉を掻き取り、赤色に発色する。5は瓦質土器の捏鉢である。厚く、口唇部を面取りする。6はゆるく屈曲する土師質の鍋。外面にススが付着する。7は土錘である。8は北宋の嘉祐通寶で、初鑄は1056年である(永井編 1994)。9は龍泉窯系青磁の大型の坏。碁笥底に似た低い高台を有し、高台内面まで施軸する。体部は浅い。口縁部は横に長く屈折させ、端部は上方に屈曲する。龍泉窯系青磁坏Ⅲ類を大型化して、体部を浅くしたもので、外面には横方向に不規則な段がつき、調整は粗い。内面に片影で放射状の文



第35図 HZK1802地点出土遺物(6)

様を施す。坏皿類の属する13世紀中頃～14世紀初頭よりは新しい例であろう。

4層(中世) 第35図1は玉縁口縁の白磁碗である。内面から口縁部外面に軸を施し、体部外面を露胎とする。大宰府編年の白磁碗Ⅳ類で、11世紀末～12世紀前半に位置づけられている。2は土師質の鍋で、段はつかない。14世紀から15世紀の所産である。3は銭貨。鑄出しが悪く、裏面も平坦で、

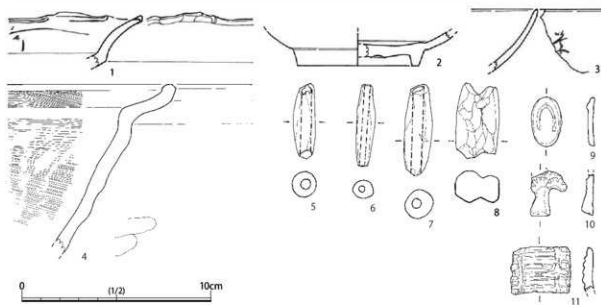


第36図 HZK1802地点出土遺物 (7)

模鈎銭とみられる。

4・6層一括 (中世) 4～7は青磁碗である。4は外面に鈎蓮弁文を施し、軸は厚い。龍泉窯系青磁碗Ⅲ類で、13世紀中頃～14世紀初頭に置かれる。5は高台部分で、内面見込みで1条の圓線と片彫の文様を施す。軸は半濁化していて、碗Ⅳ類とみてよい。14世紀初頭～後半である。6も碗Ⅳ類で、口縁がやや屈折する。軸は不透明である。14世紀初頭～後半。7は碗Ⅲ類で、萁筒底の底部である。厚く施軸する。13世紀中頃～14世紀初頭のものと考えられる。

8～11は白磁である。8・9は口縁部が外反する碗で、端部の軸葉を掻き取り、口禿げとする。白磁碗Ⅳ類で、数が増加する13世紀後半～14世紀初頭に位置づけられよう。10は皿。体部と見込みの境に圓線が1条めぐる。平底で全面施軸し、底部外面は工具で軸葉をのぼす。大宰府編年の皿Ⅳ-1類で、



第37図 HZK1802地点出土遺物(8)

13世紀後半～14世紀初頭に増加するという。11はケズリ高台の底部である。高台径が小さく、軸は半濁し、貫入している。12は青白磁の合子蓋である。口縁部はケズリで露胎する。外面に印花文を施文する。博多では12世紀末頃から登場するらしい(森本 2003)。13は陶器碗。底部のヘラケズリは粗い。内面に薄く釉をかける。14は天目碗で、15は土師質の搦鉢である。口縁部を面取りしている。16・17は土師質の鍋。16は口唇部を玉縁状に丸く収め、17は内湾気味に立ちあがる。18は土師皿、19～21は土師器の坏である。21は高台付坏で、粘土の帯を輪状に巻いて高く作る。

22～28は土鍾、29は石鍾である。30は石球。正円をなす。31～33は銭貨。31は1039年初鑄の皇宋通宝。32・33は鑄出しが悪い。裏面も平坦で、模鑄銭とみられるが、33は「光」と読める。918年初鑄の光天元寶か。

20-1層(砂丘層・攪乱層) 第36図1は土師器の坏。2・3は白磁碗でいずれもⅧ類に分類される。2は内面に1条沈線がめぐる例。3はケズリ高台で、外面の下半は露胎である。体部との境から見込み部分の軸を環状に掻き取る。12世紀中頃～後半に属する。4は龍泉窯系青磁碗である。5・6は瓦器碗。5は粘土紐を貼り付けて低い高台を作る。

20-2層(砂丘層・攪乱層) 7は瓦質土器の捏鉢である。口縁部が垂直に立ち上がる。8は土師質の捏鉢。口縁は横に屈折し、端部を摘みあげる。

17～20・22層(大溝SD131、整地層および海浜層・砂丘層～洪水層内) 9は龍泉窯系青磁坏である。坏Ⅲ類で、鑄蓮弁文を施す。13世紀中頃～14世紀初頭。10は瓦質土器の捏鉢である。口縁部を玉縁状に折り返す。11は土師質の捏鉢である。12は土師皿。スガが内面に付いており、灯明皿の可能性が高い。底部外面に板状圧痕がある。13は糸切り底の土師器の坏である。14・15は鉄釘で、15は両端が欠損する。断面四角形で、頭部はL字形に曲がる。

22層(海浜層・砂丘層～洪水層内) 16は白磁碗Ⅴ類で、11世紀末～12世紀前半の例。口縁部が外反する。外面を篋描きの弓状縦線で充たし、内面には沈線1条をめぐらせて草花状の沈線文を施す。17は白磁碗Ⅷ-1類で、12世紀中頃～後半に置かれる。外面はケズリで露胎、高台はやや低い。見込みは軸を環状に掻き取り、体部の境に段を設けない。沈線を1条めぐらす。

18～20は青磁碗である。18は外面に片彫の錦蓮弁文を、内面に櫛目文を施す。軸が薄く、文様の凹凸がよく目立つ。龍泉窯系青磁碗1-6b類、もしくはⅡ類に相当する例とみられ、12世紀中頃から13世紀前葉の範囲で捉えうる。19・20は縦方向の櫛目を入れた片彫蓮弁文を施す例。19は内面に片彫草花文と櫛目文を、20は沈線1条と片彫草花文でそれぞれ飾る。両例とも青磁碗1-6a類で、12世紀中頃～13世紀初頭に属する。

21～24は土師器。21は口縁部を厚く作る甕で、22・23は皿である。22は緩く、23は垂直気味に立ち上がる。24は坏。体部中央の器壁が薄く、稜をなす。

一括品 第37図1は龍泉窯系の輪花坏で、内面に片彫で施文する。輪花の先端部を面取りしている。体部中央あたりで屈曲し、稜が付く。2条の区画線や花文で飾るなど、龍泉窯系青磁碗1類の文様と共通することから、12世紀中頃～13世紀初頭の年代をあたえておきたい。2は龍泉窯系青磁碗である。ケズリ高台で内面見込み部分に段を有する。3は近代の染付で、「学」と読める。九州大学食器である。4は口縁部が強く屈曲した土師質の鍋で、13世紀後半～14世紀頃とみてよい。外面にススが付着する。5～7は土錘、8は滑石製石錘である。9～11は型作りした泥面子（芥子面）で、9は草履、10は松、11は薪がモチーフである。10は葉の部分に軸を施す。下部部に穿孔があり、「いけどうろう」¹⁾に用いた可能性もある。（谷 直子）

4. 小 結

本地点では、基底石2石からなる石積み遺構SF130と、大溝SD131を検出することができた。大溝については、当初、浜堤鞍部などの自然地形である可能性も完全には棄却できないでいた。そこで、本地点ではジオスライサーを用いた地質学的調査を実施し、ここから得られた地質学的成果と考古学的所見を突き合わせて、元寇防塁周辺の自然堆積環境を復元し、大溝の評価を行うこととした。その結果、この大溝は自然作用で形成されたとは考え難く、人為的に形成された溝であることを明らかにした。

また、出土遺物を層ごとに回収し、炭化物の放射性炭素年代測定を実施した。これらの作業を経て、石積み遺構と大溝が、ともに13世紀後半に築造された元寇防塁であることを明らかにした点が、本調査の最大の成果と言える。

なお、2017年度に実施したHZK1701地点の地質学的調査では、浜堤頂部付近に石積み遺構が築造され、当時の汀線までの距離が20～30m程度であったことが明らかにされたが（福田・森編 2018）、今回の調査は浜堤や砂丘そのものに迫り、その形成過程の復元に成功した。すなわち、干潟を主体とした海成層の上に、11世紀前半の大規模な出水を契機として堆積した洪水層が形成され、さらにその洪水層を土台として貧弱な砂丘（浜堤）が短期間に形成されたことが判明した。石積み遺構と大溝からなる元寇防塁は、その上に築造されたのである。（三阪一徳）

註

- 1) 福田正宏・下山正一・市原季彦・森 貴教・谷 直子「九州大学箱崎キャンパスにおける石積み遺構の立地環境」（福田・森編（2018）所収）。
- 2) 下山正一・三阪一徳・市原季彦「HZK1802地点における土層の概要」（三阪・谷編（2019）所収）。
- 3) 福田正宏・下山正一・市原季彦・森 貴教・谷 直子、前掲註1に同じ。
- 4) 下山正一・三阪一徳・市原季彦、前掲註2に同じ。

- 5) 下山正一・三阪一徳・市原季彦、前掲註2に同じ。
 6) 下山正一・三阪一徳・市原季彦「箱崎砂州の発達過程の考察」(三阪・谷編(2019)所収)。
 7) 大庭康時氏にご教示いただいた。
 8) 市原季彦・下山正一「HZK1802地点におけるジオスライサー調査の成果」(三阪・谷編(2019)所収)。
 9) 下山正一・三阪一徳・市原季彦、前掲註2に同じ。
 10) お盆の頃、博多の商家の玄関先では、ひねり人形を箱庭のように飾り付けた。この箱庭が「いけどうろう」と呼ばれる。

引用文献

- 小畑弘己 2008「銭貨」『中世都市・博多を掘る』海鳥社 147～154頁
 永井久美男(編) 1994「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫理蔵銭調査会
 福田正宏・森 貴教(編) 2018「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—」九州大学理蔵文化財調査室
 三阪一徳・谷 直子(編) 2019「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—」九州大学理蔵文化財調査室
 宮崎亮一(編) 2000「大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—」太宰府市教育委員会
 森本朝子 2003「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌』第11号 博多研究会 21～48頁
 山本信夫・山村信榮 1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 237～310頁

第7表 HZK1802地点出土遺物観察表

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	地肌	色調	文様・装型	備考
25-1	SF130 10層	青磁 碗			[5.5]	緻密	良好	10GY7/1 明緑灰	外: 魚軸、羅漢弁文 内: 魚軸	大宰府編年 藤原実成系Ⅱ期
25-2	SF130 9層	青磁 鉢	4.4	[2.0]		緻密	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外: ケズリ、魚軸 内: 魚軸、魚文	藤原実成系 取り上げNo.43
25-3	SX129 11層	土師陶器 皿	(注0)	6.4	1.1		良好	10YR7/4 に近い黄橙	外: 回転ナデ、糸切り底? 内: 回転ナデ	板田区遺 取り上げNo.1
25-4	SF130 8～11層	土師陶器 皿	(注8)	(注6)	1.1	緻密	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外: ナデ 内: ナデ	糸切り底
25-5	SF130 8～11層	白磁 皿			[2.2]	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外: 魚軸 内: 魚軸	
25-6	整地層? 19-2層 +	陶磁 器		(注2)	[3.6]	緻密、φ1～2mmの砂 粒を少量含む	良好	7.5Y6/3 に近い黄	外: ケズリ、魚軸 内: 魚軸	
25-7	自然堆積層 22層 +	土師陶器 杯	13.4	8.6	3.0		良好	7.5YR7/6 橙	外: 回転ナデ 内: ナデ	糸切り底
25-8	SD131 12層 遺物A19	土師陶器 鉢			[3.0]	緻密	良好	10R7/1 明赤灰	外: ナデ、スス付着 内: ハケメ	
25-9	SD131 14層	青磁 鉢			[2.2]	緻密	良好	7.5GY7/1 明緑灰	外: ケズリ、魚軸 内: 魚軸	大宰府編年 藤原実成系Ⅱ期
25-10	〃	青白磁 鉢			[3.6]	緻密、精良	良好	10G7/1 明緑灰	外: 魚軸 内: 魚軸	
25-11	〃	白磁 鉢			[2.2]	緻密	良好	5Y7/1 灰白	外: 魚軸 内: 魚軸、花文	大宰府編年 白磁Ⅱ V-4期
25-12	〃	瓦質土器 鉢			[3.6]	緻密、φ1mm 大の砂粒 をわずかに含む	良好	5Y7/1 灰白	外: ハケメ、ナデ 内: ハケメ、ナデ	
25-13	〃	瓦質土器 椀鉢			[3.8]	緻密、φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	2.5Y6/2 灰黄	外: ココハタ、ナデ 内: ハケメ、ナデ	
25-14	〃	瓦質土器 椀鉢			[2.0]	緻密、φ1mm 大の砂粒 をわずかに含む	良好	N7/0 灰白	外: ナデ 内: ココナデ	
25-15	〃	瓦質土器 火鉢			[5.9]	緻密、精良	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外: ミガキ、ナデ 内: ナデ	
25-16	〃	土師陶器 鉢			[3.4]	緻密、φ1mm 程度の砂粒 を少し含む	良好	外: 7.5YR4/1 赭灰 内: 7.5YR5/3 に近い黄	外: ナデ、スス付着 内: ハケメ、ナデ	

IV HZK1802地点 (理学部二号館南地点第2次調査)

番号	出土位置	種類 図類	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	文様・図型	備考
25-17	Ⅱ	土師器 皿	(9.2)	(8.0)	1.2	緻密, ϕ 1mm 大の砂粒をわずかに含む	良好	10YR8/3 淺黄褐色	外: ナデ 内: ナデ	糸切り底
25-18	Ⅱ	土師器 皿		(5.4)	(1.5)	緻密	良好	10YR6/3 に近い黄褐色	外: ココナデ 内: ナデ	糸切り底
25-19	Ⅱ	土師器 皿	(8.4)	(6.4)	1.4	緻密, 赤褐色粒子を含む	良好	7.5YR6/4 に近い褐色	外: ココナデ 内: ナデ	糸切り底
25-20	Ⅱ	土師器 皿	(8.4)	7	(1.0)	緻密, ϕ 1mm 大の砂粒を少し含む	良好	5YR6/4 に近い褐色	外: ナデ 内: ナデ	糸切り底
25-21	Ⅱ	土師器 坪	(14.0)		(1.8)	緻密	良好	10YR4/2 灰黄褐色	外: 回転ナデ 内: ココナデ	
25-22	Ⅱ	土師器 坪		(9.6)	(1.2)	緻密, ϕ 1mm 大の砂粒を少し含む	良好	10YR6/4 淺黄褐色	外: ナデ 内: 回転ナデ	糸切り底
25-23	Ⅱ	土師 長 7.1 短 1.9 厚 1.9				緻密	良好	5YR5/4 に近い赤褐色	ナデ	17.60g
25-24	Ⅱ	土師 長 5.3 短 1.3 厚 1.3				緻密	良好	7.5YR6/4 に近い褐色	ナデ	6.66g
25-25	Ⅱ	土師 長 4.7 短 1.2 厚 1.2				緻密	良好	2.5YR6/6 褐色	ナデ	5.50g
25-26	Ⅱ	土師 長 5.4 短 1.1 厚 1.0				緻密	良好	5YR5/4 に近い赤褐色	ナデ	4.61g
25-27	Ⅱ	滑石製 石鉢	長 [2.9]	短 1.4 厚 1.4						(8.29g)
25-28	Ⅱ	滑石製 石鉢	長 4.5 短 2.7 厚 1.7							24.31g
25-29	Ⅱ	滑石製 石鉢	長 5.1 短 3.9 厚 1.8							48.36g
25-30	Ⅱ	円盤状 石製品	タテ 2.8 ヨコ 2.2 厚 1.0							7.95g
25-31	Ⅱ	円盤状 石製品	タテ 2.3 ヨコ 1.8 厚 0.8							5.20g
25-32	Ⅱ	円盤状 石製品	タテ 2.5 ヨコ 2.7 厚 0.8							6.45g
25-33	Ⅱ	円盤状 石製品	タテ 3.3 ヨコ 3.5 厚 0.9							13.93g
25-34	Ⅱ	残片 乾元垂簾	タテ 2.4 ヨコ 2.3 厚 0.1							3.03g
27-1	SD131 15・16層	青磁 碗			(3.45)	緻密	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外: 染釉 内: 染釉, 分劃線	大卒前編年 龍泉京系統 I-4期
27-2	Ⅱ	中国陶 鉢			(4.55)	粗い, ϕ 1mm 大の砂粒・褐色粒子を多く含む	良好	7.5YR6/2 灰黄褐色	外: ココナデ 内: ココナデ	陶器林 I-1b 類
27-3	Ⅱ	土師器 皿	(8.8)	(6.0)	1.15	緻密, ϕ 1~2mm の砂粒を少し含む	良好	10YR8/3 淺黄褐色	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ	糸切り底?
27-4	Ⅱ	土師器 坪			(3.3)	緻密, ϕ 1~2mm の砂粒・赤褐色粒子を含む	良好	7.5YR6/4 に近い褐色	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, 摩滅	板状圧痕
27-5	Ⅱ	土師 長 4 短 1.25 厚 1.1				緻密	良好	5YR6/6 褐色	ナデ	4.84g
27-6	Ⅱ	土師 長 4.3 短 1.6 厚 1.6				緻密	良好	7.5YR7/4 に近い褐色	ナデ	8.32g
27-7	Ⅱ	磁器 蓋			(6.0)	緻密, ϕ 1mm 程度の砂粒を少し含む	良好	5YR7/6 褐色	外: ナデ, 工具痕 内: 粗い工具痕	
27-8	Ⅱ	磁器 蓋			(6.5)	粗い, ϕ 1~5mm の砂粒を多く含む	良好	外: 7.5YR6/4 に近い褐色 内: 10YR6/4 に近い黄褐色	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ	
27-9	SD131 17-2層 遺物 A16	土師器 皿	(10.3)	(8.4)	1.2	緻密, 赤色粒子を含む	良好	10YR7/3 に近い黄褐色	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, 摩滅	
27-10	SD131 12~16層	青磁 碗	(18.2)		(2.3)	緻密	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外: 染釉, 縁溝井文 内: 染釉	大卒前編年 龍泉京系統 II 期
27-11	Ⅱ	青磁 坪			(3.1)	緻密	良好	10Y7/2 灰白	外: 染釉, 縁文 内: 染釉	龍泉京系坪目類
27-12	Ⅱ	白磁 小皿	(10.0)		(2.1)	緻密	良好	7.5Y7/1 灰白	外: 染釉 内: 染釉, 口縁付, スズ付着	白磁碗収容
27-13	Ⅱ	瓦質土器 埴輪			(3.8)	緻密, ϕ 1mm 大の砂粒を少し含む	良好	5Y8/1 灰白	外: ココナデ, ナデ 内: ココナデ	
27-14	Ⅱ	瓦質土器 埴輪			(2.1)	緻密, ϕ 1mm 大の砂粒を少し含む	良好	5Y7/1 灰白	外: ナズリ, ハケメ 内: ハケメ, ナデ	
27-15	Ⅱ	瓦質土器 埴輪			(4.8)	緻密, ϕ 1mm 程度の砂粒を少し含む	良好	外: 10YR7/3 に近い黄褐色 内: 5YR6/6 褐色	外: ナデ 内: ハケメ	

番号	出土位置	種類 図様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	文様・図型	備考
27-16	■	瓦質土器 縹磁			[5.1]	やや緻密, φ1~2mm の砂粒を含む	良好	5YR/1 灰白	外: /ハケメ, ナデ 内: ココノケ, 摩滅	
27-17	■	瓦質土器 縹磁			[5.5]	やや緻密, φ1~2mm の砂粒を含む	良好	2.5Y7/2 灰黄	外: ナデ, 指オサエ 内: /ハケメ	
27-18	■	土師器 縹			[3.5]	緻密, φ1mm 大の砂粒, 褐色粒子を含む	良好	外: 2.5YR5/3 に近い橙 内: 2.5YR6/6 橙	外: /ハケメ, ナデ, スス付着 内: ナデ, 工具痕	
27-19	■	土師器 縹	(8.0)	(6.0)	1.25	やや緻密, φ1mm 大の 砂粒, 褐色粒子を含む	良好	2.5Y7/4 に近い橙	外: 摩滅 内: 摩滅	糸切り底
27-20	■	土師 縹	長 3.8 短 0.9 厚 0.9			緻密, 精良	良好	2.5YR5/4 に近い赤褐	ナデ	2.22g
27-21	■	土師 縹	長 6.7 短 2.0 厚 1.9			緻密, φ1mm 程度の砂粒 を少し含む	良好	2.5YR6/6 橙	ナデ	22.43g
27-22	SD131c(4層 3・4・6層) + SD131 12~16層	白磁 小碗			[2.6]	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外: 染釉 内: 染釉	
27-23		陶器 縹	4.2		[1.9]	緻密	良好	10Y5/1 灰	外: ケズリ, 染釉 内: 染釉, マアト	朝鮮王朝陶器
27-24		土師器 縹			[3.15]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	10YR/7.4 に近い黄橙	外: ナデ 内: ココナデ	
27-25		土師器 縹	(8.0)	6.8	1.4	緻密, φ1mm 程度の砂粒 を少し含む	良好	2.5YR6/4 に近い橙	外: ナデ 内: 回転ナデ	糸切り底
27-26		土師 縹	長 [4.9] 短 1.2 厚 1.25			緻密	良好	10YR/7.4 に近い黄橙	ナデ	[6.25g]
27-27		滑石製 石輪	長 [4.5] 短 2.5 厚 1.7							[22.58g]
32-1	SD122	青磁 縹			[2.8]	緻密	良好	2.5G7/1 明オリーブ灰	外: 染釉 内: 染釉, 蓮花文	大宰府編年 藤原系系図 I 類
32-2	■	青磁 縹			[3.8]	緻密	良好	2.5N6/2 灰オリーブ	外: 染釉 内: 染釉	藤原系系 図
32-3	■	青磁 縹			[3.1]	緻密	良好	5G6/1 オリーブ灰	外: 染釉, 蓮華井文 内: 染釉	大宰府編年 藤原系系図 II 類
32-4	■	青磁 縹	(4.6)		[2.0]	緻密	良好	2.5N6/2 灰オリーブ	外: ケズリ, 染釉, 点斑文	同安原系系 図 I 類
32-5	■	青磁 縹	(4.8)		[1.0]	緻密	良好	2.5G7/1 明オリーブ灰	外: ケズリ, 染釉, 点斑文	同安原系系 図 I 類
32-6	■	白磁 縹			[3.2]	緻密	やや 良	2.5Y8/1 灰白	外: 染釉 内: 染釉	白磁碗青磁
32-7	■	磁器 赤	(6.4)		[3.7]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	2.5YR7/2 灰黄	外: ナデ, 露物 内: ナデ, 露物	
32-8	■	陶器 縹			[2.6]	緻密, φ1~2mm の砂 粒を含む	良好	外: 2.5Y5/2 灰白 内: 5Y7/2 灰黄	外: 露物 内: 染釉, 散文	黄釉鉄絵 磁甕
32-9	■	陶器 縹	(8.2)		[2.7]	緻密	良好	10YR7/3 に近い黄橙	外: ナデ, 薄く染釉 内: ナデ, 薄く染釉	
32-10	■	瓦器 縹			[2.4]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	2.5Y5/1 灰	外: ナデ 内: ナデ, 三方弁	
32-11	■	瓦器 縹	(6.8)		[2.4]	緻密, φ1mm 大の砂粒 をわずかに含む	やや 良	2.5Y7/2 灰黄	外: ナデ 内: ナデ	
32-12	■	土師器 縹	(7.8)	(6.5)	1.1	緻密	良好	2.5YR7/4 に近い橙	外: 摩滅 内: ナデ	
32-13	■	土師器 縹			(6.2)	緻密, φ1~2mm の砂 粒を含む	良好	2.5Y7/2 灰黄	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, スス付着	糸切り底 灯明皿
32-14	■	土師器 縹	(12.8)		[2.8]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	2.5YR7/4 に近い橙	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, 摩滅	
32-15	SD103	土師器 縹			[3.4]	緻密, φ1mm 以下 の砂粒を少し含む	良好	5YR6/4 に近い橙	外: 指オサエ, スス付着 内: /ハケメ, ナデ	
32-16	SK109	土師器 縹	(9.0)	(7.0)	1.7	緻密, φ2mm 大の砂粒 をわずかに含む	良好	10YR4/1 靑灰	外: ココナデ 内: ココナデ	糸切り底
32-17	■	土師器 縹			[1.8]	緻密, 雲母片含む	良好	2.5YR6/4 に近い橙	外: ココナデ 内: ココナデ	
32-18	SK113	土師 縹	長 [3.0] 短 0.9 厚 0.9			緻密, 精良	良好	外: 5YR6/6 橙	外: ナデ 内: ナデ	
32-19	SP123	磁器 縹	(5.8)	(0.7)		緻密, φ1~2mm の砂 粒を含む	良好	10YR7/3 に近い黄橙	外: 摩滅 内: 摩滅	糸切り底
33-1	遺構外 1層	染付 縹			[2.4]	緻密, 均質	良好	2.5R4/4 に近い赤	外: 染釉 内: 染釉	近世~近代
33-2	■	染付 縹			[2.3]	緻密, 均質	良好	2.5G7/1 灰白	外: 染釉, 植物文様 内: 染釉	近世~近代
33-3	■	染付 縹			[2.15]	緻密	良好	N8/0 白	外: 染釉, 散文 内: 染釉, 散文	近代? 染付輪花皿

IV HZK1802地点 (理学部二号館前南地点第2次調査)

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	文様・図型	備考
33-4	Ⅱ 南壁 A20	瓦質土器 鍋			[2.5]	緻密	良好	2.5Y7/2 灰黄	外：ナデ 内：ハケメ	
33-5	Ⅱ 南壁 A18	土人形			[3.1]	緻密	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ, 顔の表現 内：指オサエ	
33-6	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 3.85	ヨコ 1.45	厚 0.55	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ナデ	傘
33-7	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.55	ヨコ 0.45		緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ヨコナデ	楕
33-8	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.6	ヨコ 1.7	厚 0.3	緻密		7.5YR7/2 明褐灰	表：生押し 裏：ナデ	団扇
33-9	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.15	ヨコ 2.15	厚 0.45	緻密		表：7.5YR7/3 に近い橙～ 7.5YR7/6 橙 裏：7.5YR7/3 に近い橙～ 5YR6/6 橙	表：生押し 裏：ナデ	新東永
33-10	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.6	ヨコ 2.8	厚 0.55	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ヨコナデ	筥
33-11	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.6	ヨコ 2.1	厚 0.45	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ナデ	菊
33-12	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.35	ヨコ 2.5	厚 0.3	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ヨコナデ	魚
33-13	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.05	ヨコ 1.35	厚 0.5	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ナデ	楕形
33-14	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.85	ヨコ 1.6	厚 0.55	緻密		表：7.5YR8/4 浅黄橙 裏：7.5YR7/3 浅黄橙	表：生押し 裏：ナデ	楕
33-15	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.45	ヨコ 1.6	厚 0.7	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ナデ	役者
33-16	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.2	ヨコ 1.8	厚 0.3	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ヨコナデ	?
33-17	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.6	ヨコ 2.1	厚 0.3	緻密		2.5Y8/2 灰白	表：生押し 裏：ナデ	
33-18	Ⅱ	土製品	タテ 3.2	ヨコ 1.25	厚 0.3	緻密		7.5YR7/3 に近い橙	表：生押し 裏：凹刻ナデ?	十字架? 蓋?
33-19	Ⅱ	土人形?	タテ 2	ヨコ 1.8	厚 0.65	緻密		7.5YR6/4 に近い橙	外：生押し 内：ナデ	
33-20	Ⅱ	土製品	タテ 4.7	ヨコ 1.15	厚 1.2	緻密		外：10YR6/3 に近い黄緑	外：ナデ 内：ナデ	
33-21	遺構内 2層 南壁 A24	土師器 皿		5.6	[1.7]	緻密, 赤色粒子を多く 含む	やや 良	7.5YR5/4 に近い橙	外：ナデ, 摩滅 内：ナデ	糸切り皿 近世?
33-22	遺構内 3層	磁器 碗	(4.4)	[2.5]		緻密, 均質	良好	5YR5/2 灰地	外：刷毛目の施釉 内：刷毛目の施釉	近世～近代
33-23	Ⅱ	磁器 碗	(4.4)	[1.5]		緻密	良好	2.5Y7/3 浅黄	外：ケズリ, 施釉 内：施釉	近世
33-24	Ⅱ	灰付 碗		[2.4]		緻密	良好	5B6/7 明黄灰	外：施釉, 施文 内：施釉, 施文	近世
33-25	Ⅱ	白磁 碗		[2.4]		緻密	良好	10Y7/1 灰白	外：施釉 内：施釉	近世?
33-26	Ⅱ	陶器 碗	(4.2)	[2.3]		やや粗い, φ1mm 大の 砂粒, 黒色粒子を含む	良好	7.5Y6/1 灰	外：ケズリ, 施釉, メアト 内：施釉	朝鮮王朝陶器
33-27	Ⅱ	陶器 碗	(5.0)	[1.3]		やや粗密, φ1mm 大の 砂粒を含む	良好	7.5Y6/1 灰	外：ケズリ, 施釉, メアト 内：施釉, メアト	朝鮮王朝陶器
33-28	Ⅱ	青磁 碗		[3.4]		緻密	良好	50Y6/1 オリーブ灰	外：施釉, 施文 内：施釉	大寺内編年 倉庫築成系注目
33-29	Ⅱ	青磁 碗		[2.9]		緻密	良好	2.50Y7/1 明オリーブ灰	外：施釉, 顔のない葉井文 内：施釉	龍泉窯系IV群 二次焼熟
33-30	Ⅱ	青磁 碗		[2.1]		緻密	良好	50Y7/1 明オリーブ灰	外：施釉 内：施釉, 施文	龍泉窯系IV群以 後
33-31	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 2.5	ヨコ 1.8	厚 0.5	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：タテナデ	
33-32	Ⅱ	灰黒子 片子面	タテ 1.3	ヨコ 2.15	厚 0.4	緻密		10YR8/2 灰白	表：生押し 裏：ヨコナデ	黒瓦胎
33-33	Ⅱ	土器 片	長 [3.3]	幅 1.6	厚 1.5	緻密, φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ	[7.43g]
33-34	Ⅱ	瓦玉	タテ 5.1	ヨコ 4.8	厚 2.0	やや粗密, φ1mm 大の 砂粒を含む	良好	10YR6/1 褐灰	外：摩滅 内：摩滅	

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	文様・刷型	備考
33-35	※	残痕 裏水透貨	タテ 2.2	ヨコ 2.2	厚 0.1					古瓦片, 2.13g
34-1	遺構外 3・4・6層	青磁 坏			[3.0]	緻密	良好	5G7/1 明オリブ灰	外: 染釉 内: 染釉	大寺の福正 倉家系灰目録以 後
34-2	※	白磁 磁			[4.0]	緻密	良好	7.5Y7/1 灰白	外: 染釉 内: 染釉	
34-3	※	白磁 磁	[3.6]	[1.2]		緻密	良好	2.5G8/1 灰白	外: 染釉 内: 染釉	
34-4	※	青磁 坏	(16.4)	[2.1]		緻密	良好	7.5G7/1 明緑灰	外: ケズリ, 染釉, 掻き取り 内: 染釉	倉家系灰目録以 後
34-5	※	瓦質土器 控鉢			[3.4]	緻密, φ1~2mm の砂 粒を含む	良好	外: 5Y6/1 灰	外: ハケメ, ナデ 内: ハケメ, ナデ	
34-6	※	土師質 鍋			[3.7]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	外: 10R3/1 黒褐 内: 7.5Y6/3 に近い黒	外: ナデ, スス付着 内: ハケメ, ナデ	
34-7	※	土師 長 [1.9]	厚 2.2	短 2.0		緻密	良好	10Y8/1 褐灰		[12.30g]
34-8	※	残痕 裏水透貨	タテ 2.4	ヨコ 2.4	厚 0.1					1056年初跡 3.18g
34-9	※	青磁 坏	(9.0)	[4.3]		緻密	良好	2.5G7/1 明オリブ灰	外: 染釉 内: 染釉, 施文	大寺の福正 倉家系灰目録以 後
35-1	遺構外 4層 南壁 A13	白磁 磁			[2.0]	緻密	良好	5Y7/3 淡黄	外: 染釉, 雲胎 内: 染釉	白磁陶V類
35-2	※ 南壁 A15	土師質 鍋			[3.2]	緻密, φ1~2mm 位の 砂粒を含む	良好	5Y8/6 橙	外: ナデ 内: ヨコハケメ	
35-3	※ 南壁 A7	模倣銭	長 2.4	短 2.3	厚 0.1					1.75g
35-4	遺構外 4・6層	青磁 磁			[2.9]	緻密	良好	2.5G7/1 明オリブ灰	外: 染釉, 施文 内: 染釉	倉家系灰目録
35-5	※	青磁 磁	(7.6)	[2.9]		緻密	良好	10Y6/2 オリブ灰	外: ケズリ, 染釉 内: 染釉, 施文	倉家系灰目録
35-6	※	青磁 磁			[2.6]	緻密	良好	7.5Y6/2 灰オリブ	外: 染釉 内: 染釉	倉家系灰目録
35-7	※	青磁 磁			[2.5]	緻密	良好	2.5G5/1 オリブ灰	外: 染釉 内: 染釉	倉家系灰目録(磨 面)
35-8	※	白磁 磁			[2.1]	緻密	良好	5G7/1 灰白	外: 染釉 内: 染釉, 口売げ	白磁陶IX類
35-9	※	白磁 磁			[1.6]	緻密	良好	2.5G7/1 明オリブ灰	外: 染釉 内: 染釉, 口売げ	白磁陶IX類
35-10	※	白磁 磁	(6.0)	[0.5]		緻密	良好	5G7/1 明オリブ灰	外: 染釉 内: 染釉, 掻き取り	白磁陶IX-1類
35-11	※	白磁 磁	3.6	[1.5]		緻密	良好	5Y8/1 灰白	外: ケズリ, 染釉 内: 染釉	
35-12	※	青白磁 合子蓋	(8.4)	[1.5]		緻密	良好	7.5Y6/2 灰オリブ	外: 染釉, 印花文 内: 染釉, 施文, 口売げ	
35-13	※	陶磁 磁	3.8	[1.4]		緻密	良好	2.5Y7/3 淡黄橙	外: 染釉, 掻き取り 内: 染釉	
35-14	※	陶磁 灰目録			[3.3]	緻密	良好	N2/1 黒	外: 染釉 内: 染釉	
35-15	※	土師質 控鉢			[4.8]	緻密, φ1mm 大の砂粒 をわずかに含む	良好	7.5Y8/4 に近い橙	外: ハケメ, ナデ 内: ハケメ	
35-16	※	土師質 鍋			[3.0]	緻密, φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	10Y6/3 に近い黄橙	外: ナデ 内: ハケメ, ナデ	
35-17	※	土師質 鍋			[2.9]	やや緻密, φ1mm 大の 砂粒を含む	良好	7.5Y5/4 に近い黒	外: ナデ 内: ヨコハケ	
35-18	※	土師質 磁			[1.7]	やや緻密, φ1~3mm の砂粒を含む	良好	7.5Y8/4 に近い橙	外: 摩滅 内: 摩滅	
35-19	※	土師器 坏	(13.6)	(9.2)	1.9	緻密, φ1~2mm の砂粒 赤色粒子を含む	良好	5Y8/7 橙	外: ナデ 内: ナデ	糸切り底
35-20	※	土師器 坏			[2.3]	緻密, φ1~2mm の砂粒 を含む	良好	7.5Y8/4 に近い橙	外: ナデ 内: ナデ	
35-21	※	土師器 裏台付坏	(7.2)	[1.5]		緻密, φ1~2mm の砂粒 を少し含む	良好	10Y8/3 淡黄橙	外: ナデ 内: ナデ	

IV HZK1802地点 (理学部二号館前南地点第2次調査)

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	文様・図型	備考
35-22	※	土師	高 3.6 底 0.9	厚 1.0		緻密, 赤褐色粒子を含む	良好	10YR7/2 に近い黄橙	ナデ	292 g
35-23	※	土師	高 3.9 底 0.9	厚 0.9		緻密	良好	外: 5YR7/4 に近い橙	ナデ	245 g
35-24	※	土師	高 3.9 底 1.1	厚 1.0		緻密	良好	5YR6/4 に近い橙	ナデ	430 g
35-25	※	土師	高 4.55 底 2.0	厚 2.0			良好	10YR7/4 に近い黄橙	ナデ	1452 g
35-26	※	土師	高 4.3 底 1.5	厚 1.5		やや粗い, φ1~2mm 大の砂粒を多く含む	良好	2.5YR6/6 赤橙	ナデ	816 g
35-27	※	土師	高 4.4 底 1.8	厚 1.5		緻密, φ1mm 程度の砂粒を含む	良好	2.5YR5/6 明赤橙	ナデ	1087 g
35-28	※	土師	高 6.1 底 1.9	厚 1.5		緻密	良好	7.5YR5/2 灰黒	ナデ	181 g
35-29	※	滑石製 石鉢	高 3.6 底 3.4	厚 1.4						3467 g
35-30	※	石球	径 3.1 径 3.1	厚 3.0						3166 g
35-31	※	磁石 重床透貫	径 2.4 径 2.4	厚 0.1						270 g
35-32	※	模倣銭	長 2.2 径 [1.5]	厚 0.1						[099 g]
35-33	※	模倣銭	長 [1.3] 径 [1.0]	厚 0.1						[068 g] 光天元貨?
36-1	遺構外 20-1層 南壁 A6	土師器 杯			[1.9]	緻密	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, 摩滅	
36-2	20-1層上面	白磁 碗			[2.8]	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外: 擦輪, 擦 内: 擦輪, 沈線	大宰府編年 白磁碗V類
36-3	※	白磁 碗	(6.0)		[4.4]	緻密, φ1mm 程度の砂粒を少し含む	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外: ケズリ, 擦輪 内: ケズリ, 擦輪	白磁碗V類
36-4	※	青磁 碗			[2.3]	緻密	良好	10Y6/1 灰	外: 擦輪 内: 擦輪	龍泉窯系
36-5	20-1層	瓦器 碗			[0.7]	緻密	良好	7.5Y5/1 灰	外: ナデ 内: ナデ	
36-6	20-1層上面	瓦器 碗			[1.5]	緻密	良好	2.5Y7/2 灰黄	外: ナデ, 摩滅 内: ミガキ, ナデ	
36-7	20-2層	瓦質土器 控鉢			[4.2]	やや緻密, φ1~3mm の砂粒を含む	良好	5Y7/1 灰	外: ココナデ 内: ココナデ	
36-8	※	土師質 控鉢			[4.2]	やや緻密, φ1mm の砂粒, 灰褐色粒子を含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外: ナデ, 指オサエ 内: ナデ	
36-9	5D131 17・18層 + 整地層? 19層	青磁 杯			[1.7]	緻密	良好	10G6/1 緑灰	外: 擦輪, 縁部井文 内: 擦輪	大宰府編年 龍泉窯系杯I類
36-10	※	瓦質土器 控鉢			[3.4]	緻密, φ1mm 程度の砂粒 黒褐色粒子を含む	良好	2.5Y6/1 黄灰	外: ナデ 内: ナデ	
36-11	遺構外 20・22層	土師質 控鉢			[3.8]	緻密, φ1mm 大の砂粒を少し含む	良好	2.5YR8/2 灰白	外: ナデ, 摩滅 内: ナデ, 摩滅	
36-12	※	土師器 碗			1.0	緻密	良好	10YR6/3 に近い黄橙	外: ナデ 内: ナデ, スス付着	板状庄産
36-13	※	土師器 杯			[10.0]	緻密, 精良	良好	10YR7/3 に近い黄橙	外: 摩滅 内: 指オサエ, ナデ	糸切り庄
36-14	※	鉄釘	長 8.0 径 1.3	厚 1.0						
36-15	※	鉄釘	長 [6.2] 径 1.5	厚 1.3						
36-16	遺構外 22層 南壁 A3	白磁 碗	(16.4)		[2.9]	緻密	良好	7.5Y7/2 灰白	外: 擦輪, 擦文 内: 擦輪, 擦文	大宰府編年 白磁碗V類
36-17	※ 南壁 A9	白磁 碗	(4.4)		[1.7]	緻密	良好	7.5YR/1 灰白	外: ケズリ, 磨削 内: 擦輪, 掻き取り, メアト	白磁碗V類-I類
36-18	※ 南壁 A23	青磁 碗			[3.0]	緻密	良好	7.5Y5/2 灰オリーブ	外: 擦輪, 縁部井文 内: 擦輪, 縁目文	龍泉窯系碗 I-6b もしくは庄産
36-19	※ 南壁 A5	青磁 小碗	(10.6)		[3.4]	緻密	良好	10G7/1 緑緑灰	外: 擦輪, 縁部井文 内: 擦輪, 草花文, 縁目文	龍泉窯系碗 I-6a類
36-20	※ 南壁 A10	青磁 碗	(12.2)		[3.5]	緻密	良好	5Y6/1 緑灰	外: 擦輪, 縁部井文 内: 擦輪, 沈線, 草花文	龍泉窯系碗 I-6a類

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	直径 (cm)	器高 (cm)	胎土	焼成	色調	文様・図型	備考
36-21	"	土師器 甕			[2.0]	やや粗い、φ1mm 位の 砂粒を含む	やや 良	7.5YR5/4 に近い紺	外：指オサエ、ナデ 内：指オサエ、ナデ	
36-22	"	土師器 甕 A25			[1.2]	緻密、黒褐色の粒子を 含む	良好	7.5YR5/4 淺黄橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
36-23	"	土師器 甕			[1.3]	緻密、目立つ砂粒を含 まない	良好	7.5YR5/3 淺黄橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
36-24	"	土師器 杯			[2.7]	緻密、赤色粒子を含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ 内：ナデ	
37-1	一括	青磁 梅花杯			[2.7]	緻密	良好	5G7/1 明オリブ灰	外：指輪 的：区画線、区文	大寺の福年輪泉葉 系前 1 類に似る
37-2	"	青磁 碗	6.4	[1.7]	緻密	良好	7.5Y6/2 灰オリブ	外：アズリ、指輪 内：指輪		藤原系青磁
37-3	"	染付 碗			[3.3]	緻密	良好	N8/O 白	外：指輪、「字」 内：指輪	九大食器
37-4	"	土師器 碗			[9.0]	やや粗い、φ1mm 位の 砂粒、黒母片を多く含 む	良好	外：5YR3/1 黒褐 内：5YR6/6 橙	外：ナデ、スス付層 内：黒コハダ、ナデ	
37-5	"	土師	長 [3.9]	径 1.3	厚 1.4	緻密	良好	7.5YR5/2 灰橙	ナデ	5.67g
37-6	"	土師	長 4.3	径 1	厚 1.0	緻密	良好	5YR6/6 橙	ナデ	3.88g
37-7	"	土師	長 4.8	径 1.5	厚 1.5	緻密、φ1mm 位の砂粒 を少し含む	良好	2.5Y3/1 黒黄	ナデ	9.25g
37-8	"	滑石製 石鉢	夕子 [3.9]	径 2.3	厚 1.7	緻密				19.29g
37-9	"	美濃子 芥子面	夕子 2.65	径 1.6	厚 0.35	緻密		2.5Y8/2 灰白	表：型押し 裏：夕子ナデ	草履
37-10	"	美濃子 芥子面	夕子 1.9	径 1.85	厚 0.6	緻密		裏：2.5GY8/1 灰白、5YR5/6 明褐、裏：7.5YR5/4 に近い紺	表：型押し、指輪 裏：上下布？ナデ	松 登孔あり
37-11	"	美濃子 芥子面	夕子 2.4	径 3.1	厚 0.5	緻密		7.5YR5/3 淺黄橙	表：型押し 裏：夕子ナデ	新

() は復原値、[] は遺存値を表す

V HZK1805地点（理学部二号館前南地点第3次調査）

1. 調査の経緯

(1) 調査地点の位置と調査の経緯

HZK1805地点は、工学研究科共同研究棟の四周に設定された調査地点である。第2図に掲げたグリッドでいうとK26・K27・L26・27区に位置し、HZK1601地点（理学部二号館前第1次、福田・森編 2018）、HZK1802地点（同第2次、本書第三章）に南接する。HZK1601地点とは一部重複し、再掘削した箇所がある。

九州大学埋蔵文化財調査室が進めてきた箱崎キャンパスの調査において、識者の注意に上っていたのは、キャンパスを南北に貫く石積み列であった。礫岩・砂岩の石積みで、J19区（HZK1706地点）、J21・22区（HZK1603・1604・1803地点）、K24区（HZK1701地点）、K25区（HZK1802地点）で検出されている（福田・森編 前掲、三阪・谷編 2019、本書第三・IV章）。永年想定されていたラインよりも陸側に寄ってはいたものの、直線的に並び、国指定史跡元寇防塁地蔵松原地区にも無理なく繋がっていくことから、湮滅したと思われていた防塁であるとの評価が次第に寄せられ、かつ、実態解明への期待が高まっていった。

キャンパスの南北を、大溝が縦断することも判明している。しかも、J19区（HZK1706地点）やK24区（HZK1701地点）では、石積みと並行して走るというのである。これらが②浜堤列の鞍部であって、石積みと並行するようにみえるだけなのか、あるいは④防衛上の目的から人の手で掘削され、石積みとともに防塁の一部を構成する、とみるべきかは、当然挙がるべくして挙がった議論であった。これを、HZK1802地点（第四章）とHZK1803地点の調査（第三章）が解決に導く。石積みと、人工的に掘り込んだ溝との組み合わせは、これまでの調査で知られていない構成であった。

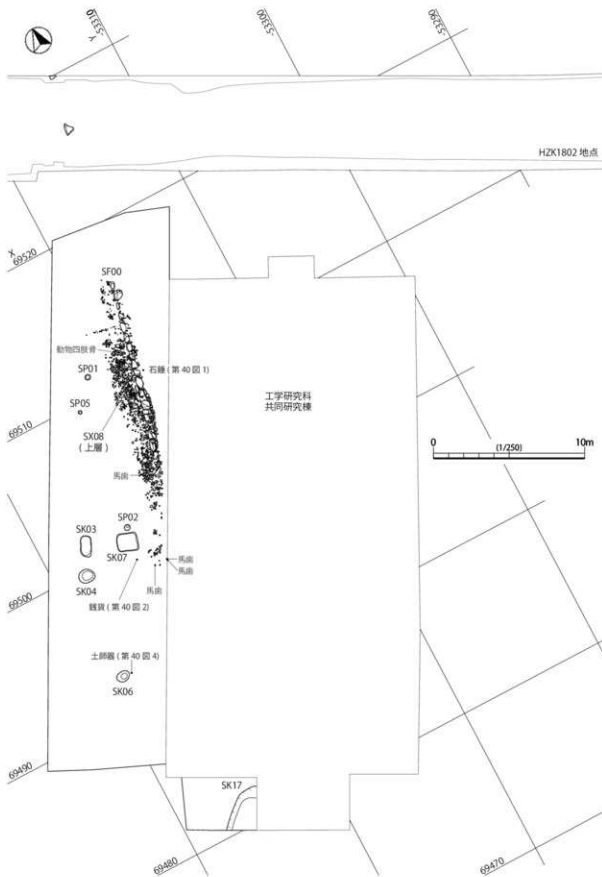
新しい事実が判明するにつれ、学内においても、「学術的重要性を考慮して、現地をそのまま保存すべきと考える」との提言が、埋蔵文化財検討ワーキンググループにおいて示される。そうして、平成30年12月14日に開催された九州大学埋蔵文化財調査委員会は、これらの持続的な保存活用を図り、国指定史跡元寇防塁の追加指定に向けて取り組んでいく方針を示した。

この2年半余の調査・研究によって¹⁾、防塁は砂洲の先端にあたるキャンパス北半で良く姿をとどめていることが判明している。これに対して、砂洲の基部に寄る南半エリアは、もともとの標高が高いために、石積み列が湮滅している可能性が強まった。そこで、防塁の中核をなす石積み遺構の遺存範囲を確定し、史跡として保存する範囲を確定するための発掘調査を実施することとなる。それまでに検出されていた南の端はK25区のHZK1802地点であり、一方、K28区以南で実施した本調査や試掘・立会調査では全く遺っていないかった。残るK25～28区間のどこまでの部分で遺存しているかを、把握する必要があったわけである。

以上により、九州大学埋蔵文化財調査室は、平成31年1月29日付の福岡県教育委員会あて「九大統統第91号」にて埋蔵文化財発掘届を提出した。2月15日付「31教文第3036号」でこの届出が許可され、3月15日に現地調査を開始した。

(2) 調査要項

遺跡名 箱崎遺跡



第38図 HZK1805地点石積み確認面 遺構分布図

地点名	九州大学箱崎キャンパス HZK1805地点（理学部二号館前南地点第3次調査）
調査名	九州大学埋蔵文化財調査室調査番号：HZK1805 福岡市調査番号：1840、箱崎遺跡第94次調査
所在地	福岡市東区箱崎6-10-1
調査面積	800㎡
調査原因	学術研究
調査期間	平成31年3月15日～令和元年5月10日
遺物量	コンテナ（内寸54cm×34cm×15cm）227箱
調査主体	九州大学埋蔵文化財調査室
発掘担当	齋藤瑞穂、福永将大
調査作業員	高田遼和、中田風歌（高槻大学学生） 穴井和子、伊藤未紀、井上 剛、井上光江、浦崎てい子、大浦旗江、大衛英美、奥 敦子、春日ゆかり、門脇尚子、城野勝彦、高武奈美、小林敏子、定永靖史、真田文子、 篠崎繁美、節政善憲、竹本葉子、田代 薫、田中悦子、田中ゆみ子、田野和代、堤 末子、永濱弘子、仲前富美子、中村尚美、中山大輔、西浦喜久子、西田和廣、原田由 佳、東嶋 西、東島真弓、松尾美恵、松下さゆり、松下由希子、三辻香奈子、宮原ゆ かり、宮元亜希世、武藤マリ子、安里由利子、山田幹裕、山本加奈子、吉田辰義
遺物整理担当	谷 直子
整理作業員	石井若香葉、犬山真弓、尾座本洋子、小名真理子、坂口由美子、富田文代、富田麗子、 濱谷賀美和

2. HZK1805地点の遺跡形成プロセス

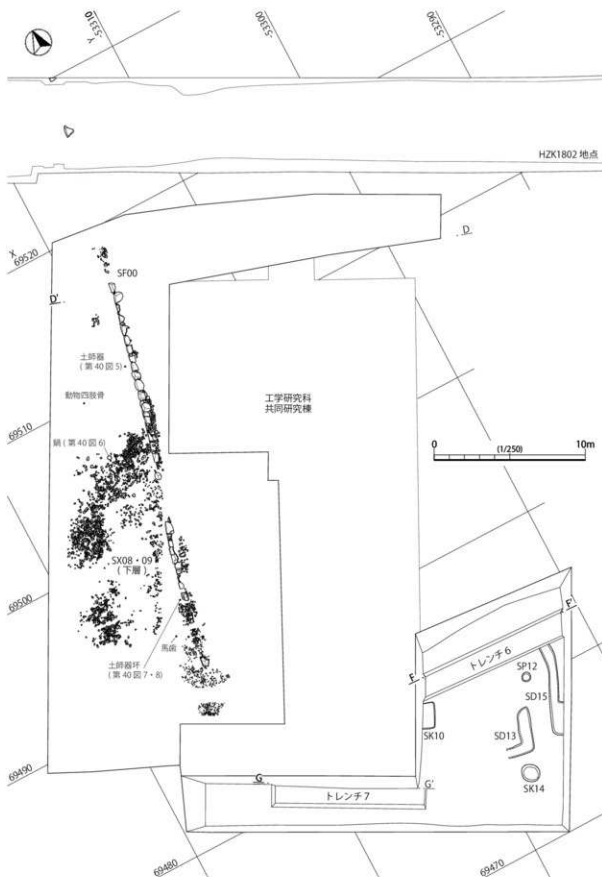
調査の経過をふりかえりつつ、本地点の遺跡形成プロセスをまずは概観しておこう。

石積みの遺存範囲の特定という目的のもと、まずは人工分子集合組織体研究棟・工学研究科共同研究棟両建物間通路の表土掘削を開始した（第38図）。HZK1802地点の石積み遺構SF130ならびに、HZK1601地点の礫散布SX01の南延長線上に位置する。

地表から70cmほどで大型石材の連なりが確認される。そこで、このレベル（標高2.6m前後）で全体を均すこととした。この面を石積み確認面と呼ぶ。同面では、ビットSP01・SP02・SP05、土坑SK04・SK06と火葬土坑SK03・SK07、現代のゴミ坑SK17が検出されている。また、石積み列のすぐ西側（博多湾側）には、礫岩・砂岩の小礫が散らばる様子も確認された。これをSX08と言う。

石積み列は、北接するHZK1802地点をはじめ（第四章）、HZK1803（第三章）・HZK1603（福田・森編2018）・HZK1902（第二章）・HZK1604（福田・森編前掲）の各地点で検出された石積み遺構とおおよそ直線的にならぶ。これらが箱崎砂丘の東端に築かれた元寇防塁地蔵松原地区に繋がり、ともにその一部を構成するとみてよければ、石積み確認面の年代は、当時「石築地」と呼ばれた防塁の維持管理がなされなくなって、すでにしばらく経過した頃、となろう。

次いで、石積みの基底石が半分ほど顔を出し始めるレベル（標高2.3m前後）には、礫がより広範囲に散らばることが判明した（第39図）。散布の一部は、SX09の番号をあてて記録したが、すでに番号が付けされていたSX08と一連の散布であることが、掘削を進めるなかで明らかになった。したがって、礫散布を今後、SX08・09と括って説明することを諒とされたい。基底石の中ほどで、礫が



第39図 HZK1805地点石積み埋没進行面 遺構分布図

広く散布するこの標高2.3m前後を、石積み埋没進行面として把握しよう。

ところで、石築地修理記事の初出史料は、比志島文書の正応6年(1293)4月宮崎石築地破損検見注文である⁷⁾。そうして、幕府滅亡の前年である元徳4年(1332)の妙忠少貳貞経御教書⁸⁾が示すように、修理は鎌倉期を通して行われた(相田1958)。元徳4年のそれは、筑前守護少貳貞経が自身の担当である博多の石築地の修理を命じたものであり、箱崎に関するものでないが、博多同様箱崎もまた維持・管理が続けられていたとみて差し支えあるまい。

鎌倉幕府が倒れた後も、豊後守護大友氏泰に対する修理命令が建武5年(1338)⁹⁾と康永元年(1342)¹⁰⁾とに重ねて出され、貞和2年(1346)には、鎮西管領一色直氏が「異賊防禦構以下事」を沙汰するよう命じられている¹¹⁾。これらの年代をそのまま参照すれば、埋没進行面の上限は14世紀半ばとなる。しかしながら、川添昭二が注意したように、大友氏泰への2度の命令からは、修理がなかなか実行されなかった様子が察せられるし(川添編1971、川添2006、佐伯2009)、筑前守護少貳頼尚と抗争する一色氏をして、外寇にまで目配りする余裕があったとは考えにくい。埋没進行面の年代は、それを勘案して鎌倉幕府滅亡の頃、すなわち14世紀前・中葉の交以降とみておこう。

調査の経過に論を返すと、石積み確認面・埋没進行面の遺構を精査・記録したのち、石積み基礎石の設置面まで掘削を進めた。ここで到達した標高2.1m前後の面を、石積み基底面と呼ぶ。この面から掘りこまれた遺構はない。この面の年代には、元寇防塁が築造されてから、維持管理されていた期間が見込まれる。

石築地の築造が始まったのは建治2年(1276)であるから、この面の上限は13世紀第4四半期の始まりと一致すると言い切つてよい。一方で下限は、維持管理が充分行われていた期間となり、叙上の貞和2年(1346)は候補の1つに挙がるが、しかし14世紀半ばの維持管理が満足に行われていたとは言い得ない点も、併せてみてきたとおりである。現在遺る石築地復旧跡で最も新しいのは乾元2年(1303)の例であるが(川添1971)¹²⁾、警固番役そのものは幕府が存続しているあいだ続いていたから(相田1958、川添前掲1971)、基底面の年代ももう少し幅をもたせ、下限を14世紀前葉と見込んでおくのが穏当なところであろう。ここまですべてを簡約すると、

石積み基底面：13世紀第4四半期～14世紀前葉

埋没進行面：14世紀中葉～

となる。

さて、基底面まで掘り進めていく過程において、石積み列はそのまま東側の共同研究棟に突き当たることがほぼ確実となる。それは、石積み列が延びていくと同時に、HZK1802・1803の両地点で確認された背後の大溝もまたこの建物の下に潜む可能性を示唆していた。そこでまずは、共同研究棟床下に調査区を拡張して、石積み列の行方を辿った。その際、岩永省三ワーキンググループ長の指導を得て、建物外壁が載る布基礎の直下を精査し、基底石10基が確認されている。また大溝は、宮本一夫室長の調査指導にもとづいて北東部分を5m幅で拡張し、存在を確認するに到った。トレンチ4と呼び、SD11と名付けた遺構が、これらにあたる。

防塁を構成する大溝SD11の行方を辿るため、調査区はさらに共同研究棟建物の東・南側まで拡張した。これを東拡張区と呼んでいる。この拡張区で、大溝のほか、火葬土坑SK10、ピットSP12、溝SD13、土坑SK14、溝SD15が確認されている(第39図)。大溝SD11以外の遺構群は、大溝との切り合い関係や遺物の年代から、防塁が管理されなくなって、埋没が進行した、14世紀中葉以降の年代があたり得る。

以上の経過をふまえ、次の「3. 防塁廃絶後の遺構と遺物」では、石積み確認面・埋没進行面およ

び東拡張区で検出された14世紀中葉以降の遺構群について解説する。そうして「4. 元寇防塁」では、防塁を構成する石積み・大溝の両遺構を詳しくみていこう。ただし防塁は、本地点でもっとも古い形跡でなく、先行する自然流路ND16・18がある。節を分けて、「5. 防塁形成以前」でこれらを取りあげ、防塁築造前夜にもアプローチしてみたい。(齋藤瑞穂)

3. 防塁廃絶後の遺構と遺物

(1) 礫散布 SX08・09 (第38・39図)

石積み確認面 調査区北西から南東に延びた石積み遺構 SF00は、地表下70cmで確認された。この深度は、隣接する工学研究科共同研究棟の布基礎底面のレベルと一致する。70cm以浅は、建物建設⁹⁾に際して一帯を均したときに姿を消したものと推測される。

礫散布 SX08・09は、この石積み遺構の前方(博多湾側)に広がった、礫岩・砂岩の散布である(第38図)。背後にも散らばる箇所がわずかにあるが、しかしながらそれは石積み確認面のレベルでだけみとめられ、さらに深い部分に続かない。石積みの裏込石などでなく、造成時に生じたものとみえておくのが穏当なところであろう。これに対して前方の散布は、確認面に深に続く。

石積み埋没進行面 前方に散らばる角礫は何層にも重なるが、石積み基底面には達しない。少し高い位置から始まるようである(第51図裏:トレンチ2)。石積みの維持管理体制が緩み、前面も少なからず埋まり始めた後に、散布イベントが発生したらしい。

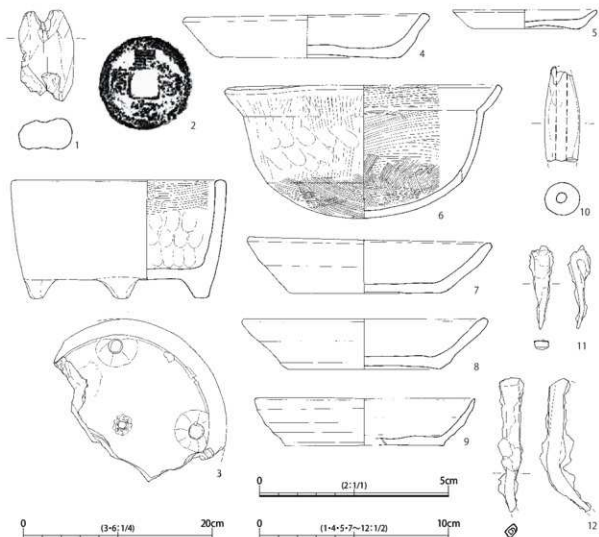
確認面での範囲よりいっそう広がることも判明した。調査の過程において一部の散布に SX09の番号をあて、すでに番号を付していた SX08とは別個の遺構と捉えたが、その後、両散布は一連のものであることが明らかになっている。本項が、SX08・09と称する所以である。散布は、調査区の中央で石積み遺構に接し、南西に向かって弧を描く。弧は15mにもなり、また、石積み遺構からの直交距離は最長で6.8mを測る。単なる崩落でなく、何らかの行為が介在しているとみて間違いない。

散布礫の特徴 玄武岩の岩塊を少量含むほかは⁹⁾、礫岩・砂岩がほとんどである。石積み遺構の築石と共通し、大きいもので60cm角の例がある。多いのは20cm角で、均一的でなく、形を整えていくわけでない。エッジのある割面がよく目立つ。

礫の散布については、⑦もともとこの20cm角の礫を積んであって、それが崩れた、あるいは①本来もう少し大きいサイズであったが、崩れた際に壊された、という2つの可能性を考慮することができる。もしも角礫状でなく、薄手で、しかも基底石の設置面と同じレベルにあるならば、HZK1902地点や HZK1802地点がそうであったように、②成形・積石作業にともなって生じた可能性も出てくるが、ひとまずそれを考える必要はあるまい。

宮本一夫は、「本来、石積み土塁の頂部にあたる犬走りに敷き詰められた礫であると考えられる。これらの敷かれた礫が、土塁廃絶後に石積みとともに、海側に向けて崩落し、基底石前面に集積したものと考えられる」(三阪・谷編 2019:160頁)と推測する。散らばった礫は、石積みの築石として小さいが、間詰石や裏込石、あるいは天端に敷くには確かにふさわしい。叙上の2案でいうと②を想定したものであり、傾聴に値する一案ではある。しかし、調査に直接関わった担当者の感触からすると、本来はもう少し大きかったとする③の可能性を考えたい。何とならば石積み遺構 SF00が、天端面を広くとり礫を敷き詰めるほどの幅を、そなえていたとは思えないからにはかならない。

今津地区や生の松原地区の石積みは、博多湾を向く正面と、背後の陸側面との2面を取って台形に作る。天端面は前後に高さを同じく石を積んだこの場合に初めて成立するが、SF00のように、博多



第40図 HZK1805地点 SX08・09周辺出土遺物

湾に面した片側にしかない場合、敷いた礫は前に崩れるより先に、背後の大溝に落ち込んでいくだろう。こうした筆者の予測を後押ししてくれるのは、散布礫の割れ面の風化の度合いが一樣でない点である。これは礫の割れる契機が一度きりでなく、石積みを作ったとき以外に、割る／割れるイベントがあったことを示す。

そうすると、どのような目的で散らばり、割られたかが問題となる。15世紀成立の『老松堂日本行録』が伝えるように、弘安の役に箱崎で戦闘があり¹⁶⁾、上陸をめざす元軍がこの部分を崩し、壊した可能性もないわけでない。しかし、それであれば帯状には延びず、石積みのすぐ前にままとまっているであろうし、戦闘の際に崩れることが仮にあっても、石築地役を担った御家人が次の襲来にそなえて撤去するに違いない。むしろ筆者の注意を惹いたのは、福岡市教育委員会による箱崎遺跡第3次調査で検出された石組型井戸SE09である（下村編 1991）。写真からの判断ではあるものの、石材は礫岩・砂岩状を呈し、築石のような割面もみうけられる¹⁷⁾。管理が行われなくなり、埋没が進んだ防塁は、砂州に生きる人々にとって相当に有用な資材であっただろう。石を採り、手頃なサイズに割るなどした行為の結果がSX08・09であったように思うのである。（齋藤瑞穂）

礫散布 SX08・09周辺の出土遺物 第40図1は滑石裂石錘。2は、1038年初年の北宋銭皇宋通寶

である（永井編 1994）。表面の鋳出しは悪く、裏面も平坦で外縁は浅い。3は瓦質土器の火鉢。短い脚が付き、焼成後に中央を穿孔する。4は土師器の坏である。糸切り底で板状圧痕がある。5は土師皿。糸切り底で板状圧痕がある。6は礫の合間から伏せた状態で出土した土師質の鍋で、14世紀前半頃の例である（山本ほか 1997）。スス・コゲは付着していない。同種の例が火葬土坑 SK07にもみられる（第45図4）。法量はほぼ同一で、口径と器高の違いはわずかでしかない。胴部の下方に明瞭な継ぎ目があり、ハケメの方向はその上下で異なる。この成形・調整の特徴もまたよく似ている。

7・8はまとまって出土した土師器の坏。2例とも糸切り底で板状圧痕がある。法量はほぼ同一である。9も糸切り底の土師器の坏。板状圧痕がある。10は紡錘形の土鍾。確認面からそう深くない位置で出土した。11は鉄釘。先端に向かって細くなる形状から小型の鉄釘と考えられるが、釘頭部の断面は扁平な長方形で、端部がコの字に折り返され、長押金具状を呈する。12は断面四角形の鉄釘。

（谷 直子）

（2）ピット SP01・SP02・SP05（第41図）

石積み確認面で検出したピットで、石積み遺構の前方（博多湾側）に位置している。SP01は径38cmの円形ピットで、確認面からの深さは17cmである。木片が出土しているが、図化に基えるものでなく、年代は詳らかでない。

SP02は径39cmの円形ピットである。すぐ南の火葬土坑 SK07とは重複していない。確認面からの深さは38cmである。中ほどで、若干粘性のある土塊が検出されている。糞石の可能性を考えたが、目視の限りでは骨や種子を含んでいない。ほかに遺物もなく、年代は不明である。

SP05は小型のピットで、径は26cm、検出面からの深さは18cmである。石積み側から埋まっらしい。下層の砂は、周囲に堆積するそれと大きく異なるわけでないが、わずかに暗い。そこから、土師器の杯もしくは碗と、鍋とみられる例の小破片があわせて3点出土している。中世後半代の遺構とみておきたい。

（齋藤瑞穂）

（3）土坑 SK04・SK06（第41図）

石積み確認面で検出した土坑で、石積み遺構の前方（博多湾側）に位置する。SK04は長径108cm、短径90cmの楕円形をなし、確認面からの深さは32cmを測る。SX08・09よりも高い位置から掘り込まれていて、同遺構よりも新しい。青磁や播鉢のほか捏鉢、鍋など9点出土している。青磁からみて、14世紀末以降の年代をあたえうる。

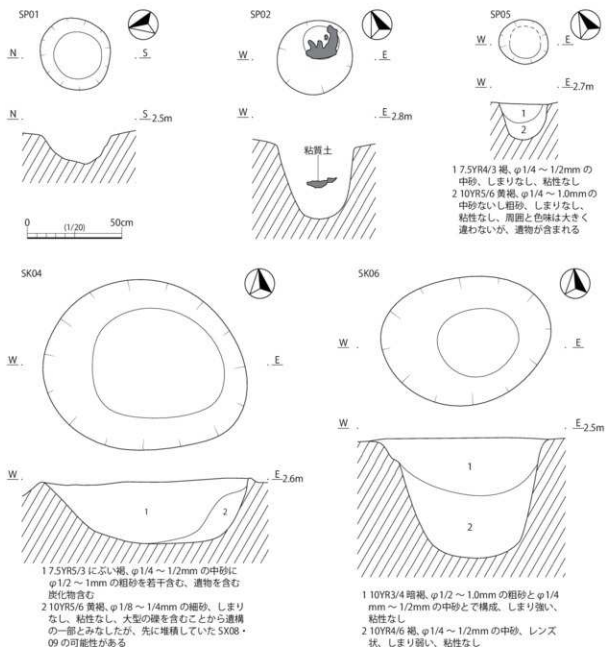
SK06は長径91cm、短径68cmの楕円形土坑である。SK04よりも深く、確認面からは63cmを測る。レンズ状の堆積をなす。遺物は10点出土し、龍泉窯系青磁、天目、朝鮮陶器、褐釉の陶器がある。14世紀以降の土坑らしい。

（齋藤瑞穂）

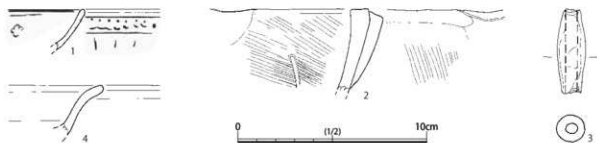
出土遺物 第42図1～3はSK04の出土品で、1は象嵌青磁の碗である。高麗末～朝鮮王朝初期の例で、14世紀末～15世紀初頭に属する。二次的な被熱で釉が濁る。象嵌された黒色の文様だけが残り、白色粘土による施文部分は判然としない。2は瓦質土器の播鉢で注口部分がゆるくせり出す。13世紀後半～14世紀前半の年代があたえられる器形である（山本ほか 1997）。3は紡錘形の土鍾。

4はSK06出土の龍泉窯系青磁坏。口縁部が外反して、体部の立ち上がりはゆるい。釉は黄色味を帯び、不透明で貫入する。器形は大宰府編年の坏皿類であるが、軸調は碗IV類に似る。碗IV類と同じ14世紀初頭～後半の可能性が高い。

（谷 直子）



第41図 HZK1805地点 SP01・SP02・SK04・SP05・SK06平面・断面図



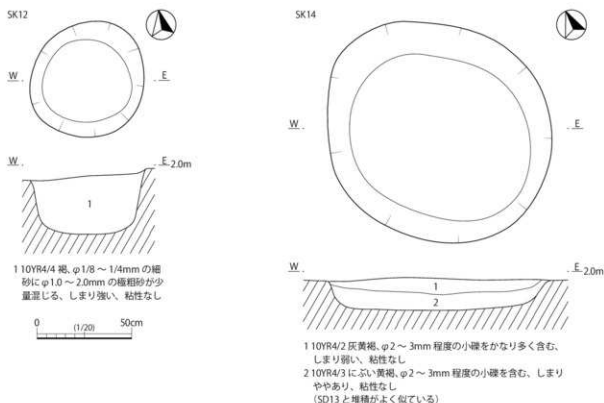
第42図 HZK1805地点 SK04・SK06出土遺物

1 ~ 3 SK04, 4 SK06

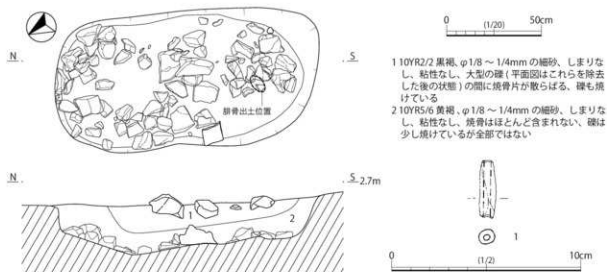
(4) 土坑 SK12・SK14 (第43図)

東拉張区で検出した土坑で、石積み・大溝の両遺構より陸側に位置する。暗褐色砂層を剥ぎ、大溝を確認した標高2.0m 前後で検出している。SK12は径60cmの円形土坑で、確認面からの深さは32cmである。SK14も、円形の土坑である。長径120cm、短径115cm、確認面からの深さは17cmを測る。土師器が4点出土しているが、図化に基えない。

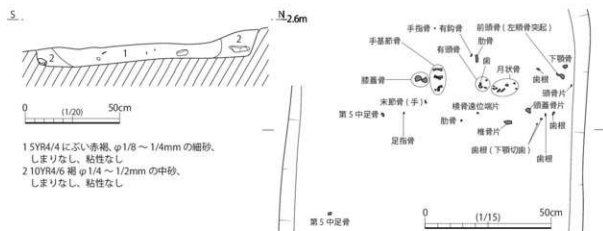
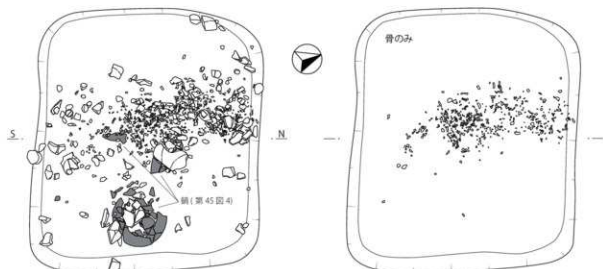
(齋藤瑞穂)



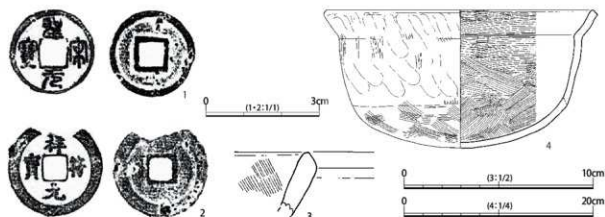
第43図 HZK1805地点 SK12・SK14平面・断面図



第44図 HZK1805地点 SK03平面・断面図および出土遺物



- 1 5YR4/4 にぶい赤褐, ϕ 1/8 ~ 1/4mm の細砂, しまりなし, 粘性なし
 2 10YR4/6 相 ϕ 1/4 ~ 1/2mm の中砂, しまりなし, 粘性なし



第45図 HZK1805地点 SK07平面・断面図および出土遺物

(5) 火葬土坑 SK03・SK07・SK10

石積み遺構 SF00付近から、火葬土坑が3基検出された。SF00を挟んで西側（博多湾側）にSK03とSK07、東側（陸側）にSK10が分布している。

火葬土坑 SK03（第44図） 長さ1.37m、幅0.78m、確認面からの深さ26cmで、長楕円形の平面プランを呈する。土坑内からは礫が多数出土しており、礫には焼けた痕跡が確認できる。これらの礫は、土坑の内外を問わずに広がっており、土坑内に意図的に敷き詰められたものとは考え難い。元々散乱していた礫（礫散布 SX08・09）の上に砂が堆積し、その砂を掘り込んで土坑を構築したために、埋まっていた礫が土坑内に存在することになったと考えられる。なお、土坑底や壁面に焼けた痕跡を確認することはできない。土坑内からは、炭化物と火葬骨片が複数出土している。

火葬土坑 SK07（第45図） 長さ1.39m、幅1.18m、確認面からの深さ9cmで、方形プランを呈する。土坑内からは小礫が多数出土しており、小礫には焼けた痕跡が確認できる。土坑底や壁面に焼けた痕跡を確認することはできない。

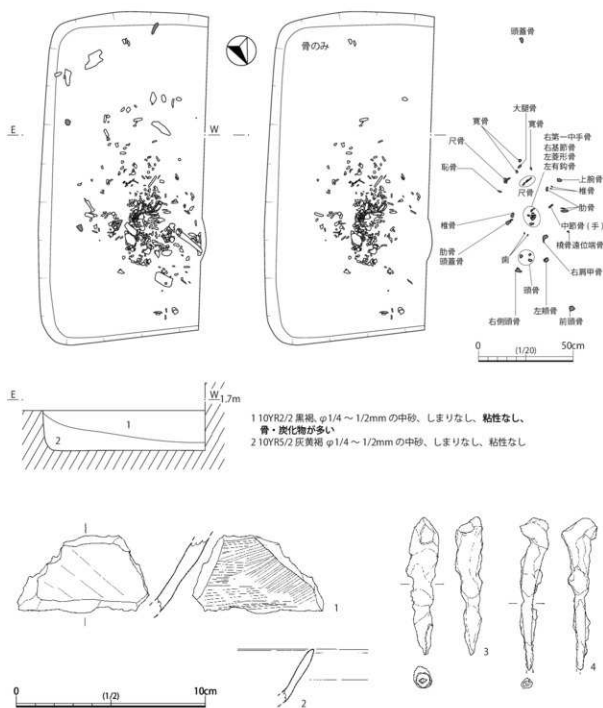
土坑内からは、炭化物と火葬骨片が多数出土している。出土人骨の分析によって、北頭位の状態で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が指摘されている（第VI章舟橋・米元・石川報告）。火葬骨片の出土状況を示したのが右上・右下である。右上より、土坑内の西側半分を中心に火葬骨片が出土していること、人骨の残りが非常に悪いことが見て取れる。右下は、部位が特定可能な火葬骨片の分布を示したものである。これを見ると、人骨の分析で指摘されているように、土坑の北側から南側にかけて頭蓋・上肢・下肢の順で骨片が出土していることを把握できる。

土坑内からは、土師器の鉢形鍋が口縁部を下にして伏せた状態で出土している（第45図4）。被熱痕跡などは確認できない。この鉢形鍋と火葬骨片の分布は重複しておらず、鉢形鍋の下からの人骨出土も確認できない。14世紀後半から15世紀前半頃のものと考えられ（山本ほか 1997）、遺構もこの時期の所産であると考えられる。

火葬土坑 SK10（第46図） 長さ1.7m、確認面からの深さ21cm。遺構の西側が共同研究棟建物に壊されているため幅はわからないが、方形プランを呈すると考えられる。SK03・SK07と違って、土坑内から小礫は出土していない。SK10はSF00の東側（陸側）に存在する遺構であり、SK03・SK07のように周囲に小礫が散乱している環境下にないため、こうした差異が生じたものと考えられる。土坑底や壁面に焼けた痕跡を確認することはできない。

土坑内からは、炭化物と火葬骨片が多数出土している。出土人骨の分析によって、北西頭位の状態で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が指摘されている（第VI章舟橋ほか前掲報告）。SK07と同様、火葬骨片を抜き出して中央・右に示した。人骨の残りの悪さや、土坑北側から頭部・上肢・下肢の順で出土していることがわかる。しかし、土坑南側から頭蓋骨が出土しており、拾骨した際に位置が乱された可能性がある。（福永将大）

火葬土坑の出土遺物 第44図1はSK03出土の土錘である。円筒形をなす。第45図はSK07の出土品。1・2は銭貨で、1は1101年初鑄の聖宋元寶である。裏表とも文字や外縁、内郭が明瞭である。2は1008年初鑄の祥符元寶。表面は明瞭だが、裏面は平坦で、外縁が浅く浮き出る程度にすぎない。3は瓦質土器の捏鉢。口唇部を面取りする。4は土師質の鍋で、ほぼ完存する。鍋としては使われていない。口縁部が強く屈曲した14世紀代の例である。礫散布 SX08・09周辺で出土した例（第40図6）に似る。第46図1はSK10で出土した土師質の鍋胴部である。内面は工具による粗いナデ、外面はハケメで整える。2は土師器の坏。内・外面ともナデ。3・4は鉄釘である。断面は多角形で、釘頭が屈曲するものである。（谷 直子）



第46図 HZK1805地点 SK10平面・断面図および出土遺物

火葬土坑群の位置づけ SK03・SK07・SK10の計3基の火葬土坑が検出された。これらは火葬人骨を埋葬する土坑墓ではなく、以下の3点から遺体を荼毘に付した場と判断した。

- ・土坑内に焼けた小礫や炭化物が見られ、この場で遺体を焼いたものと考えられる
- ・副葬品が希薄であり、蔵骨器や石塔など一点も確認できない
- ・人骨の分析でも指摘されているように、人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性がある

同様の遺構は、全国各地で事例を見出すことができる (第47図)。三重県四日市市伊坂町瓦土遺跡

からは、15世紀後半から16世紀代のものと考えられる火葬墓が129基見つまっている（徳積ほか編 2005）。ほとんどが焼土・炭を伴っており、出土した火葬人骨は完体のもの、特に頭骨が少ないため火葬後の拾骨が行われた可能性が指摘されている¹⁵。36,000㎡にわたり調査を実施しているが、石塔・石仏は1点も出土していないという。なお、南西約800mに位置する伊坂中世墓群では、五輪塔・宝篋印塔・石仏・蔵骨器が複数出土している。墓上遺跡と伊坂中世墓群はほぼ同時期に営まれており、前者が山間部の非居住域に位置する火葬の場、後者が居住域に位置する墓参の場と考えられている。

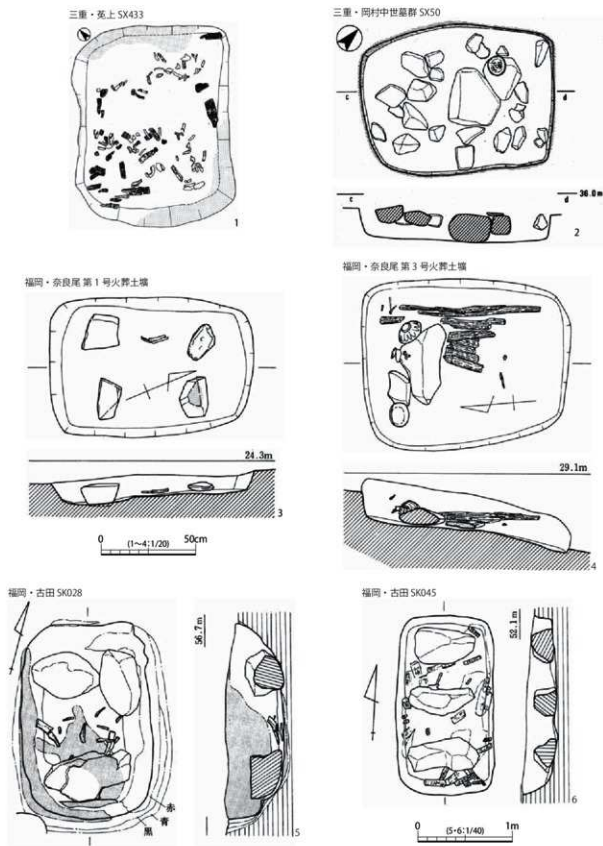
同じく三重県度会郡玉城町岡村中近世墓群では、丘陵尾根沿いに99基の中世後期を中心とする火葬坑群が見つまっている（伊藤編 2006）。土坑内からは火葬人骨が出土しており、墓上遺跡と同様、茶毘の場と考えられている。土坑底に棺を置くための台石が設けられていることが多い。鏡や小刀の副葬品を伴うものもある。SX50から出土した鏡は激しく熱変していることから、棺に遺体と副葬品を入れた状態で火葬したことが推測される。火葬坑内から出土する土師器皿類の年代は15世紀中葉頃が中心で、遺構に伴わない遺物を含めると、15世紀前半から16世紀初頭の間、当地が利用されていたことがわかる。なお、三重県内で火葬坑の確認事例は複数存在するが、その多くは単独もしくは数基程度の群集であり、墓上遺跡や岡村中近世墓群のような群集形態が確認された事例は少ないという（伊藤編 前掲）。

山口県下関市吉母浜遺跡では、土塚墓116基、火葬墓19基が見つまっている。北から南（海側）へと墓域が移動したことが指摘されており、墓城南側に分布が偏る火葬墓は、当該墓地の中でも後出のものと考えられている（村田編 1985）。土師器の検討から、時期は13世紀後半から15世紀代だとされる¹⁶。火葬墓に共通する特徴として、①焼けた人骨を含む、②墓坑の下層には木炭を多量に含んだ層が堆積する、③墓坑壁は被熱している、④石をもつ場合は焼けており、墓坑底に置かれた塊石の上面は炭が付着して黒色を呈している、の4つが挙げられている。これらの特徴から、遺体をその場で焼いた、すなわち茶毘の場であることが指摘されている。一方、墓坑プラン、釘の有無、石の有無、副葬品の有無、人骨の遺存度には変異が見られ、特に人骨の遺存度に関しては、ほぼ全身の部位が確認されたものから、ごく少量の焼骨片しか確認できなかったものまで多様であるという。しかし、全身かほぼそれに近い部位を残しているも、第2頸椎（いわゆる「のど仏」）がどの墓からも確認できないことから、量的多寡は別として、拾骨は行われていたと考えられている。

福岡県糸島市前原奈良尾遺跡では、尾根斜面に火葬土坑13基が並んで見つまっている（中間編 1991）。長さ1m前後、幅0.7m前後の長方形プランを呈し、土坑底に棺を置くための台石を1～6個据えいるものが多い。炭化物や火葬骨が出土しており、火葬骨は全骨格が残存しているものほくなく、頭骨も部分的で、歯は全く出土していない。茶毘に付したあと、拾骨されたことが想定されている。壁上半は被熱痕跡を留めているが、土坑底面や壁下半に被熱痕跡が見られるものは少ない。火のまわりは上方で強かったようで、床面に炭が多いものに限って下半は焼けていないという。土坑内から青磁碗・皿や土師器坏が出土する火葬土坑もあり、供獻品と考えられている。供獻品の年代から、15世紀後半～16世紀中頃が火葬土坑の盛期だとされている。

福岡市早良区重留古田遺跡では、火葬関連施設8基、焼土坑10基が見つまっている（池田・屋山編 1997）。火葬関連施設と焼土坑の違いについて、①人骨の有無、②床面の台石の有無、③壁・床の被熱痕跡の強弱、④覆土の様相などが挙げられており、前者を火葬墓、後者を火葬場（茶毘の場）と解釈できる可能性を示唆している。しかし、各要素で両者を厳密に区分することは難しく、例外も存在するという。時期は15世紀後半から16世紀前後のものと考えられている。

福岡県大野城市乙金業師の森遺跡第32次調査でも、火葬土坑SX12が見つまっている（上田編



第47図 火葬土坑の種類

1 : 穂積ほか編 (2006) 2 : 伊藤編 (2006) 3・4 : 中間編 (1991) 5・6 : 池田・塚山編 (1997)

2014)。北壁を除く3面に被熱痕跡を残しているが、床面には被熱痕跡が見られないという。床面直上には骨片や炭化物を含まない粘土層が堆積し、この層上で南北に並ぶ人頭大の礫を検出。埋土中からは焼けた人骨や炭化物、焼土塊が出土している。出土人骨の検討から、先に挙げた吉母浜遺跡における火葬墓の事例と同様、土坑内で北西頭位の状態で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が指摘されている¹⁸。また、SX12から出土した炭化材の放射性炭素年代測定が行われており、AD1430-1475年、AD1415-1450年という値が出ている。

紙数の都合上、限られた数の事例しか紹介することができなかったが、これらの火葬土坑群の間には以下のような諸特徴が共通してみられる。

- i 遺構の時期は15世紀後半～16世紀代
- ii 土坑底に棺を置くための台石を据えているものが多い
- iii 焼土・炭化物を伴っており、壁や床に被熱痕跡が存在するものが多い
- iv 火葬骨の残りは悪く、拾骨された可能性が高い
- v 石塔・石仏の出土が希薄

これらの諸特徴と、SK03・07・10を比較してみると、iv・vは共通するが、それ以外は異なっている。時期については、SK07出土の土師器鉢形鍋から14世紀後半～15世紀前半と想定され、SK03・10は出土遺物がなく時期不明であるが、SK07と近い時期にあることは想定できる。時期比定が正しいのであれば、他の火葬土坑群より100年ほど古く位置づけられることになる。

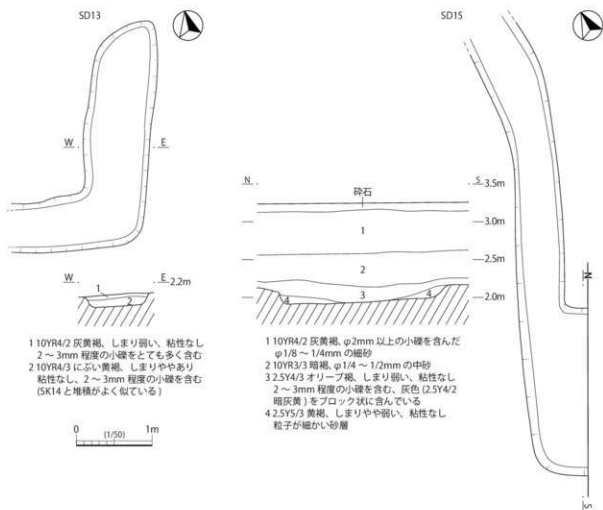
SK03・07の土坑内からは小礫が多数出土しているが、上述したように、意図的に敷き詰めたものとは考えられず、iiのような機能を想定することは難しい。

焼けた小礫や炭化物は確認できるが、iiiのように壁や床に被熱痕跡を見出すことはできない。この点を考える上で、奈良尾遺跡での所見は興味深い。壁上半は被熱痕跡を留めているが、土坑底面や壁下半に被熱痕跡が見られるものは少なく、床面に炭が多いものに限って下半は焼けていないことが指摘されている（中岡編 1991）。SK03・07・10は、上部を後世の造成により削平されており、床面に近い部分のみが残存した状況にある。削平された上部に被熱痕跡が残っていた可能性は否定できない。

そもそも中世における火葬墓は、13世紀前後に出現し、14世紀以降にその数を増やすことが指摘されている（狭川 2009、吉田 2011など）。火葬墓が増加する14世紀代には、律宗系五輪塔も広がりを見せており、狭川真一氏はこれらの背景に律宗の教線拡大を想定している（狭川 前掲）¹⁹。なお、博多遺跡群における火葬墓の出現は、13世紀後半～14世紀初頭とされている（大庭 1992）。火葬墓や石塔の動向を見る限り、13世紀から14世紀にかけての時期に、画期を見出すことが出来るよう。

13世紀から14世紀、すなわち中世前期から中世後期にかけて、葬送行為に変化が見られることが文献史の研究成果からも明らかになっている（大石 2004、島津 2017など）。特に島津毅氏の論考は、大石雅章氏など先学による研究成果を踏まえた上で、中世顕密体制論（黒田 1975）においてこれまで等閑視されてきた、顕密僧・禪律念仏僧と俗人の分業関係を検討の中軸に据え、中世前期から中世後期への葬送行為の変化を論じている。中世前期は、俗人の奉行が葬送全体を監督し、顕密僧は俗人の行事官のもと、導師祝願などの宗教儀礼を主に担っていた。一方、中世後期になると、俗人の監督のもと禪律僧が葬送を奉行する「一向僧沙汰」へと変化し始め、禪律僧が葬送全般の進行を司るようになったという（島津 前掲）。中世後期以降の葬送における禪律僧の関与の増大は、先にみた14世紀代の火葬墓と石塔の広がりとも連動している可能性もあり、興味深い。

福岡市東区箱崎の地藏松原に勝軍地藏堂があり、その室内に石造地藏菩薩坐像が安置されている。桃崎祐輔氏はこの石造地藏菩薩坐像を検討し、宮崎宮土の律宗寺院に旧在していた可能性、そして、



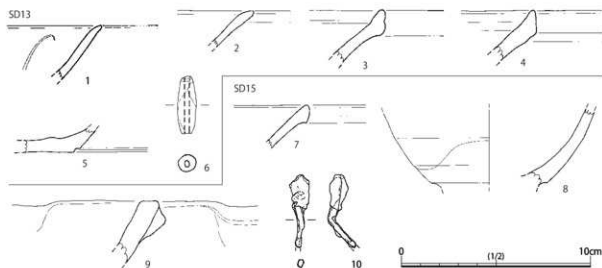
第48図 HZK1805地点 SD13・SD15平面・断面図

六甲山麓で産出する御影石を用いて製作されていることから、近畿地方との緊密なネットワークを持つ律宗系有力寺院が存在した可能性を指摘している (桃崎 2013)。勝軍地藏石造地藏菩薩坐像は、14世紀前半代頃に製作されたと考えられている。

以上を総合して考えると、14世紀前半代には箱崎周辺で禅僧僧が活動しており、彼らの影響で火葬が行われていた可能性がある。本調査地点は、当時の海岸線近くに位置しており、人目につきにくい場所であったと考えられることから、茶毘に付す場所としては最適だったのではなかろうか。勝軍地藏堂の後庭に14世紀代に遡る板碑が複数存在しているのは示唆的である。存在が想定されている律宗寺院の所在は不明であるが、伊坂中世墓群で推測された「墓参の場」が地藏松原付近に存在していた可能性もあろう。箱崎遺跡群における中世墓の動向を踏まえながら、今後より検討を深めていく必要がある。(福永将大)

(6) 溝 SD13・SD15 (第48図)

土坑 SK12・SK14と同じく、東拡張区で検出した遺構である。SD13はL字に曲がる溝で、南側で防型の大溝SD11を切る。検出面での幅は最大で88cm、検出面からの深さは16cmである。溝底の標高は1.89mで、SD11の溝底標高1.36mより50cm余高い。遺物は97点出土しており、土師器の杯皿類



第49図 HZK1805地点 SD13・SD15出土遺物

が多い。大溝との新旧関係や、遺物の年代から、15世紀代とみておこう。

SD15は調査区の東端で検出した溝で、これもL字形を呈する。南北に走る部分は幅65cmと細く、東に曲がってにわかに幅は2.1mとなる。溝底の標高は1.93mであった。遺物は34点出土しており、遺構の年代は14世紀と評価し得る。位置や形、溝底の標高からみて、両遺構には何らかの関係性がありそうだが、しかし年代にズレがある。(齋藤瑞穂)

出土遺物 第49図1～6はSD13の出土品である。1は青磁碗の口縁部で内面に片彫りで施文する。龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で(宮崎編 2000)、12世紀中頃～13世紀初頭の年代があたえられている。2は白磁碗。口唇部がやや肥厚する。3・4は瓦質土器の鉢である。両例とも、口縁部がやや玉縁状を呈する。肥前ではこの種の鍋が14世紀後半～15世紀中葉に広く出回り、次第に素口縁化していくという(山本ほか 1997)。素口縁化が進んだこれらは、15世紀中頃以降の例であろう。5は糸切り底の土師器の坏。6は円筒形の小型土錘である。

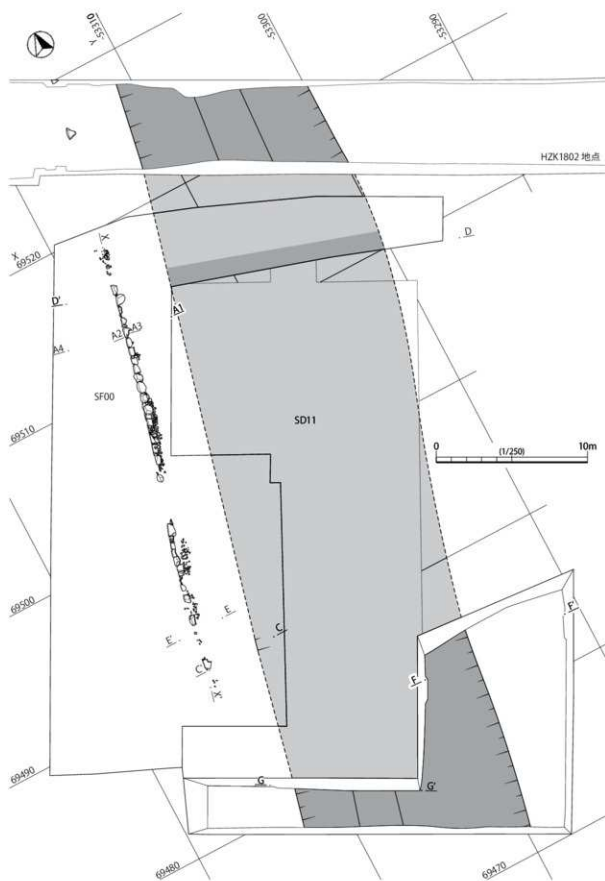
7～10はSD15の出土で、7・8は白磁碗。7は玉縁口縁で、白磁碗Ⅳ類にあたる。11世紀後葉～12世紀中頃に属する。8は白磁の小碗。外面をケズりで仕上げた。9は土師質の控鉢である。注口部のゆるい張り出しがやや明瞭になってきており、14世紀代の所産であろう。10は小型の鉄釘と思われる。断面は長方形で、先端部が折れ曲がる。(谷 直子)

4. 元寇防塁

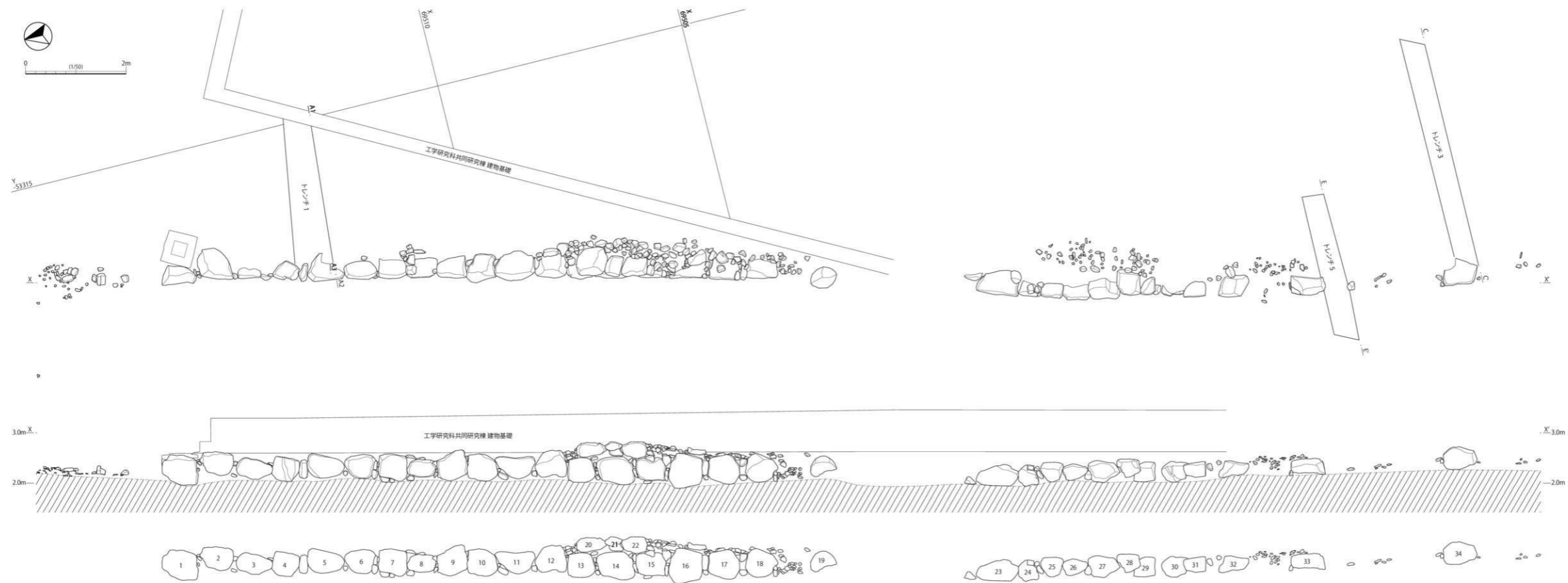
(1) 石積み遺構 SF00 (第50・51図)

HZK1805地点を南北に縦貫する石積み遺構をSF00と称する。築石の並びを北に延ばすと、10m先でHZK1802地点(第4章)の石積み遺構SF130に到る。調査地点の違いにより、異なる名称をあてているが、本来一連なりの石積み列であることを疑う余地はもはやあるまい。

区間① 北半の区間①と、南半の区間②に分けて報告する。区間①は、当初の掘削範囲である工学研究科共同研究棟の西側部分を指し、区間長は13.42mを測る。基底石が19石並び(第51図:築石番号1～19)、築石2段目が3石残る(20～22)。また、2段目もしくはそれより上に積んであっただろう築石の1つが、築石11・12のすぐ前に落ちていた(巻末写真図版13(12))。共同研究棟建設時の造

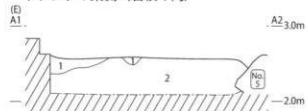


第50图 HZK1805地点元寇防壁全体图



第51图 HZK1805地点SF00平面·立面图

トレンチ 1 東側 (石積み内)



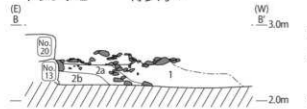
- 1 10YR3/3 暗褐、φ1/2～1mmの粗砂、炭化物を多く含む、しまり強い、粘性なし
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐、φ1/2～1mmの粗砂・φ1～2mmの極粗砂で構成、しまり普通、粘性なし

トレンチ 1 西側 (石積み前) 博多湾→



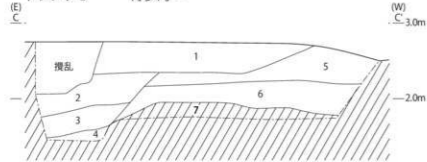
- 1a 10YR5/6 黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂、下端に1列の礫敷きが見える、しまり強い、粘性なし
- 1b 10YR5/6 黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂、しまり弱い、粘性なし
- 2 10YR6/4 にぶい黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂、しまり強い、粘性なし

トレンチ 2 博多湾→



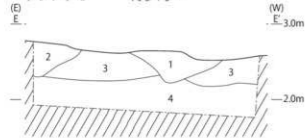
- 1 10YR5/6 黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂、上方で石片が混じる、しまりふつう、粘性なし
- 2a 10YR6/4 にぶい黄褐、石の入り方で2aと2bを分けている、φ1/4～1/2mmの中砂にφ2mm以上の小礫や石を多量に含む、しまり強い、粘性なし
- 2b 10YR6/4 にぶい黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂、しまり強い、粘性なし

トレンチ 3 博多湾→



- 1 10YR3/3 暗褐、粗砂混じりの中砂 (φ1/4～1mm) 炭化物を多く含む、しまり強い、粘性なし
- 2 10YR5/6 φ1/4～1mmの中砂・粗砂で構成、φ2mm以下の小礫を多く含む、しまり強い、粘性なし、大溝SD11を埋めた土と考えている
- 3 10YR6/3 にぶい黄褐、φ1/4～2mmの中砂・極粗砂、しまり普通、粘性なし、大溝SD11の覆土
- 4 10YR5/6 黄褐、φ1/4～1/2mmの中砂に若干粗砂が混じる、粒子が細かいので7層の水性堆積層との切りあいが見える、しまり弱い粘性なし
- 5 10YR6/3 にぶい黄褐、φ1/2～1mmの粗砂・φ1～2mmの極粗砂で構成、しまり普通、粘性なし、水平に堆積する
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐、φ1/16～1/4mmの極細砂・細砂にφ1～2mmの極粗砂が混じる、5層と違って炭化物が目立つ、しまり弱い、粘性なし
- 7 水性堆積層

トレンチ 5 博多湾→



- 1 10YR2/2 黒褐、石積み周辺に散らばるものと同じサイズの礫を多く含む、φ1/2～1mm程度の粗砂にφ2～3mmの小礫が混じる、しまり強い、粘性なし、礫石抜きとり痕
- 2 10YR3/3 暗褐、炭化物を多く含む粗砂層 (φ1/2～1mm)、3層を切る、しまりなし、粘性なし
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐、φ1/2～1mmの粗砂・φ1～2mmの極粗砂で構成、しまり普通、粘性なし
- 4 10YR4/4 褐、極粗砂を含む粗砂 (φ1/2～2mm)、しまり弱い、粘性なし

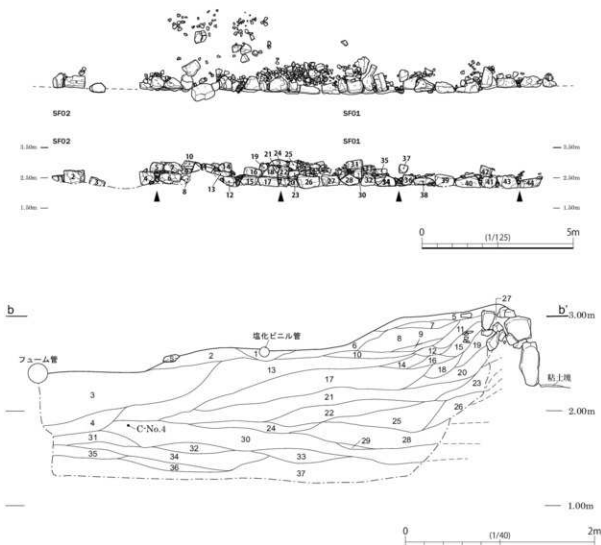
第8表 HZK1805地点 SF00築石観察表

区間名	築石番号 (奥51段)	位置	標高 (m)	岩種	幅幅 (cm)	面高 (cm)	幅×高 (m ²)	正面の 特徴	備考
①	1	基底石	2.01	礫岩	68	46	31.3	割面	本来の設置角度を維持していない
	2	基底石	2.14	礫岩	60	44	26.4	割面	
	3	基底石	2.08	礫岩	71	38	27.0	自然面	
	4	基底石	2.04	礫岩	—	46	—	自然面	
	5	基底石	2.10	礫岩	70	43	30.1	割面	
	6	基底石	2.08	礫岩	57	42	23.9	自然面	
	7	基底石	2.06	礫岩	55	48	26.4	自然面	
	8	基底石	2.12	礫岩	52	31	16.1	自然面	
	9	基底石	2.07	砂岩	54	55	29.7	割面	
	10	基底石	2.04	礫岩	60	53	31.8	割面	
	11	基底石	2.08	礫岩	76	39	29.6	割面	
	12	基底石	2.12	礫岩	63	36	22.7	割面	
	13	基底石	2.01	砂岩	52	49	25.5	割面	
	14	基底石	1.97	礫岩	64	48	30.7	自然面	
	15	基底石	2.05	礫岩	55	38	20.9	自然面	
	16	基底石	1.90	礫岩	65	69	44.9	割面	
	17	基底石	1.98	礫岩	62	58	36.0	割面	16・17：間詰石を含めて面が揃う
	18	基底石	2.02	礫岩	53	43	22.8	割面	
	19	基底石	2.13	礫岩	50	29	14.5	割面	本来の設置角度を維持していない
	20	2段目	—	礫岩	48	25	12.0	割面	
	21	2段目	—	礫岩	25	23	5.8	割面	
	22	2段目	—	礫岩	48	30	14.4	割面	
②	23	基底石	1.95	礫岩	82	40	32.8	割面	側面も割面
	24	基底石	1.93	礫岩	38	48	18.2	割面	本来の設置角度を維持していない
	25	基底石	2.02	礫岩	35	32	11.2	割面	本来の設置角度を維持していない
	26	基底石	2.05	礫岩	48	28	13.4	割面	
	27	基底石	2.01	砂岩	45	30	13.5	割面	
	28	基底石	2.11	砂岩	36	31	11.2	割面	
	29	基底石	2.02	砂岩	42	27	11.3	割面	
	30	基底石	2.02	砂岩	40	32	12.8	割面	
	31	基底石	2.12	砂岩	42	25	10.5	割面	
	32	基底石	2.12	砂岩	50	24	12.0	割面	上面も割面
	33	基底石	2.18	砂岩	62	20	6.4	割面	上面・側面も割面、本来の設置角度を維持していない
	34	基底石	2.28	砂岩	58	42	24.4	割面	

成で動かなかった基底石の正面に、かつ、縦方向に落ちているから、この落下は防塁の崩壊、すなわち SX08・09の形成と期を同じくするものと推測される。

礫岩・砂岩で構成され、大ぶりの石が目立つ（第8表）。1の基底石は背後に設置されていた集水桝に押され、また19も造成工事の影響を受けて、ともに前のめりになっているが、ほかは本来の角度を保ち、石面が博多湾を真っ直ぐ向く。区間①に配された基底石の標高は平均2.05mで、HZK1902地点の石積み遺構 SF05と較べると20cm余低い。築石16の設置面が1.90mで一際低いのが、これは造成の影響を被った可能性が高い¹⁶⁾。面高40cm超の例が半数以上を占め、70cmに迫る例がみられるのは、北のHZK1902地点（第Ⅱ章）やHZK1603・1604地点の石積みと異なるこの区間の特長である。北接するHZK1802地点の場合も、それぞれ面高60・70cmで、区間①の諸例に引けをとらない。HZK1802地点から本区間までは、大ぶりの石を使うゾーンと評してよい。

築石番号3と4、9と10の間は、築石と築石とが直に接するが、他は間詰石を噛ませる。4と5とのように一部分も接していないケースも多い。HZK1603地点の調査に携わった森貴教は、こうした築石同士が全く接していない箇所が存在に着目し、「基底石の不連続の間隔は4m（1丈3尺2寸に相当）で一定しており、石積みを構築する際の作業単位を示す可能性がある」（福田・森編 2018：57頁）と論じる（第52図）。興味深い主張であり、一考の価値はあるが、しかし森説に対する素朴な疑問として、1丈3尺2寸というキリの悪い距離が、なぜ単位たり得るかが釈然としない。もちろん



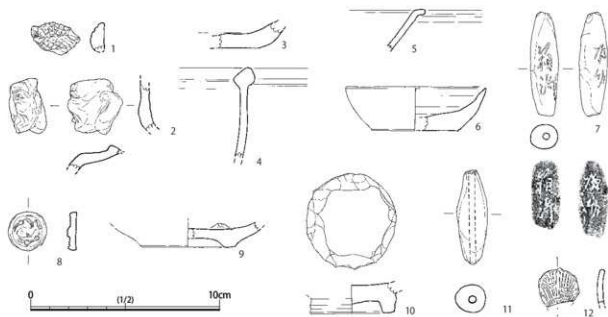
第52図 HZK1603地点 SF01平面・立面・断面図 (福田・森編 2018)

我々の社会においても、例えば42.195km という半端な値を承認し、特定の用途に用いるなど、整数ばかりということでは必ずしもないが、森説が成立するにはその値を使った類例を挙げ、値の普及ぶりが示されなければならぬ。

また、森が立案に到った HZK1603地点を点検してみると、同地点の築石番号12-15間のように、基底石の不連続は単位とされた箇所以外にもあるし、2段目の5は単位境とされた基底石4-6間を跨ぐ。これらの評価が、単位問題の進展に不可欠であろう。さしあたって、筆者が担当した SF00では(第51図)、13-18間のようにことごとく間詰石を噛ませる部分があり、接する/接していないで単位をみいだすことが難しい。16-17間のように、築石と間詰石の面が寸分の差もなく揃う場所がある点からすると、計画的に石を積み、距離を稼いでいるようにさえみうけられる。

築石番号20・21・22は2段目にあたる。石面の面積は、基底石の諸例よりはるかに小さい。21が本遺構の最高点で、1段目の14を設置した面からの高さは84cmを測る。HZK1603地点のSF01は、3段で90cm 違っていた。本来はこも3段以上積んであったとみて差し支えない。

区間② 工学研究科共同研究棟の建物基礎および床下で検出した部分を指す。区間①から2.8m 南に位置し、区間長は断続的に9.95mを測る。築石番号23-32まで連続し、32から85cmの空隙を挟ん



第53図 HZK1805地点 SF00周辺出土遺物

で33が、さらに2.3m 空いて34がある。基底石の標高は平均2.07mで、区間①とはそう違ってはいない。ただし、建物の基礎下・床下で検出しているため、若干前に傾いた築石もあり、築造時からは沈んでいる可能性が限りなく高い。礫岩と砂岩で構成されるが、やや砂岩が多い印象を受ける。

区間①における基底石石面の平均サイズが27.2cm²であるのに対して、区間②のそれは14.8cm²しかない。築石番号23が32.8cm、34が24.4cmを測る以外は20cmに達しておらず、区間①のほぼ半分の大きさの石で作っているわけである。また、区間①の13-18間と違って、隣りあう築石はほぼ接し、間詰石を挟むケースはほとんどない。このようにして石のサイズ選択や配置ぶりを較べると、作業単位はともかくとして、ひとまず区間①と②が異なる作法で作られたことは指摘してよい。(齋藤瑞穂)

SF00周辺の出土遺物 第53図1・2はトレンチ3の1層から出土した遺物である。1は泥面子(芥子面)。籠に盛られた果物をモチーフとする。2は土人形で、布袋かもしくは恵比寿を象ったものであろうが、頭巾の有無などを弁別する手がかりがない。型押しで成形したのち、細部を整える。内面には、型に押し込んだ時にできた粘土の継ぎ目や指紋が残る。

3-6はトレンチ5から出土した。3・4は4層の例で、3は土師器の坯底部である。4は黄釉盤で、大宰府編年の盤12類。11世紀後半～12世紀前半に属する。5・6は1層の出土。築石を抜き取った後に埋まったものとみられ、5は白磁碗。口縁部が短く屈折させて平坦にする。屈折部直下に強いナデを加えていて、稜線が付く。大宰府編年の白磁碗V4類もしくはⅧ類とみておきたい。いずれであっても12世紀中頃に増加するタイプである。6は土師皿。小型で、胎土が均質であり、高さもある。口縁部にススが多く付着しており、灯明皿として用いたものと考えられる。近世の例であろう。

7-8は区間②周辺の出土品である。7は円筒形の土鍾。「箱崎」・「水口」を刻む。後者は所有者の名であろうか。8は泥面子(面打)である。円盤形で、魚と小花の文様を型押しする。

9・10は、SF00のライン上に掘り込まれた近代以降のゴミ坑SK17出土の陶磁器である。9は青磁碗。萁苜底気味になった底部である。10は白磁碗の底部を打欠いた瓦玉。元々の碗は、ケズリによる角高台で、壘付や高台内にも施軸されている。11・12はSK17周辺で出土しているもので、11は土鍾。12は泥面子(芥子面)である。モチーフは団扇。(谷直子)

石積み後背の再検討 SF00の後背部分を、トレンチ1・3・5が示している（第51図裏）。大溝SD11との関係は、次の（2）で詳説されるであろうからここでは省き、築石が重みをあずけるすぐ背後の部分についてのみ報告する。

トレンチ1・3・5をみると、築石の後背は水平に堆積した砂のみが存する。2層確認され、にぶい黄褐色砂とにぶい黄褐色砂が堆積するらしい。トレンチ5に礫岩・砂岩の剥片を含む層があるが（1層）、これは築石を抜き取った攪乱の痕跡であり、本来はもっぱら砂のみで構成されると言ってもよい。一方、これまでの報告は、この部分に裏込石が存すると説いてきた。

さしあたってHZK1603地点の断面に、それらしい表現を見つけ得る（第52図下段）。ただし、礫塊を含む19層は「植物根由来の攪拌を受け」（福田・森編 2018：52頁）た層であるといい、築造時のままを遺したものとみなしがたい¹⁷⁾。さらに言えば、基底石の後背に同じような礫塊はなく、石積みを確認したレベルの付近のみ後背に散らばっている点も気に懸かる。

ほかに、HZK1604地点の報告には、「原位置を保つものではないが、石積みの背部を構成する裏込石」（福田・森編 前掲：58頁）があり、HZK1701地点では大溝のなから「拳大の裏込石が複数出土し」（三阪・谷編 2019：21頁）たという。また、HZK1706地点でも、「基底石上部の石片散布」が「裏込石や石積み石材、両者の破片に由来する」（三阪・谷編 前掲：85頁）と説く。

このようにして過去の成果を逐一点検すると、実は原位置を保つ裏込石は確認されていないことに気付く。実際、本地点では砂のみで、HZK1802地点でも、礫岩片の混じる層はあっても石を詰めたというようでない。箱崎キャンパスの石積み遺構に裏込石がともなう、というこれまでの報告・言説は、一旦放棄するのが正しいように思う¹⁸⁾。

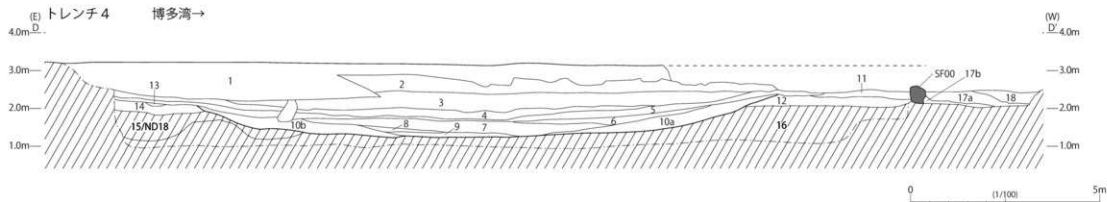
むしろ、石を積み、砂を盛りあげただけの簡素な作りではなかったか。礫岩片の存否も、礫を詰めた云々でなく、盛りあげる砂の周囲で、石を打つける・割るなどの加工をしたかどうかにか左右されているように思うのである。

石積みの埋没 「2. HZK1805地点の遺跡形成プロセス」で年代上の見通しを述べ、「3. 防曇廃絶後の遺構と遺物」の礫散布SX08・09の項で少しふれたが、ここではそれらの議論の基盤である堆積データを報告する。

埋没過程を物語るのは、トレンチ1のA3-A4断面およびトレンチ2と（第51図）、次の大溝の項で示されるトレンチ4（第54図上段）である。向かって右側が博多湾の方向であり、いずれの断面においても、石積みから博多湾方面に傾斜した、にぶい黄褐色砂の三角堆積が確認されている。この部分に礫は含まれない。礫は、そこに堆積した部分が多く含む。トレンチ2における2a層であり、トレンチ4における17a層が、これに該当する。基底石付近が風成砂によって埋まりつつあるなか、石積みが少しずつ崩れ始めたのであろう。

やがて、黄褐色砂が防曇の内外を広く覆う。内側は大溝が暗褐色砂層に切られるためみあたらないが（トレンチ4）、HZK1803地点ではこの種の砂が大溝の上方に堆積していた（第14図）。外側を覆った形跡は、トレンチ1の1a・1b層、トレンチ2の1層、トレンチ4の18層に表れている。一部のエリアでは砂がしばらく堆積した後、にわか大型の礫が散らばるようになる。トレンチ2で1層上面に表れているのがそれで、石積み確認面まで累々と積み重なる。これが、最大で60cm角に達し、意図的に割ったとみられるSX08・09の角礫である。維持管理の終了によって砂は次第に溜まり、中世びとが石積みを資材として採っていきやすいシチュエーションが醸成されたものと推測される。

（齋藤瑞穂）

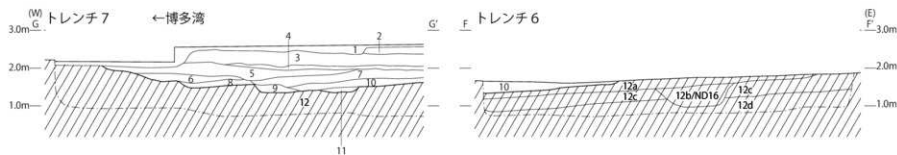


【層序】

- 1 10YR6/3にぶい黄褐、中砂(粗砂含む)、しまり弱い、粘性なし、バラスや小礫を含む、建物建設に伴う造成土
- 2 10YR4/2灰黄褐、中砂(粗砂含む)、しまり強い、粘性なし、1~2m程度の炭化物を多く含む
- 3 7.5YR3/3暗褐、中砂(粗砂含む)、しまり強い、粘性なし、0.5cm程度の炭化物を含む、根を含む
- 4 10YR3/3暗褐、中砂(粗砂含む)、しまり強い、粘性なし、0.5~1cm程度の炭化物を含む、根を含む
- 5 7.5YR4/3褐、中砂(粗砂含む)、しまりやや強い、粘性なし
- 6 10YR6/3にぶい黄褐、中砂(粗砂含む)、しまり弱い、粘性なし、大溝SD11の埋土
- 7 10YR5/2灰黄褐、中砂(粗砂含む)、しまりやや弱い、粘性なし、大溝SD11の埋土

- 8 10YR4/2灰黄褐、中砂(細砂、粗砂含む)、しまりやや弱い、粘性なし、大溝SD11の埋土
- 9 2.5YR4/2暗灰黄、中砂(細砂、粗砂含む)、しまりあり、粘性なし、大溝SD11の埋土
- 10a 10YR5/4にぶい黄褐、中砂(細砂含む)、しまり弱い、粘性なし、大溝SD11の埋土
- 10b 10YR5/4にぶい黄褐、中砂(細砂含む)、しまり弱い、粘性なし、大溝SD11の埋土
- 11 10YR6/3にぶい黄褐、中砂・粗砂、しまりかなり弱い、粘性なし
- 12 10YR5/3にぶい黄褐、中砂(細砂含む)、しまり弱い、粘性なし
- 13 10YR3/3暗褐、中砂(粗砂含む)、しまり強い、粘性なし、0.5~1cm程度の炭化物を含む
※HK1802地点のSD122と対応か?

- 14 10YR5/3にぶい黄褐、中砂、しまりやや弱い、粘性なし
- 15 10YR5/3にぶい黄褐、細砂、粗砂含む、しまり弱い、粘性なし、10YR5/2灰黄褐の粗砂がまじる、自然流路ND18
- 16 10YR5/6黄褐のシルト~細砂と、10YR5/3にぶい黄褐の粗砂が層状に堆積、しまり弱い、粘性なし、下部ほど氷害を多く含む
- 17a 10YR6/4にぶい黄褐、φ1/4~1/2mmの中砂に礫を多く含む、しまり強い、粘性なし
- 17b 10YR6/4にぶい黄褐、φ1/4~1/2mmの中砂層、礫は自立しない
- 18 10YR5/6黄褐、φ1/4~1/2mmの中砂、しまりなし、粘性なし



【層序】

- 1 共同研究棟基礎直下の砕石層
- 2 10YR4/2 灰黄褐、φ1/8~1/4mmの細砂、φ2mm以上の小礫やφ1~2mmの極粗砂を含む、SD15を覆う層に对比できる
- 3 10YR3/3 暗褐、粗砂混じりの中砂(φ1/4~1/2mm)、SD15を覆う層に相当する、炭化物はほとんどみあたらない、しまり強い、粘性なし
- 4 10YR4/3にぶい黄褐、φ1~2mmの極粗砂とφ1/4~1/2mmの中砂とで構成される、大溝の覆土である5層以下を3~4層が切る、しまり普通、粘性なし
- 5 10YR5/6黄褐、φ1/4~1mmの粗砂・中砂で構成される、吾側でやや粗さがめだつて、色味やしまりは共通しており層を分離することはできない、しまり普通、粘性なし、大溝SD11の覆土

- 6 10YR6/4にぶい黄褐、φ1/4~2mmの中砂~極粗砂で構成、しまりはかなり弱く、接触している12層のしまりの強さと対称的である、粘性なし、大溝SD11の覆土
- 7 2.5Y/4黄褐、φ1/8~1/4mmの細砂にφ1~2mmの極粗砂が混じる、5~8層の黄褐より白味が強い、しまり強い、粘性なし、大溝SD11の覆土
- 8 10YR5/6黄褐、φ1/8~1/2mmの細砂・中砂で構成、色味は5層によく似ているが、5層より細かい、7層の黄褐よりは黄味が強い、大溝SD11の覆土
- 9 7.5YR5/8明褐、φ1/16~1/4mmの極細砂・細砂に極粗砂が混じる、石積み側から流れ込んで三角堆積した部分、大溝SD11の覆土
- 10 10YR4/4 褐、φ1/8~1/4mmの細砂にφ1~2mmの極粗砂が多く混じる、遺物がかなり含まれていた、しまり普通、粘性なし、大溝SD11の覆土

- 11 5YR5/8明赤褐、φ1/8~1/4mmの細砂とφ1~2mmの極粗砂で構成、大溝の底でしまりは弱い、粘性なし、遺物もほとんど含まない、大溝SD11の覆土
- 12 大溝が埋り込まれた自然堆積層
- 12a 2.5Y6/2 灰黄、φ2mmおよびそれ以上の極粗砂・小礫層
- 12b 10YR2/3にぶい黄褐、φ1/16~1/8mmの細砂粒のみで構成される、均一的で混じりは少ない、しまり強い、粘性なし、自然流路ND16

第54図 HZK1805地点 SD11 断面図

(2) 大溝 SD11 (第50・54図)

石積み遺構 SF00の東側(陸側)に、SF00と並行する形で検出した。調査区北側で幅15.3m、東拡張区で幅14.2mを測る。東拡張区では、平面にて確認している。調査区北側にトレンチ4、東拡張区にトレンチ6・7を設定し、堆積状況を確認した。

トレンチ4南壁セクション 第54図上段はトレンチ4南壁のセクション図である¹⁹⁾。17b・17a・18層は石積み遺構 SF00の西側(博多湾側)に堆積する。防塁が機能しなくなった後に堆積したものと考えられる。17a層を中心に多く見られる礫は、SF00側から流れ込むように含まれている。これらは、SF00の築石に由来するものと考えられ、石材は同じ砂岩・礫岩である。

SF00の陸側3.5m付近から、シルト～細砂層と粗砂層が互層に堆積する自然堆積層(16層)を切る形で、SD11の掘り込みラインを確認した。2～5層は暗褐色砂層としてまとめることができ、しまりが強く、炭化物を多く含んでいる。SD11の掘り込みラインを切って堆積していることから、SD11の廃絶・埋没後の所産であることは確実である。

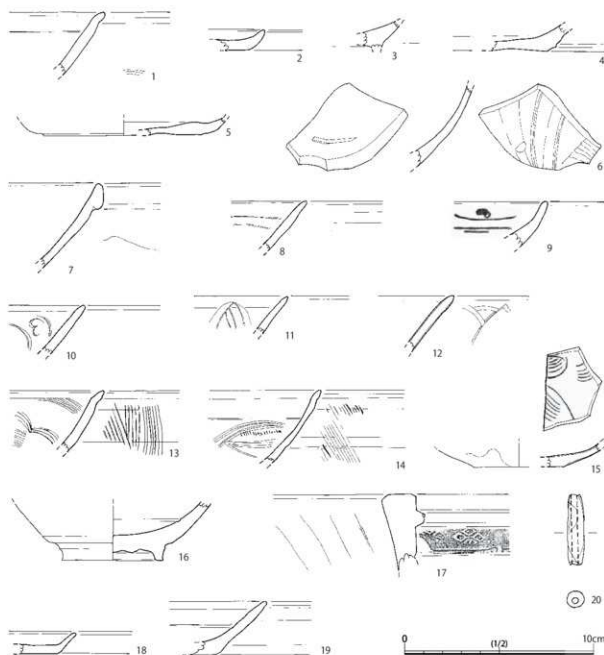
6・7・8・9・10a・10b層はSD11の埋土である。このうち6～9層は灰黄褐色を呈し類似性が高いが、10a・10b層は黄褐色で6～9層とは異なっている。10a層は、SF00の陸側に、石積みを固定させるために盛られた盛土(第1章第9図)の、流れ込みの可能性がある。10a・10b層はともに黄褐色砂層で類似した特徴をもっており、かつ、自然に堆積している黄褐色砂層との区別が難しい。SD11を構築する際に掘削した砂を、石積み陸側の盛土に用いた場合、盛土の砂と自然堆積の砂との区別が難しいため、10a層が盛土の流れ込みの砂層で、10b層がSD11東側から流れ込んだ自然堆積層であったとしても、両者を区別するのは困難である。なお、削平されていて判断が難しいが、11層は盛土の可能性もある。

一方、10a層を盛土の流れ込みではなく、10a層・10b層ともにSD11内に自然に堆積した砂層だと解釈すると、SD11の掘り込み最深部にこれらと類似した砂層が堆積していないのはやや不自然である。SD11構築後に砂層が堆積したため、再度掘りなおした結果、最深部の砂層は除去されたものの、SD11の両側の立ち上がり付近に砂層が残ってしまった(その残存した砂層が10a層・10b層)という解釈も成り立つ。もしそうであれば、SD11構築後における補修・修繕行為を、本セクションから指摘することができるかもしれない。いずれにしても10a層・10b層の位置づけを明確にすることは現状困難であり、上述したような可能性の一つに絞り込むことはできない。

12層は、自然堆積層(16層)をまっすぐ水平に切る形で堆積している。14層も12層と同様で水平に堆積しており、特徴も12層と類似している。12・14層の下面は、SF00の基底石の下面とレベルがおおよそ一致していることも興味深い。以上より、12・14層は、SF00構築に伴う造成土の可能性が高い。15層は、自然流路 ND18と解釈した。これについては後述する。

トレンチ4南壁セクションでは、炭化物を採取し、年代測定と炭化物の樹種同定を行っている。分析結果の詳細は第6章小林報告・パレオ・ラボ AMS年代測定グループ報告を参照願いたい。SF00とSD11の構築年代に比較的近い時期の所産と考えられる7・9・10a・12層などの年代測定結果は、1154-1307 calADの幅に収まっている。防塁が築造されたのが建治2年(1276)であり、やや古い測定値がでてくるものの、海洋リザーバー効果の影響を受けていることが容易に想定されるため、大きな矛盾はないと判断する。

また、樹種同定の結果は興味深い。7・10a・12・15層で採取した炭化物はサカキと同定され、それより上の層からはサカキは検出されていない。試料数は少ないものの、SD11の埋土以前と以後で、炭化物の樹種に有意差が存在する可能性が指摘できる。



第55図 HZK1805地点トレンチ4出土遺物

13層から採取した炭化物の年代は、41822-40930 calAD と極めて古い値を示している。炭化物の残存状態が悪く、樹種同定は不可能であったが、測定した炭化物は亜炭の可能性が高い。亜炭は、石炭の中でも最も石炭化度が低いもので、自然堆積層中に存在することもあるというから²⁰⁾、本測定結果をもって、13層を現代の攪乱によるものと即断することはできない。なお、13層は、トレンチ4のすぐ北側で検出されたHZK1802地点の溝SD122(第31図)と対応する可能性が高い。(福永将大)

第4トレンチの出土遺物 第55図1・2は5層(SD11廃絶後の堆積)出土である。1は龍泉窯系青磁碗で、口縁部は小さく外反し、口唇部を丸く収める。内面口縁部下に沈線が1条めぐる。2は土師皿。摩滅が著しく調整は不明。3は7層(SD11)で出土した土師器の高台付坏。粘土紐を貼り付けて高台を作る。4は10a層(SD11)の土師器の坏底部。糸切り底で内外面ともナデで調整する。

5は10b層(SD11)出土の土師器の坏底部である。摩滅しているが、外面に板状圧痕が残る。6は12層(SF00構築に伴う造成土)の青磁碗。外面に鎬蓮弁を施す。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類で、13世紀前葉である。7・8は14層(SF00構築に伴う造成土)出土の白磁碗である。7は玉縁口縁で、11世紀後葉～12世紀中頃の碗Ⅳ類。8は直口縁で、軸は薄く、内面に匏掻きで施文する。

9～20は、トレンチ4の一括品である。SD11の覆土を切る5層以浅の暗褐色砂層出土品と、6層～10b層のSD11の遺物、および大溝構築時およびそれ以前に属する12・14層以深出土のすべてを含む。

9は近世の染付碗で、内面を呉須の植物文で飾る。10～12は龍泉窯系青磁碗である。10は大宰府編年のⅠ2類で、片彫りの花文を内面にあしらう。11は片彫りで草花文を施す。碗Ⅰ類で、10・11は12世紀中頃～13世紀初頭に属する。12は碗Ⅱ類で13世紀前半頃に位置づけられる。外面に蓮弁文を施す。13・14は同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類の例。内面に花文とジグザグ状の点描文を、外面に細かい縦の柵目文を施す。12世紀中頃～13世紀初頭の所産である。

15は白磁の皿で、見込み部分に匏掻きの草花文を配する。皿Ⅶ-1b類にあたり、12世紀後葉～13世紀初頭の年代があたえられている。16は朝鮮王朝陶器の碗。高台部分は粗いケズリ。内面に1条の沈線がめぐり、砂メアトが残る。降矢哲男の成果を参照すれば(降矢 2018)、15世紀に位置をあたえるのが穏当なように思われる。17は瓦質土器の火鉢。厚く平坦に整えられた口唇部の下に尖帯を設け、その下方を割菱のスタンプ文で飾る。18は糸切り底の土師皿。19は糸切り底の土師器の坏である。内面に明瞭な回転ナデを施す。20は円筒形の土鍾。(谷 直子)

トレンチ6・7北壁セクション 第54図下段はトレンチ6・7北壁のセクション図で、トレンチ7の西に石積み遺構SF00が来る。2・3・4層は暗褐色砂層としてまとめることができ、トレンチ4南壁の2～5層に対応するものと考えられる。SD11の廃絶・埋没後の所産であろう。

トレンチ4南壁と同様、シルト～細砂層と粗砂層が互層に堆積する自然堆積層(12層、トレンチ4南壁の16層と対応)を切る形で、SD11の掘り込みラインを確認できる。トレンチ4南壁西側では、SD11の掘り込みラインはSF00に向けてなめらかに立ち上がっていたが、トレンチ7北壁西側は階段状をなして立ち上がっている。調査区北側と南側で、SD11の形状(断面形状)が異なっていた可能性がある。

5～11層はSD11の埋土で、そのうち10層はトレンチ6北壁西側でも確認できる。トレンチ4南壁の12・14層に見たような、石積み遺構SF00構築時の造成の痕跡は確認できない。

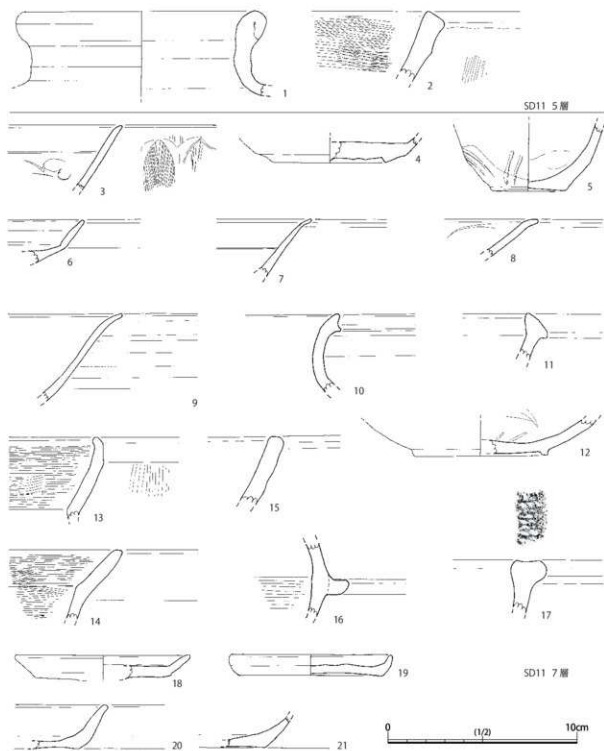
12(a～c)層は、径2mm以上の粗砂層で、小礫を含んでおり、洪水などによる水性堆積層と考えられる。12a層が12b層とした自然流路ND16を覆っている。自然流路ND16については後述する。

(福水将大)

トレンチ7で出土したSD11の遺物 第56図1・2は5層の出土品である。1は中国陶器の甌。口縁部を玉縁状に折り返す。厳密には決しがたいが、12ないし13世紀代の例と推測される。2は瓦質土器の捏鉢である。口唇部を面取りする。

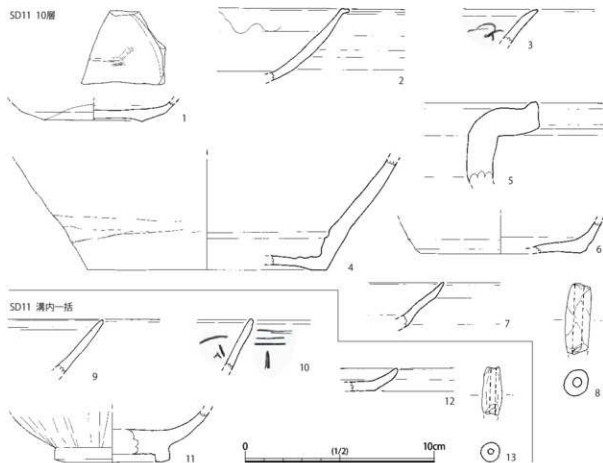
3～21は7層出土。3～6は龍泉窯系青磁である。3は碗Ⅰ-6b類で12世紀中頃～13世紀初頭の例。外面は縦の柵目を入れた鎬蓮弁文で飾り、内面には片彫り草花文を施す。4は萁筒底の碗で、萁筒底内を削って稜を付け、中央の軸を掻き取る。壺付からすぐ立ち上がった部分にも稜を設けてある。内面は見込みと立ち上がりの境に1条の圈線をめぐらす。5は碗Ⅳ類。外面は型押し草花文で飾り、軸は底部まで及ばない。4・5とも14世紀前半に属する。6は皿である。見込みと立ち上がりの境に圈線を1条配する。

7～9は白磁碗。7の口縁は屈折していて、上端を水平にする。内面の体部中央に沈線が1条めぐ



第56図 HZK1805地点トレンチ7出土遺物①

る。大宰府編年の碗V-4類もしくはⅧ類である。数の増えてくる12世紀中頃とみておこう。8は輪花碗。内面口縁部そばに、薄く文様を窺描きする。9は口唇部内面の軸を挿き取った口禿の例。碗Ⅷ類で、13世紀中頃～14世紀初頭に属する。10は焼き締め陶器もしくは中世須恵器の壺である。口唇部がM字を呈する。11は瓦質土器の鉢あるいは鍋。口縁部を玉縁状に仕上げ、暗灰色を呈する。肥前に



第57図 HZK1805地点トレンチ7出土遺物②

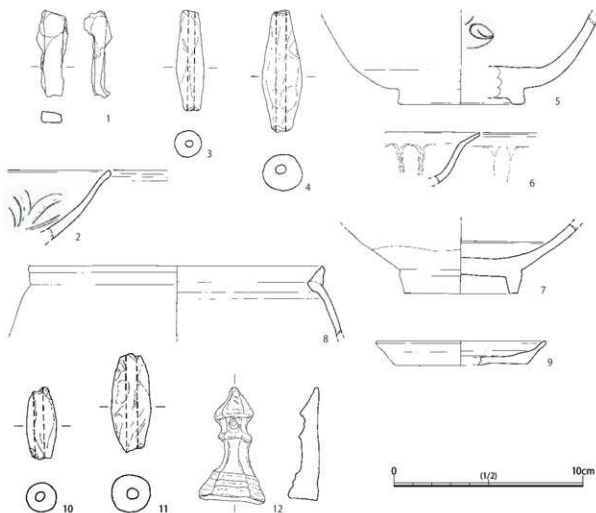
多く見られ、14世紀後半～15世紀中葉のものである。

12は瓦器碗。粘土紐を貼り付けて低い高台を作る。内面にミガキを施す。13・14は土師質の鍋である。13はやや内湾し、他方14は比較的真っ直ぐ立ち上がる。頸部の屈曲はいずれも明瞭で、14世紀前半頃に位置づけられる。15は口唇部を丸くおさめた土師質の控鉢。16は土師質の湯釜。鈔の部分で、それより下方にスガが付着する。17は肥前でみられる土師器の鉢で、13世紀後半頃の例。口唇部に型押しで施文する。18・19は糸切り底の土師皿、20・21は同じく糸切り底の坏である。

第57図1～8は10層の出土品。1は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類である。12世紀中頃～後半の例で、見込みに片彫りで施文する。2・3は白磁碗。2は口唇部が短く屈折するV4類、3は口縁部が外反した碗Ⅱ類である。前者も、草花文で飾る後者も12世紀中頃～後半の年代があたえられている。4は中国陶器の甕。5は陶器の壺。口縁緑帯部の特徴からすると、13世紀後半の常滑焼であろうか。6は糸切り底で、底部外面に稜のついた土師器の坏。7も土師器の坏で、口縁部が肥厚する。8は円筒形の土鍾。9～13はSD11の溝内一括品。9～11は龍泉窯系青磁碗である。9は内面に沈線を1条施す。10は内外面とも片彫りで施文する。11は鑄蓮弁を施した碗Ⅱ類。13世紀前半に属する。12は土師器の皿。13は円筒形の土鍾である。

第58図には、トレンチ内外の出土遺物を掲げている。1は、東拡張区の大溝確認面で出土した鉄釘。断面は四角形で、先端が折れ曲がる。

2～4は、SD11の溝内から出土した例。2は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類で、内面に片彫りで花文を施す。



第58図 HZK1805地点トレンチ7および周辺の遺物

1 東松原区大溝確認、2～4 SD11周辺、5～12 トレンチ7一括

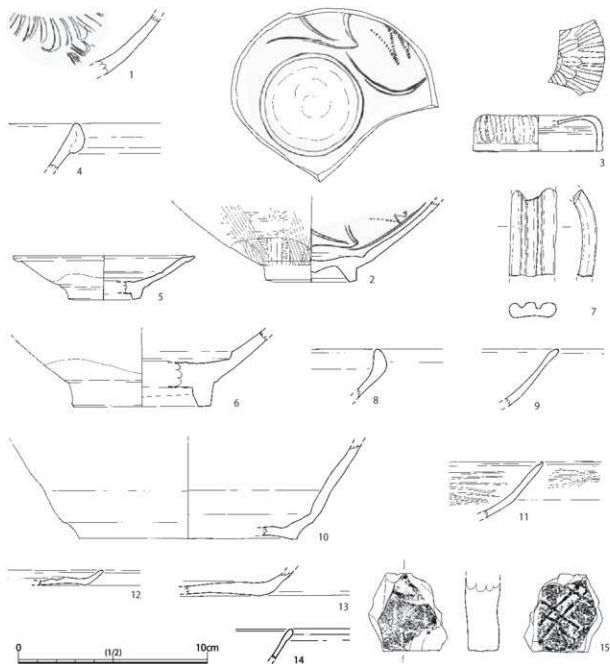
12世紀中頃～13世紀初頭の年代があたえられている。3は円筒形の、4は紡錘形の土鍾。

5～12はトレンチ7の遺物で、SD11の覆土を切る4層以浅の暗褐色砂層出土品、5層～11層のSD11の遺物、および大溝築造以前にあたる12層出土品のすべてを含む。5は龍泉窯系青磁碗。細い片彫りで施文する。6は青白磁の小碗あるいは坏。内面に花卉形の施文、外面に花卉状の稜線が見られる。型作りかもしれない。7は白磁碗V4類。高いケズリ高台で、見込みに沈線が1条めぐる。8は中国陶器の甕。短頸で肩が張る。大宰府編年の耳壺IV類あるいは壺IV類に似る。13世紀後半であろうか。9は土師皿。糸切り底であるが摩滅している。10・11は土鍾、12は泥面子(芥子面)である。モチーフは灯笼で、作りが粗い。他の例と比べて大型で、「いけどうろう」²¹⁾の可能性はある。

(谷 直子)

他地点の大溝との比較 トレンチ4南壁セクションより、石積み遺構SF00の除幅3.5m付近から大溝の掘り込みラインを確認した。箱崎キャンパス内の他地点における、石積みと大溝の掘り込みまでの距離を見てみると、HZK1802地点(第23図)では約4.7m、HZK1803地点(第14図)では約5.5mである。地点によってばらつきがあることがわかる。

また、石積みの基底面のレベルと大溝最深部の比高差を見てみると、本調査地点であるトレンチ4



第59図 HZK1805地点トレンチ6出土遺物

南壁セクションでは約0.9m、HZK1803地点では約1mで、2地点分のみデータではあるが、おおよそ共通性が見られる。

トレンチ4南壁では、石積み側の大溝の掘り込みラインはなめらかに立ち上がっていたが、トレンチ7北壁では階段状をなして立ち上がっていた。HZK1802地点やHZK1803地点でも、石積み側の大溝の掘り込みラインは階段状をなして立ち上がっている。ただし、砂地で非常に脆弱なため、確認された階段状の立ち上がりが機能的にどれほど意味を持つものなのかわからない。

以上、属性によって各地点で共通性をもつものと、そうでないものがあることがわかる。石積みから掘り込みまでの距離や、掘り込みラインの形状などに見られる地点差が、何を反映しているのかに

ついで現状では説明が難しい。担当御家人や工人の差異を反映している可能性も無くはないが、それを論じるだけのデータが不足している。今後の課題としたい。（福永将大）

5. 防塁築造以前

トレンチ6出土遺物 トレンチ6は、西側の片隅に大溝SD11がかかるものの、防塁以前に堆積した部分（12層）がほとんどを占める。

第59図1は龍泉窯系青磁碗I-2b類。12世紀中頃～13世紀初頭の例で、内面に片彫りで蓮華文を施す。2は同系青磁碗I-1b類。匏状施文具で花文と、櫛状工具によるジグザクの点描文を内面に配する。外面は細かい縦の櫛目文を施す。1の例と同じ年代に属する。3は青白磁の合子壺である。型押し菊花形で口縁部の軸をふき取る。博多では12世紀後半あたりから出現する（森本 2003）。

4～6は白磁である。4は玉縁口縁の碗で大宰府福年の白磁碗IV類。11世紀末～12世紀中頃の所産である。5は皿Ⅲ-1類の例で、口縁部はやや外反し、体部内面に沈線が1条めぐる。内面見込み部分の軸を環状に掻き取る12世紀中頃に属する。6は碗Ⅷ類。ケズリ高台で底部の器壁が厚い。内面見込み部分の軸を環状に掻き取り、段が付く。12世紀中頃～13世紀初頭のものである。

7は中国陶器の水注の把手である。2条の縦沈線を施す。8は瓦質土器の鉢。口縁部端を肥厚させ、端部外面は暗灰色を呈する。9は瓦器碗。10は中国陶器の壺底部である。内外面とも底部付近に回転ナデのあとが残る。11は瓦器碗。内面口縁部直下に段を設ける。全面をヨコミガキで整える。12は糸切り底の土師皿。13は土師器の坏。糸切り底だが、摩滅している。14も坏で、口縁部の例。わずかに肥厚させてある。15は平瓦。表面に布目、裏面に格子タタキが残る。端部はナデで面取りする。

（谷 直子）

自然流路ND16・ND18（第54図） トレンチ6北壁で自然流路ND16（12b層）、トレンチ4南壁で自然流路ND18（15層）を検出している。いずれもトレンチのセクションで確認しており、平面的に検出したものではない。ND18とした15層の下端ラインの形状から、流路が2条あるように見えるが、これらを分けることはできない。

トレンチ6のND16は、水性堆積層と考えられる12a層に覆われている。トレンチ4のND18は、石積み遺構SF00築造時の造成によって削平され、造成土の可能性を指摘した14層に覆われている。ND16・18ともに、防塁築造以前に位置づけられることは間違いない。なお、ND18から採取した炭化物を年代測定した結果、1147-1212 calADの年代値が得られている。

当初、ND16・18は、シルト・細砂層と粗砂層が互層に堆積する自然堆積層（トレンチ4南壁16層、トレンチ7北壁12c・12d層）を人為的に掘りこんで構築された溝であると考えていたが、HZK1803地点で自然流路ND03が検出されており（第三章）、覆土の類似性などから、最終的にND16・18も自然流路であると判断した。HZK1803地点の例と同様、宇美川から派生した網状流路の一部と考えられる。

堆積環境の変遷 HZK1805地点北側に隣接するHZK1802地点では、ジオスライサーによる堆積環境の調査がなされている（三阪・谷編 2019）。その調査結果によると、1030 calAD前後に宇美川・多々良川に起因すると考えられる大規模な出水があり、それによって堆積した土砂をベースに浜堤が発達し、非常に短期間で陸化したことが明らかになっている。少なくともAD1000年頃まで、本地点周辺は人間が生活できるような場所ではなかったようだ。

その後も、ND16・18などが確認されていること、また、トレンチ6北壁で水性堆積層（12a層）

が確認されていることを踏まえると、安定した陸地が形成されるのは防塁築造直前のことであった可能性がある。トレンチ4南壁12・14層に、SF00構築時の造成行為を読み取ったが、こうした当該地点における陸地の不安定性が原因となつて、造成行為が必要だったのかもしれない。(福永将大)

6. 小 結

HZK1805地点(理学部二号館前南地点第3次)は、HZK1601地点(同第1次)、HZK1802地点(同第2次)のすぐ南で実施した発掘調査である。

本地点では、石積み遺構 SF00と大溝 SD11で構成される元寇防塁を検出した。石積み遺構は、区間①・区間②あわせて26mを測る。そうして、この区間②が箱崎キャンパスで発見された石積みの南限である。大溝は自然堆積層を均し、さらに掘り込んで構築された。確認面での幅は、調査区北側で幅15.3m、東拡張区で幅14.2mを測る。SF00基底石設置面との比高差は約0.9mである。断面形は均一でなく、場所によって異なる。

石積みの外側では、築石を壊した際に生じた礫散布もみとめられた。石積みの埋没が進行するなかで行われたようであり、防塁の管理がなされなくなった14世紀中葉以降の年代があたえられる。加えて本地点では、火葬土坑や溝なども形成されている。遺物を含んでいない遺構もあるものの、総じて14世紀後半以降に属する。

防塁の築造前は、自然流路が流れていたことも判明した。11世紀に洪水があり、にわかに陸化したと説かれてきたが、本地点の自然堆積層包含遺物や採取した炭化物などからすると、洪水はもう少し長い期間をかけ、繰り返し発生した様子が察せられる。こうした環境と築造時に行われた整地との関係解明が今後の課題である。(福永将大・齋藤瑞穂)

- 1) これ以前に全く積み重ねがなかった、ということではもちろんない(例えば、田尻 2010)。
- 2) 比志島文書、宮崎石築地破損検見注文。「鎌倉遺文」古文書編第23巻、18167号文書。「注解元寇防塁編年史料」268頁。福田・森編(2018)所収の佐伯弘次論文「箱崎の元寇防塁と葦原」もあわせて参照。
- 3) 筑前中村文書、妙少寺貞経御教書。「鎌倉遺文」古文書編第41巻、31670号文書。「注解元寇防塁編年史料」462～463頁。
- 4) 大友文書、足利直義御教書案。「南北朝遺文」九州編第1巻、1213号文書。「注解元寇防塁編年史料」474～475頁。
- 5) 大友文書、足利尊氏御教書案。「南北朝遺文」九州編第2巻、1779号文書。「注解元寇防塁編年史料」485～486頁。
- 6) 葦原入来院文書、鎮西沙汰事書并足利直義御教書案。「南北朝遺文」九州編第2巻、2276号文書。「注解元寇防塁編年史料」488～490頁。
- 7) 豊前末久文書、舜極覆助勘状。「鎌倉遺文」古文書編第28巻、第21601号文書。「注解元寇防塁編年史料」336頁。
- 8) HZK1805地点に隣接する人工分子集合組織体研究棟は1997年の、工学研究科共同研究棟は1998年の竣工である。
- 9) 調査時に下山正一氏の御教示を得た。本調査地点から最も近くでは、能古島で採取しうる(唐木田ほか 1994)。
- 10) 老松堂日本行録、(60)。岩波文庫青4541。
- 11) 第3次調査は、苜崎宮の北100mの地点で実施されている。石組壁戸 SE09の石材が礫岩・砂岩であるならば、砂州先端の箱崎キャンパスだけでなく、箱崎中核部もまた同じ石材を使って防塁が築造されたことになる。なお、SE09の掘方から出土した遺物のうち、最も新しいのは15世紀代の例らしい(下村編 1991)。
- 12) 松下孝幸「三重県四日市市菟上遺跡出土の中世火葬骨」(徳積・角正・竹田編(2005)所収)。
- 13) 田中良之氏は、伴件する土師器や永楽通宝と、墓の分布の検討から、墓の年代観は15世紀代を中心として13世紀にまで遡るものというよりは、15世紀を中心にして以降へと連続するものと考えた方が妥当であるとしている(田中・土肥 1987)。
- 14) 米元史織・舟橋京子・早川和賀子・高松浩史・岩橋由季・谷澤聖里・中井 夢・田中良之「薬師の森遺跡第16・

- 32次調査出土人骨について」(上田編(2014)所収)。
- 15) 田中良之氏は、吉母浜遺跡の火葬墓を論じる中で、吉母浜遺跡で見られるような火葬墓のスタイルは、真宗教団を介した情報伝達系で西日本各地に広域伝播した可能性を述べている(村田編1985)。
 - 16) HZK1902地点のSF05区間②の場合を参照されたい(第二章)。
 - 17) 福田・森編(2018)巻頭図版3(1)「HZK1603地点西地区石積み遺構SF01(北東から)」をあわせて参照。
 - 18) HZK1802地点を担当した三阪は、裏込石の存在する可能性を残す。第IV章との併読を乞うこととしたい。
 - 19) トレンチ4南壁のセクション図は、HZK1805地点速報の中ですでに報告しているが(三阪・谷編(2019):159頁図4)、本書ではこれに石積み前面部分の堆積情報を加えている。以後、第54図上段をトレンチ4南壁のセクション図として扱うこととする。
 - 20) 本試料が垂炭の可能性があることと、垂炭は自然堆積層中にも存在することについては、パレオ・ラポの小林克也氏にご教示いただいた。
 - 21) お盆の頃、博多の商家の玄関先では、ひねり人形を箱庭のように飾り付けた。この箱庭が「いけどうろう」と呼ばれる。HZK1802地点にも同様の可能性のある遺物が出土している(第37図10)。

引用文献

- 相田二郎 1958 [1982]『蒙古襲来の研究』増補版 吉川弘文館
- 池田祐司・塚山 洋(編) 1997『古田遺跡—古田遺跡第1次・第2次調査報告—』福岡市教育委員会
- 伊藤裕偉(編) 2006『玉城丘陵の中世火葬坑群』三重県埋蔵文化財センター
- 上田龍児(編) 2014『乙念地区遺跡群10—薬師の森遺跡第15・16・22・32・34・35次調査—』大野城市教育委員会
- 大石雅章 2004『日本中世社会と寺院』清文堂出版
- 大庭康時 1992『博多遺跡群の埋葬遺構について』『法哈強』第1号 博多研究会 63—83頁
- 川添昭二 1971『覆動状について』『史淵』第105・106合輯 九州大学文学部 1—37頁
- 川添昭二 2006『元寇防塁が語るもの—福岡市史編さんに備えて—』『市史研究ふくおか』創刊号 福岡市博物館市史編さん室 5—39頁
- 川添昭二(編) 1971『注解元寇防塁編年史料—異国警因番役史料の研究—』福岡市教育委員会
- 唐木田芳文・富田幸臣・下山正一・千々和豊 1994『福岡地域の地質—地域地質調査報告(5万分の1地質図幅)—』地質調査所
- 黒田俊雄 1975『日本中世の国家と宗教』岩波書店
- 佐伯弘次 2009『南北朝時代の博多警因番役』『史淵』第146輯 九州大学大学院人文科学研究院 17—40頁
- 狭川真一 2009『近畿の中世石塔』『日本の中世墓』高志書院 23—40頁
- 高津 毅 2017『日本古代中世の葬送と社会』吉川弘文館
- 下村 智(編) 1991『箱崎遺跡2—箱崎遺跡群第3次調査の報告—』福岡市教育委員会
- 田尻義了 2010『九州大学キャンパスに眠る埋蔵文化財—元寇防塁を中心に—』『平成22年度貴重文物講習会資料』九州大学附属図書館
- 田中良之・土肥直美 1987『吉母浜中世墓の親族構造』『東アジアの考古と歴史—岡崎敬先生退官記念論集—』岡崎敬先生退官記念事業会 629—650頁
- 永井久美男(編) 1994『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』兵庫埋蔵文化財調査会
- 中間研志(編) 1991『奈良尾遺跡』福岡県教育委員会
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 降矢哲男 2018『中国朝鮮の陶磁器』淡交社
- 徳積裕昌・角正淳子・竹田憲治(編) 2005『菟上遺跡発掘調査報告—本文編—』三重県埋蔵文化財センター
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 宮崎亮一(編) 2000『大宰府条坊跡 XV—陶磁器分類編—』大宰府市教育委員会
- 村田多津江(編) 1985『吉母浜遺跡』下関市教育委員会

- 桃崎祐輔 2013「福岡市東区箱崎松原跡軍地蔵石仏と米一丸塚塔一宮崎宮周辺の御影石製石造物にみる西大寺律・一条氏との関係に注目して―」『御影石と中世の流通―石材識別と石造物の形態・分布―』高志書院 229～248頁
- 森本朝子 2003「博多遺跡群出土の合子について」『博多研究会誌』第11号 博多研究会 21～48頁
- 山本信夫・山村信崇 1997「九州・南西諸島」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館 237～310頁
- 吉田奈佳子 2011「中世の葬送と供養観の展開」『三重大学』第11号 三重大学人文学部考古学・日本史研究室 1～27頁

第9表 HZK1805地点出土遺物観察表

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
40-1	露敷布 SK08・09	滑石製 石鉢	高 4.8	径 2.9	厚 1.6					32.9g 取り上げNo.1
40-2	"	鉄製 聖来透瓦	夕テ 2.45	ヨコ 2.45	厚 0.12					4.0g 取り上げNo.3
40-3	"	瓦質土器 火鉢	(228)	(190)	12.5	緻密	良好	2.5Y3/1 黒褐色	外：ナデ 内：ヨコ/ハケ、ナデ、指オサエ	底部中央に焼成痕 露孔 取り上げNo.2
40-4	"	土師陶 坪	13.2	10.0	2.2	緻密	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ 内：ナデ	赤切り底、板状圧 痕、取り上げNo.4
40-5	"	土師陶 皿	7.6	6.0	1.0	緻密	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：ナデ	赤切り底、板状圧 痕、取り上げNo.13
40-6	"	土師陶 鉢	29.3		14.1	緻密、金層付含む	良好	外：2.5Y6/8 橙 内：7.5YR6/6 橙	外：ハケメ、指オサエ、ナデ 内：ハケメ	取り上げNo.14
40-7	"	土師陶 鉢	13.0	8.2	2.85	緻密	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ	赤切り底、板状圧 痕、取り上げNo.15
40-8	"	土師陶 坪	(13.1)	8.2	2.65	緻密	良好	10YR7/3 に近い黄橙～ 10YR4/1 緑灰	外：ナデ 内：ナデ	赤切り底、板状圧 痕、取り上げNo.15
40-9	"	土師陶 坪	(11.7)	8.4	2.5	緻密、φ1mm 大の砂 粒を少し含む	良好	7.5YR6/4 に近い橙	外：回転ナデ 内：ナデ	赤切り底、板状圧 痕
40-10	"	土師 瓦	長 16.1	短 1.85	厚 1.7	緻密	良好	7.5YR6/4 に近い橙～ 5YR5/8 明赤褐色		14.6g
40-11	"	鉄釘 底	長 4.4	短 1.2	厚 1.2					
40-12	"	鉄釘 尖	長 17.0	短 1.4	厚 1.8					
42-1	SK04	青磁 碗			[2.2]	緻密	良好	2.5Y8/2 灰白	外：擦輪、捺文 内：擦輪、捺文	二次焼成、朝鮮玉 朝倉青磁碗
42-2	"	瓦質土器 磁鉢			[4.4]	緻密、φ1mm 大の白色 粒子を少し含む	良好	N4/0 灰	外：ハケメ、ナデ 内：ヨコナデ、ハケメ	
42-3	"	土師 瓦	長 4.5	短 1.5	厚 1.45	緻密	良好	2.5YR6/8 橙 ～5YR1.7/2 黒	外：ナデ	7.6g
42-4	SK06	青磁 坪			[2.6]	緻密	良好	7.5YR7/2 灰白	外：擦輪 内：擦輪	大宰府編年 藤原朝末付白磁土師
44-1	SK03	土師 鉢	長 3.1	短 0.9	厚 0.8	緻密	良好	7.5YR4/3 褐	外：ナデ	2.1g
45-1	SK07	鉄製 聖来透瓦	夕テ 2.2	ヨコ 2.2	厚 0.1					1.99g 取り上げNo.272
45-2	"	鉄製 押形元瓦	夕テ [2.4]	ヨコ 2.5	厚 0.1					3.16g
45-3	"	瓦質土器 擦鉢			[3.4]	緻密、φ1mm 程度の砂粒 を少し含む	やや軟弱	10YR6/3 に近い黄橙	外：ナデ 内：ハケメ	取り上げNo.60
45-4	"	土師陶 鉢	28.8		14.6	緻密、φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	外：5YR6/6 橙 内：5YR6/8 橙	外：ハケメ、指オサエ、ナデ 内：ハケメ	取り上げNo.109
46-1	SK10	土師陶 鉢			[3.9]	やや細かい、φ1～3mm の砂粒を含む	良好	N2/0 黒	外：ヨコ/ハケ 内：ナデ、工具痕	取り上げNo.128
46-2	"	土師陶 坪			[2.8]	緻密、φ1mm 程度の砂粒 を少し含む	良好	7.5YR8/4 浅黄橙	外：ナデ 内：ナデ	取り上げNo.69
46-3	"	鉄釘 底	長 7.2	短 1.5	厚 1.4					取り上げNo.1
46-4	"	鉄釘 尖	長 18.0	短 1.5	厚 1.8					
49-1	SD13	青磁 碗			[2.9]	緻密	良好	2.5Y7/3 浅黄～ 2.5G16/1 オリーブ灰	外：擦輪 内：擦輪、捺文	大宰府編年 藤原朝末系 1 期 二次焼成
49-2	"	白磁 碗			[2.0]	緻密	良好	7.5Y7/2 灰白	外：クズリ、擦輪 内：ナデ、擦輪	

V HZK1805地点 (理学部二号館南南地点第3次調査)

番号	出土位置	種類 種類	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	構成	色調	文様・装束	備考
49-3	"	瓦質土器 鉢			[2.7]	やや緻密、φ1mm 大の 砂粒を多く含む	良好	75YR5/1 灰白	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
49-4	"	瓦質土器 鉢			[2.7]	緻密、φ1~5mm の砂 粒を少し含む	良好	5Y7/1 灰白	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
49-5	"	土師器 坪			[1.2]	緻密、φ1~2mm の砂 粒をわずかに含む	良好	10YR7/3 に近い黄橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	糸切り底
49-6	"	土師 器	高 3.0	厚 0.95	厚 0.9	緻密	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ	22g
49-7	SD15	白磁 器			[2.2]	緻密	良好	5YR2 灰白	外：擦輪 内：擦輪	大寺前編年 白磁類IV類
49-8	"	白磁 器 (10.0)			[4.0]	やや緻密、φ1mm 大の 茶褐色砂粒を含む	良好	2.5YR/3 淡黄	外：ケズリ、裏胎、擦輪 内：擦輪	
49-9	"	土師器 椀鉢			[3.3]	やや緻密、φ1~3mm の砂粒を含む	良好	10YR8/4 浅黄橙	外：ナデ 内：ナデ	
49-10	"	鉄釘	長 (3.8)	厚 1.0	厚 1.0					
53-1	SF00 TR3 1層	瓦質土 器子面	寸テ 1.6	ヨコ 2.45	厚 0.7	緻密	良好	10YR8/2 灰白	表：玄押し、裏：ナデ	単物
53-2	"	土人形	寸テ 2.95	ヨコ 2.9	厚 0.65	緻密	良好	表：10YR6/3 に近い黄橙 裏：10YR6/2 灰黄橙	表：玄押し、ナデ 裏：黒いサシ	裏法が希薄?
53-3	SF00 TR5 4層	土師器 坪			[1.3]	緻密、φ1mm 大の砂粒 ・赤色砂粒を含む	良好	5YR6/6 橙	外：ナデ、摩滅 内：摩滅	板状圧痕
53-4	"	陶器			[4.7]	やや粗い、φ1mm 大の 砂粒を多く含む	良好	外：7.5YR7/3 に近い橙 内：5Y6/3 オリーブ黄	外：ナデ、裏胎 内：擦輪	黄釉類 I-1類 磁磁
53-5	TR5 1層	白磁 器			[2.2]	緻密	良好	10YR/1 灰白	外：擦輪 内：擦輪	白磁破V-4も、しく は滑順
53-6	"	土師器 皿	(7.5)	4.6	2.3	緻密	良好	10YR7/3 に近い黄橙	外：回転ナデ 内：回転ナデ	糸切り底、口縁部 スス付着、滑明血 斑付
53-7	SF00 周辺一括	土師 器	長 5.5	厚 1.45	厚 1.3	緻密	良好	5YR5/8 明赤橙	外：ナデ、灰文	10.2g 「磁磁」(「赤」)
53-8	"	瓦質土 器面打	寸テ 2.1	ヨコ 2.05	厚 0.45	緻密	良好	10YR6/3 に近い黄橙	表：玄押し、裏：ナデ	魚と花
53-9	SF00 (SK17)	青磁 器		(5.2)	[1.3]	緻密	やや 軟質	輪：5YR2 灰オリーブ 露加部：7.5YR6/4 に近い橙	外：ケズリ、裏胎 内：擦輪、メアト	
53-10	"	白磁 器			4.5	[1.6]	緻密	N7/0 灰白	外：ケズリ、擦輪 内：擦輪	瓦玉加工 二次被焼
53-11	(SK17周辺)	土師 器	長 5.0	厚 1.6	厚 1.45	緻密	良好	7.5YR6/4 に近い橙～ 2.5YR6/6 橙	外：ナデ	9.2g
53-12	"	瓦質土 器子面	寸テ 2.9	ヨコ 2.1	厚 0.3	緻密	良好	10YR8/3 浅黄橙	表：玄押し、裏：ナデ	図類
55-1	SD11 TR4 5層	土師器 器			[3.4]	緻密、黒色砂粒を含む	良好	5YR4/3 灰オリーブ	外：擦輪 内：擦輪、灰文	取り上げNo.17
55-2	"	土師器 皿			1.1	やや緻密、φ1~3mm の砂粒を多く含む、赤 色砂粒を含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	取り上げNo.7
55-3	TR4 7層	土師器 高台付坪			[1.6]	緻密、φ1mm 程度の白色 砂粒を含む	良好	7.5YR6/4 に近い橙	外：ナデ 内：ナデ	取り上げNo.12
55-4	TR4 10a 層	土師器 坪			[1.3]	やや緻密、φ1mm 大の 砂粒、赤色砂粒を含む	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：ナデ	糸切り底 取り上げNo.2
55-5	TR4 10b 層	土師器 坪	(8.4)		[0.9]	やや緻密、φ1~3mm の砂粒を含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：ナデ 内：摩滅	板状圧痕 取り上げNo.14
55-6	TR4 12層	青磁 器			[4.2]	緻密	良好	10YR6/1 灰	外：擦輪、灰文 内：擦輪、灰文	大寺前編年 磁磁系系類I類 取り上げNo.1
55-7	TR4 14層	白磁 器			[4.5]	緻密	良好	5YR7/2 灰白	外：ケズリ、裏胎、擦輪 内：擦輪	白磁類IV類 取り上げNo.19
55-8	"	白磁 器			[2.6]	緻密	良好	5YR7/2 灰白	外：擦輪 内：擦輪、灰文	取り上げNo.18
55-9	TR4	染付 器			[2.4]	緻密	良好	N8/0 白	外：擦輪 内：擦輪、植物文	
55-10	"	青磁 器			[2.6]	緻密	良好	2.5G/7/1 明オリーブ灰	外：擦輪 内：擦輪、花文	磁磁系系類 I-2類
55-11	"	青磁 器			[2.0]	緻密	良好	7.5G/6/7 緑灰	外：擦輪 内：擦輪、草花文	磁磁系系類 I 類
55-12	"	青磁 器			[3.0]	緻密	良好	5G/7/1 明オリーブ灰	外：擦輪、蓮弁文 内：擦輪	磁磁系系類 II 類
55-13	"	青磁 器			[3.3]	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外：擦輪、花文、点線文 内：擦輪、灰文	同定系系類 I-11類

番号	出土位置	種類 器種	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	焼成	色調	文様・調整	備考
55-14	■	青磁 鉢			3.9	緻密	良好	25G7/1 明オリーブ灰	外：條輪、花文、点線文 内：條輪、條文	白磁系Ⅰ-1b類
55-15	■	白磁 皿(8.6)	4.8	1.3		緻密	良好	5Y8/2 灰白	外：ケズリ、條輪 内：條輪、條文	白磁系Ⅰ-1b類
55-16	■	陶磁 鉢(10.4)			3.1	やや緻密、φ1mm 大の 黒色粒子・砂粒を含む	良好	5G16/1 オリーブ灰	外：ケズリ、條輪 内：條輪、條文	朝鮮王朝陶磁
55-17	■	瓦葺土器 土師 鉢			4.0	緻密、φ1~3mm の砂 粒をわずかに含む	良好	N4/0 灰	外：ナデ、割変文 内：ナデ、工具痕	
55-18	■	土師 鉢			1.2	緻密、φ1~2mm の砂 粒を含む	良好	5YR7/6 橙	外：ナデ、摩滅 内：面転ナデ	系切り底
55-19	■	土師 鉢			2.8	緻密、φ1~2mm の砂粒 ・赤褐色の硝子を含む	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：ナデ	系切り底
55-20	■	土師 鉢	長 3.7	短 0.9	厚 0.85	緻密	良好	7.5YR6/4 に近い橙～ 7.5YR4/1 黄灰	外：ナデ	3.3g
56-1	TR7 5層	陶磁 鉢	(13.2)		4.5	緻密、φ1mm 大の砂粒 ・黒色粒子を含む	良好	5Y5/2 灰褐色	外：ナデ 内：ナデ	
56-2	■	瓦葺土器 土師 鉢			3.7	緻密	良好	外：2.5YR/2 灰白 内：2.5YR/2 灰白～N5/0 灰	外：ハケメ、ナデ 内：ハケメ	
56-3	TR7 7層	青磁 鉢			3.5	緻密	良好	75G7/1 明緑	外：條輪、朝鮮弁文 内：條輪、草花文	大宰府出土 豊原系Ⅰ類(心組)
56-4	■	青磁 鉢	(5.8)		1.3	緻密	良好	25G7/1 明オリーブ灰	外：ケズリ、條輪 内：條輪	豊原系Ⅰ類
56-5	■	青磁 小皿(8.0)	4.1	3.6		緻密	良好	5Y6/2 灰オリーブ	外：先押し草花文、條輪 内：條輪	豊原系Ⅰ類Ⅳ類
56-6	■	青磁 皿			2.2	緻密	良好	5Y7/2 灰白	外：ケズリ、條輪 内：條輪	豊原系Ⅰ類
56-7	■	白磁 鉢			3.0	緻密、黒色粒子をわず かに含む	良好	7.5YR/1 灰白	外：條輪 内：條輪	白磁系Ⅰ-4もしく はⅠ類
56-8	■	白磁 皿			2.0	緻密	良好	7.5Y7/1 灰白	外：條輪 内：條輪、條文	
56-9	■	白磁 鉢			4.6	緻密	良好	5G18/1 灰白	外：條輪、点 内：條輪	白磁系Ⅰ類
56-10	■	陶磁 鉢			4.0	緻密、φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	7.5Y5/1 灰色	外：ナデ 内：ナデ	
56-11	■	瓦葺土器 鉢			2.4	緻密、φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	2.5Y7/2 灰赤	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
56-12	■	瓦葺 鉢(12.2)	7	1.9		緻密、φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	外：2.5YR8/2 灰白 内：2.5YR6/1 黄灰	外：ナデ 内：ミガキ、ナデ	
56-13	■	土師 鉢			4.3	緻密、φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	外：2.5YR/2 灰白 内：2.5YR6/4 に近い橙	外：ハケメ、ナデ 内：ヨコハケ	
56-14	■	土師 鉢			3.6	緻密、φ1mm 大の砂粒 を含む	良好	外：2.5YR/1 黄褐 内：2.5YR6/6 橙	外：ナデ 内：ヨコハケ	スス付着
56-15	■	土師 鉢			3.6	緻密	良好	10YR7/2 に近い黄橙	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
56-16	■	土師 鉢			3.9	やや緻密、φ1mm 大の 砂粒を多く含む	良好	7.5YR6/3 に近い橙～ N3/0 黄灰	外：ハケメ、ナデ 内：ハケメ、ナデ	スス付着
56-17	■	土師 鉢			2.8	やや粗い、φ5mm 大の 砂粒を多く含む	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：局部型押し條文、ナデ 内：ナデ	
56-18	■	土師 鉢(9.2)	7.2	1.3		緻密、φ1~2mm の砂 粒を少し含む	良好	10YR7/4 に近い黄橙	外：ナデ 内：ナデ	系切り底
56-19	■	土師 鉢(8.6)	7.6	1.1		粗い、φ1~5mm の砂 粒を多く含む	良好	7.5YR8/4 浅黄橙	外：ナデ 内：ナデ	系切り底
56-20	■	土師 鉢			2.3	緻密、φ2mm 大の砂粒 をわずかに含む	良好	7.5YR6/4 に近い橙	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
56-21	■	土師 鉢			1.7	緻密 精良	良好	7.5YR7/4 に近い橙	外：面転ナデ 内：ナデ	系切り底
57-1	TR7 10層	青磁 鉢	(5.0)	(1.0)		緻密、黒色粒子を少し 含む	良好	10Y6/1 灰	外：ケズリ、條輪 内：條輪、條文	大宰府出土 豊原系Ⅰ類(心組)
57-2	■	白磁 鉢			3.8	緻密、茶褐色の硝子を含 む	良好	10Y7/1 灰白	外：ケズリ、條輪 内：條輪	白磁系Ⅰ-4類
57-3	■	白磁 鉢			1.8	緻密	良好	7.5Y7/1 灰白	外：條輪 内：條輪、草花文	白磁系Ⅰ類
57-4	■	中国陶磁 鉢	(12.6)	(5.8)		緻密、φ1mm 大の砂粒 を少し含む、φ1~5mm の 黒色粒子を含む	良好	外：10YR6/3 に近い黄橙 内：10YR6/2 灰黄褐	外：ナデ、露胎 内：ナデ、露胎	
57-5	■	陶磁 鉢			4.2	緻密、φ1~3mm の白 色・黒色粒子、φ1mm 大の硝子を含む	良好	外：2.5YR4/3~5Y5/3 灰オリーブ 内：2.5YR4/3 黄	外：ナデ、自然熱 内：ナデ	露胎焼?
57-6	■	土師 鉢	(10.6)	8.4	1.8	緻密 精良	良好	7.5YR8/4 浅黄橙	外：ナデ 内：ナデ	系切り底

V HZK1805地点 (理学部二号館前南地点第3次調査)

番号	出土位置	種類 種類	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	胎土	構成	色調	文様・装束	備考
57-7	"	土師器 坪		[2.4]		褐色 精良	良好	10YR7/3 に近い黄褐色	外：ナデ 内：ナデ	
57-8	"	土師 長 3.8 短 1.3 厚 1.4		[2.9]		褐色 精良	良好	7.5YR5/4 に近い黄褐色	外：ナデ	6.3g
57-9	SD11 TR7→括	青磁 碗		[2.7]		褐色 精良	良好	2.5G7/1 明オリブ灰	外：施釉 内：施釉、唐文	龍泉窯系
57-10	"	青磁 碗		[2.7]		褐色 精良	良好	10Y6/2 オリブ灰	外：施釉、唐文 内：施釉、唐文	龍泉窯系
57-11	"	青磁 碗 (10.2)	6	[2.7]		褐色 精良	良好	7.5G7/1 明緑灰	外：施釉、唐文 内：施釉、唐文	大寺約編年 龍泉窯系Ⅱ期Ⅱ類
57-12	"	土師 皿			1.2	褐色、φ1mm 大の砂粒を 含む	良好	7.5YR7/4 に近い黄褐色	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
57-13	"	土師 長 2.55 短 1.0 厚 1.1				褐色 精良	良好	7.5YR4/1 緑灰	外：ナデ	2.0g
58-1	東北地区 SD11 楕円蓋	鉄釘	長 [4.6]	短 1.7 厚 1.2						
58-2	東北地区 SD11 蓋口	青磁 碗		[3.7]		褐色 精良	良好	7.5YR6/1 灰	外：施釉 内：施釉、花文	龍泉窯系Ⅱ期
58-3	"	土師 長 7.4 短 2.1 厚 1.9				褐色 精良	良好	5YR6/8 緑～7.5YR5/2 灰緑	外：ナデ	20.4g
58-4	"	土師 長 5.3 短 1.4 厚 1.4				褐色 精良	良好	7.5YR6/4 に近い黄褐色	外：ナデ	10.4g
58-5	TR7→括 SD11 2 浅 以深を含む	青磁 碗 (14.4)	[4.8]			褐色 精良	良好	5Y5/2 灰オリブ	外：ケズリ、裏釉、施釉 内：施釉、唐文	龍泉窯系
58-6	"	青白磁 坪		[2.7]		褐色 精良	良好	10G8/1 明緑灰	外：施釉、蓮井様の型押し成形 内：施釉、花卉	
58-7	"	白磁 碗 (12.6)	6.0	[3.7]		褐色 精良	良好	5G7/1 灰白	外：ケズリ、裏釉、施釉 内：施釉、唐文	大寺約編年 白磁碗 V-4 類
58-8	"	陶磁 蓋 (15.5)		[3.8]		褐色 精良	良好	10YR8/2 灰白	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
58-9	"	土師 皿 (9.0)	7.0	1.3		褐色、φ1mm 程度の砂粒 ・赤色粒子を少し含む	良好	7.5YR7/4 に近い黄褐色	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	糸切り皿
58-10	"	土師 長 3.8 短 1.6 厚 1.52				褐色 精良	良好	10YR6/4 に近い黄褐色～ 5YR6/6 緑	外：ナデ	8.8g
58-11	"	土師 長 6.2 短 2.05 厚 2				褐色 精良	良好	10YR4/1 緑灰～7.5YR5/4 に 近い黄褐色	外：ナデ	20.0g
58-12	"	灰濁子 少テ 3.0 6.1 3.45	ヨコ 厚 1.6			褐色 精良	良好	10YR8/3 浅黄褐色	表：型押し、指オウエ 裏：指オウエ	灯籠
59-1	東北地区 トレンチ6	青磁 碗		[3.3]		褐色 精良	良好	5G6/1 オリブ灰	外：施釉 内：施釉、唐文	龍泉窯系Ⅱ-2 類
59-2	"	青磁 碗 (13.4)	4.8	[4.2]		褐色 精良	良好	5Y6/3 オリブ黄	外：ケズリ、ハケメ、裏釉、施 釉 内：施釉、花文	同安城系Ⅱ-1b 類
59-3	"	青白磁 合子 [7.0]		1.9		褐色 精良	良好	5G7/1 明オリブ灰	外：施釉、型押し唐文 内：施釉	
59-4	"	白磁 碗		[2.4]		褐色 精良	良好	2.5Y7/3 浅黄	外：施釉 内：施釉	白磁碗Ⅳ類
59-5	"	白磁 皿 (9.6)		2.3		褐色 精良	良好	5Y6/2 灰オリブ	外：ケズリ、裏釉、施釉 内：施釉、掻き取り	白磁碗Ⅱ-1 類
59-6	"	白磁 皿 (13.4)	7.4	[3.9]		褐色 精良	良好	10Y8/1 灰白	外：ケズリ、裏釉、施釉 内：施釉、掻き取り	白磁碗Ⅲ類
59-7	"	中国陶器 香		[4.6]		褐色、φ1～2mm の砂 粒を少し含む	良好	5YR6/3 に近い黄褐色	外：縦溝2条、施釉	把手
59-8	"	瓦質土師 鉢		[2.7]		褐色、φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	外：2.5Y5/1 黄灰 内：2.5Y7/2 灰黄	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	
59-9	"	瓦質 碗		[3.0]		褐色、φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	外：NS/O 灰 内：5Y7/1 灰白	外：ナデ 内：ナデ	
59-10	"	中国陶器 香		11.6	[5.0]	褐色、φ1mm 大の黒褐色 色粒子を含む	良好	釉：5Y4/3 明オリブ 露胎部：10YR7/2 に近い黄褐色	外：ナデ、裏釉、施釉 内：面転ナデ	
59-11	"	瓦質 皿		[3.0]		褐色 精良	良好	N6/O 灰	外：ナデ、三方弁 内：ナデ、三方弁	
59-12	"	土師 皿		0.8		褐色 精良	良好	7.5YR8/4 浅黄褐色	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	糸切り皿
59-13	"	土師 坪		[1.3]		褐色、φ1mm 大の砂粒 を少し含む	良好	7.5YR8/4 浅黄褐色	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	糸切り皿
59-14	"	土師 坪		[1.6]		褐色 精良	良好	10YR8/4 浅黄褐色	外：ナデ、摩滅 内：ナデ、摩滅	
59-15	"	平瓦 長 [4.2] 短 [3.9]		厚 1.7		褐色、φ1～3mm の砂 粒を含む	良好	10YR7/3 に近い黄褐色	表：布目 裏：格子タタキ	

() は変形径、[] は径寸を表す

VI 分析と考察

箱崎遺跡 HZK1803・1805地点出土炭化材の樹種同定

小林 克也

1. はじめに

福岡県福岡市の箱崎遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている。

2. 試料と方法

試料は、HZK1803地点の石積み遺構 SF01周辺（第14図）より採取された炭化材3点と、HZK1805地点の大溝 SD11トレンチ4断面（第54図）より採取された炭化材6点、火葬土坑 SK07（第45図）より採取された炭化材3点、火葬土坑 SK10（第46図）より採取された炭化材2点の、計14点である。発掘調査所見では、いずれも中世の試料と考えられている。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柁目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE 社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

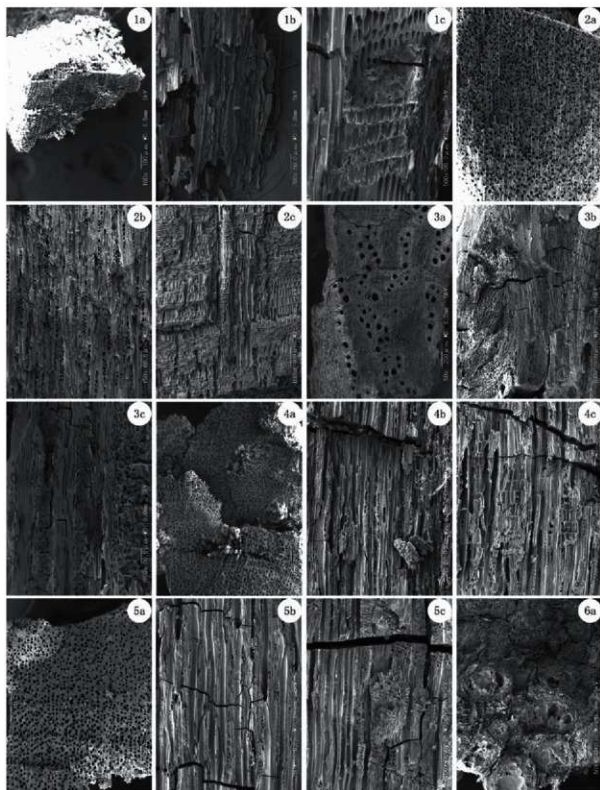
同定の結果、針葉樹ではマツ属複雑管束亜属のみ1分類群、広葉樹ではクスノキ科とコナラ属アカガシ亜属（以下、アカガシ亜属）、サカキの3分類群、単子葉のタケ亜科1分類群の、計5分類群がみられた。サカキが8点で最も多く、アカガシ亜属が3点、マツ属複雑管束亜属とクスノキ科、タケ亜科が各1点であった。同定結果を第10表に、一覧を第11表に示す。

第10表 箱崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果

樹種	HZK1803			HZK1805							合計					
	遺構	石積み SF01周辺		火葬 SK07			火葬 SK10		大溝 SD11:TR4							
	層位	B-2	18-2	20-2	上	上	中	上	中	3		4	7	10a	12	15
マツ属複雑管束亜属		1														1
クスノキ科				1												1
コナラ属アカガシ亜属					1					1	1					3
サカキ		1	1					1	1			1	1	1	1	8
タケ亜科						1										1
合計		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	14

以下に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxyton* マツ科（第60図1a-1c：試料No.3） 仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞



第60図 箱崎遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. マツ属複雑管束型属 (No.3)、2a-2c. クスノキ科 (No.16)、3a-3c. コナラ属アカガシ型属 (No.11)、
4a-4c. サカキ (No.7)、5a-5c. サカキ (No.12)、6a. タケ型属 (No.18)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で、切削等の加工は容易である。

クスノキ科 Lauraceae (第60図2a-2c: 試料 No.16) 小型の道管が単独ないし2~3個複合し、やや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は周閉状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、幅1~2列となる。木部繊維内には、油細胞が認められる。

クスノキ科にはニッケイ属やタブノキ属、クロモジ属などがあり、暖帯を中心に分布する、主に常緑性の高木または低木である。

コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 (第60図3a-3c: 試料 No.11)

厚壁で丸い大型の道管が、放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシやツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬かつ強韧で、耐水性があり、切削加工は困難である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. モツコク科 (第60図4a-4c: 試料 No.7, 5a-5c: 試料 No.12)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は20~40段程度の階段穿孔となる。放射組織は上下端1~4列が直立する異性で、幅1~3列となる。

サカキは日本海側で新潟県、太平洋側で関東以西の本州、四国、九州などの温帯から亜熱帯に分布する常緑高木である。材は強韧、堅硬で、切削加工は困難である。

タケ亜科 Subfam. *Bambusoideae* イネ科 (第60図6a: 試料 No.18) 向軸側の原生木部、その左右の2個の後生木部、背軸側の節部の三つで構成される維管束が散在する単子葉植物の程である。維管束の配列は不整中心柱となる。維管束鞘の細胞は厚壁であり、向・背軸部に関わりなく厚くなる。

タケ亜科はいわゆるタケ・ササの仲間、日本には12属がある。

4. 考察

箱崎遺跡で採取された炭化材は、マツ属複維管束亜属とクスノキ科、アカガシ亜属、サカキ、タケ亜科の5種類であった。いずれも破片状の微細な炭化材である。またクスノキ科、アカガシ亜属、サカキは常緑広葉樹林の主要な構成樹種であり(伊東ほか 2011)、遺跡周辺に常緑広葉樹林が広がっている可能性が考えられる。

HZK1805地点の火葬土坑 SK07では、クスノキ科とアカガシ亜属、タケ亜科が、HZK1805地点の火葬土坑 SK10では、サカキが得られた。クスノキ科とアカガシ亜属は薪炭材として普通に利用される樹種であり(伊東ほか 2011)、燃料材として利用されていた可能性が考えられる。またタケ亜科は韌性や耐朽性が高い材であり(内村 2005)、タケ亜科製の製品であった可能性もある。

HZK1805地点の大溝 SD11 トレンチ4の3層と4層の炭化材はアカガシ亜属、7層以下の4点の炭化材はいずれもサカキであった。4層と7層を境に出土する樹種の傾向が異なっている可能性がある。

VI 分析と考察

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂 2011 『日本有用樹木誌』 海青社
 内村悦三 2005 『タケ・ササ園産一種類・特徴・用途―』 創林社

第11表 箱崎遺跡出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	地点名	出土位置	層位	遺物 No.	種類	樹種	年代測定番号	年代測定による時期
3	HZK1803	SF01高辺	18-2層	炭化物3	炭化材	マツ属樺縄巻常葉亜属	PLD-38837	平安末～鎌倉
6	HZK1803	SF01高辺	8-2層	炭化物6	炭化材	サカキ	PLD-38840	鎌倉
7	HZK1803	SF01高辺	20-2層	炭化物7	炭化材	サカキ	PLD-38841	平安中期～後期
8	HZK1805	SD11-TR4	12層	炭化物1	炭化材	サカキ	PLD-38842	平安後期～鎌倉
9	HZK1805	SD11-TR4	10a層	炭化物2	炭化材	サカキ	PLD-38843	平安中期～鎌倉
10	HZK1805	SD11-TR4	3層	炭化物3	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	PLD-38844	江戸前期～昭和
11	HZK1805	SD11-TR4	4層	炭化物4	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	PLD-38845	室町～江戸前期
12	HZK1805	SD11-TR4	7層	炭化物5	炭化材	サカキ	PLD-38846	鎌倉～室町
15	HZK1805	SD11-TR4	15層	炭化物8	炭化材	サカキ	PLD-38849	平安中期～鎌倉
16	HZK1805	SK07	—	No.5/6	炭化材	クスノキ科	PLD-38850	鎌倉～室町
17	HZK1805	SK07	—	No.17/3	炭化材	コナラ属アカガシ亜属	PLD-38851	鎌倉～室町
18	HZK1805	SK07	—	No.32/4	炭化材	タケ亜科	PLD-38852	鎌倉～室町
19	HZK1805	SK10	—	No.9/2	炭化材	サカキ	PLD-38853	平安後期～鎌倉
20	HZK1805	SK10	—	No.20/9	炭化材	サカキ	PLD-38854	鎌倉

HZK1803・1805地点の年代測定結果

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ
伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹
Zaur Lomtadize・小林克也

1. はじめに

福岡県福岡市の箱崎遺跡から出土した試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、一部の試料については樹種同定も行われている。

2. 試料と方法

試料は、HZK1803地点の石積み遺構 SF01周辺（第14図）の各層から採取された7点、HZK1805地点の大溝 SD11トレンチ4（第54図）断面の各層から採取された8点、火葬土坑 SK07（第45図）から採取された3点、火葬土坑 SK10（第46図）から採取された2点の計20点で、いずれも炭化材である。

HZK1803地点の試料は、15層の試料 No.1（PLD-38835）、16-2層の試料 No.2（PLD-38836）、18-2層の試料 No.3（PLD-38837）、19層の試料 No.4（PLD-38838）、17層の試料 No.5（PLD-38839）、8-2層の試料 No.6（PLD-38840）、20-2層の試料 No.7（PLD-38841）である。樹種同定の結果、試料 No.3がマツ属複雑管束亜属、試料 No.6と No.7がサカキであった。

HZK1805大溝 SD11の試料は、12層の試料 No.8（PLD-38842）、10a層の試料 No.9（PLD-38843）、3層の試料 No.10（PLD-38844）、4層の試料 No.11（PLD-38845）、7層の試料 No.12（PLD-38846）、9層の試料 No.13（PLD-38847）、13層の試料 No.14（PLD-38848）、15層の試料 No.15（PLD-38849）である。樹種同定の結果、試料 No.10と11がコナラ属アカガシ亜属、試料 No.8、9、12、15がサカキであった。

HZK1805地点火葬土坑 SK07の試料は、試料 No.16（PLD-38850）、試料 No.17（PLD-38851）、試料 No.18（PLD-38852）である。樹種同定の結果、試料 No.16がクスノキ科、試料 No.17がコナラ属アカガシ亜属、試料 No.18がタケ亜科であった。

HZK1805地点火葬土坑 SK10の試料は、試料 No.19（PLD-38853）と、試料 No.20（PLD-38854）である。樹種同定の結果、いずれもサカキであった。

なお、試料 No.18のタケ亜科を除いて、いずれも最終形成年輪が残っていないかった。測定試料の情報、調整データは第12表のとおりである。

試料は調整後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクト AMS: NEC 製1.5SDH）で測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3. 結果

第13表に同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年代に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第61図にマルチプロット図を、第62～64図に暦年代較正結果をそれぞれ示す。暦年代較正

に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13、暦年較正結果が1950年以降にのびる試料については Post-bomb atmospheric NH2) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して、出土位置ごとに層位順に結果を整理する。また、4700年前頃の測定結果を示した試料 No.14 を除いたマルチプロット図を、第61図に示す。

(1) HZK1803地点石積み遺構 SF01周辺

8-2層の試料 No.6 (PLD-38840) は1207-1266 calAD (95.4%) で、13世紀初頭～後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代に相当する。

15層の試料 No.1 (PLD-38835) は1184-1265 calAD (95.4%) で、12世紀後半～13世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代末期～鎌倉時代に相当する。

16-2層の試料 No.2 (PLD-38836) は974-1023 calAD (95.4%) で、10世紀後半～11世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期に相当する。

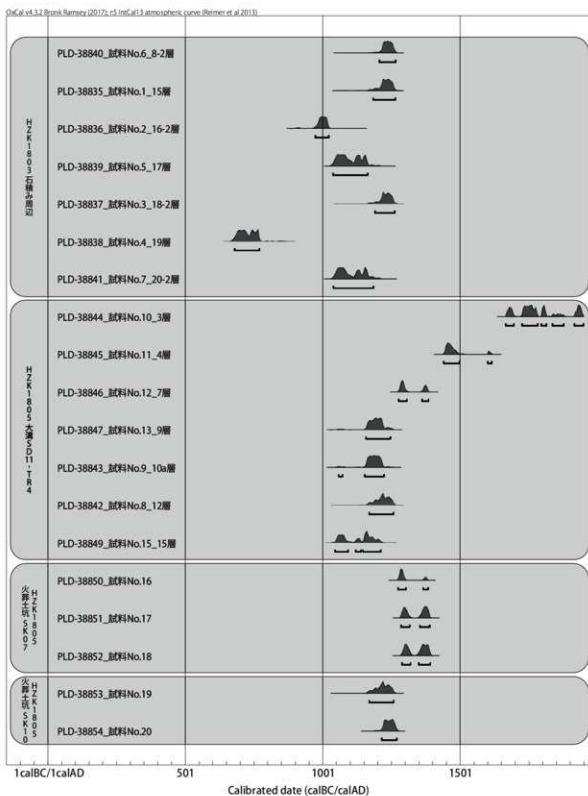
17層の試料 No.5 (PLD-38839) は1038-1164 calAD (95.4%) で、11世紀前半～12世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。

18-2層の試料 No.3 (PLD-38837) は1191-1263 calAD (95.4%) で、12世紀末～13世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代末期～鎌倉時代に相当する。

19層の試料 No.4 (PLD-38838) は680-770 calAD (95.4%) で、7世紀後半～8世紀後半の暦年代を示した。これは、飛鳥時代～奈良時代に相当する。

20層の試料 No.7 (PLD-38841) は1039-1185 calAD (95.4%) で、11世紀前半～12世紀後半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～後期に相当する。

測定試料はいずれも最終形成年輪が残っていないか。木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の測定結果はいずれも古木効果の影響を受けていると考えら



第61図 マルチプロット図（試料 No.14を除く）

れ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。

マルチプロット図をみると、8-2層（試料 No.6）と15層（試料 No.1）の2点の暦年代は、層序に対して整合的であると考えられるが、16-2層以下の試料は、層序に対して暦年代が前後しており、再堆積の試料が混ざっていると考えられる。

(2) HZK1805地点大溝 SD11（トレンチ4）

4層の試料 No.11（PLD-38845）は1441-1498 calAD（88.8%）および1601-1615 calAD（6.6%）で、15世紀中頃～末および17世紀初頭～前半の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

7層の試料 No.12（PLD-38846）は1277-1307 calAD（62.8%）および1362-1386 calAD（32.6%）で、13世紀後半～14世紀初頭および14世紀後半の暦年代を示した。これは、鎌倉時代～室町時代に相当する。

9層の試料 No.13（PLD-38847）は1158-1247 calAD（95.4%）で、12世紀中頃～13世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

12層の試料 No.8（PLD-38842）は1170-1258 calAD（95.4%）で、12世紀後半～13世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。

3層の試料 No.10（PLD-38844）は1668-1695 calAD（15.6%）、1726-1781 calAD（42.4%）、1797-1814 calAD（10.7%）、1836-1844 calAD（1.5%）、1851-1868 calAD（3.3%）、1873-1876 calAD（0.6%）、1918-1954 calAD（21.4%）で、17世紀後半～20世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

10a層の試料 No.9（PLD-38843）は1058-1073 calAD（1.3%）および1154-1224 calAD（94.1%）で、11世紀中頃～後半および12世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

13層の試料 No.14（PLD-38848）は、 ^{14}C 年代が 39634 ± 209 ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が41822-40930 calBC（95.4%）で、工藤（2012）を参照すると、最終氷期亜間氷期（MIS3）に相当する暦年代を示した。

15層の試料 No.15（PLD-38849）は1046-1093 calAD（37.2%）、1120-1140 calAD（9.2%）、1147-1212 calAD（49.1%）で、11世紀中頃～13世紀前半の暦年代を示した。これは、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。

いずれの試料も最終形成年輪は残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。マルチプロット図をみると、いずれの試料も層序に対して整合的な暦年代を示している。13層の試料 No.14は、ほかの試料に対して極めて古い測定結果を示しており、再堆積と考えられる。

(3) HZK1805地点火葬土坑 SK07

試料 No.16（PLD-38850）は1274-1303 calAD（78.3%）および1366-1384 calAD（17.1%）で、13世紀後半～14世紀初頭および14世紀後半の暦年代を示した。試料 No.17（PLD-38851）は1285-1317 calAD（41.1%）および1354-1390 calAD（54.3%）で、13世紀後半～14世紀前半および14世紀中頃～末の暦年代を示した。試料 No.18（PLD-38852）は1289-1320 calAD（38.1%）および1350-1392 calAD（57.3%）で、13世紀後半～14世紀前半および14世紀中頃～末の暦年代を示した。いずれも、鎌倉時代～室町時代に相当する。また、いずれの試料も最終形成年輪が残っておらず、測定結果は古木効果の影響を受

けていると考えられる。

(4) HZK1805地点火葬土坑 SK10

試料 No.19 (PLD-38853) は1170-1258 calAD (95.4%) で、12世紀後半～13世紀中頃の暦年代を示した。これは、平安時代後期～鎌倉時代に相当する。また、試料 No.20 (PLD-38854) は1216-1270 calAD (95.4%) で、13世紀前半～後半の暦年代を示した。これは鎌倉時代に相当する。いずれの試料も最終形成年輪が残っており、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられる。

引用・参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- Hua, Q, Barbetti, M, Rakowski, A.Z. 2013 Atmospheric Radiocarbon for the Period 1950-2010. *Radiocarbon*, 55 (4), 1-14.
- 工藤雄一郎 2012 『旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—』 神泉社
- 中村俊夫 2000 『放射形炭素年代測定法の基礎』 『日本先史時代の¹⁴C年代』 日本第四紀学会 3～20頁
- Reimer, P.J, Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W, Blackwell, P.G, Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafidason, H., Hajdas, L., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. 2013 IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), 1869-1887.

第12表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-38835 試料 No.1	HZK1803 石積み SF01周辺 15層 炭化物1	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38836 試料 No.2	HZK1803 石積み SF01周辺 16-2層 炭化物2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38837 試料 No.3	HZK1803 石積み SF01周辺 18-2層 炭化物3	種類：炭化材（マツ属樹種管末産物） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38838 試料 No.4	HZK1803 石積み SF01周辺 19層 炭化物4	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38839 試料 No.5	HZK1803 石積み SF01周辺 17層 炭化物5	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38840 試料 No.6	HZK1803 石積み SF01周辺 8-2層 炭化物6	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38841 試料 No.7	HZK1803 石積み SF01周辺 20-2層 炭化物7	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38842 試料 No.8	HZK1805 大溝 SD11-TR4 12層 炭化物1	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)

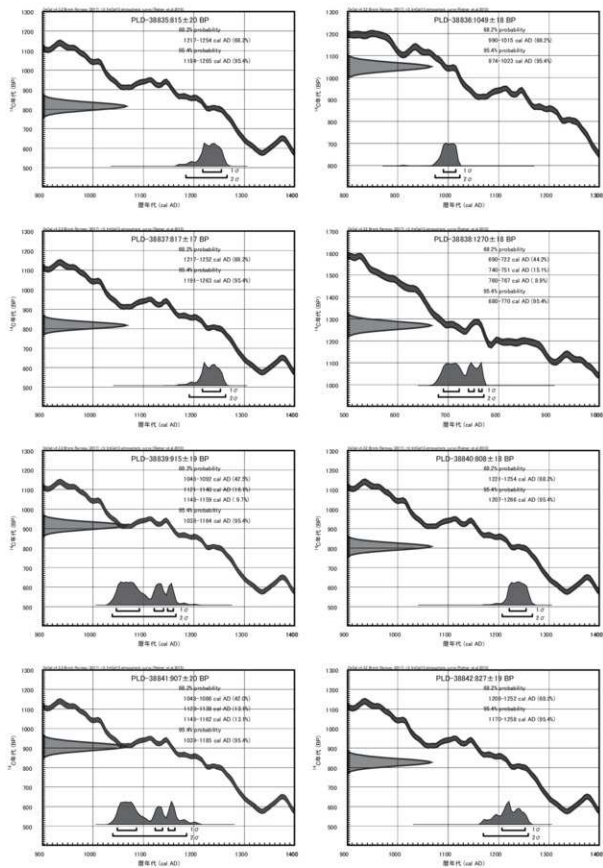
VI 分析と考察

測定番号	過剰データ	試料データ	前処理
PLD-38843 試料 No.9	HZK1805 大溝 SD11-TR4 10a層 炭化物2	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38844 試料 No.10	HZK1805 大溝 SD11-TR4 3層 炭化物3	種類：炭化材（コナラ属アカガシ系属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38845 試料 No.11	HZK1805 大溝 SD11-TR4 4層 炭化物4	種類：炭化材（コナラ属アカガシ系属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38846 試料 No.12	HZK1805 大溝 SD11-TR4 7層 炭化物5	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38847 試料 No.13	HZK1805 大溝 SD11-TR4 9層 炭化物6	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38848 試料 No.14	HZK1805 大溝 SD11-TR4 13層 炭化物7	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38849 試料 No.15	HZK1805 大溝 SD11-TR4 15層 炭化物8	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38850 試料 No.16	HZK1805 火葬土坑 SK07 遺物 No.55	種類：炭化材（クスノ木科） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38851 試料 No.17	HZK1805 火葬土坑 SK07 遺物 No.173	種類：炭化材（コナラ属アカガシ系属） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38852 試料 No.18	HZK1805 火葬土坑 SK07 遺物 No.324	種類：炭化材（タケ亜科） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38853 試料 No.19	HZK1805 火葬土坑 SK10 遺物 No.92	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)
PLD-38854 試料 No.20	HZK1805 火葬土坑 SK10 遺物 No.209	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不測 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2mol/L, 水酸化ナトリウム：1.0mol/L, 塩酸：1.2mol/L)

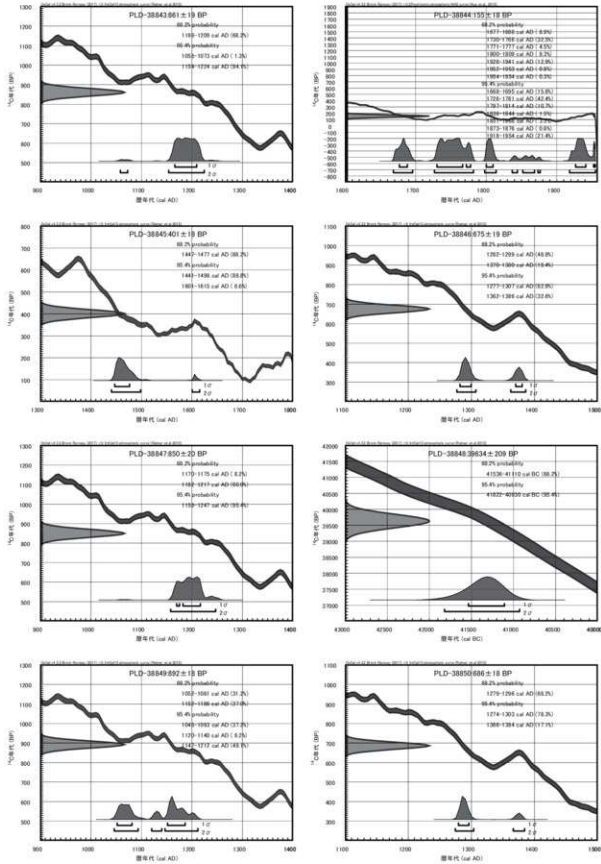
第13表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正暦年代 ($\text{yBP} \pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 ($\text{yBP} \pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38835, 試料 No.1 HZK1803石積み SF01 高さ15層	-33.19 \pm 0.11	815 \pm 20	815 \pm 20	1217-1254cal AD (68.2%)	1184-1265cal AD (95.4%)
PLD-38836, 試料 No.2 HZK1803石積み SF01 高さ16-2層	-30.98 \pm 0.14	1049 \pm 18	1050 \pm 20	990-1015cal AD (68.2%)	974-1023cal AD (95.4%)
PLD-38837, 試料 No.3 HZK1803石積み SF01 高さ18-2層	-29.33 \pm 0.17	817 \pm 17	815 \pm 15	1217-1252cal AD (68.2%)	1191-1263cal AD (95.4%)
PLD-38838, 試料 No.4 HZK1803石積み SF01 高さ19層	-27.20 \pm 0.16	1270 \pm 18	1270 \pm 20	690-722cal AD (44.2%) 740-751cal AD (15.1%) 760-767cal AD (8.9%)	680-770cal AD (95.4%)
PLD-38839, 試料 No.5 HZK1803石積み SF01 高さ17層	-30.64 \pm 0.13	915 \pm 19	915 \pm 20	1046-1092cal AD (42.5%) 1121-1140cal AD (16.1%) 1148-1159cal AD (9.7%)	1038-1164cal AD (95.4%)

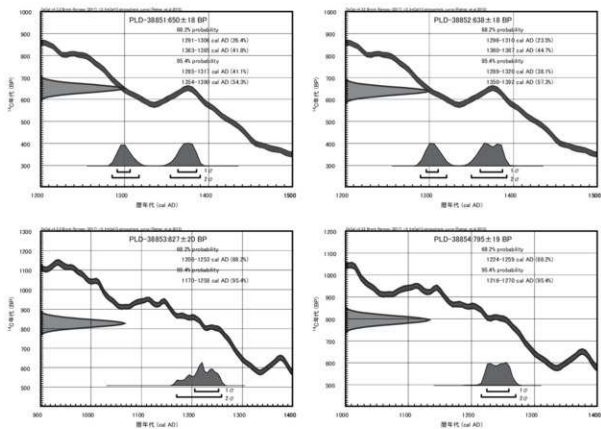
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年前正用年代 (yBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に校正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38840, 試料 No.6 HZK1803石積み SF01 高辺B-2層	-26.93 \pm 0.19	808 \pm 18	810 \pm 20	1221-1254cal AD (68.2%)	1207-1266cal AD (95.4%)
PLD-38841, 試料 No.7 HZK1803石積み SF01 高辺B-2層	-29.02 \pm 0.15	907 \pm 20	905 \pm 20	1048-1086cal AD (42.0%) 1123-1138cal AD (13.1%) 1149-1162cal AD (13.1%)	1039-1165cal AD (95.4%)
PLD-38842, 試料 No.8 HZK1805大溝 SD11-TR4 12層	-26.45 \pm 0.12	827 \pm 19	825 \pm 20	1206-1252cal AD (68.2%)	1170-1258cal AD (95.4%)
PLD-38843, 試料 No.9 HZK1805大溝 SD11-TR4 10a層	-31.08 \pm 0.16	861 \pm 19	860 \pm 20	1166-1209cal AD (68.2%)	1058-1073cal AD (1.3%) 1154-1224cal AD (94.1%)
PLD-38844, 試料 No.10 HZK1805大溝 SD11-TR4 3層	-28.22 \pm 0.19	155 \pm 18	155 \pm 20	Post-bombNH22013: 1677-1688cal AD (8.9%) 1730-1766cal AD (32.5%) 1771-1777cal AD (4.5%) 1800-1809cal AD (8.3%) 1926-1941cal AD (12.9%) 1952-1953cal AD (0.8%) 1954-1954cal AD (0.3%)	Post-bombNH22013: 1668-1695cal AD (15.6%) 1726-1781cal AD (42.4%) 1797-1814cal AD (10.7%) 1836-1844cal AD (1.5%) 1851-1868cal AD (3.3%) 1873-1876cal AD (0.6%) 1918-1954cal AD (21.4%)
PLD-38845, 試料 No.11 HZK1805大溝 SD11-TR4 4層	-27.60 \pm 0.19	401 \pm 18	400 \pm 20	1447-1477cal AD (68.2%)	1441-1498cal AD (88.8%) 1601-1615cal AD (6.6%)
PLD-38846, 試料 No.12 HZK1805大溝 SD11-TR4 7層	-27.82 \pm 0.12	675 \pm 19	675 \pm 20	1282-1299cal AD (48.8%) 1370-1380cal AD (19.4%)	1277-1307cal AD (62.8%) 1362-1386cal AD (32.6%)
PLD-38847, 試料 No.13 HZK1805大溝 SD11-TR4 9層	-34.79 \pm 0.14	850 \pm 20	850 \pm 20	1170-1175cal AD (8.2%) 1182-1217cal AD (60.0%)	1158-1247cal AD (95.4%)
PLD-38848, 試料 No.14 HZK1805大溝 SD11-TR4 13層	-26.16 \pm 0.20	39634 \pm 209	39630 \pm 210	41536-41110calBC (68.2%)	41822-40930calBC (95.4%)
PLD-38849, 試料 No.15 HZK1805大溝 SD11-TR4 15層	-26.48 \pm 0.19	892 \pm 18	890 \pm 20	1052-1081cal AD (31.2%) 1152-1186cal AD (37.0%)	1046-1093cal AD (37.2%) 1120-1140cal AD (9.2%) 1147-1212cal AD (49.1%)
PLD-38850, 試料 No.16 HZK1805大溝土坑 SK07	-23.41 \pm 0.16	686 \pm 18	685 \pm 20	1279-1296cal AD (68.2%)	1274-1303cal AD (78.3%) 1366-1384cal AD (17.1%)
PLD-38851, 試料 No.17 HZK1805大溝土坑 SK07	-27.98 \pm 0.18	650 \pm 18	650 \pm 20	1291-1306cal AD (26.4%) 1363-1385cal AD (41.8%)	1285-1317cal AD (41.1%) 1354-1390cal AD (54.3%)
PLD-38852, 試料 No.18 HZK1805大溝土坑 SK10	-27.49 \pm 0.18	638 \pm 18	640 \pm 20	1296-1310cal AD (23.5%) 1360-1387cal AD (44.7%)	1289-1320cal AD (38.1%) 1350-1392cal AD (57.3%)
PLD-38853, 試料 No.19 HZK1805大溝土坑 SK10	-26.91 \pm 0.13	827 \pm 20	825 \pm 20	1206-1253cal AD (68.2%)	1170-1258cal AD (95.4%)
PLD-38854, 試料 No.20 HZK1805大溝土坑 SK10	-24.89 \pm 0.15	795 \pm 19	795 \pm 20	1224-1259cal AD (68.2%)	1216-1270cal AD (95.4%)



第62図 暦年較正結果 (1)



第63図 暦年較正結果 (2)



第64図 暦年較正結果 (3)

箱崎遺跡 HZK1805地点出土人骨について

舟橋 京子・米元 史織・石川 健

1. はじめに

九州大学箱崎キャンパス HZK1805地点において中世の火葬土坑が検出され、人骨が出土した。九州大学埋蔵文化財調査室により人骨の調査・取りあげが行われた。出土した人骨は、九州大学大学院比較社会文化研究院および九州大学埋蔵文化財調査室において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。

分析にあたって、人骨の年齢推定は、歯牙の咬耗度については橋原（1957）の方法を用いた。年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成2』（1988）記載の年齢区分に従い、幼児（1-6歳）、小児（6-12歳）、若年（12-20歳）、成年（20-40歳）、熟年（40-60歳）、老年（60歳-）とする。

2. 人骨出土状況

(1) 火葬土坑 SK03

1.37×0.78mの長楕円形の土坑内から裸および火葬骨片が全面にわたり出土している。このうち墓構内南側の裸の間から肋骨が出土している。ほかにも裸よりも上のレベルから骨片や木炭が複数出土している。残存状態が良好ではないため、詳細な火葬前の姿勢を人骨から知ることはできない。

(2) 火葬土坑 SK07

1.39m×1.18mの方形の土坑内の西側半分を中心に、東西70cm南北110cmの範囲から火葬骨が出土している。最も北側からは頭蓋骨片・下顎骨片・歯根片が出土している。それらの南側からは肋骨片・橈骨遠位端片・手根骨片・手の指骨・歯牙が出土している。土坑中央付近からは膝蓋骨片・指骨（手の基節骨）が出土している。最も南側からは中足骨や足の指骨が出土している。本個体の東側からは土師質の鍋が口縁部を下にした状態で出土している。

人骨の保存状態があまりよくないため火葬前の姿勢は不明なもの、および土坑内北側から順に頭蓋・上肢・下肢の順で出土していることから、本個体は北に頭位をとった状態で安置されていたと推定される。加えて、歯牙や指骨が残存しているにもかかわらず主要な四肢骨片や頭蓋片が出土していない。他所から遺体を移動した場合にはむしろ歯牙や指骨など小さい部位が元の場所に残置される可能性が高い。以上の出土状況及び人骨の残存部位から、土坑内面に火を受けた形跡は認められないものの、本個体はこの土坑内で北頭位の状態で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が高いと考えられる。

(3) 火葬土坑 SK10

南北1.7mの土坑内の東西60cm南北150cmの範囲から火葬骨が出土している。最も北西側からは頭蓋片・歯根片が出土している。その南東側からは上腕骨片・前腕骨片が出土しており、一番南東側からは大腿骨などが出土している。土坑底に近いほど焼成温度が低いと考えられる濃い灰色の骨片が

出土している。

人骨が出土した土坑の壁面には熱を受けた痕跡は明瞭には認められないものの、埋土には炭が若干含まれ土坑底からは塊石が2点出土している。塊石の上面には炭が付着している。人骨の保存状態があまり良くないため埋葬姿勢は不明であるものの、土坑内北側から頭部、上肢、下肢の順で出土している。加えて、人骨の出土量が少なく、炭が少量伴出していることから、本個体はこの土坑内で北西頭位の状態で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が高いと考えられる。サイズが小さく拾骨の際には取りこぼされがちな手足の指骨や歯牙などが出土していることも、SK07同様に他所からの火葬骨の搬入ではなく本土坑内で火葬が行われたことの傍証となろう。

3. 人骨所見

(1) 火葬土坑 SK03

保存状態 本人骨の保存状態はあまり良好ではなく、腓骨の骨体部片以外は部位同定困難な長管骨片及び不明骨片が遺存しているのみである。

性別と年齢 性別と年齢は、推定可能な部位が遺存していないため不明である。

特記事項 本人骨は、クラックが入り硬化していることから火葬されたと推定される。

(2) 火葬土坑 SK07

保存状態 本人骨の保存状態は良好ではない。頭蓋骨は下顎のオトガイ付近片および前頭骨の左眼窩上縁から頬骨突起付近片および左右不明下顎側切歯片が遺存している。この他にも歯種同定困難な歯根片が複数遺存している。下顎切歯の歯牙咬耗度は2° bである。この他にも椎体片・肋骨片・左右不明膝蓋骨片・手根骨・手の指骨・左右第5中足骨・足の指骨が遺存している。

性別と年齢 性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯牙咬耗度及び指骨の骨端が密合していることから成人と推定される。

特記事項 本人骨は、クラックが入り硬化していることから火葬されたと推定される。但し、エナメル質が残存しており、骨そのものも黒色あるいは灰色の部分がみられることから、焼成温度は部分的には300～500度前後であったと推定される (Beach et al. 2008, Wahl 2008)。

(3) 火葬土坑 SK10

保存状態 本人骨の保存状態は良好ではない。頭蓋骨は前頭骨片、右頭頂骨のラムダ縫合付近片、蝶形骨片、篩骨の鶏冠付近片、左側頭骨の頬骨突起片、右側頭骨外耳付近片、左上顎骨の梨状孔付近・口蓋付近片、下顎頭・左下顎枝付近片が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

△	△	/	/	/	/	/	△	△	○	△	△	△	○	M ²	/
M ₃	/	/	/	P ₁	/	I ₂	I ₁	/	/	/	/	/	/	/	/

この他にも歯種同定困難な歯根片が多数遺存している。軀幹骨は、椎体片・左右肋骨片・仙骨片が遺存している。上肢は、右肩甲骨の肩峰基部片、左右不明上腕骨片、左右不明腕骨遠位端片、左右不

明尺骨骨体部片、右第一中手骨・基節骨、左右有鈎骨・左大菱形骨および中節骨片が複数出土している。下肢は、寛骨片および左右不明大腿骨体部片が遺存している。

性別と年齢 性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、残存している歯根がすべて先端まで完全に形成されており、手足の指骨の骨端が癒合していることから成人と推定される。

特記事項 本人骨は、クラックが入り硬化していることから火葬されたと推定される。ただし、骨そのものは黒色あるいは灰色の部分のみみられることから、焼成温度は部分的には500度前後であったと推定される（Wahl 2008）。

4. 火葬行為について

本遺跡においては、SK03、07、10の3遺構ともに火葬骨が出土している。歯牙の残存状況・人骨の色調の観察から、火葬の温度そのものは、部分的には300度ないしは500度前後の可能性が考えられ、火葬そのものの焼成温度がそれほど高くなかった可能性と一部火回りが悪かった可能性が考えられる。

加えて、SK07、SK10に関しては、人骨の出土状況の精査および人骨の観察から、①土坑内で部位ごとに一方向から頭蓋・上肢・下肢の順で出土していること、②歯牙や指骨が残存しているにもかかわらず主要な四肢骨片や頭蓋片が出土していない、という所見がみられる。これらのことから、SK07、SK10では遺体が各土坑内で火葬され、その後人骨の多くが他所へ持ち去られた可能性が高いと考えられる。その要因としては、人為的な持ち去りと動物などによる持ち去りの場合が考えられる。ただし、後者の動物による持ち去りの場合は残存部位に偏りが生じる。加えて、遺構内が全体として動物により攪乱を受け、本事例のように出土状況が人体の大きな相対的位置関係を保っている可能性は低くなる。したがって、これらの遺構に関しては、土坑内で火葬が行われたのちに、拾骨が行われた事例であると考えられる。

このように、土坑内で火葬を行いその後拾骨がなされた事例として、室町期の山口県下関市吉母浜遺跡中世墓のLG23号墓や福岡県大野城市業師の森遺跡32次調査SX12号墓などで類似をみることができる（田中 1985、米元他 2014）。ただし、吉母浜中世墓では、拾骨の量には様々あり、一方で同時期の福岡県朝倉市三奈木久保田遺跡では墓坑内で火葬を行い、拾骨を行わない「現地火葬墓」とされる事例も報告されている（舟橋・田中 2002）。拾骨の量や有無に差はあるが、このような事例は少数ではあるが西日本各地に分布していたことが指摘されている（田中 1985）。このような火葬関連遺構における多様性の位置づけに関しては今後資料の増加を待って検討を行いたい。

5. まとめ

以上、出土人骨についての記載報告を行ってきた。本遺跡出土人骨の保存状態は良好ではなく、また火葬により人骨自体が収縮・湾曲していることから、形質的比較を行える個体は得られなかった。

火葬前の姿勢としては、保存状態が良くないことから、人骨の出土状況に基づく復元は困難であるが、土坑の長辺が1mないしは1.5mであることから、伸展と屈肢の両方の可能性が考えられた。加えて、SK07および10の人骨出土状況から、火葬前は北ないしは北西頭位であると推定された。火葬の温度そのものは、部分的には300度ないしは500度前後の可能性が考えられた。加えて、少なくともSK07およびSK10の2基については、土坑内で火葬・拾骨を行った場としての火葬土坑事例と考えら

れた。

謝 辞

本人骨の調査報告に当たっては九州大学埋蔵文化財調査室の福永将大氏をはじめ、齋藤瑞徳氏、谷直子氏の御世話になった。深謝したい。

引用文献

- 九州大学医学部解剖学第二講座編 1988 「日本民族・文化の生成 2—九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成一」 六興出版
- 田中良之 1985 「中世の遺構」『吉母浜遺跡』下関市教育委員会 31～100頁
- 橋原 博 1957 「日本人歯牙の咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』第31巻増冊第4 熊本医学会 1～50頁
- 舟橋京子・田中良之 2002 「三奈木久保田遺跡出土人骨について」『三奈木久保田遺跡—福岡県甘木市大字三奈木字太田、久保田、高棚所在遺跡の調査—』甘木市教育委員会 148～151頁
- 米元史織・舟橋京子・早川和賀子・高椋浩史・岩橋由季・谷澤亜里・中井 歩・田中良之 2014 「薬師の森遺跡第16・32次調査出土人骨について」『乙金地区遺跡群10—薬師の森遺跡第15・16・22・32・34・35次調査—』大野城市教育委員会 133～147頁
- Beach, J. J., Passalacqua, V. N. and Chapman, N. E., 2008. Heat-related changes in tooth color: temperature versus duration of exposure. *The analysis of burned human remains*. Elsevier. pp.137-144.
- Wahl, J., 2008. Investigations on pre-roman and roman cremation remains from southwestern Germany: results, potentialities and limits. *The analysis of burned human remains*. Elsevier. pp.145-161.

箱崎遺跡出土碇石の岩石学的分析

足立達朗

本稿では、HZK1702地点から出土した碇石2点について岩石学的分析を行った結果を報告し、それらの原産地について若干の考察を提示する。

1. 分析対象資料・分析手法

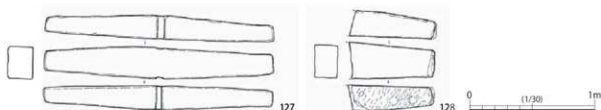
今回の分析は、HZK1702地点C区から出土した碇石2点（第65図、三阪・谷籾 2019）が対象である。分析に用いた石材サンプルは、各資料について日常の展示に支障をきたさない部分から、ディスクグラインダー（日立工機製 G3613DB）を用いて6 cm×2 cm×3 cm程度の岩石スライスを3枚ずつ切り出したものを用いた。これらのスライスから岩石薄片、全岩化学組成分析用粉末、ジルコン抽出用粉末を作成した。岩石薄片については岩石組織の観察・構成鉱物の同定に基づく岩石記載を行った。全岩化学組成分析用粉末は、融剤と混合してガラスビードを作成し、波長分散型蛍光X線分析装置（XRF）を使用して主要・微量元素組成を分析した。測定は、九州大学大学院比較社会文化研究院設置のXRF（リガク製 ZSX primus II）を用いて、中野ほか（2009、2012）に従って実施した。また、ジルコンは年代測定に用いるために、北野ほか（2014）の方法に従って抽出した。抽出したジルコンは、ハンドピッキングしてエポキシ樹脂に埋め込み、固化後にダイヤモンド琢磨した。測定はレーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計（LA-ICP-MS（レーザー：New Wave Research製 UP-213、ICP-MS：Agilent 7500cx））を用いて、Adachi et al.（2012）に従って分析し、U-Pb年代を計算した。

2. 分析結果

(1) 岩石記載

遺物番号127 この資料は、等粒状組織を示し、主成分鉱物として石英、斜長石、カリ長石、黒雲母を含む黒雲母花崗閃緑岩である（第66図a）。この他にホルンブレンドを包有物として極わずかに含み、副成分鉱物として褐礫石、チタン石、燐灰石、ジルコンを含み、二次鉱物として緑泥石、緑礫石を含む。

石英は最大4 mm程度の粒徑で自形から他形を呈する。また斜長石を取り囲むような産状を示し、黒雲母を包有する。斜長石は最大5 mm程度、柱状、自形の形状を呈し、明瞭な累帯構造を示す。また黒雲母とホルンブレンドを包有する。カリ長石は最大1 cm程度で、他形で他の鉱物の粒間を充填



第65図 HZK1702地点出土の碇石

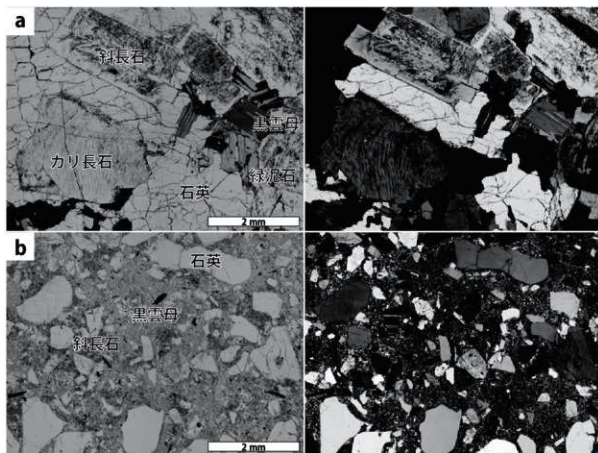
するよう産し、パーサイト組織が顕著である。石英、斜長石、黒雲母を包有する。黒雲母は0.5～1mm程度の粒径で、自形で板状～卓状の形状を呈する。ホルンブレンドを包有する。また層間に沿って緑泥石に置換されていることがあり、粒間が緑泥石に置換されていることがある。

褐糜石は400 μ m程度で、淡褐色～黄色を呈し、自形で多角形状の形状を示す。黒雲母と接しており、ともに斜長石に取り囲まれるように産する。チタン石は300 μ m程度で、自形でくさび形を呈する。斜長石やカリ長石に包有されて産する。燐灰石とジルコンは最大200 μ m程度で、自形で長柱状～針状を呈する。主に黒雲母と斜長石の包有物として産する。

遺物番号128 この資料は、斑状組織を示し、斑晶鉱物として石英、斜長石、カリ長石、黒雲母を含む石英斑岩である(第66図b)。この他に石基鉱物として石英、斜長石、カリ長石、不透明鉱物を含み、副成分鉱物としてジルコン、燐灰石を含む。

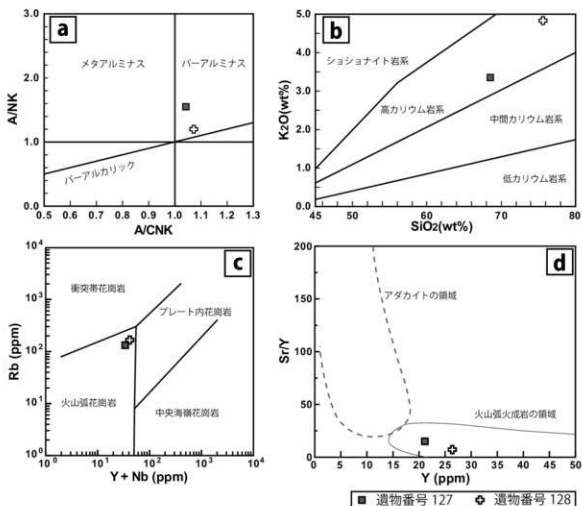
斑晶鉱物に関して、石英は最大3mm程度の粒径で融食形を示すものが多い。斜長石は0.6mm程度の粒径で、自形、柱状を呈する。カリ長石は最大1.5mm程度で、半自形、柱状を示す。黒雲母は長径0.8mm程度で自形、板状を示す。離溶組織と思われる細粒の不透明鉱物を多く含む。石基鉱物は、数十 μ m程度の粒径の極細粒な石英、斜長石、カリ長石、不透明鉱物であり、顕微鏡下で全体的にやや褐色がかっている。

燐灰石とジルコンは最大200 μ m程度で、自形で長柱状～針状を呈する。



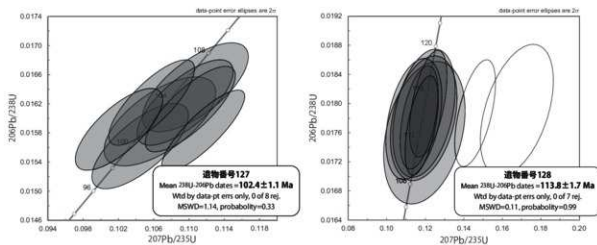
第66図 分析対象資料の顕微鏡写真(左:単ニコル,右:直交ニコルでの撮影)

(a) 遺物番号127(黒雲母花崗閃緑岩)の薄片写真。等粒状組織を示し、自形の鉱物を多く含む深成岩である。(b) 遺物番号128(石英斑岩)の薄片写真。斑状組織を示し、石英および斜長石を斑晶として含む半深成岩である。

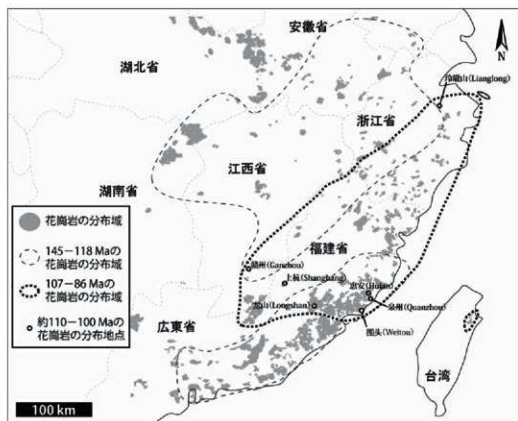


第68図 分析資料の岩石タイプの判別図

(a) アルミナ飽和度に基づく分類図。(b) SiO₂-K₂O による分類 (Peccerillo and Taylor, 1976)。(c) 微量元素組成に基づく花崗岩質岩石の地球化学的判別図 (Pearce et al., 1984)。(d) アダカイト判別図 (Defant and Drummond, 1990)。



第69図 分析資料から抽出したジルコンのコンコードシア図



第70図 中国南東部における花崗岩類の分布 (Li et al, 2014:一部抜粋)
約110-100 Maの年代値を持つ花崗岩類が報告されている地点も示している

3. 考察

これまでの結果をまとめると、今回分析した皖石2点は、一方が深成岩の黒雲母花崗岩であるが、他方は半深成岩の石英斑岩であり、固結時の地殻内部での深度にやや違いがあると考えられる。しかしながら、Iタイプで高カリウム岩系の火山弧花崗岩質であるという岩石学的な特徴が一致することに加え、形成時期についてもおおよそ1億年前の白亜紀で一致するなど共通点が多い。このことは、両石材の地質学的背景が類似していることを示唆する。

森 (2019) は本稿で扱った皖石2点について考古学的な分析を行っており、これらが一石型・角柱対称型の大形品・小型品に属するとし、研究史に基づいてこれらが宋代から元代の中国南船で使用されたと指摘している。これは、中世・中国貿易の拠点である博多遺跡群周辺において引き揚げられた遺物のうち、中国陶磁器は華北産のものもあるが浙江省・福建省・広東省のものが圧倒的に多いこと (田中 2019) に拠る。本稿ではこれらに従い、箱崎遺跡から出土した皖石と対比可能な岩石が浙江省・福建省・広東省に分布しているかを考察する。

浙江省・福建省・広東省を含む中国南東部地域では広域的に花崗岩類が分布しており、それらの地球化学的、年代学的データが蓄積されてきた (例えば、Li and Li, 2007)。これによると、中国南東部の花崗岩類の活動時期は、145-118Maのステージとそれよりも若い107-86Maのステージに分けられ、後者のステージに活動した花崗岩類は浙江省・福建省・広東省の沿岸部を中心に分布しており、中でも箱崎遺跡から出土した皖石が示す約110-100Maの花崗岩類は福建省などに分布が限られてい

る(第70図)。また、107-86Maのステージに活動した花崗岩類の共通点として、Iタイプで高カリウム〜シヨナイト岩系であることが分かっており(Li et al., 2014)、複数の地点において花崗岩などの深成岩類と石英斑岩などの半深成岩が同じ地域に産出する例も報告されている(例えば Mao et al., 2002)。これらのことは、博多遺跡群から出土した稜石の岩石学的特徴が、福建省などに分布が限られている約1億年前に形成された花崗岩類の特徴と一致することを意味し、これらの地点のいずれかが今回分析した稜石の石材採取地点である可能性が高いことを示唆する。翻って、これらの地点から産出する花崗岩類は岩石学的特徴の共通点が多いため、この中から稜石の石材採取地点を特定するのは今回得られたデータだけでは困難である。採取地点の特定のためには今後鉱物化学組成、全岩希土類元素組成・同位体比などを詳細に比較する必要がある。

引用文献

- Adachi, T., Osanai, Y., Nakano, N. and Owada, M., 2012. LA-ICP-MS U-Pb zircon and FE-EPMA U-Th-Pb monazite dating of pelitic granulites from the Mt. Ukidake area, Sefuri Mountains, northern Kyushu. *Journal of Geological Society of Japan*, 118, pp.39-52.
- Chappell, B.W. and White, A.J.R., 2001. Two Contrasting Granite Types. 25 Years Later. *Australian Journal of Earth Sciences*, 48, pp.489-499.
- Cox, K.G., Bell, J.D. and Pankhurst, R.J., 1979. *The Interpretation of igneous rocks*. George, Allen and Unwin, London.
- Defant, M.J. and Drummond, M.S., 1990. Derivation of some modern arc magmas by melting of young subducted lithosphere. *Nature*, 347, pp.662-665.
- Irvine, T.N., Baragar, W.R.A. 1971 A Guide to the Chemical Classification of the Common Volcanic Rocks. *Canadian Journal of Earth Science*, 8, pp.523-548.
- 北野一平・小山内康人・中野伸彦・足立達朗・吉本 敏 2014「ジルコンの迅速分離手法とU-Pb年代測定への適用例」『比較社会文化』第20巻 九州大学大学院比較社会文化学府 1~10頁
- Mao, J.R., Tao, K.Y., Lee, C.-Y., Xie, F.G., Xu, N.Z., 2002. Geochronology and geochemical characteristics in late Mesozoic Sifang pluton, southwestern Fujian, and their significance. *Acta Petrologica Sinica*, 18, pp.449-458.
- 森 貴教 2019「中世稜石の基礎的検討—HZK1702地点出土稜石の位置づけ—」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—』九州大学埋蔵文化財調査室 144~152頁
- Li, Z.X. and Li, X.H., 2007. Formation of the 1300-km-wide intracontinental orogen and postorogenic magmatic province in Mesozoic South China: a flat-slab subduction model. *Geology*, 35, pp.179-182.
- Li, J., Zhang, Y., Dong, S. and Johnston, S., 2014. Cretaceous tectonic evolution of South China: A preliminary synthesis. *Earth-Science Reviews*, 134, pp.98-136.
- 中野伸彦・角縁 進・小山内康人・米村和紘・委原義博 2009「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希土類元素の定量」『比較社会文化』第15巻 九州大学大学院比較社会文化学府 1~15頁
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和紘・吉本 敏・Nugroho SETIAWAN 2012「蛍光X線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』第18巻 九州大学大学院比較社会文化学府 81~94頁
- Pearce, J.A., Harris, N.B.W. and Tindle, A.G., 1984. Trace element discrimination diagram for the tectonic interpretation of granitic rocks. *Journal of Petrology*, 25, pp.956-983.
- Peccerillo, A. and Taylor, S.R., 1976. Geochemistry of eocene calc-alkaline volcanic rocks from the Kastamonu area, Northern Turkey. *Contributions to Mineralogy and Petrology*, 58, pp.63-81.
- 田中克子 2019「博多」にもたらされた中国陶磁器—国内消費地との比較材料として—『貿易陶磁器と東アジアの物流—平泉・博多・中国—』高志書院 51~78頁

中山平次郎収集の元寇防塁構築石材の岩石学的分析

足立達朗

はじめに

岩石は、その組織、構成鉱物、化学組成などから、その岩石がどのような地質学的背景を持っているかを理解することが可能である。また、日本国内のみならず世界各地で地質図が公表されているため、岩石の持つ地質学的背景は、地質図と対照することで場所の情報に変換することが可能である。これは採取地点を推定する手がかりとなり、さらには材料の調達戦略の考察につながると思われる。

本稿では、九州大学総合研究博物館に所蔵されていた中山平次郎が収集した元寇防塁構築石材の岩石学的分析を実施し、各石材の採取地点に関する考察を行った。

1. 分析資料と分析手法

今回は、九州大学総合研究博物館に所蔵されていた中山平次郎収集の元寇防塁構築石材15資料のうち、火成岩および変成岩の6資料を取り上げて分析を行った。各資料には中山の直筆で採取地点が記載されており、分析した資料の内訳は、「今津長浜」(資料番号3)、「生松原西部」(資料番号7・9)、「生松原東部」(資料番号11)、「小戸宮東」(資料番号13)、「百道松原東部」(資料番号16)である。

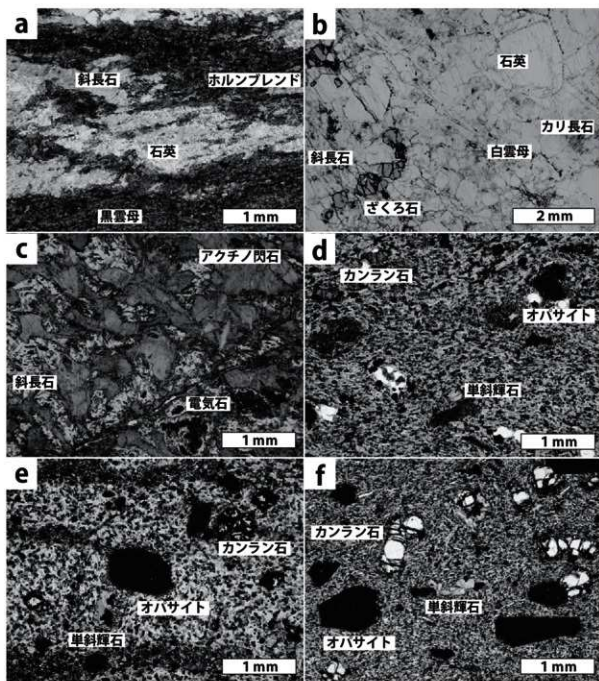
分析に用いた石材サンプルは、各資料から、岩石カッター(岩本鉱産製)を用いて2cm角度度切り出したものを用いた。このサンプルを精密切断装置(BUEHLER製 Isomet 1000)を用いて半割した。半割した資料の一方を用いて岩石薄片を作成した後、岩石組織の観察・構成鉱物の同定に基づく岩石記載を行った。他方は粉砕し岩石粉末を作成した後、融剤と混合してガラスビードを作成し、波長分散型蛍光X線分析装置(XRF)を使用して主要・微量元素組成を分析した。分析装置は、九州大学大学院比較社会文化研究院設置のXRF(リガク製 ZSX primus II)を用いた。測定条件の詳細は、中野ほか(2009, 2012)を参照されたい。

2. 結果

(1) 岩石記載

資料番号3「今津長浜」 優黒色で主に黒雲母とホルンブレンドからなるレイヤーと優白質で主に石英と斜長石からなるレイヤーが縞状構造を呈する結晶片岩(黒雲母-ホルンブレンド片岩)である(第71図a)。各レイヤーの厚層は3mm~1cm程度である。優黒色のレイヤーは定向配列した細粒(100 μ m以下)で板状の黒雲母と柱状のホルンブレンドおよび灰簾石と他形の斜長石、石英、チタン石、不透明鉱物から構成される。優白質のレイヤーは、主に波状消光し、圧砕組織を示す石英(最大粒径500 μ m)が占め、その他に斜長石、方解石、灰簾石を含む。

資料番号7「生松原西部」 優白質で、粗粒のカリ長石、斜長石、石英を含み、細粒のザクロ石、白雲母、黒雲母からなる含ザクロ石ベグマタイトである(第71図b)。カリ長石は自形・柱状で1cmを超えるものもある。パーサイト組織を呈し、斜長石、石英を包有する。斜長石は自形-半自形・柱状で、1mm程度の粒径を示す。石英は自形-他形のやや丸みを帯びた形状を示し、最大3mmの粒



第71図 分析資料の顕微鏡写真(単ホーラで撮影)

(a) 資料番号3 (黒雲母-ホルンブレンド片岩), (b) 資料番号7 (含ザクロ石ベグマタイト), (c) 資料番号9 (変斑レイ岩), (d) 資料番号11 (カンラン石単斜輝石玄武岩), (e) 資料番号13 (カンラン石単斜輝石玄武岩), (f) 資料番号16 (カンラン石単斜輝石玄武岩)。

径を示す。カリ長石の包有物として産する粒子ほど自形性が高い。ザクロ石は500 μ m程度の粒径を示し、自形でやや丸みを帯びた形状で赤色を呈する。白雲母と黒雲母はともにわずかに含まれ、板状で200 μ m程度の粒径を示す。

資料番号9〔生松原西部〕 緑色塊状で、角閃石、斜長石から主に構成される。その他に灰燼石、チタン石、電気石を含む(第71図c)。片理は認められず、塊状の角閃石が多く含まれることから、斑レイ岩起源の変成岩(変斑レイ岩)と言える。

角閃石は、淡緑～青緑色を示し、塊状で800 μ m程度の粒径を持つアクチノ四石と、そのような塊状の粒子の周囲を取り囲み、細粒・針状（100 μ m程度）、濃緑色のホルンブレンドが存在する。斜長石は他形で300 μ mの粒径を示し、針状のホルンブレンドとともに基質を構成する。灰礫石は自形・板状で100 μ mの粒径を示し、わずかに基質部に含まれる。電気石は、青色を呈し、600 μ m程度の球状を示す。周囲は斜長石に取り囲まれている。チタン石は基質に認められ、不定形で核部にチタン鉄鉱を包有している。

資料番号11「生松原東部」・資料番号13「小戸宮東」・資料番号16「百道松原東部」 暗灰色で、斑状組織を示し、カンラン石、単斜輝石を斑晶として含むカンラン石単斜輝石玄武岩である（第71図d～f）。またオパサイトを含むことが特徴である。風化の度合いなどにいくらか差は認められるが、岩石学的な観点からは3つの資料で岩石組織、鉱物組み合わせが共通するためまとめて記載する。

斑晶のカンラン石は、無色で自形・短柱状で800 μ m程度の粒径を示す。風化が進んだ粒子は周囲を褐色細粒の鉱物に置き換えられイディングス石化している。斑晶の単斜輝石は、淡緑褐色で自形・柱状で600 μ m前後の粒径を示す。砂時計状のセクター累帯構造を示すものもある。カンラン石と比較して量は少ない。オパサイトは、細粒の不透明鉱物の集合体で、1mm程度で卓状の外形を示し、核部には茶褐色のホルンブレンドを含むことが多い。石基は針状の斜長石、粒状のカンラン石と不透明鉱物、柱状の単斜輝石からなり、斜長石の弱い定向配列による流理構造が認められる。

(2) 全岩化学組成

本稿で扱った石材資料のうち、火山岩の一種である玄武岩製の石材資料（資料番号11、13、16）について全岩化学組成分析を実施した。火山岩は山体の違いが化学組成に反映されやすいため、他の岩石種と比較して岩石の採取地点を特定できる可能性が高いためである。分析結果を第15表、第72図、第73図に示す。また、これら図表には、能古島で採取した玄武岩のデータも掲載している。オパサイトを含むカンラン石単斜輝石玄武岩は北部九州では能古島、相島や玄海島など分布が限られている（井浦ほか2015）。ここでは分析対象石材資料の採取地点に近い能古島の岩石試料と比較を行った。

今回分析した資料は、Total Alkali-Silica (TAS) 区分図（第72図）上で共通してSiO₂含有量が約50wt.%、Na₂O+K₂O含有量が約5wt.%を示し、玄武岩と粗面玄武岩の境界付近にプロットされ、Irvine and Baragar (1971) のアルカリ・非アルカリ岩系の区分においてはアルカリ岩系の領域にプロットされることからこれらの資料は、地球化学的にアルカリ玄武岩であるといえる。地球化学的判別図（第73図）上においてはすべての資料がプレート内玄武岩の領域にプロットされる。重要な点として、

第15表 中山平次郎採取石材の全岩化学組成

	資料11	資料13	資料16	能古島
(wt.%)				
SiO ₂	49.81	48.93	49.21	49.49
TiO ₂	2.23	2.11	2.09	2.07
Al ₂ O ₃	17.96	16.70	16.72	16.30
Fe ₂ O ₃	10.61	12.11	11.96	12.11
MnO	0.14	0.17	0.17	0.18
MgO	4.42	6.15	6.03	5.80
CaO	8.28	8.26	8.43	8.44
Na ₂ O	3.76	3.62	3.61	3.81
K ₂ O	1.38	1.23	1.25	1.28
P ₂ O ₅	0.71	0.66	0.67	0.66
LOI	1.12	0.32	0.36	n.d.
Total	100.42	100.27	100.50	100.17
(ppm)				
V	216.83	206.08	207.44	197.68
Cr	122.60	119.48	137.04	158.66
Ni	40.41	39.54	48.31	54.59
Cu	33.87	27.39	32.20	35.37
Zn	171.00	156.12	158.96	158.24
Ga	22.98	22.38	22.22	21.69
Rb	23.45	20.11	20.99	23.16
Sr	940.90	836.77	853.34	888.21
Y	32.32	23.91	24.31	28.69
Zr	215.63	203.26	200.80	206.03
Nb	28.73	25.53	26.17	26.90
Ba	429.92	306.29	309.90	329.53

LOI: 強熱減量, n.d.: 検出限界以下



第74図 元寇防塁の位置と周辺地域の地質図

いことも類似している(足立・田尻 2018)。本稿で扱った石材資料は、実際の構築石材のごく一部であり今回の結果が構築石材の全体を代表しているとは言えないものの、能古島に産出する岩石が複数認められる点は特徴的であると考えられる。能古島に産出する岩石を使用して防塁を構築するためには、船による運搬が必要である。今回扱った石材資料が収集された地点の背後あるいは近傍には、石材採取が可能な崖や山が広く分布している。それにもかかわらず、船によって石材を運搬して防塁を構築したとすれば、山などから新たに石材を切り出すよりも、海岸などの転石を使って効率よく短期間に構築したいという当時の人々の戦略が読み取れる可能性がある。

引用文献

- 足立達朗・田尻義了 2018 「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」[九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—]九州大学埋蔵文化財調査室 68~78頁
- Irvine, T.N., Baragar, W.R.A. 1971 A Guide to the Chemical Classification of the Common Volcanic Rocks. *Canadian Journal of Earth Science*, 8, pp.523-548.
- 井浦 一・森 康・石橋秀巳 2015 「福岡県津屋崎古墳群に用いられた玄武岩石材の供給地」[九州考古学] 第90号九州考古学会 41~60頁
- 唐木田芳文 1965 「福岡市能古島・香椎の北崎花崗閃緑岩と三郡変成岩」[西南学院大学文理論集] 第6巻第1号 西南学院大学学術研究所 19~44頁
- 唐木田芳文・富田宰臣・下山正一・千々石一豊 1994 「福岡地域の地質—地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)—」地質調査所
- Le Maitre, R.W., Bateman, P., Dudek, A., Keller, J., Lameyre, Le Bas, M.J., Sabine, P.A., Schmid, R., Sorensen, H., Streckeisen, A., Woolley, A.R., Zanettin, B. 1989 *A classification of igneous rocks and glossary of terms*. Blackwell, Oxford.
- Meschede, M. 1986 A method of discriminating between different types of mid-ocean ridge basalts and continental tholeiites with the Nb-Zr-Y diagram. *Chemical Geology*, 56, pp.207-218.
- 森 貴教 2018 「石器の生産・消費からみた弥生社会」九州大学出版会
- 中野伸彦・角縁 進・小山内康人・米村和祐・桑原義博 2009 「低希釈率ガラスビードを用いた主成分・微量・軽希

VI 分析と考察

- 土類元素の定量」『比較社会文化』第15巻 九州大学大学院比較社会文化学府 1～15頁
- 中野伸彦・小山内康人・足立達朗・米村和統・吉本 紋・Nugroho SETIAWAN 2012「蛍光 X 線分析装置・レーザー溶出型誘導結合プラズマ質量分析計を用いた低希釈率ガラスビードの主成分・微量・希土類元素の迅速定量分析」『比較社会文化』第18巻 九州大学大学院比較社会文化学府 81～94頁
- 脇田浩二・井川敏恵・宝田晋治編 2009『20万分の1日本シームレス地質図 DVD 版』数値地質図 G-16 産業技術総合研究所地質調査総合センター

図版出典

- 第74図 20万分の1日本シームレス地質図（脇田ほか編 2009）を使用し、Adobe Illustrator CS4で作成。

中山平次郎の元寇防塁踏査と石材取集

岩永省三

1. 中山平次郎の元寇防塁研究

中山平次郎は、1907（明治40）年に、元寇などに関する文書を編纂した『伏敵編』（山田編 1892）を読んで以来、元寇防塁の探索を開始した（中山 1913a）。1912（大正元）年夏に現地踏査を行い、その成果を著作として発表し始めるのは1913（大正2）年である。すでに「元寇防塁」と呼び、構造や石材を論じ、残存箇所を踏査を綿密に行っている。今津長浜・生松原・小戸山東・伊崎（西公園西南側）に防塁として図を掲載。現在は防塁とは考えられていない²⁾の状況を検討するとともに、「伊崎以東の遺跡の有無」、特に「千代の松原以東の検査」に注力し、「医科大学」「工科大学」内の防塁の詳細な位置推定をおこなったのである（中山 1913a）。

中山は各地の防塁の現地踏査の過程で、石材の取集も行っていたことが判明した。医学部解剖学第二講座から総合研究博物館に移管された資料の中にまとまった量の中山平次郎取集資料があり、その中の1箱に元寇防塁石材22点が入っていた。九大に赴任後、考古学研究を開始した初期に精力的に取り組んだテーマであるし、採探資料に基づく研究の構築に信念を持っていた中山であるから、取集資料の中に防塁石材があっても何の不思議もないが、各地の防塁の石材をサンプリングしていたのは考古学者としての面目躍如である。今回、そのうち6点について足立達朗氏に岩石学的分析を実施して頂いた（本章足立報告145～150頁参照）。

中山が大正元年の医科大学の新入生歓迎会で『福岡附近の史蹟（殊に元寇の史蹟）』と題した長大な講演を行い、その講演録（中山 1913a）の中に、「今私私が歴史談をするのは、蓋し諸君が遠足でもさる、時の参考となりはせぬかと考へたからである。」「醫者が歴史談をするといふと不適當に聞こえるかもしれないが、病理学者は醫者ではない。醫者に似た石屋が石話をすると思ふて下さればよいのである。参考として其邊に石類を多く陳列して置いた。」「陳列した築石の標本」とあるから、九大博物館の所蔵となった石材標本は、まさにこの講演の際に陳列された物に当たる可能性が大である。この日、資料を陳列し、これから新入生を前に超長大な講演（聞かされる方の新入生は疲労困憊したであろうが）を打とうという中山の高揚した顔が目に見えようである。

本稿では中山の元寇防塁踏査と石材取集を追跡してみよう。

2. 各地の元寇防塁遺跡と中山の踏査（第75図・第76図）

あらためて各地に残る元寇防塁遺跡について、発掘調査報告書や論文を参照しつつ、東から西に概観し、中山の関連記述を確認しておく。九大構内の防塁は省略する。

地蔵松原の元寇防塁（東区宮松4丁目）九州大学農学部東側の地蔵松原公園内に史蹟指定地がある。1920年に中山平次郎が内務省の久松信正と発掘し、武谷水城が報告した。海側のみ石積み擁壁を設け、石材が大振り（幅50～80cmほど）である点は、九大キャンパス内で発見した石積みとよく似ている。現在の整備地では埋め戻されて石積みを見ることはできない。箱崎地区の防塁築造を分担したのは薩摩国であった。中山資料には「地蔵松原」と記す石材が1点ある。

博多小学校の元寇防塁（博多区奈良屋町）博多小学校新築工事に伴う発掘調査で発見された。海



第75図 博多から多々良川に至る地域の元寇防塁推定線

地図は1900(明治33)年の地形である。中山平次郎の記述及び近年の発掘調査成果に基づき、元寇防塁推定線と現在の史跡指定地などを記入した。第76図で説明するように、愛宕山から荒津山にかけては、海岸線が元寇防塁から200~500mも離れてしまった。御芝川から多々良川に至る区間でも海岸線は防塁から約150~200m離れている。中山は、愛宕山から荒津山にかけては、室見川が運んだ土砂が「満潮時に起こる左転の潮流」によって河口の東側に堆積したことが原因と考えた。しかし、博多以东では、御芝川は中世には博多の南側を流れて博多の西側に広がる入り江に流入していたので、現在の御芝川川口的位置には川はなく、那珂川河口も住吉付近だったので、箱崎まで影響を与えない。中山も「飯令比恵川を西に有するとも、百道原西端部に於けるよりも、川の影響を被ること微弱なるべき、箱崎浜の自然的隆地新生の程度が、百道原西端部と同等。若くはそれ以上であるべき道理が無い」(中山1913b)と述べる。では、なぜ元寇以降にどんどん土砂の堆積が進んだのか。中山は、博多湾沿岸では「岸に突出物がある時、潮流よりいふて上流の岸が前進し、下流の岸が後退し、分明に噴議を生じて居る」ことから、多々良川が運んだ土砂が名島の突出部に運られ、多々良川河口の西側、つまり箱崎に堆積したと解している(中山1913c)。この観点からすると、多々良川に近いほど砂洲が発達し、西に行くほど海岸が防塁に近くなるはずであるから、医学部の裏の中山が注目した汐入を形成する砂洲は、石堂川開削(16世紀末)後の新しい物であり、九大理学部で防塁の西側に見出された浜地の南延長部ではないと考えた方がよい。岩永2018の記述を訂正する。

側・陸側の両方に石積み擁壁を設け、両擁壁の間隔は3.5～3.8m、擁壁間を擁壁よりも小ぶりの石で満たす構造であった。規模と構造が今津地区と類似し、浜堤に沿って構築されており構築直後の堆積層から13～14世紀の遺物が出土している事などを根拠に、博多部における元寇防塁と考えられている(井上 2008)。発見された防塁はすべて保存され、一部が小学校の「石塁遺構展示室」で公開されている。博多地区の防塁築造を分担したのは筑前国・筑後国であった。

(1) 伊崎から西へ

中山は現在の西公園の西南側の伊崎の石垣(田中氏邸内)に特に注目し、そこから西に向かつての防塁の行方を詳しく記している。中山の表現のニュアンスを伝えるために原文の引用を多くし、必要に応じて現在の地名等を()内に記した。

「防塁の遺跡たる土手は現今断絶した感はあるが、伊崎より西方は遠く糸島郡の今津長浜迄其跡を存して居るといふ事を知った。此事は既に誌書に記載せられた處であつて且つ所々に或は然らんと思はるゝ土手のあることは自分が前より知つて居た處であるが、本年之を確認するに至つたのである。此伊崎以西の防塁を伝ふて歩いて見て、余は当時の石塁なるものが従来の想像とは其構造を異にしたものであらうと思ふに至つた。又石塁なるものが案外小規模なるには少からず驚いた。尚ほ此小規模なる防塁工事によって彼の大敷を防ぎ止めたる九州諸豪族の大手腕には大に驚き入つた。」(中山 1913a)

「伊崎より今津長浜へ亘つてある防塁を探索して余は防塁が崩るゝと如何なる形のものになるか、略之を量知することが出来た。」(中山 1913a)

「小戸山の東、生の松原、今津長浜に於ては伊崎に於けるが如き完全なる石垣を遺して居る地は一ヶ所も無いのであるが、石垣の崩壊したと見るべき大小石片の散乱、若くは石垣の名残と見るべきものは所々に之を存して居るのであつて、此れ等の石片は皆附近の地盤より明かに高さ土手の頂部に存して居るのである。」(中山 1913a)

中山は自身の邸宅の近くで西公園の西南側にあった「伊崎の石垣」を防塁の遺跡と認識し注目したが、そこから西南方向に防塁痕跡を樋井川まで辿る。

「田中氏邸内のもの(伊崎の石垣)に続いた石垣が現時師範学校(現在の福岡教育大学付属小・中学校)の外圍として積換えられて、旧觀を存して居らぬ事は既に前に述べた。大堰の瀉水溝(黒門川)附近に於ては誰が兎も容易に気が付くといふ程の凸地を表はしては居らぬが、直に其隣地より土手は西南に向かつて走り、妙法寺、浄慶寺、大圓寺、正光寺等の墓地(唐人町3丁目)として利用せられて居る。殊に浄慶寺横裏の墓地となつて居る土手は高さ一丈餘で、(以下略)」(中山 1913a)

「土手は次で次しく断絶し、西北(西南の誤りか)へ約一丁を経て、妙安寺、吉祥寺の墓地(唐人町2丁目)として再び高まり、菴川の縁に至つて消えて居る。」(中山 1913a)

「土手は菴川を越えて地形では宅地と海辺畑地との間に顛はれ、今川橋北方の浄満寺裏の墓地となり、樋井川岸に消えて居る。」(中山 1913a)

上記の「浄満寺裏の墓地」の東北側が「地行の元寇防塁」史蹟指定地である。

地行の元寇防塁(中央区地行2丁目) 住宅街の一角の空き地が指定地であり、発掘調査が行われておらず、構造が不明である。指定地内に散乱する礎が防塁の石材かどうか分からない。

(2) 樋井川から藤崎へ

樋井川を越えて室見川右岸にあった新監獄まで辿る。

「川を越えて土手は再び西新町の紅葉八幡（現在の西新パレス附近。大正2年に高取1丁目の現在地に移転）の裏に明らかに露出する。高さは色々であるが、最高處は一丈位はある様である。此處より礫石の残りが土手附近に散乱し初めて居る。石は一部西公園産石と同質、一部は然らず。土手はこれより修猷館の直後を過ぎ、干眼寺（百道1丁目）裏の墓地に連なり、新監獄の煉瓦塼に衝突して居る。此付近が即ち百道原である。」【此の松原には礫石の残りと思はるべき稍大なる石が松ヶ根の爲めに抱へられて居る處もある。】（中山 1913a）

上記の「修猷館の直後」が西南学院大学構内（西）および「西新の元寇防塁」史跡指定地に当たる。「干眼寺裏の墓地」の東隣が「藤崎の元寇防塁」史跡指定地である。

西南学院大学構内（東）の元寇防塁（早良区西新3丁目）1920年に西南学院本館・講堂（現西南学院大学博物館）の建設時にその北側で発見され、海側の石積み擁壁が長さ約7m分掘り出された。陸側にも擁壁があり、両擁壁の間隔は3.5m、擁壁間を粘土や砂で満たす構造であった可能性が高い。防塁の発見後、周辺が整備されていたが、第二次大戦後に埋戻されるか破壊されるかして地表から見えない状態となって、現在に至っている（伊藤 2017）。

西南学院大学構内（西）の元寇防塁（早良区西新6丁目）西南学院大学の校舎新築に伴う発掘調査で発見された。旧校舎によって大部分が破壊された石積み擁壁の基底部と、陸側擁壁から1m離れた土塁が確認された。石積み擁壁は海側・陸側の両方にあり、間隔は3.3mで、その間を砂と粘土の互層で埋めていた。土塁は幅1.5m、高さ1.3mに復元される。現在、1号館建物の内部に復元・公開されている。

西新の元寇防塁（早良区西新7丁目）西南学院大学体育館前に史跡指定地がある。1920（大正9）年に「教育勅語下賜30周年記念」で西新尋常高等小学校児童らによる掘り起しが行われ、1970（昭和45）年にその隣接地で発掘調査がなされた。1970年の成果によると、石積み擁壁が海側・陸側の両方にあり、その間を砂と砂混じり粘土の互層で埋めていた。残存高1.2m、基底部幅は3.5mであったが、現在指定地の中に整備されている1920年発掘の防塁はそれより幅が狭く、戦前の発掘後の補修や改築の結果、本来の姿と異なっている可能性があるようだ。石材産地に恵まれず、室見川対岸の愛宕山一帯の砂岩、能古島の玄武岩も運んだと推定されている（柳田 1988）。中山資料には「百道松原東部」と記す石材が3点あり、この地点での採集品であろう。

藤崎の元寇防塁（早良区百道1丁目）史跡指定地内では長さ約20m、幅2mにわたって多数の礫が露出している。発掘調査が行われておらず、詳細な構造は不明であるが、今津地区の防塁のように、海側・陸側の擁壁間にも石を詰めた構造であった可能性がある。中山資料には「百道松原西部」と記す石材が1点あり、この地点での採集品であろう。

以上の地行から藤崎に至る区間の防塁築造を分担したのは筑前国・筑後国であった。

「百道原の西方なる監獄近くに至れば、石壘の残石として陸の浜石が多く出て来ることである。陸の浜石といふても今昔く此地方に於て建築材料として使用せらるゝ青味を帯びた稍堅い深層から出る石ではない。帯黄緑色の粗塊なる石即ち愛宕山、興雲寺山等の表層を為して居る岩石と同質のものである。此の事は石壘築造の際に其の材料を何處から取ったかを推定する参考となるのである。」（中山 1913a）

「監獄の塼際迄は余が履行した處であるが、監獄に入れらるゝ事は余の好まざる處であるから」

(3) 室見川から名柄川まで

ここで室見川を渡り、名柄川まで辿る。

「室見川を渡って、愛宕山（現在、愛宕神社がある山）、興雲寺山（現在、蛭浜小と蛭浜中の間の山）は天鏡を利用したもの見えて、人工を加へた様子が無い。然し往時は何等か適當の防備はあったのであろう。興雲寺山の西、蛭ノ浜町の北海岸には名柄川口との間（蛭浜中の西側）に短篠域の土手が遺存して居て、今墓地となって居る。」

(4) 名柄川から西へ

「此の邊より以西の土手が今でも海岸線に近くあるのであって、土手の直下の處には博多灣の男波女波の舞踏を演じて居るのである。名柄川を渡って此の川口の岩山（丸隈山のこたか）と丸隈山（中隈山の誤りか）との間にも短篠の土手があり、一部は墓地となりて居る。其の邊に短篠石片と赤色の石の破片とが散乱して居る。赤色の石は何處から出るか不明であるが、此の地の附近には種々の工事に用みられて居るのであって、産地が甚だ近き處にあるを示して居るやうである。」（中山 1913a）

上記の「名柄川を渡って此の川口の岩山（丸隈山のこたか）と丸隈山（中隈山の誤りか）との間」にある「短篠の土手」が「脇の元寇防塁」史跡指定地である。名柄川と妙見岬の間には東から丸隈山・中隈山・小戸山があるが、中山（1913a）では、丸隈山を「川口の岩山」、中隈山を「丸隈山」と誤記しており、中山（1915）では正しく記している。

脇の元寇防塁（西区小戸1丁目）小戸岬から愛宕山に至る1.8kmの区間の築造を分担したのは肥前国で、そのうち中央部分だけが現存している。マリノアシティ福岡の南側に史跡指定地があるが、地表に石積みの痕跡は現れていない。1979年の調査では、3～5段の石積みが残り、愛宕山一帯に産する砂岩で築かれていた。基底部幅が4.0mと広く、粘土の使用がなく全体が石積みであったという（柳田 1984・1988）。

小戸宮東の防塁 中山は、「丸隈山（中隈山の誤りか）と小戸山との間」にある「短き土手」を重要視したが、残念ながら現存していない。中山資料には「小戸宮東」と記す石材が2点あり、この区間での採集品であろう。

「丸隈山（中隈山の誤りか）と小戸山との間にも赤短き土手がある。此土手の頂邊に産亂して居る、一部は粗粒なる短篠石、一部は東部にあつた赤石である。此の土手の頂部には人が多く来らぬ為であるが、一ヶ處に僅か許り石疊の全幅と思はるべき物を遺して居る。幅は約四尺である。予が元寇防堤の石疊を以て今迄人が想像して居たものと全然異を異にして居ると思ひ初めたは、此の小戸山の東の少し許りの石疊の殘趾を見た時に初まつて居る。」（中山 1913a）

(5) 妙見岬から南へ

妙見岬から南下して十郎川に至る。

「小戸山と妙見岬との間の僅か許の地には土手があったや否やは不明であるが、どうも無かつたらしく想像される。御膳立の附近より始まつて生の松原の海岸には歴然たる土手が遺存して居て、其の東端に近き邊が墓地となって居る。總て墓地の附近は他石が混ざる怖れがあるから、陳列した築石の標本は墓地从ら取つたものは一つも無い。」（中山 1913a）

御膳立と十郎川の間防塁のうち現存する中間部分が「向浜の元寇防塁」史跡指定地である。
向浜の元寇防塁（西区小戸3丁目）小戸岬から十郎川に至る0.6kmの区間で、築造を分担したの

は肥前国。現在は小戸公園の南側に史跡指定地があるが、地表に石積みの痕跡は現れていない。昭和初期の調査では、前面を石積みとし、後方を粘土で固めていたとされ、生の松原地区と同じである。

(6) 十郎川から南へ

続いて十郎川から長垂山まで向かう。

「少し行くと十郎川といふ小川がある。幅僅かに三四間（今記憶明かならず）位のものであるが、此の川口に於ける土手の構造は予を喜ばしめた。即ち此の川口に於ては土手が他地に於ける如く海岸と平行せずして、八字形をなして内地へ曲り込んで居るのである。此の所見より推すと、防塁は総て川口に於ては特別の形を為して屈た様と思はるゝが、此の川口程明瞭に其形を遺して居る地は他に無い様である。」(中山 1913a)

「十郎川を遡りて少しく行つた處に又一箇所土手の頂部に少し許り石畳の全幅を昔の儘に存して居る所がある。之れも亦幅約四尺である。」「石畳の礫石と推定すものは此の附近から長垂山の近く迄甚だ多く散乱して居る。」(中山 1913a)

上記の十郎川から長垂山までの間の防塁が「生の松原元寇防塁」史跡指定地である。

生の松原の元寇防塁（西区生の松原1丁目・小戸5丁目）長垂山から十郎川に至る約1.8kmの区間。築造を分担したのは肥後国。「蒙古襲来絵詞」に、竹崎季長一行が、菊池武房主従の陣取る防塁の前を、行進する場面が描かれている。1968（昭和43）・98（平成10）年に発掘調査がなされた。海側に現存最大高さ約1.8mの石積み擁壁が残り、石積み擁壁の厚さは1.2～1.3mで、擁壁の内部は小礫と砂で充填されている。擁壁の裏側は粘土を版築状に積んで補強されている。東端部に当たる小戸5丁目の整備地では本来の高さまで推定復元されており、東側と西側で石材が変わっている部分がある。石材は地区の西側の大部分ではベグマタイト（巨晶花崗岩、長垂山で産出）、東端部の九大宮舎裏以东で砂岩（小戸から愛宕山一帯に分布）とされている（柳田 1984・1988）。中山資料には「生松原西部」と記す石材が6点、「生松原東部」と記す石材が3点ある。

(7) 長垂山から西へ

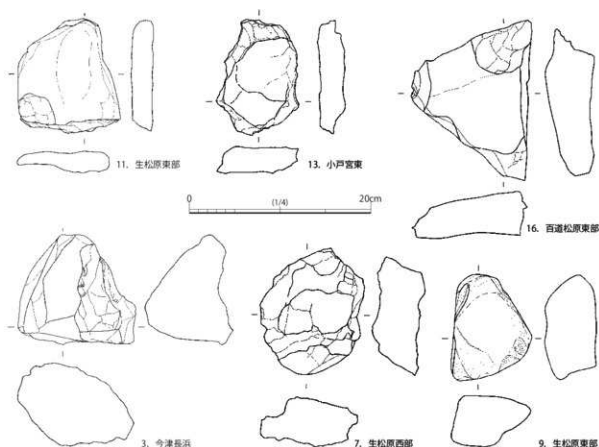
長垂山を越えて今宿に出る。今宿から今山に至る区間の防塁のうち東端部が「今宿の元寇防塁」史跡指定地である。以下の記述は中山（1915）に拠るため北から南へ向かう。

「今山より起りて海岸に沿ひ、長垂山の西（西の誤記か）側麓川口の邊に達する。壘址たること疑無き陸地線あり。」「此部に於ては其東端部に小なる割石の遺存せるに過ぎぬ。」(中山 1915b)

今宿の元寇防塁（西区今宿駅前1丁目）長垂山から今山に至る約3kmの区間で、築造を分担したのは豊前国。長垂山に近い鯉川左岸の部分のみが確認・保存されている。未調査で正確な位置や構造は不明である。今宿から北に進み毘沙門山から柑子岳に向かう。以下の記述は中山（1915）に拠るため西から東へ向かう。

「今津長濱の海邊に沿ひて東方毘沙門嶽に達する。陸地測量部の地圖にも明示せられたる堤防状陸地あり。其頂部には夥しき亂石を存し、壘址たる事確實なるものである。先般石垣が発掘せられたるは其東部の二箇所である。」

今津の元寇防塁（西区今津）柑子岳の麓から毘沙門山に至る約3kmの区間。築造を分担したのは日向国・大隅国。1913（大正2）年に史跡現地講演会に際して二ヶ所が発掘された。1968（昭和



第77図 中山平次郎採集の防壁石材 (岩石学的分析を行ったもの)

43)・1971 (昭和46)年に保存工事に伴う発掘調査が実施され、その後、約200m分が露出整備公開されている。

防壁は浜堤の海側斜面上に築かれ、石積み擁壁が海側・陸側の両方にあり、海側の高さ約3m、陸側の高さ約2.5mである。擁壁間の基底部幅約3m、上面幅は約2.5mで台形状を呈する。石材は花崗岩(柑子岳一帯産)と玄武岩(毘沙門山一帯産)であり(柳田1984・1988)、オオヘビガイやカキなどの貝殻が付着した石材が多くみられるので、海岸部の転石を小船や筏で築造担当所の波打際まで運び、そこから引き揚げたと考えられている(柳田1984)。花崗岩の築造区では内部に砂を詰め、玄武岩の築造区では内部も石を詰めていた。中山資料には「今津長浜」と記す石材が3点ある。

3. 中山平次郎の石材考察と収集石材

中山収集の石材には墨書で採集地が記されている。「地藏松原」が1点、「百道松原東部」が3点、「百道松原西部」が1点、「小戸宮東」が2点、「生松原東部」が3点、「生松原西部」が6点、「今津長浜」が3点、判読できない物が3点で、計22点ある(第77図)。

以下、再度、中山の防壁石材関係の記述を確認しておこう。本稿では九大構内の防壁は省略したが、防壁使用石材については箱崎地区のものにも触れておく。

箱崎の防壁の石材のうち、九大創設期のグラウンド造成中に出土しキャンパス内で保管されていた3個の石について中山は、「三個共に名島産のもの、如くである」(中山1913a)、「工科大学内の三石

及び同大学北邊の隆地線に於て發見すべきは、名島を構成せると同質の岩石である。」(中山 1915)と述べ、1915(大正4)年に元寇防塁の石材について報告した木下謙太郎も、「名島産の蟹岩である」と述べていた(木下 1915)。「蟹岩」は礫岩に当たるようである。

百道原では、「西方なる監獄近く」では「姪の浜石」が多く、その中でも「今昔く此地方に於て建築材料として使用せらるゝ青味を帯びた稍堅い深層から出る石」ではなく、「帯黄緑色の粗澁なる石即ち愛宕山、興雲寺山等の表層を為して居る岩石と同質のもの」であると言う(中山 1913a)。「百道原には遺石多からざれども其西端部には姪の濱の濱の砂岩多く能古石之に混ざるを見る」(中山 1915)とも言っている。

生の松原では、「生ノ松原に於ける遺石原産地の關係は甚だ特異にして、概して其西部には長垂山の粗粒質の花崗岩多く、又東部には姪の濱附近の山を形成せる砂岩多く、各部共に能古石を混ざるのである。」(中山 1915)

生の松原の防塁の石材について中山は、特に詳しく記述している。

「生の松原を東西の二部に分て申して見やう。東部に於て目に付く築石には概して姪濱石が多く交り、殊に私が拾ふて来た姪濱石の破片中には著名の層疊を表したものが有る。石の層疊が如何にして出来たものであるかは専門外のごとで、未詳であるが、以上の層疊は姪の濱石産地上層の處、殊に生の松原の東端、御願立の近傍には之が著名に表はれて居る。東部には姪の濱石の他に玄武岩も、南北朝時代の石碑に多く用ゐられて居る灰色の石も、其他種々なる石が混用されて居る。所によると海邊の自然石が主として用ゐられて居たと推定すべき地もある。石疊は九州諸豪族に課して築かした者であるから、他地に多く見無丸石が或部に塊つて居ると云ふことは、分擔の異なり、石材の取り處の相違を表はして居る様である。生の松原の西部に今最も多く散亂して居るものは粗粒性の花崗岩に似た石、一口にいへば長垂山の岩石である。」(中山 1913a)

今津では、「今津長濱に遺存せる築石は甚多種なれども、要するに其西邊なる山地に露出せる岩石及東邊兎沙門嶽を構成せると同質の岩石にして、之に混じて能古産の玄武岩が採用せられたるのである。」(中山 1915)

防塁の石材産地に関する全体的検討として以下の様に述べる。

「以上の伊崎以西長垂山迄の間の土手に遺棄せられて居る亂石を見て歩いて何か知らるゝかと云へば、之は石疊築造材料が主として該當局部に近接した土地から取られ又一部は遠隔した地のものを以て補はれて居るといふことである。甚だ平々凡々たる結論であるが之れは単なる空想では無い、一定の事實に基いた考説である。結論が平凡なのは問題の性質によるのであるから已むを得ん次第である。」(中山 1913a)

「用石は其質該當局部の附近に露出せる岩石と同質なるもの多し(福岡沿岸ならば荒戸山の石が多く混入しある様に思はる。此ことも必然には非ずして船舶を利用し築石を他の沿岸若くは島嶼に取り補ひたる形跡あり。但し博多灣の沿岸及び島嶼より産せざる遺地の石を採用したる形跡は無し。)」(中山 1913a)

「約言すれば、防塁の築石は其局部最近の産地を構成せると同質にして、之に混じて最近の島嶼に産するものが用ゐられたるのである。」(中山 1915)

一方所の防塁でも使用石材が、局所的に異なる点については、

「一の限局部に於ても種々質を異にせる石が混用せらる(此ことは必然には非ざるべしと雖も故らに石質を齎せしめたる形跡なし。)」(中山 1913a)

「初め余は今津長濱の亂石を調査し、石質が或る部に於て俄然相違を表せる所多きを見て、分擔者の相違を示したるものならんと想像したりしが、爾後木下氏は畧一船に積まるべき程の分量毎に相違あるを抽出せられたり。余の初の想像よりは寧ろ木下氏の案が當れる如く思惟せらるゝ。先般發掘せられたる局部に於ても此岩質の俄然の相違を認知し得るのである。」(中山 1915)

石材の大きさや形状については以下の様に述べる。

「築石の大きさは渾沌石大のものを大多数とし、遙に巨大にして之を運搬するに數人を要する程のものは見ず。」「形状は偏平若しくは稍平た目なる自然石若くは亂懸に打缺きたる岩片にして特に割面を整へたる形跡見えず。」「割縁部に切れ込みを有するものは見えず。」(中山 1913a)

4. 木下謙太郎の石材考察

1913(大正2)年に実施された福岡日日新聞社主催の「史蹟現地講演会」の報告として、1915(大正4)年に刊行された「元寇史蹟の新研究」において、元寇防塁の石材について報告した木下謙太郎の記述もまとめておく(木下 1915)。

「荒津山より箱崎一帯の防塁」「巖岩、玄武岩帯」とする。この間の防塁は「荒津山及び櫓屋郡名島とより運ばれし巖岩と早良郡残島より運ばれし玄武岩この二岩石を以つて構成されしことは間違ないと思惟さる。」「残島」とは能古島を指す。

「百道原一帯の防塁」「砂岩、巖岩、玄武岩帯」とする。「巖岩」は礫岩に当たるようである。荒津山から室見川に至る防塁を「百道原一帯の防塁」と纏めているので、地行、西新、藤崎の指定地が含まれる。

「此一帯の西部石疊は愛宕山産出の砂岩」、「東部即ち福岡市地行の海濱を経て荒津崎迄は玄武岩、巖岩が使用されて居る。」「此巖岩は荒津山に、玄武岩は対岸残島に産出するので此二箇所より船舶により運漕されたものである。」

「生ノ松原一帯の防塁」「粗花崗岩、砂岩帯」とする。木下は今山から室見川河口左岸の愛宕山に至る防塁を「生ノ松原一帯の防塁」と纏めているので、今宿、生の松原、向浜、藤の指定地が含まれる。

「生ノ松原の中央より以北は、石質改まり小戸山、中隈山、愛宕山産出の砂岩が凡そ石疊の材料として使用されたのである。」「防塁の石材とされる砂岩は、如上三山の表層に現はれたる黄褐色のものが選ばれたのである。」

「今宿沿岸の防塁」は「多く破壊を受けて居るが残墟をよく調査すると、石疊には、糸島・早良両郡界に聳えたる長垂山原産の粗花崗岩が使用せられて居る。」そして「此粗花崗岩の中に角閃岩・輝岩が石疊材料として所々に交へられた一事」に注目する。両者が「毘沙門嶽北麓沿岸及び寶島附近の産で、交へられた分量は船一隻宛の積載量である」との判断に基づき、「今宿沿岸のみならず全般元寇防塁の岩石運搬法」を「凡て船舶に依つて行はれたことを発見した」とする。

「生ノ松原一帯の防塁は前記二石を使用して居る」ので「粗花崗岩、砂岩帯と申す。」

「今津長濱の防塁」「六種の岩石より成れる混合帯」とし、西から東に向けて記述する。

閃緑岩は「柑子嶽に近い西方」に見られ、その産地は「今津村の津舟崎の北方沿岸則ち今津村大原より小田濱に向ひ濱江に沿うて四五町を行くと、沿岸一帯此閃緑岩の産地である。防塁に使用された閃緑岩は凡て此地點より運ばれたのである。」

角閃岩・輝岩が東方で見られ、「今津長濱の防塁」では「最も大部分を占めて居る。」「大原なる村落を超へ防塁に沿ひ東に進むと、閃緑岩は減じて防塁の石が全く改り、深緑の岩石、淡緑の岩石が現れてくる。深緑のものが角閃岩で、淡緑のものが輝岩である。そして緑色に白線の縞に交じって居るのが千枚岩である。」それらの産地は、「今津毘沙門嶽の北麓、即ち牛頸崎以東の海岸」であり、「牛頸崎を越ゆると角閃岩・輝岩の大きなもの小きもの圓きもの長きもの」などが「幾萬と数を知らず轉ろがって居る。」「長濱防塁の角閃岩、輝岩は毘沙門嶽北麓より運ばれていたのである。」

滑石は所々に混じり「毘沙門嶽の東方寶島附近が原産地なることも今回確め得たのであった。」

蛇紋岩も使用され、産地は「今津入り江則ち瑞梅寺川の河口濱崎の沿岸である。」

玄武岩も使用され、「今津毘沙門嶽は、玄武岩を骨子として出来た山岳で、此山の西面中腹には一尺五六寸乃至二尺に垂んとする石墨材料に恰當せる玄武岩の断片が簇々堆積されある。」「長濱防塁に使用された玄武岩はこの毘沙門嶽より投下したものである。」

「今津長濱の防塁は主として閃緑岩、角閃岩、輝岩、蛇紋岩、玄武岩、滑石の六種より構成されておる。」「混合帯と言ったのはこれが為である。」

「結論」 結論として以下の3点を述べている。

「第一に元寇防塁に使用されし岩石は、「變質岩（變成岩）」は「角閃岩、輝岩、水成岩類」は「第三紀層」の「砂岩、礫岩」、「火成岩」は、「花崗岩、蛇紋岩、閃緑岩、玄武岩」である。

「第二に防塁に使用されし岩石は、凡て附近の山岳と高地とより運搬されしこと。」

「第三に防塁に使用されし岩石は、凡て船舶を以つて運ばれたものと斷定を致す。」

5. 中山・木下の考察結果を受けて

中山・木下ともに専門の地質学者ではないし、両者の検討は、肉眼観察のみに基づく認定であるため、その判断の妥当性が問題となるとともに、当時の岩石分類や呼称と現在のそれとの関係も問題となる。しかし、詳細極まる観察と記述は元寇防塁研究上、今日でも色褪せていない。とはいえ、今日、両者の文章そのものが取り上げられることは少なく、若い研究者は旧仮名遣いの古い文体にもなじみが薄い。本稿であえて引用を多くして紹介した次第である。両者の検討結果をまとめ、異同を明らかにするとともに、足立達朗氏による「中山平次郎収集の元寇防塁構築石材の岩石学的分析」の成果とも照合しておこう。

箱崎から荒津山までの元寇防塁 中山は箱崎の防塁については、糟屋郡の名島産、名島と同質の岩石とする。木下は、東方では名島の「礫岩」、西方では荒津山の「礫岩」と残島（能古島）の「玄武岩」が運ばれたとみる。足立達朗・田尻義子による箱崎キャンパス内の防塁石材の岩石学的分析では、礫質砂岩・砂岩・礫岩・泥岩であり、名島層の岩石とおおむね一致し、多くが名島層から採取可能と考えられるが、名島層以外の河川流域の転石も一部に用いられている可能性があることがわかった（足立・田尻 2018）。

荒津山から室見川までの元寇防塁（地行・西新・藤崎） 西公園がある荒津山から室見川までの区間は、東半と西半で様相が異なる。東半について木下は、荒津山産の「礫岩」、残島（能古島）産の「玄武岩」が使用され、両者は船舶により運ばれたとみる。

西方について中山は、西端の「監獄近く」では「姪の浜石」が多く、その中でも「青味を帯びた稍堅い深層から出る石」ではなく、「帯黄緑色の粗漚なる石」即ち愛宕山・興雲寺山等の表層をなす岩石と同質とし、「姪の浜の砂岩」が多く「能古石」が混じるともいっているから、「姪の浜石」は砂岩、

「能古石」は玄武岩であろうか。木下は愛宕山産の「砂岩」とする。

足立の分析した資料番号16（百道松原東部）は、「カンラン石単斜輝石玄武岩」で能古島産に近いと言ふ。中山・木下ともに能古島の玄武岩があると推定しており、裏付けられたことになる。

愛宕山から今宿までの元寇防塁（脇・向浜・生の松原・今宿）この区間では、生の松原の東部である現在の九大宿舎裏側くらいを境に東西で石材が変わることは共通認識であった。

愛宕山から小戸山を経て生の松原東部に至る防塁について、中山は「姪濱石」でも「産地の上層」の物が多く、ほかに「玄武岩」、南北朝時代の石碑に多く用いられた「灰色の石」、「海邊の自然石」などが混用されたと見る。「姪濱石」は「姪の濱附近の山を形成せる砂岩」を指し、「能古石を混ぜる」とも言っている。「能古石」は「玄武岩」の事であろうか。木下は、「小戸山、中隈山、愛宕山産出の砂岩」が大半とし、これら3山の「表層に現はれたる黄褐色のもの」とみる。愛宕山から小戸山に至る沿岸部の砂岩が主体とみる点で中山・木下の認識は一致する。

足立の分析した資料番号13（小戸宮東）・11（生松原東部）は、「カンラン石単斜輝石玄武岩」で能古島産に近いと言ふ。資料番号9（生松原東部）は、「変斑レイ岩」であり、能古島と今津半島に産するという。能古島の玄武岩であれば、中山の推定を裏付けることにならうか。

生の松原西部について、中山は長垂山の「粗粒質の花崗岩」「粗粒性の花崗岩に似た石」とみており、木下は明言していないが今宿と同じく長垂山原産の「粗花崗岩」とし、認識が一致している。

足立の分析した資料番号7（生松原西部）は、「ザクロ石を含むベグマタイト」で「含紅雲母ベグマタイト岩脈」で知られる長垂一帯に産するとされているから、この区間の防塁に特徴的にみられる石材である。

今宿の防塁について木下は、糸島・早良両郡界の長垂山原産の「粗花崗岩」を主とし、見沙門山北麓沿岸・宝島付近産の「角閃岩」「輝岩」が混じるとする。中山は特に触れていない。

今津の元寇防塁 東方と西方とで様相に違いがある。東半では、中山は、見沙門山由来の岩石（種を特定せず）と能古島由来の玄武岩とする。木下は見沙門山北麓沿岸に由来する「角閃岩」「輝岩」「玄武岩」、見沙門山東方の小島・宝島由来の「滑石」、今津入江沿岸由来の「蛇紋岩」があるとする。中山と木下で、玄武岩産地を見沙門山とみるか能古島とみるかが異なるが、他を見沙門山由来とみる点では一致する。西半では、中山は西方の山地由来の岩石（種を特定せず）、木下は沿岸一帯由来の「閃緑岩」とし相違があるが、防塁の西方の近場由来とみる点では一致する。

足立が分析した資料番号3（今津長浜）は、「黒雲母-ホルンブレンド片岩」であり、能古島-今津地域に分布する三部-蓮華変成岩類のうちの白亜紀花崗岩類によって接触変成作用を受けた岩石と類似するとされているから、三部-蓮華変成岩類と白亜紀花崗岩類が隣接して分布する防塁の西方に由来すると言えよう。

まとめに替えて

総合研究博物館に収蔵されている元寇防塁の石材が、中山が収集した防塁石材のすべてか一部かは不明であるが、各地域の防塁を構成する代表的な石材が選ばれているのであろう。中山の考察中の岩石種の認定には誤りもあろうが、個々の地域の防塁の石材調達範囲、すなわち、基本的に近隣の海岸・沿岸部・山岳から調達され、能古島からも選ばれた、とする点については、概ね妥当な結論に達していると思われる。それは個々の防塁のみならず、周辺各地の海岸や山野で類似した石材を探した地道な踏査の成果でもあっただろう。とはいえ、中山や木下の仮説の検証のためには、今回実施した

ような石材の詳細な岩石学的分析をさらに進める必要があるであろう。

謝 辞

総合研究博物館の米元史織氏は、博物館資料の移転作業の過程で、収蔵庫の片隅の箱群の中から中山先生収集の防塁石材を「再発見」してくれた。そのため、今回の岩石学的分析や検討が可能となった。あらためて米元氏に謝意を表する。

小稿の執筆に当たり九州大学埋蔵文化財調査室の三阪一徳氏・齋藤瑞穂氏・福永将大氏にお世話になりご教示を頂いた。挿図製作では谷直子氏・石井若香葉氏を煩わせた。記して謝意を表する。

2019年11月20日提出

引用文献

- 足立達朗・田尻義了 2018「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室 68～78頁
- 伊藤慎二 2017「西南学院大学構内のもうひとつの元寇防塁遺構：大学博物館北側の元寇防塁」『西南学院大学国際文化論集』第31巻第2号 西南学院大学術研究所 121～144頁
- 井上麻子 2008「博多の元寇防塁」『中世都市・博多を掘る』海鳥社 48～51頁
- 岩永省三 2018「中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス」『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室 125～145頁
- 鏡山 猛ほか 1968「生の松原元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査—」福岡市教育委員会
- 鏡山 猛ほか 1969「今津元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代（13世紀）における蒙古襲来に対する石築地の第二次（昭和43年度）調査—」福岡市教育委員会
- 木下謙太郎 1915「元寇防塁の石」『元寇史蹟の新研究』丸善 336～352頁
- 中山平次郎 1913a「福岡附近の史蹟一珠に元寇の史蹟—」九州帝國大学医科大学雑誌部
- 中山平次郎 1913b「箱崎の石塁」『福岡日日新聞』大正2年6月12日～20日、(中山(1984)『古代の博多』に収録、214～236頁)
- 中山平次郎 1913c「元寇防塁の価値」『福岡日日新聞』大正2年7月27日～31日、(中山(1984)『古代の博多』に収録、238～249頁)
- 中山平次郎 1915「元寇防塁址と博多湾沿岸の地形変化（上）（中）（下）」『歴史地理』第25巻第3・4・5号、293～319頁・425～450頁・542～552頁
- 中山平次郎 1984『古代の博多』九州大学出版会
- 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」『古代の博多』九州大学出版会 365～394頁
- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世』第1巻 平凡社 180～194頁

箱崎キャンパス内外の元寇防塁推定線再論

岩永省三

はじめに

岩永は、『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』（福田・森編 2018、以下、『報告1』と略す）に掲載した「中山平次郎の元寇防塁位置研究と九州大学キャンパス」（以下、前稿と略す）において、中山平次郎の1912（大正元）年の踏査成果に基づいて、九州大学箱崎キャンパス内の元寇防塁位置の推定を行った。この仮説は、『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—』報告書（三阪・谷編 2019、以下、『報告2』と略す）および本報告書（以下、『報告3』と略す）で詳細に報告がなされた2017年度以降の発掘調査の進展によって、大枠では検証されてきたが、細かい点で修正を要する点も出てきたので、本稿の1・2で詳述する。

また、箱崎キャンパスの南側および馬出キャンパス内の元寇防塁推定線について前稿で論じ残した点もあるので、3・4で述べる。

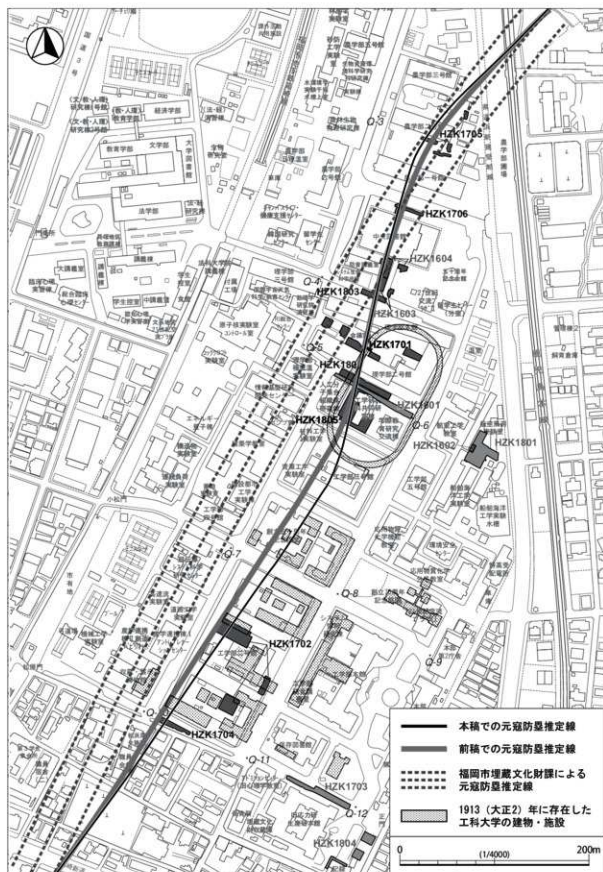
箱崎キャンパス内の調査で明らかとなった、元寇防塁の構造に関する新知見として、防塁の内側の大規模な空堀の存在が特筆される。5では元寇防塁と時期が近い福島県阿賀志山防塁を取り上げつつ、中世前期の騎馬軍防衛法に言及する。

1. 中央図書館と地藏松原の間の元寇防塁推定線（第78図）

2016年に、中央図書館の南側にある防音講義室の南側のHZK1603地点で比較的良好な状態で防塁が発見され、防音講義室の北側のHZK1604地点で、その北への延長部が見つかった。前稿の図4に記した元寇防塁推定線では、防音講義室の北側、中央図書館と重なる部分ではわずかに東に振らせ、中央図書館の東西中軸線と直行する方向とし、そのまま農学部1号館まで伸ばし、そこから緩いカーブを描いて、地藏松原の史蹟指定地に至る推定線とした。

ところが、『報告2』で報告したHZK1706地点では、HZK1603・HZK1604地点の防塁線をまっすぐ北に伸ばした位置で防塁を検出した。つまりその防塁線は、中央図書館と重なる部分で、図書館の東西中軸線と直行せずに、北で西に触れる方向となる。さらに本稿を執筆している時点では発掘調査に入っていないが、HZK1706地点に北接する地点での立会調査（2019年8月21日）では、HZK1604・HZK1603地点の防塁とHZK1706地点の防塁を結ぶ線をそのまま延長した方向に防塁線が伸びて農学部1号館に至ると言う情報が得られている。つまり、農学部1号館地点で、前稿図4での推定位置より、西に約10m海側に寄ることになる。したがって、農学部1号館を北に越えたあたりから強めのカーブを描いて地藏松原の史蹟指定地に至っていたことになる。

カーブでなく折れ線となるかが問題であるが、元寇防塁は基本的に浜堤の頂部付近に築いているし、自然の浜堤はカーブを描くであろうから、あえて折れ線にしようとするれば、角部分が浜堤の頂部から外れて海側に降りてくることになり、防衛上不合理であるから、やはり浜堤と同じくカーブを描いていたと考えるべきであろう。第78図に前稿図4の推定線と今回修正した推定線を重ねて示したので、参照されたい。



第78図 元冠防塁推定線の変更

2. 工学部地区内の元寇防塁推定線 (第78図)

箱崎キャンパス南半部の工学部地区内での防塁推定線を再検討する。前稿執筆の時点では、『報告2』で報告した理学部2号館北側のHZK1701地点の防塁はすでに見つかった。また『報告1』で報告された理学部2号館南側のHZK1601地点では石積みはなかったものの礫の集合体から防塁の位置はほぼ推定できた。しかし、それより南については、中山平次郎の記述しか手掛かりがなく、1913(大正2)年の建物配置を参照しつつ、前稿図4のような推定線を描いた。つまり、HZK1601地点の南側、工学研究科共同研究棟のあたりから西にカーブし、50周年記念講堂の中央やや西側を通り、工学部2号館の西南隅を通過して、箱崎キャンパスの外に出て、職員会館の東側の細い道路付近を通過して南に延びていくルートである。

その後『報告2』で、HZK1601地点のすぐ北側のHZK1802地点とHZK1601地点のすぐ南側のHZK1805地点が報告された。その結果、HZK1805地点内における防塁は、HZK1603地点の防塁とHZK1701地点の防塁を結んでそのまま南方向に直線的に延長した状態となり、HZK1805地点外にしばらく直線的に伸びていくと推定できる。つまり、前稿で推定したようにHZK1805地点の範囲内から徐々に西方向にカーブするものではないという事が判明した。しかし、工学部を南に出た場所では、次項に述べるように、九大職員会館の東側道路付近を通る可能性が大であり、その点では前稿での考えを変える必要はないから、第78図に示したように、工学部3号館から記念講堂にかかる位置で、方向を大きく西にカーブさせないと取まりがつかない。この結果、工学部2号館から3号館にかけての場所では、防塁推定線は、前項の推定位置より最大25mほど東に寄ることとなった。

その場合問題となるのが、HZK1702地点A区で発見された「溝状遺構」である。これが他の調査区において防塁の内側で発見された大溝(空堀)と一連の物であれば、防塁はその西側、工学部2号館建物の長大な南北棟の下に来ることになる。その場合、防塁推定線は、『報告2』p154図1のように、工学部3号館から記念講堂にかけて強めに西へカーブし、記念講堂を過ぎてから東へ戻し気味にカーブするという逆S字状のカーブを描くことになる。しかし、2019年夏に始まったHZK1901地点の調査(継続中)ではHZK1702地点で大溝と認識した遺構が溝ではなく、大溝は東側に寄る可能性が出てきており、HZK1702地点の防塁本体も、前稿あるいは『報告2』での推定位置より東に寄る可能性が出てきた。この問題については、HZK1901地点の調査終了後に再検討したい。

3. 工学部の南外の元寇防塁推定線 (第79図)

工学部内の一連の調査によって、防塁は工学部2号館の西南隅を通過して、南側に延びて行くことが判明した。その延びて行く方向については前稿で述べたが、補足をしておく。

中山は、南から北へ向けて「網屋町では防塁が何處を通過して居たか跡を遺して居らぬ様であるが、町を過ぐると防塁は明瞭なる土手として顕はれて来る。」「即ち同地の東北にある墓地の土手がそれである。」「以上の土手は東北に向かって走り、工科大学の柵の近くに至りて消滅して居る」(中山1913a)。

網屋の東北にある「墓地の土手」は別の論文では「一光寺裏の低き墓地」と明記されている(中山1915)。明治から昭和初期まで一光寺裏の墓地は、海側に底を向けた長靴のような形で、南北約140m、東西約110mを占め、一角に中山が防塁とみなした「土手」が残っていたようだ。しかしその後、1936(昭和11)年までに、東西約75m、南北50~60mの台形に縮小され、しかも全体に周囲の道路よ



第79図 工学部及び工学部南外の元寇防塁推定線

A 1926年の状況 B 『箱崎方面元寇防塁平面図』 C 2015年の状況

り高く盛り土されて現在に至っているから、そのどの辺が土手であったのかは、現状の墓地だけを見る限り判らない。しかし、周囲の道路には手掛かりがある。

2018年3月に福岡市埋蔵文化財課の池田祐司氏から、九大医学部・工学部・農学部を含む地域の第二次大戦前の精密な地図（1/8000）を提供いただいた。西部軍作成で「極秘」の印が押され、工学部・農学部の建物が細かく表現されている。それを年度別の工学部・農学部平面図と照合すると、1926（昭和元）年の状況であり、1927（昭和2）年には下らないと判明した。この地図には当時の一光寺墓地が細かく表現されており（第79図A）、中山が踏査した1912（大正元）年に近い1911（明治44）年修正の陸軍陸地測量部作製の仮製2万分の一地図の当該部分とも大差なく、中山が見た状況を知る手掛かりとなる。この墓地のどこに「土手」があったかは、前稿で詳細に記した、『箱崎方面元寇防塁平面図』（福岡市埋蔵文化財調査課蔵）に記されている。その一部を第79図Bに示した。さらに2015（平成27）年の市街地地図を第79図Cに示した。第79図Aと第79図Cを比較すれば、第79図

Aの一光寺墓地の形状は第79図Cでトーンをかけた範囲にほぼ残っていることが判る。第79図Bで「土手」を示す線は、第79図Cの道路①附近となる。第79図Bの「土手」を北に伸ばした線は、第79図Cの道路②（職員会館脇道路）の附近となる。道路①・道路②ともに、周囲の街区の道路と方向が異なっていることが一目瞭然で、それは防塁の名残であるがゆえと考えられる。道路①・②が防塁の頂上に当たるのか脇を走っていた道に当たるのかは即断できないが、周囲より高かった部分が里道として生き残ったとみる方が良からう。

4. 医学部内の元寇防塁推定線補説（第80図）

前稿で、中山平次郎の記述（中山 1913a）と1912（大正元）年の「医科大学平面図」に基づき、医学部内での防塁ルートを推定した。その後、先に述べたように池田祐司氏から、九大医学部・工学部・農学部を含む地域の第二次大戦前の精密な地図を提供いただいた。それを年度別の医学部平面図と照合すると、1925（大正14）年から1926（昭和元）年の中間の状況であり、1927（昭和2）年には下らないと判明した。

この地図には、医学部の西辺（海側）に等高線が記入されており（第80図A）、年代差はあるものの、それを、1912（大正元）年の「医科大学平面図」に落とし込むと第80図Bのようになる。これを見ると、この等高線が、防塁が遺存した高まりそのものであって、長さ200mに渡って防塁が良好に残っていたように見える。しかし、1912（大正元）年の中山平次郎の踏査記録と照合すると、そうでもなかったようだ。

「防風松林内にそれと思ふ凸地を発見した。」「此の凸地は今高さ三四尺位のものに変じて居るが、（幅は不明なれども二十三十間（36～54m、岩水注）位の間に崩れ広がり居るが如し（…略…）海岸線と平行して東北に向って走り、其の状今宿付近に見たる煙滅に類して居る防塁とよく似て居る。」「此の凸地は西南に向ては火葬場附近の堤防と通らなつては居るが此の部分は大学構内のものと同時代に出来たものが否かは明かでない。」「防風松林内の凸地は海岸線と平行し、東北に走りて居ることは明白ではあるが、山形の地として見えて居るは解剖学教室の裏の辺迄にて、其の以東は（医化学教室裏の桑畑の存在より考ふれば既往より斯くなりて居りしが如し）。」「大学の「テニスコート」の近くに至れば其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ、唯大学の北境に幅狭き土手を遺して居るに過ぎぬ。」「中山 1913a）

第80図Aの等高線では、病理学教室の裏あたりから北へ向かって、200mほどずっと高まりがあり全部が防塁の遺存体のように見えるが、以上の中山の記述では、1912（大正元）年の段階ですでに、薬学教室の裏から解剖学教室の裏くらいまでは「凸地」が残るが、それ以北ではほとんど削平され、医化学教室の裏では桑畑になっていたという。第80図Bの等高線では、医化学教室の裏手に浜堤が挟れた部分があり、ここが桑畑とすると、防塁はここでは「内面の大半が鋤去せられ」ていたことになるから、西半分しか残っていなかったのであろう。

桑畑からさらに北について中山は、「大学の「テニスコート」の近くに至れば其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ、唯大学の北境に幅狭き土手を遺して居るに過ぎぬ」と記し、さらに残りが悪かったようだ。前稿では、1912（大正元）年時点のテニスコートの位置を不明とし、基礎医学教室群よりもっと北の運動場寄りと推定した。その後、1907（明治40）年撮影の写真から、その時点でテニスコート位置が、法医学教室のすぐ北側と判明した。コートの位置が1912（大正元）年まで変わっていないと仮定して、第80図Bに、通常の規模のテニスコートを入れ込んだ。中山の記



第80図 医学部内の元寇防塁推定線

A 1925-26年の状況 B 等高線を入れた「医科大学平面図」(1912年の状況) C 元寇防塁推定線の変更

述ではテニスコート近くでは「其外面の大部分も亦大学構外の耕地として鋤去せられ」となっているから、内側も外側も削られてやせ細っていたのであろう。ただし、この記述には解せない点もあり、テニスコートより海側30mまで大学の敷地であり、浜堤と松林は全部が敷地内に入っているから、浜堤上に防塁があれば、「大学構外の耕地として鋤去せられ」るはずはない。1920（大正9）年撮影の医学部俯瞰写真では、医学部西辺の松林はまだしっかりと残っていたようであり、松林内が部分的に耕地として「鋤去せられ」ているようにも見えない。こう考えると、1912（大正元）年のテニスコートが、1907（明治40）年と場所が変わり、第80図Bの「運動場」の近くにあり、防塁が「運動場」の西南端の西側の敷地入隅部付近から構外に出ていくとすれば、前稿で記したように、入隅部から北に行くにつれて防塁の「其外面」が「構外の耕地として鋤去せられ」る部分が多くなり、構内に残る部分は北に行くほど「幅狭き土手」となってしまうのが納得できる。

上の検討結果を前稿での防塁推定線とともに第80図Bに加えたのが第80図Cである。防塁推定線は、前稿と北半では重なるが、医学部教室の裏手以南では、浜堤のカーブに合わせて西側に振った。その結果、敷地西南隅の火葬場に近づいた。中山の記述では、「此の凸地は西南に向けては火葬場附近の堤防と連らなつては居るが此の部分は大学構内のものと同時代に出来たものか否かは明かでない」とある。大正2年段階の「火葬場」は校地の西南隅にある。前稿の推定線をそのまま伸ばしても敷地の西南隅から東に約70mの地点に至り火葬場からだいぶずれてしまった。そこで「火葬場附近の堤防と連らなつては居る」の解釈に困ったのだが、今回の推定線なら、第80図Aでわかるように、敷地のすぐ南側にある松林（浜堤）につながるので無理がなくなる。

5. 元寇防塁と阿津賀志山防塁から見た中世前期の騎馬軍防御法

箱崎キャンパス内の元寇防塁遺構では、北から順に、HZK1705・HZK1706・HZK1803・HZK1701・HZK1802・HZK1601・HZK1805・HZK1702・HZK1704の諸地点の諸調査において、石積み遺構が載る浜堤の背部付近（陸側）で、石積みと並行する南北の大溝を検出した（第78図）。大溝は石積みから5mほど離れた位置に西肩があり、幅は約15m、深さは約1.5mである。この結果、防塁の内側には幅15m前後の大規模な空堀が設けられていることが判明した（三阪・谷編 2019）。

大溝には理学部中庭のHZK1701地点以南では黒褐色土が堆積し、12世紀～16世紀の遺物が堆積し、下層から上層にかけて遺物の時期が新しくなる傾向が見られた。出土遺物の様相は地点によって異なり、理学部中庭地点（HZK1701）では14世紀代を中心とする貿易陶磁器や土師器・土錘、石錘、銭貨など、理学部2号館前南地点第1次（HZK1601）では貿易陶磁器・土師器・須恵器・土錘・石錘などであるのに対し、工学部2号館地点（HZK1702）・工学部2号館南側地点（HZK1704）では、日用雑器（土師器・瓦器類）が多い。工学部2号館地点は中世の箱崎道跡群に含まれ、住民の集住域に近いことから、石積みの放棄後に周辺住民の廃棄物が入ったと見られる。中央図書館前北地点以北で黒褐色土の堆積が認められず、浜堤と類似する砂層が堆積しているのは、場所が砂川の先端近くで石積み遺構の終点に近く、付近に住民が居住せず有機質の投棄や堆積が無かったためと評価できる。この大溝については、一部で、2本の南北方向の浜堤間の自然の窪みにすぎず人工の遺構ではない可能性も囁かれていたため、当初は「溝状遺構」と呼んでいたが、理学部2号館前南地点第2次（HZK1802）では、調査区の南壁で、溝状遺構の東側から西に向かって堆積する浜堤の砂層を人為的に掘り込む形で溝が掘削されたことが確認されたのに加え、地質学的調査（ジオスライサー調査）の結果、「砂丘」の発達が非常に悪く、「溝状遺構」がこのような堆積環境下で自然に形成されるもので

はない点が指摘されたことから、「溝状遺構」は、浜堤間の窪みに自然堆積したのではなく、人工的な大溝（空堀）であることが確定した。溝内に堆積する遺物から見て、大溝は石積み遺構と併存し、石積みと組み合わせで使用されたこととみられる。

石積みの陸側に大溝を設ける理由は何か。一見非合理的で、海側に設けたほうが良いように思えるが、そうではない。石積みが元寇防塁であれば、元軍に防塁を突破された際に、すぐ陸側に侵入されてしまうのを防ぐべく、大溝内に追い落とし、防塁側および陸側から弓などで攻撃し撃退する事を目指したと考えられよう。防塁上に着陣する武将らが出入りする陸橋が必要であるから、堀がところどころ途切れていた可能性が考えられる。

このように塁と堀を組み合わせる敵を防御する施設の類例はあるのだろうか。福島県伊達郡国見町にある国指定史跡・阿津賀志山防塁は、奥州藤原氏が源頼朝軍の奥州進入に対する防御施設、騎馬の突進を止めるバリエードとして造ったもので、1189（文治5）年8月の阿津賀志山の戦いの主戦場となった（本木編 1994）。長さ約3.2km、二重の堀と三重の土塁からなり、外堀の肩から内堀の肩までが5丈（15m）である。堀と土塁を組み合わせる騎馬軍や歩兵を防ぐ戦術思想が平安時代末期にあったことがわかる。しかも敵側に向けた正面に堀でなくまず土塁を設けている点で元寇防塁と同じである。押し寄せる敵の弓騎騎兵に対して、まずは彼らより一段高い土塁状から一斉に矢を射かけてその機動性を削ぐ。かりに敵が土塁まで達しても、馬が土塁を超えるには難儀する。土塁を越えた敵は堀に追い落とし、両側の土塁から矢を射かけて殲滅する。堀は二重であるから守りは固い。想定上は、かなりの防御性能を持っていたはずである。

しかし、阿津賀志山の戦い自体は、8月7日夜に鎌倉方が引き連れてきた工兵隊が堀を埋めて人馬の進軍に支障が無いようにし¹⁾、8月8日に防塁の西側（鎌倉側）で合戦が始まり鎌倉方が優勢となり、10日には頼朝が防塁を超えて進軍し国衡本陣（大木戸）を総攻撃し、さらに、鎌倉軍の一部が、防塁が発する北端にある阿津賀志山の西北側の小坂峠を越えて奥州藤原軍の背後、すなわち防塁の内側に回り込んで奇襲をかけたため²⁾、鎌倉軍の勝利に終わった。

鎌倉軍が10日に防塁を超えるのにさほど苦労していないことから、防塁自体はさほど効果を発揮せず（柳原 2015）、むしろ平泉権力の支配が及ぶ境界を示すことに主眼があった（吉井 2005）、あるいは東北武士団の象徴（八重樫 2015）とも評価されている。しかし、敵工兵隊による堀の埋め立て活動を許してしまった点で平泉方には隙があったし、8日には押しされ気味になると、防塁内側の大木戸（本陣）に引いてしまったから、防塁開口部の守りが薄くなり、10日に鎌倉軍が防塁を超えるのを許してしまったのであろう。10日に大木戸の守りを固め、背後から奇襲を受けるまでは大軍の攻撃を凌いだようであるから、堀を埋められ弱体化した防塁で徹底抗戦することを放棄し、本陣を死守する方に防衛戦の主力を移したのであろう。しかし、この戦いの結果だけから、阿津賀志山防塁の意義を過少評価はできないし、空堀を伴う防塁一般の軍事的効力を小さく見積もる事も誤りであろう³⁾。

とはいえ、一般論として、長大な防衛線の場合、それを隙なく守りきるには膨大な兵員が必要で、手薄な部分があれば敵に狙われる。また長大で堅固な防衛線でも途切れる所こそが弱点なのは、難攻不落を謳われたマジノ線に立て籠もったフランス陸軍に対し、正面からぶつからず、第一次大戦時の改変シェリーフェン・プランを踏襲すると見せかけつつ、不可能と言われたアルデンヌ高地突破を敢行してフランスに雪崩れこんだH・グデーリアン麾下のドイツ機甲軍団の電撃戦（Blitzkrieg）の例を出すまでもない。元寇防塁の場合、弘安の役は短期で終わったが、西海道各国の御家人を総動員して、国別に防塁上にブラッと着陣させて、元・東路軍に上陸を躊躇・断念せしめたり、兵站確保のために物資の豊富な博多を狙うしかないから、江南軍との合流前に防塁が尽きる所から迂回侵入し、

農村部に進軍するのも東路軍にとっては現実的ではなかったであろう⁴⁾。防塁の有効性が実戦で試されることはなかったが、こけおどしではあり得ない。

阿津賀志山防塁に照らせば、元寇防塁が塁と堀との組み合わせで元の騎馬軍や歩兵部隊を防御する施設であったと考えるのは合理的である。堀と土塁を組み合わせると騎馬軍や歩兵を防ぐ戦術思想が平安時代後期からすでにあり、鎌倉幕府にも受け継がれ、文永の役で元軍の上陸を許し、苦戦に陥った苦い経験から、再度の襲来への備えとして長大化して実現されたと考えたい。

堀による囲郭は、安倍氏の烏海柵、清原氏の大鳥井山遺跡、藤原氏の柳之御所遺跡、など陸奥・出羽武士団の象徴と評価され（八重樫 2015）、長大な堀をもつ阿津賀志山防塁は、安倍氏の城柵の伝統（大石 1994）、あるいは平泉権力の境界（吉井 2005）、東北武士団の象徴（八重樫 2015）、馬牧の堀からの発想（大石 1994）、など東北武士団との関係が強調されている。しかし、堀と土塁を組み合わせた防塁が、弓射騎兵や徒歩立ち軍勢への防御施設として特異な発想とは思えず、関東においてあるいは、平氏を含む西国武士団でも用いられていなかったのか検討の必要があらう⁵⁾。

生の松原や今津の元寇防塁の発掘調査は、石積みのみが調査されたため、陸側の堀の有無は不明であるが、生の松原では防塁の陸側に上面が若干窪んだ平坦面が観察され、堀があった可能性はあらう。元寇防塁のこのような構造が判明したのは、箱崎地区が初めてであり、鎌倉時代初期の戦術・兵法の研究上画期的な成果と言え、きわめて高い学術的価値を有する。今後、今津・長垂・生の松原・向浜・脇・藤崎・西新・西南学院・地行などの元寇防塁でも、内側に堀が存在しないか探索する必要が生じてきたと言えよう。

謝 辞

小稿の執筆に当たり九州大学埋蔵文化財調査室の三阪一徳氏・齋藤瑞穂氏・福永将大氏にお世話になりご教示を頂いた。挿図製作では三阪一徳氏・谷直子氏・石井若香葉氏を煩わせた。齋藤氏は、阿津賀志山防塁を実査の上、多量の写真を提供くださった。第81図はその一部である。記して謝意を表する。

2019年11月13日提出

註

- 1) 用意周到にも工兵隊を引き連れて来ており、一晩のうちに人馬の進軍に支障が無いようにしてしまったのは、鎌倉方が事前に堀と土塁からなる防塁建設の情報を探知しており、対策を立てていたこと何合わせ（柳原 2015）。
- 2) 藤原氏が、防塁の西方から迂回攻撃されることを全く想定していなかったわけではなかろう。防塁が発する国見山（厚樫山）の北側には越口土塁・空窪土塁・東畑砦、国見山の西北側には駒場山砦・石母田山館・陣場館・守山砦・花館などの遺構があり（大石 1994）、すべてが奥州合戦時まで遡るか不明なもの、それなりの守りはなされていたようである。しかし、小山朝光ら七人は、鎌倉軍本営から北上し小坂峠を越えて大きく迂回し、国府本営（大木戸）の北側に達したのである。わずかに七人でも朝露のおかげで大人数の襲来と勘違いさせることができた。
- 3) 奥州藤原氏は、清衡による権権確立以降、ほとんど実戦経験を持たず、かりに義経が存命で総大将となっても、平氏との戦いに明け暮れた鎌倉軍の前では脆弱であったかもしれない。しかし、もし義経が阿津賀志山の戦いに参加していれば、工兵隊を妨害し、かつて自分が参加した寿永3（1184）年の一ノ谷の戦いから、鎌倉軍が迂回戦術を取ることを予想して先回りして小坂峠からの侵入も許さず、その場合、鎌倉軍が防塁を突破し、大木戸を落とすのが困難になったかもしれない。歴史の研究に「正」は禁物であるが、阿津賀志山の戦いの結果だから、この種の防塁が、象徴的效果を狙ったもので実戦には役立たずと断る必要もなからう。
- 4) 遅れて到着した江南軍は、平戸が大宰府に近いという（誤？）情報により、東路軍が集結する志岐でなく平戸に集結、東路軍と平戸で合体後、鷹島に移動したものの、大宰府めざし上陸する前に、台風で壊滅した。かりに上

陸・進軍していたとしても、兵站確保が困難で、大宰府まで到達することは容易ではなかっただろう。ただし江南軍のはとんどの兵員の実態は軍人でなく農民で、フビライが考えた江南軍組織の真の目的は移住・植民であったとみる説(新井 2007)もあるから、農村部に居ついてしまったかもしれない。

- 5) 頼朝は奥州合戦で平泉に赴き、無量光院、毛越寺、中尊寺などの壮麗な寺院を実現して感激し、鎌倉へ凱旋後、それらを模して、義経・泰衡ら合戦で没した者の怨霊を慰めるための永福寺を建立した。これは頼朝が京都の壮大な浄土教寺院の実態をよく知らず、平泉の諸寺院を間近に見て初めてそれらの意義や効果を実感したという事情がある。しかし、弓射騎兵や徒歩立ち軍勢への防御施設と言った軍事技術については、東北武士団以外でも研究されていた可能性はあるだろう。

引用文献

- 新井孝重 2007『戦争の日本史7 蒙古襲来』吉川弘文館
 大石直正 1994『阿津賀志山防塁関連遺構』『国指定史跡阿津賀志山防塁保存管理計画書』国見町教育委員会 62-66頁
 木本元治(編) 1994『国指定史跡阿津賀志山防塁保存管理計画報告書』国見町教育委員会
 中山平次郎 1913a『福岡付近の史蹟一殊に元寇の史蹟一』九州帝國大学医科大学雑誌部
 中山平次郎 1913b『箱崎の石塁』『福岡日日新聞』大正2年6月12日～20日、(中山(1984)『古代の博多』に収録、214～236頁)
 中山平次郎 1913c『元寇防塁の価値』『福岡日日新聞』大正2年7月27日～31日、(中山(1984)『古代の博多』に収録、238～249頁)
 中山平次郎 1915『元寇役防塁址と博多湾沿岸の地形変化(上)(中)(下)』『歴史地理』第25巻第3・4・5号、283～319頁・425～450頁・542～552頁
 中山平次郎 1984『古代の博多』九州大学出版会
 福田正宏・森 貴教(編) 2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
 三阪一徳・谷 直子(編) 2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
 八重樫忠郎 2015『阿津賀志山の二重堀』『東北の中世史1 平泉の光芒』吉川弘文館 246～249頁
 柳原敏昭 2015『奥州合戦』『東北の中世史1 平泉の光芒』吉川弘文館 216～245頁
 吉井 宏 2005『阿津賀志山防塁を考える』『義経とその時代』山川出版社 81～93頁

Ⅶ 箱崎砂丘東端の元寇防塁をめぐる二・三の問題

1. 調査の成果と到達点

元寇防塁研究の目的は、①いかなる防衛戦略のもとで築造されたかを復原することであり、②築造と維持管理のどのような側面が、社会的矛盾を顕在化させたかを解明することである。九州大学埋蔵文化財調査室が、過去の蓄積を継承しつつ展開してきた仮説と調査のサイクルの目的もまた、両問題の解決に資するところに存する。

本書第二章～第五章で報告された2018・19年度調査の最大の成果は、①元寇防塁が石積みと大溝とで構成されることを明らかにし、②この大溝が浜堤間の鞍部そのままではなく、人工的に開削されたことを実証した点である。もとより大溝は2016年度調査でいちはやく姿を現し、「防塁を構成する一部として認定すべきである」（福田・森編 2018：146頁）との指摘がなされていたが、人工の溝か自然に生じた凹部かはもちろん、石積みとの関係さえ明確でなかった。認定すべきと言わしめたHZK1601地点は、礫岩片の散布が付近にみられるとはいえ、石積みを検出したわけではなく、翌年のHZK1701地点・1702地点の場合も（三阪・谷編 2019）、溝とみられる遺構の立ち上がりを抑えきれなかったからである。本書第四章で報告されたHZK1802地点が、石積みと溝の併存を明らかにし、かつ、人の手で掘削された遺構であることを証明して、課題を解決に導いた。

HZK1802地点に続いて実施したのは、HZK1803地点（第三章）である。2016年の工事立会で石積みみ列の存在を把握していたが、新しく礫岩1石が加わった。石積みの東方部分は、HZK1802地点とは別の担当者が調査にあたったが、石積みみ列に並行する溝が同じように検出されている。自然堆積層を人工的に掘り込んでいることもまた確かめられ、HZK1802地点が実証した①・②の2点はより確かさが加わるところとなった。「溝状遺構」と呼んでいたこの遺構を、本書で「大溝」と呼び換えたのは、研究の進展の反映である¹⁾。

しかしながら、HZK1802・1803の両地点とも道路部分に設けた調査区であったために、検出できた石積みや大溝はそう長い区間でなく、共同溝を始めとする大小の配管も入り組む。配管の設置に因る掘乱坑は石積みと大溝との間を容赦なく遮り、両遺構の堆積関係を見えなくさせていた。このもどかしさを払拭してくれたのが、HZK1805地点だったのである（第五章）。配管の少ない建物間通路で実施されたこの調査は、石積みから溝までの堆積を一体で可視化することに成功した。

HZK1805地点がもう1点明らかにしたのは、防塁の廃絶後であった。管理の行われなくなった防塁は姿をどう変えたのか、以後の中世びとは防塁をどのように扱ったか、一端が炙り出された。

石積みはHZK1902地点でも確認された（第二章）。建物基礎下で奇跡的に遺った石積みは、北接するHZK1604地点と、南接するHZK1603地点の石積みとの間隙を埋める。

これまでの報告範囲において、石積み遺構の北限はH19区のHZK1706地点SF01であり、南限は本書で報告したK26区のHZK1805地点SF00となる。検出は断続的であるものの、元寇防塁がこの220m超の間を縦貫していたのは確実である。岩永省三の防塁ライン研究はこうした調査の成果や新史料が加わっていつそう精緻化し、足立達朗の岩石学的研究は能古島が果たした役割の大きさを浮かびあがらせる（いずれも第六章記載）。また、宮本一夫は、異国警固番役に携わる薩摩御家人に焦点をあて、防塁内部の遺構について試論を展開してみた（三阪・谷編 前掲）。

以上が、現時点における箱崎キャンパスの元寇防塁研究の到達点である。

2. 文永の役の経過と戦役後の防衛戦略

構造の違いと防塁の条件 元寇防塁研究の目的の第一は、防塁に要請された戦略上の役割を解明することである。

元寇防塁研究のあゆみについては、優れた解説『蒙古襲来研究史論』がすでにあり（川添 1977）²¹、また、直近の動向は三阪がまとめているから（三阪ほか 2019）、ここでは特に詳論しない。考古学が、⑦位置の特定と④構造の把握に貢献してきた点だけを強調しておこう。いずれも防衛戦略と直接関わる側面であることは論を要すまい。

先鞭をつけたのは中山平次郎である。よく知られた⑦位置に関する議論だけでなく、④構造についても言及があり（中山 1913a, 1915）、築石の石材は築造地周辺で主に集めていることをいちはやく指摘する²²。これを木下謙太郎が継承・深耕した成果は広く知れ渡るところとなり（木下 1915）、戦後の考古学的調査の前提になった。

今日的な方法論にもとづく調査のメスが入ったのは、九州大学を中核とした生の松原・今津・西新3地区の総合調査であった。生の松原地区では砂丘を利用して、正面を低い位置から、陸側面はそれより高いレベルから積み始める点が把握されるとともに、その後方を粘質土で補強・地固めしてある点が明らかになった（鏡山ほか 1968）。続く今津地区の調査では、玄武岩を使う部分と花崗岩を使った部分とで構造を違える点が発見されている（鏡山ほか 1969）。西新地区では、石を積み前に粘土を敷いて基盤を整え、石積みの内部は粘土と砂質土とを相互に重ねていた。水工学の山内豊穂・巻内勝彦は、いずれの地区も「地耐力には問題はな」く、「粘土と砂の混合割合にある土は、粒度や締固め上など力学的にみて、今日の安定処理の基本原則にかなっている」（山内ほか 1973: 368頁）と評し、柳田純孝は「生の松原、今津、西新では防塁築造の負担国が異なることになり、防塁の構築法、石材の相違は構築分担国の相違に一致するという結果を導き出すことができる」（柳田編 1970: 8頁）と総括した。

やがて、博多でも石積みが報告されるようになる。福岡市博多区博多遺跡群第68次調査の例は45度の急傾斜面に石を敷き、一方、第111次調査の例は正面と陸側面とに大ぶりの石を配して、段状に積みあげていた。前者の調査に携わった井澤洋一は、護岸施設をともし防塁との案を提示し（井澤編 1992）、後者の調査を担当した井上麻子は、第111次例と今津地区との共通りに着目する（佐藤編 2002、井上 2008）。一方で同じ頃、西新地区では土塁を併設した石積みが確認される。土塁はしかも、石積みと先行して築造されていた（大塚編 2002）。

このようにして、防塁ないし可能性のある遺構が相次いで検出され、かつ、それぞれ特色あることも判明した2000年代は、検証という次のステージへと研究が動いた時期であった。直接の契機となったのは、大塚紀宜による福岡市東区香椎地区遺跡の調査である。石積みの基底面は標高 0.5m 前後で水に浸かり、しかも織豊期以降に登場する副木を渡してあった（大塚編 2002）。海岸線に遭る石積みのごとくだが、元寇防塁というわけではなかったのである。

かつて武谷水城がみだした香椎浜の防塁を（武谷 1921）、大塚はこの調査地に隣接することを理由に防塁の候補から排除し、また、先掲の博多遺跡群第68次調査の石積みも、これとの共通りから防塁でないと言いつつ（大塚 2013）。そうして、防塁と認定してよい場合の条件として、⑦石積みの断面が箱形で、④前面は石を積み上げて壁を造り、⑥基底部の標高は3～4mほど、の3項目を示す。

ところが箱崎キャンパスの例は、3項目中2つが該当しない。成案が得られたかにみえた防塁の構

造の研究は、あらためての検討を余儀なくされたのであった（蔵富士編 2019）。

本章の視座「防塁の構造⁽⁶²⁾といふ事は未だ何人も着手した事なき疑題である」（中山 1913b）との発言からすでに1世紀余を闊いた。かなりの部分で明らかになったのであろうが、しかし議論に挙がっていない点もないわけでない。その1つが、重み付け・優先度の問題である。博多湾岸20kmの防塁のどこごとくが同レベルの防御力を要請された、とは限らないであろう。例えば本書で扱っている箱崎地区の築造を担当したのは薩摩であり、その範囲は箱崎キャンパスが建つ砂洲の先端から、こんにちの博多との境域あたりまで、と考えられてきた（相田 1958）。実際のところ西端は確かでないが、しかし少なくとも箱崎宮・箱崎宮寺周辺は含まれるに違いない。この場合、両寺があり、軍事的な拠点でもあった中核部と（佐伯 2001）、箱崎キャンパスが位置する砂洲先端部とを、同じように努力をかけたとは考えにくいのである。本章のタイトルを「箱崎砂丘東端の」と銘打った所以である。

防塁の築造は建治2年（1276）3月頃始まった。文永の役からは、1年半も経っていない。防衛戦略は文永の役における元軍の行動を色濃く反映するものであろうし、防塁はその分析から導かれた帰結として築造されたはずである⁶³。元寇防塁の考古学は、文献史学の成果をこういった観点で点検するところから始めなければならない。

文永の役における元軍の上陸地と防衛戦略 文永11年（1274）10月20日、元軍は今津（福岡市西区今津）⁶⁴、百道原（福岡市早良区百道）⁶⁵に上陸した。倉原（福岡市早良区祖原）や別府（福岡市城南区別府）に橋頭堡を確保して、赤坂（福岡市中央区赤坂）に進む。赤坂や島岡（福岡市城南区島岡）で日本軍と戦った⁶⁶。

箱崎宮（福岡市東区箱崎）も炎上したらしい⁶⁷。弘安の役後の記事ではあるものの、筑前守護少弐経資が多々良潟に乱杭を打たせている点からすると⁶⁸、元軍が多々良潟から箱崎砂丘を回り込んで侵入し、箱崎宮を焼いた可能性は高い。13世紀後半ないし14世紀代とみられる焼土が箱崎一帯に広がりを見せる点は、箱崎襲来を示す物証となり得るが、しかし第1章で福永が指摘したように、建武3年（1336）多々良浜合戦のそれと弁別するのは難しい。豊後守護大友頼泰が陣を構えた点からみて⁶⁹、箱崎中核部が博多・大宰府防衛上の拠点であったことは、みとめて差し支えないだろう。

他方、文永の役後、大宰府そのものの防衛を強化した形跡がみあたらない点は注意しておいてよい。示唆する記事は一切なく、水城もとりわけ修築した様子がない（杉原編 2009）。これは、大宰府まで段階的に防衛線を設けるのではなく、防塁ですべての上陸部隊を撃破する水際作戦を選択したことを物語る。あるいは、元軍の博多駐留を恐れたのかも知れない。面の支配でなく、経済拠点を点的に支配し、貨幣と物資を集積するクビライ政権の拡大戦略を（杉山 1992）、日本側が熟知していた可能性は充分にある。

防塁の対象 したがって次に問題となるのは、水際防衛作戦の内容である。兵士材料と兵器材料という観点から元軍の軍勢力を復元し⁷⁰、防塁で防ごうとした対象に接近してみよう。

服部英雄は、馬防のための石塁と考えた（服部 2003、2014）。その根拠は、『蒙古襲来絵詞』に騎兵の描写がある点と、発掘された実際の元寇防塁が、騎馬の越えられない高さや幅をそなえていた点である。すなわち、馬術の障害飛越競技で用いる障害物は高さ1.4m、幅1.6-2.4mであり、甲を着装した騎兵であればなおのことこれを越えることはできない。したがって、高さ5尺（1.5m）、幅1丈（3m）もあれば馬防として充分機能する、と力説したのであった。データを示し、曖昧さを排する服部の主張は、読み手を引き込む魅力に充ちる。しかし、一歩立ち止まって考えてみたい。「絵詞」に登場した元軍の騎兵はどれほどであったか、を。

確かに元軍というと、ユーラシアを瞬く間に駆け巡った軽装騎兵がイメージされる。倉原山に陣を

構えた元軍を描いた「絵詞」絵八には、馬に跨がった兵の姿があり、絵六の三井資長が追撃した敵軍にも騎兵はいる。後の弘安の役の際、元の張轄は肥前鷹島からの撤退の際に、馬70頭を棄てている（服部 2017）¹⁵。

モンゴル東部のタブン・トルゴイ遺跡やツァガーン・チュルト遺跡で出土した遺存体から復原されるモンゴル帝国時代の馬の体高は最大134.0cmで（バトツェンゲル 2014）、いわゆるポニーにあたる。障害飛越競技で出走するサラブレッドの体高が160～170cmである点を参照すれば、跳躍力がそれに勝ることはあるまい。服部の説くとおり、防塁は馬防としての機能を果たしうるのであろう。

しかし、竹崎季長の奮闘シーンとして著名な絵七で対峙しているのは弓兵・槍兵であり、絵六で三井資長の放った矢が当たっているのも槍兵であって、騎兵の出現率は決して多くない。その点で、黒田俊雄の「元軍はおもだった指揮者のほかは騎兵でなくて軽装の歩兵である。日本へ襲来した元軍というのは」、「モンゴル兵のほか高麗軍もいたし、また漢人軍もあったから、本来のモンゴルの戦法だけでないのは当然ののだが、一騎打ち戦術法にたいして単に集団戦法が優勢を示したというのでなく、歩兵の集団であったことに注意してよい。日本の騎馬武者は長槍と弓矢の徒歩の集団にとりこめられて吉戦したのである」（黒田 1965：92～93頁）という評価が正鵠を射ているように思う。

1237年成立のモンゴル見聞記「黒鞆事略」には、「遠征の時には1頭だけに負担がかからないように、替え馬を準備して、ともに連れて行く。部将ともなれば3、4頭、あるいは5、6頭をつないで連れて行くこともある。貧しき兵卒でも1、2頭は準備した」との記事がある¹⁶。それでもなお騎兵の割合が低いと考えるのは、飼業の問題が存するからである。白石典之がモンゴル軍の編成に関連して注目したように（白石 2017）、牧草はかなりの量が必要であって、「ゆっくりと移動しながら、少しずつ口に入れていくのが、馬が草を食べるときの特徴であり、一個所にじっと立ち止まって、周囲の草を食べることはほとんどない。一晩中、放牧地に放牧して観察してみると、20～30キロメートルの距離を歩きながら、40キログラムもの草を食べた勘定になる」（澤崎 1987：85～86頁）という。

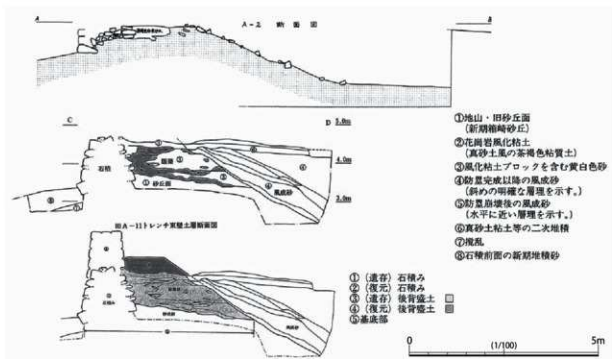
「高麗史」に「蒙漢軍二万五千我軍八千」¹⁷、「元史」に「屯田軍及女直軍并水軍合萬五千人」の数字が登場する¹⁸。蒙漢軍2万5千人の半分を騎兵が占めると仮定して、「貧しき兵卒」まで1、2頭準備するならば馬の数は1～2万頭にもなるし、1/3であっても8千頭を下回らない。それを輸送する間の飼業と水をそう簡単に用意できるとは考えにくいのである。実際、弘安の役の際、東路軍は志賀島で1ヶ月余り駐留したようだが、同島で8000頭を1ヶ月養う飼業を得ることなど不可能に近い¹⁹。

畢竟、文永の役にせよ弘安の役にせよ、機動力を活かした戦術を採りうるほどの高い割合を騎兵が占めたとはいえない。騎兵対策でなく、歩兵（槍兵・弓兵）に対峙するために築造した、とみてよいように思うのである。

3. 裏加佐小考

裏加佐＝昇降用後方土手説批判 対歩兵戦を想定していた場合、馬の跳躍力でなく、歩兵が容易に越えられない高さが要請される。ほぼ原形に近い状態をとどめているという今津地区Ⅲ区をみてみると、断面台形に積みあげた石積みの正面（博多湾側）は高さ2.6m、陸側面の高さ1.9mで、基底部の幅は2.8m、天端面幅は2.0mを測る。正面と陸側面の標高差は70cmで、天端は水平になるらしい（鏡山ほか 1969）。

一方、生の松原地区は高さ1.55mにとどまるが、本来はそれ以上と推測されている（第82図下段、



第82図 元寇防塁生の松原地区

上段 1967年調査 (鏡山ほか 1968)、中段 1998年調査、下段 復原案 (荒牧編 2001)

荒牧編 2001)。基底部幅は今津地区の半分で1.4ないし1.6mに過ぎないが、砂・粘土を交互に突き固めた版築の土手を付設する。池崎譲二はその土手を、「正応二年(1289)川田家文書、永仁六年(1298)入来院家文書、嘉元四年(1306)比志島文書に見える「裏加佐」¹⁾と呼ばれているものと考えられている」(荒牧編 前掲: 8頁)と解説した。

第16表に掲げたのは、裏加佐について言及する諸論考である。池崎が「※」を付して引用したのは同表の3にあたる川添昭二の論で、川添以後の論者のほとんどが、川添の「従来、石塁の後方に土砂を盛って陸地から石塁に緩やかに登れるように作った所をいうのであろう、といわれている」(鏡山ほか 1968前掲: 16頁、川添編 1971: 117~118頁)を参照する様子が見えて来よう。

ただし、「といわれている」とあるように、この理解は川添に始まるわけでない。さらに遡れば、「裏加佐が如何なるものであるか、判明しないが、恐らく石塁の後方に土砂を盛って陸地からその石塁につくやうにした箇所をいふのであろう」や、「裏といふ文字から石築地の後方にある部分を指すものではあるまいか。即ち後方から石塁に登るために傾斜面の部分が附加されたその箇所を言ふものであろうか」(相田 1934: 80・88頁)と論じた相田二郎の言説に辿り着く。

いま、執拗に初現を追及しようとしているのは、こんにち半ば定説化した裏加佐=昇降用後方土手説が、ほとんど情報のない状態で構想された可能性が存するからである。実際、雑誌「歴史地理」に掲載されたこの論文の冒頭には、「筆者は所謂石塁の遺跡を一見した事がない。従って遺跡による石築地の知識は、「元寇史蹟の新研究」の中に取められた、陸軍少将竹内栄喜氏、医学博士中山平次郎氏、木下讚太郎氏等の有益なる論説に悉く負ふ所のものである」(相田 前掲: 75頁)とある。

着想の種は「八幡愚童訓」にあるらしい。「石築地はこれに拠って警固番役を行ひ、敵軍襲來の時、その築地の上で所謂下げ矢の構で防戦に努め、敵勢の上陸を阻止する為に作られたものである」(相田 前掲: 77頁)という部分があり、「八幡愚童訓」の「^(5, 6, 7, 8)百元海ハタニ数百町石ノ築地ヲ面キウニ⁽⁹⁾一丈ヨリ高。此方ハ⁽¹⁰⁾ノヘニシラ馬⁽¹¹⁾ノ乗馳上リ。既船ヲ見下テサケ箭射様ニ誘タル」⁽¹²⁾に似る。わけ

第16表 裏加佐に関する言説とその系譜

文献	言及内容
0 中山(1915)	先づ土壌を築き次に其頂上に石垣を設け、之を其礎壁として利用せんは、甚だ不便なる如く考察せらるゝ。殊に今津長浜東部の石垣の如く其高六尺五寸許もあらんには、従歩者は勿論、重馬者や獵、賊船を見下して防戦する事不可能なる如く推量せらるゝ。壁は先づ一定の高さに土砂を盛りて堤防状陸地を築き、其頂部に石壁を作りたる後、其内面に更に土砂を盛り、略圓(第83図③)に掲げたる如く、従歩者にも、亦重馬者にも、防戦可能なる程度に高められたるは殆んど確實と推せらるゝ。
1 相田(1934)	裏加佐が如何なるものであるか、判明しないが、恐らく石壁の後方に土砂を盛って陸地からその石壁につくやうにした箇所をいふのであろう。 裏と云ふ文字から石築地の後方にある部分を指すものではあるまいか。即ち後方から石壁に登るために傾斜面の部分が附加されたその箇所を言ふものであろうか。
2 相田(1958)	裏加佐の築造：正応九年(ママ)五月に、薩摩国の御家人比志島忠範が、箱崎石築地の中忠範の所領清家院内比志島分五丈一尺四寸の裏加佐を勤仕している。そうして翌二年四月五日に守護島津宗吉がこれ(ママ)認知の覆勅状を出している。裏加佐が如何なるものであるか判明しないが、恐らく石壁の後方に土砂を盛って陸地から石壁に緩やかに登れるように作った所をいうのであろう。この頃始めてかような部分が付けられたのではなく、恐らく新しく築造した時からかような構造であって、正応二年の覆勅状は、その修理を行ったことを示すのであろう。 図(第83図④)にみるように、上部は外側から内側に向かって低く傾斜し、その下端は内側の石壁面に傾いた土壁に接触して下だらかな坂の形を呈していたのである。守護の士卒は石築地の裏側から下だらかな坂を登って、その外側上部即ち石築地の最も高い所に達することができたのである。ここから所謂下打の構えで、海岸に逼る軍船から上陸せんとする敵兵、若しくは海岸に近寄って来る敵船目が射けるのに便利のように築造してあったのである。古文書に裏加佐もしくは加佐という言葉が見えてくる。これは如何なる意味のものであろうか。前掲今津の石築地の断面図について説いた如く、内側の低い石壁に続く下に向う下だらかな土壁を指すのではなからうか。裏というところから考えると右の如く解いて適当にしているようである。
3 川添 ^明 (鶴山ほか 1968)	正応元年(1288)五月、薩摩国の比志島忠範は、同国の分担地域である豊崎地域内の同人負担分の裏加佐五丈一尺四寸を上げていた。用語の意味については、従来、石壁の後方に土砂を盛って陸地から石壁に緩やかに登れるように作った所をいうのであろう、といわれていた。生の松原地域の裏加佐という用語に該当すると思われる部分は、昭和43年3月の調査によると、予想以上に後背に長く延びていた。自然の傾斜を利用して石を布置したものである。土砂のものではない。昭和45年1月・3月に再調査・発掘された百道原(西南学院大学体育館南側)の石築地遺構は、本体となる石築地とはほぼ同じ規模の土砂の二次的防壁がその背面(南側)に接続しており、これが裏加佐といわれるもの遺構ではないかと推察される。後考にまちいた。なお青方文書永仁六年(1298)八月一日某書下葉にいう「裏」というのは、裏加佐の略語であって裏登のことではあるまい。裏加佐の関係史料は、防塁築造当初の時点では見当たらない。一律にいうのはさしつかえねばならぬが、裏加佐は、狭義の石築地(海に面した石垣の部分)が築造された後背に築営されたところであったように考えられる。生の松原・百道原の発掘状況もこのことを支証するようであるし、文書の中に出てくる裏加佐の用語が石築地とは独立的・相対的にあつかわれていることも注目すべきである。
4 川添編(1971)	加佐・裏加佐については、石壁天端へ登り降りする坂路として、石壁後背に緩勾配を付して添えた土であろうと考えられている(川添 1971)。また、これら加佐は、現用の土木技術用語である堤防土の「裏上打」、「裏置き」の源と、積み重なったもの高さという意味で全く同じ語である。
5 山内ほか(1972)	石壁の後方は、土砂を盛ってゆるやかな傾斜をなすようにつくられており、この部分は裏加佐といふ。
6 網野(1974)	生の松原：石積みの後方6～10mの傾斜面に転石を置いている部分があり、石築地役の中の「裏加佐」(防塁の後方に土砂を盛って陸側からゆるやかに登れるようにしたところ)に相当すると考えられる。
7 柳田(1988)	生の松原：石積み背面には、新时期砂礫の砂丘頂部を若干削り込むようにして平坦面を作り、基礎面で幅18mの花崗岩風化粘土と砂とを交互に版築状に叩き締めた構造が見られる。これは正応二年(1289)川田宗文書、永仁六年(1298)入来院文書、嘉元四年(1306)比志島文書に見える「裏加佐」(川添編 1971)と呼ばれるものと考えられている。
8 池崎 (荒牧編 2011)	生の松原地区では石壁の背後に砂・粘土の互層による構造物が築かれ、石壁の上面に続く傾斜面を形成し、背後から石壁に登ることを容易にしている。西新地区では、西南学院大学内調査区で、石壁の背後に砂・粘土の版築状積み上げにより構築された東西方向に延びる土壁状の施設と、この土壁から南側に延びる土手状の構築物を検出した。生の松原地区と西新地区で検出されたこれらの構築物は、いずれも砂と粘土を用いて版築状につき固めており、また石壁の背後に築かれていることも共通する。西新地区の構築物は機能・用途が不明だが、生の松原地区のものは文献に記載された「裏加佐」とみえていだろう(川添 1968)。
9 大塚(2013)	生の松原地区では石壁の背後に砂・粘土の互層による構造物が築かれ、石壁の上面に続く傾斜面を形成し、背後から石壁に登ることを容易にしている。西新地区では、西南学院大学内調査区で、石壁の背後に砂・粘土の版築状積み上げにより構築された東西方向に延びる土壁状の施設と、この土壁から南側に延びる土手状の構築物を検出した。生の松原地区と西新地区で検出されたこれらの構築物は、いずれも砂と粘土を用いて版築状につき固めており、また石壁の背後に築かれていることも共通する。西新地区の構築物は機能・用途が不明だが、生の松原地区のものは文献に記載された「裏加佐」とみえていだろう(川添 1968)。

10	服部(2014)	背後の土手は史料に見える「裏加佐」に相当するとされる(相田二郎「蒙古襲来の研究」)。
11	佐伯 ²¹⁾ (福田・森編 2018)	石築地築造後に、「加佐」、「裏加佐」という文言がよく登場するようになる。「加佐」は、石築地の上部をさす用語、石築地の付属物、裏加佐の裏を省略したものなどと解釈され、裏加佐は、 石壁の後方に土砂を盛って、陸地から石壁に緩やかに登れるように作った所 と解釈されている(川添編 1971)。隣摩国の場合、正応2年(1289)と永仁6年(1298)、寛元4年(1306)に裏加佐(比志島文書、入来文書)、正応6年に加佐と裏芝(比志島文書)の史料が出てくる。築造後、石築地は、破損分の修理や加佐・裏加佐といった増築がなされ、より強固で使い勝手が良いものにされていた。
12	藏富土編(2019)	構造上、防塁II期の背後には傾斜面が付属することになるが、防塁I類でも早くから同様の設備の存在が想定されており、史料にみる「裏加佐」がこれに相当すると考えられている(川添 1968)。
13	三阪ほか(2019)	「裏加佐」は石壁の後方に土砂を盛って、陸地から石壁に緩やかに登れるように造った所と考えられている(川添編 1971、佐伯 2018)。

※文言そのままではなく、引用頁の省略など簡単な改変を加えている。

でも筆者の注意を喚起したのは、直前の「此方は延ベニシテ馬乗り乍ら馳上り」＝「正面は急であるのに対して、内側はなだらかに、馬に乗りながら駆け上り」という箇所である。緩斜面の存在を示唆しており、昇降用後方土手説の輪郭をみてとることができる。

この着想を、おそらく「遺蹟による石築地の知識」が後押ししたのである。同じ「歴史地理」では、今津地区の発掘に携わった中山平次郎が、防塁の構造を解説していた(第83図③)。しかも、可能性の提示というレベルでなく、「塁は先づ一定の高さに土砂を盛りて堤防状陸地を築き、其頂部に石壁を作りたる後、其内面に更に土砂を盛り、略図に掲げたる如く、徒歩者にも、亦乗馬者にも、防戦可能な程度に高められたるは殆んど確實と推せらる。」(中山 1915:300頁)、と言い切る。

しかしながら、「殆んど確實」とする主張の基盤は、必ずしも発掘で得た事実でなかった。中山もまた、愚童訓の記述に信を置いていたのである²²⁾。「土砂を盛」ったと考えたのは、「石垣を設け、之を其儘壘として利用せんは、甚だ不便なる如く考察せられ、「徒歩者は勿論、乗馬者と雖、賊船を見下して防戦する事不可能なる如く推量」(中山 前掲:299~300頁)したからであった。こんにちの感覚からすれば、愚童訓は点検の対象であれこそすれ、根拠とするにはあまりに頼りない²³⁾。それを基盤とする学説を無批判に継承するのは、若干の躊躇いを感じるのである。

さて、相田は晩年、発表してきた数々の元寇関係論文を一書にまとめ直す。そこでは、川上市太郎が公表したばかりの精細な断面実測図も加わり(第83図④、川上 1941)²⁴⁾、あらためて裏加佐の検討がなされた(第16表2)。

川上の図によれば、今津防塁の正面は高さ7尺もあるのに対して、陸側面は4尺にとどまる。これに対する川上自身の評価は定かでないが、現在の知見でいうと、基底石の設置面は平坦でなく、砂丘の傾斜を利用して作っていて、陸側は正面ほど積みあげなくても天端が水平に仕上がる(鏡山ほか 1969前掲)。しかし相田は、この図に沿って築造当時を構想したらしい。ゆえに残念ながら、「上部は外側から内側に向って低く傾斜し、その下端は内側の石壁面に続いた土塁に接触してなだらかな坂の形を具えていたのである。守備の士卒は石築地の裏側からなだらかな坂を登って、その外側上部即ち石築地の最も高い所に達することができた」(相田 1958:202~203頁)と考察したの結果として正しくなく、この図から裏加佐を「内側の低い石壁に続く下に向うなだらかな土塁を指すのではなからうか」と推測したことも否定せざるを得ない。なお、「大正二年発掘した見沙門山麓より五丁の地点では防塁の後面に積土を示す断面図があるが、この近くに設けたIV-1区には粘土は認められ」(柳田 1984:371頁)なかったといい、第83図②で描かれた積土も、いまでは否定されている。

相田の失考は、生の松原地区の発掘にもとづく戦後の裏加佐理解にも深い影を落とした。「石壁の後方に土砂を盛って陸地から石壁に緩やかに登れるように作った所」と言われていたのに対して、発



第83図 相田 (1934)・相田 (1958) が参照し得た「遺蹟による石築地の知識」

掘で検出された「登り上がりと考えられる傾斜面は」、「自然砂丘の傾斜をそのまま利用したらしく、人工的構築の跡は認められぬ」(鏡山ほか 1968 : 6 頁) だったのである(第82図上段)。川添は、「裏加佐という用語に該当すると思われる部分は、実測図に示されているように、予想以上に後背に長く延びている。自然の傾斜を利用して石を布置したものである」と述べた。結果に則して「緩やかに登れる」点を残し、「土砂を盛っ」たかどうかは省いたわけである。多くの論者が参照する川添の解説は、実は盛土を条件としていない。

他方、1998年の調査は、川添も参加した1967年地点の再確認調査であったが、「基底面で幅1.8mの花崗岩風化粘土と砂とを交互に版築状に叩き締めた構造」(荒牧編 前掲 : 8 頁)を裏加佐として報告する(第82図中段)。自然砂丘の傾斜でなく、盛土部分を裏加佐と言うのである。全く同じ地点で、結果的に自然砂丘部分を裏加佐とする川添の言説を引用していながら、盛土部分を「[裏加佐]¹⁾と呼ばれているもの」と報告したのは混乱の拡大以外の何物でもなく、厳しい言い方をすれば、引用の手

続きとして適切でなかった。

ともあれ裏加佐をめぐるはかような混乱があり、しかも根源は「八幡愚童訓」に行き着く。データの乏しい時期であったのはわからなくもないが、いまとなつては説得力のある充分な論拠とは言えない。史料・考古データ双方の総ざらいが、いま、要請されているのである。

裏加佐と箱崎キャンパス 次のA～Cは「裏加佐」がみえる史料である。それぞれ、池崎が挙げた「正応二年（1289）川田家文書、永仁六年（1298）入来院家文書、嘉元四年（1306）比志島文書」にあたる。

史料A 薩摩川田家文書、島津忠宗覆勘状²³⁾

薩摩国役所箱崎石築地満家院内比志島分五丈一尺四寸裏加佐、去年五月被勤仕畢、仍執達如件、

正応二年
四月五日

忠宗（花押）

比志島孫太郎殿

史料B 薩摩入来院文書、宮崎要害所石築地配分²⁴⁾

「いしつちはいふん」

入来院分宮崎要害所石築地

裏加佐 追切木俣 小松原崎 国堺 等配分

合拾四丈五尺二寸五分内

(中略)

右、任御教書并注文、来月廿日以前、可令勤仕給之状如件、

永仁二年七月廿日

史料C 比志島文書、薩摩守護島津氏奉行人連署奉書²⁵⁾

比志嶋石築地裏加佐并破損事、先度自惣領成其功之勉、末子難済之由、雖被申之、重破損丈丈、猶以自惣領被経入、有末子難済者、以使可有沙汰之状如件、

嘉元四
正月廿八日

阿忍（花押）

本性（花押）

比志嶋殿

さしあたって確認しておきたいのは、3通とも薩摩が分担した箱崎に関わる、という点である。

現在までの裏加佐に関する議論は、箱崎に対して証した／命じた文書（文献資料）と、早くに発掘が行われ、幸いにして遺りも良かった今津・生の松原地区の防塁（考古資料）とを対比してきた。しかしこれは、各地区の構造が同じ場合に初めて成り立つ。今津・生の松原間の違いも決して小さくないが、両地区と箱崎キャンパスの違いはそれにも況してはなほだしい。史料A～Cの内容は、いま我々が手にしている箱崎のデータと照らし合わせるこそ望ましい学問的手続きであって、むしろ箱崎との対比なくして、裏加佐の正しい理解にまで接近し得ないであろう。

無論、「箱崎」といっても狭くはない。箱崎キャンパス（福岡市東区）の建つ砂洲先端から、博多（福岡市博多区）との境までとすればおよそ4kmとなるが、先にも述べたように、その区間がおしなべて構造を同じくしているかはわからない。しかしながら、史料Bと次に掲げる史料Dは、場所の絞り込みを可能にしてくれる。

史料 D 薩藩日記権執印文書、薩摩新田宮石築地用途支配状案²⁹⁾

新田宮政所注進 為蒙古用心、宮崎小松^(中略)洲崎石築地用途支配

(中略)

右、任支配之旨、今月中に可被致其沙汰之状如件、

弘安九年十月 日

執行貫首紀

六名略ス、

執印數位惟宗判

弘安9年(1286)の史料Dに「宮崎小松^(中略)洲崎」が、永仁2年(1294)の史料Bに「小松原崎」の地名がみえる。川添はこの両「小松」を同一地とみなし、「地蔵松原といわれる現在の九州大学工学部附近の地名であろう」(川添編 1971:90頁)と推考した²⁹⁾。箱崎キャンパスのN31・32区～P31・32区(第2図)に地蔵の森と呼ばれるエリアがあるが、ここに小松山重盛院還国寺があったと伝わることをも勘案すると(古田 1997)、「小松」が箱崎キャンパスの近傍を指している可能性は限りなく高い。ちなみに、小松洲崎を字義通り解釈すれば、小松の「洲の、崎となりて、指し出でたる処」を指す。防塁と浜堤列の関係がより明らかになれば、さらに絞り込めるかもしれない。ともあれ、史料B・Dの「小松」が箱崎キャンパスの近傍を指すとすれば、細く長い箱崎でも、特に筆者らの調査した地点に、裏加佐は存在したことになる。

その場合、裏加佐を、相田以来の「石塁の後方に土砂を盛って陸地から石塁に緩やかに登れるように作った所」(相田 1958前掲:184頁)であったり、池崎のいう「粘土と砂とを交互に版築状に叩き締めた構造」(荒牧編 前掲:8頁)と解釈することは難しい。そうして、川添のように「自然の傾斜を利用して石を布置したもの」(川添編 前掲:117頁)との理解を導くこともまた難しいのである。これらは、版築状であれ、石を布置したものであれ、石積み構造物からは独立している土盛り施設が想定されている。

他方、箱崎キャンパスで検出された防塁は、三阪が張りほて状と喝破したごとく(三阪ほか 2019)、石を積んだ部分のみでは成立できない(第52図など)。重みをあずける背後の盛土部分をあわせて初めて成り立つ「石築地」であり、この部分に裏加佐などと別称があたえられるはずはないのである。

ならば、裏加佐とは何であったか。次の史料が切口をあたえてくれている。

史料 E 肥前深江文書、少式経實石築地役催促状³⁰⁾

^(送書)「深江以下東郷庄并越中次郎左衛門人・有間左衛門等注文田数」

建治貳年四月五日到来 ^(石築地) 少式殿御^(三)

異国警固之間、要害石築地事、高麗尙向輩之外、課于奉行国中、平均所致沙汰候也、今月廿日以前、相具人夫、相向博多津、請取役所、可被致沙汰候、恐々謹言、

建治二年三月十日 ^(御書) 少式(花押)

深江村地頭殿

史料 F 調所氏家譜、大隅国在庁石築地役支配注文³¹⁾

(前略)

右、件石築地役、任関東御教書并少式殿御施行之旨、以八月中、可終其功之状如件、

建治二年八月 日

調所藤原在判

書生藤原在判

惣官大藏

大介兼税所藤原在判

守護代左兵衛尉藤原在判

(後略)

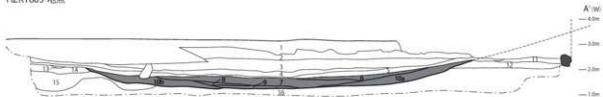
史料Eは、建治2年(1276)3月、筑前守護少貳経資が同国深江村の地頭に出した石築地築造命令で、石築地に関わるものでは最も早い例である。当然ながら築造を命じたのは石築地であって、裏加佐に関する言及はない点に注意したい。同年の史料Fでも、裏加佐はみえない。大隈の守護職にない少貳経資が施行状を出しており、薩摩に対しても同様であっただろう。

石積み高さの復原試算 箱崎キャンパスで検出した防塁の構造を、第84図に示した。図には、補助線を加えている。一方の破線は溝の立ち上りを石積み方向に延長し、他方は石積み正面の稜線を上方に延ばしたものであって、交差位置の標高は3.7~3.8mになる。石積みの後背を粘質土で突き固めるなどするわけでないから、それ以上高くはできないであろう。石積みの設置標高は2.1ないし2.2mであるから、差は最大で1.7mとなる。ただし、石積みの勾配は80°前後であり、大溝も直線的に立ち上がり続けるわけではもちろんあるまい。したがって、石積みの高さは1.5m程度を見込んでおくのが妥当であるように思う。

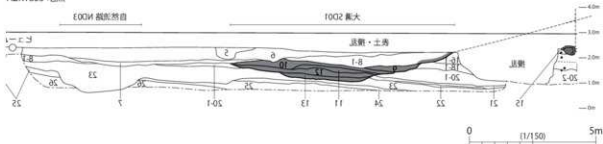
しかしこの場合、騎兵を止めることはできても、接近した歩兵が越えられない高さではない。さらに言えば、突き固めていない後背部分の維持管理も決して容易でない。

HZK1803・1805地点の炭化物 そうすると、発掘調査で検出しにくい素材のもので、それを補った可能性を考えておく必要がある。この点で筆者らの注意を引いたのは、HZK1803・1805地点で採取した炭化材であった。一部の材の樹種同定が行われている(第VI章小林報告、第10表)。

HZK1805地点



HZK1803地点



第84図 HZK1803・1805地点における防塁の構造

HZK1803 地点では、8-2層、18-2層、20-2層（第84図、第14図）採取の試料で樹種が同定された。8-2層は石積み遺構 SF01 の前方（博多湾側）に堆積していた層で、18-2層は石積み遺構の直下にあたる。20-2層の試料は石積みの設置標高より1m 余低いレベルで採取されたようだが、層は「自然もしくは人為作用による攪拌を一定程度伴っている可能性がある」（第三章32頁）との調査所見がある。このうち18-2層例はマツ、他の2例はサカキと同定された。

HZK1805 地点に眼を転じると、大溝 SD11（第84図）を切って、その上部に堆積した暗褐色砂3・4層の試料（古く見積もっても15世紀以降）が、コナラ属アカガシ亜属であったのに対し、大溝覆土の7層および10a層、石積み後背の12層、かつ、溝周辺の15層で採取された炭化材はことごとくサカキと同定されている。また防塁廃絶後に、大溝内に掘り込まれた火葬土坑 SK10 の採取炭化物にもサカキが含まれていた。炭化物は無作為に抽出したものであったが、防塁の周囲でほとんどの割合をサカキが占めていたわけである。

ところで、箱崎のような海岸砂丘というと、海風による飛来塩分の影響を絶えず受けるため、植物にとって望ましい生育条件では必ずしもない。風による砂の移動や乾燥に耐性のある植物が群落を作るのがふつうである。他方、サカキは庭木や神事で用いられる常緑の小高木で、本来海岸性の植物でない（岡本ほか 1959、内海 2011）。海岸砂丘で生育しないわけでないが、純林を形成する可能性は小さい。標高のもう少し高い場所に生えるから、標高2m 程度の海岸砂丘でのかような高い割合はふつうでない³⁰。

高い出現率の要因についてまず推測されるのは、防塁周辺に投棄された木製品の可能性である。サカキは有用材の1つだが、しかし遺跡出土木製品のデータを縦覧すると、九州での使用は弥生時代から古墳時代に多いという（山口 2012）。一方、中世でサカキが使われている様子はいまのところない（佐藤 2011）。木製品一般に由来する可能性は、考えなくてよさそうである。

可能性の第二は、榎（垣榎）である。弘安4年（1281）、肥前守護少少経資が武雄社の大官司に榎ならびに石築地上の榎を用意するよう命じており³¹、「絵詞」絵十三にも二枚接ぎの榎がみえる。あわせて幅45cm 前後になる2枚の板を採るのにサカキは適さないが（川合 1996）、滋賀県守山市下之郷町下之郷遺跡で出土した弥生時代の榎は、スギの割板を並べ、裏側にサカキを渡して補強しており（川畑編 2004）、部分的に使うこのような可能性が全くないとは言いつてもいい。しかし、そうは言っても、延慶2年（1309）成立の『春日権現験記絵』が示すように（第85図）、大量に使用する時代の榎は角材で補強するようであるから、ことさらサカキを用いる可能性は限りなく小さいだろう。

本来海岸性の植物でなく、木製の道具類でも榎でもないとなると、サカキそのものを植えた可能性だけが残る。

裏加佐 = ^{うらかさ} 説の提唱 植樹を想定した場合、それと防塁との関わりが問題となる。防塁から一旦離れ、長享3年（1489）に行われた奈良興福寺の塔頭・大乗院の石築地造営工事について、織豊期以前の石垣造営という観点で深耕した岡本智子の議論に耳を傾けてみたい（岡本 2006）。

工事は、大乗院庭園の東方に石築地70丈、南方に石築地6丈3尺を築くものであったらしい。東方は石築地70丈に「節子垣」33丈を足し、南方は石築地の先に「芝築地」を設け、石・芝両築地の上には竹垣等を配した³²。「芝築地」の性格は詳らかでないが、石築地の作事に携わる唱問師が関わっていない点から、岡本は石を主とする築地でないと推測する（岡本 2019）。さしあたって、「芝築地」なる築地があり、石築地は他の築地と組み合わせる場合のあることを確認しておく。

筆者の注意を特に引くのは、築地の嵩増しである。先に、南方築地に竹垣等を加える例をみたが、東方においても、石築地69丈8尺が成った4日後に「石ツシノ芝置之」⁽¹⁹⁸⁾の記事がある³³。明応8年



第85図 春日権現験記絵にみられる播種機の構造 (小松岡 1982)

(1499)にも「東方石ツキ地上芝置之」がみえ³⁰⁾、築地は「芝」を置いて完成となるようである。これを、岡本は「おそらく言葉のとおり石築地の上に芝が葺かれたわけではなく、垣根のように柴が植えられたものと考えたい」(岡本 前掲2006:143頁)と言う。「日葡辞書」にあたってみると、「Xiba」には柴の意味があるから(第17表、土井ほか編訳 1980)、その推測はあながち見当違いでない。

ひるがえって箱崎キャンパスの元寇防塁を見返したとき、木製の道具類でも、楯でもないらしい植物残滓が、防塁の一部を担っていた可能性は充分すぎるほどある。石積みと大溝の間が狭く、また粘質土等で補強されていない点からすると、柴が植わっていた可能性も、芝を敷いていた可能性も考え得るが、ただし炭化材はサカキだから、芝よりは柴の方がイメージしやすい。

つまり蓋然性が高いのは、石積み遺構の後背砂地にサカキを植えて生垣状を成し、より嵩を増した防塁の光景である。石積みを支える砂の流出防止にも、これは力を発揮したであろう。「石・芝両築地の上に竹垣等を配した」などの記事からすると、このような植栽も、別の名称で呼ばれたに違いない。

ちなみに「日葡辞書」をひもとくと、「Casa」には高い所、大きな積み重なったものの意味がある。

第17表 『日葡辞書』による関係語句の意味

1	Xitcaigi	イシツイチ (石築地)	石垣。
2	Xibatcaigi	シバツイチ (芝築地)	(芝) 草を植えた土のかたまりで作った垣。
3	Xiba	シバ (柴・芝)	木の枝 (柴)。また、芝草。往々にして土のついたまま屋根の棟に置かれる或る草。または、土手や崖などを作るのに使う草。
4	Casa	カサ (寓)	山の高い所。例: kou votosaba casaye mauare (城を落さば寓へ回れ)。 何か大きな物、あるいは、積み重なった物の占める、容積、また、外観。 例: Casaga aru (寓がある)。 例: Casaga agaru (寓が土がる)。 壁とか土壁とかのような工作物が段々と出来て行くにつれて、容積が増す。
5	Via	ウラ (裏)	木や竹などの一番高い、末梢の部分。ある地方では (Akabai)、Vie (末) という。
6	Via	ウラ (裏)	器物やその他の物の裏面。あるいは、裏地。 例: Viaou ufou (裏を打つ)。 家の背後。または、家のうしろにある狭い土地。 (以下略)

土塁などが徐々にできあがっていくのを、「Casaga agaru」と言ったらしい。高い、もしくは高くするといった語感をともなう。また、「Vra」は裏という意味もあるが、木や竹などの一番高い、末端をも指した。弓の上端の、弦輪をかける部分を末弭（しび）というのは、この場合の「Vra」にある。

以上、ここまで重ねてきた議論は、裏加佐=昇降用後方土手説とは別の解釈を導く。すなわち裏加佐とは、「末Vra」による「嵩Casa」、木で高さを加え、石積みを補ったもの、と考えることができるのである。

4. 箱崎先端部の石築地と律宗

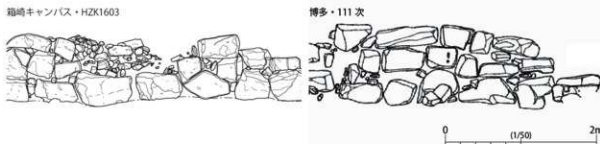
分担国を跨ぐ共通点 これまでの考古学的アプローチが特に強調してきたのは、各国が分担した地区間の構造的差異であった。共通する部分があったわけではないものの、あくまで事実の把握にとどまり、それを積極的に評価する言及はなかったように思う。

筆者らが報告する箱崎砂丘東端の防塁が、これまで知られていた例と大きく異なることは事実だが、しかしことごとくが違っているわけではない。調査に携わった眼からみて最も近い関係にあると思うのは、キャンパスに隣接する箱崎地藏松原防塁⁷⁰を除けば、福岡市博多区博多遺跡群第111次調査で検出された博多地区の防塁である（佐藤編 2002）。箱崎キャンパスの石材は多々良川右岸の名島層で採取する礫岩・砂岩であり⁷¹、能古島由来の玄武岩もみられる（第V章）。博多地区も同様で、名島海岸一帯の礫岩・砂岩が多くを占め、かつ、玄武岩等を含んでいた。

築石のサイズや形にも類似性がみとれる（第86図）。明治期編纂の史料集【伏敵編】に「箱崎宮ノ東ヨリ名島ニ至ル間ノ海辺耕作地ノ沙底ニ大方石アリ」、「巨大ニシテ人力ク動スヘキニ非ス」の記述があり⁷²、かつて中山平次郎は今津長浜などの実態からこれを訝しんだが、（中山 1913a, 1913c）、箱崎地藏松原地区も、また本書で報告する箱崎キャンパスも、築石のサイズは【伏敵編】の記事を踏付けていた。博多遺跡群例も大ぶりで、石面の面積はHZK1805地点SF00区間②などに近い。ただし、構造は異なる。石材が共通し、築石のサイズもよく似て、しかし積み方は違っているわけである。

いずれにせよ、分担国を跨いで共通する部分がある、という点是指摘しておいてよい。元寇防塁の築造組織を理解するうえで、この点はむしろ注意されなければならない。

作事を指揮した人々 柳田純孝は先に掲げた史料Eの「相具人夫、相向博多津」をして、「人夫を連れて博多津に向かい」というのは、負担者はそれぞれ自分の領民を引き連れて築造工事にあたることになっていたのである。したがって、九州の各地から農民が駆り出され、国をあげての大工事だった様子がうかがえる」（柳田 1988：187～188頁）と読み説く。



第86図 箱崎キャンパスと博多遺跡群の元寇防塁正面観

農民と限定するのは躊躇われるものの⁹⁰、人夫を挑発して工兵隊を組織するのは、すでに治承・寿永の内乱段階にみられる(川合 1991)。郎従・所従あるいは舍弟・若党のほか、百姓を挑発したことを疑う余地はない。しかしながら、御家人各々が石材を調達し、それぞれが思い通りに積んだわけではないだろう。築造を主導する集団の存在は、当然考えられて良い。

鎌倉期に土木工事を仕切ったのは石工たちであった。それを示す一例として、岡山県高梁市備中町笠神の徳治2年(1307)銘磨崖碑がよく知られている。成羽川の難所を開削し、船路の整備にあたった人物として名が刻まれた石切大工伊行経は、12・13両世紀の交に渡来し、東大寺の再建で活躍した宋人石工伊行末の後裔であった(三浦 1984、藤澤 2000)。この工事は、成羽善養寺の尊海が大動進となり、指揮は本山にあたる奈良西大寺の律僧実専が執った。伊派の石工は律宗と結びつき、末寺は職人を編成する拠点でもあったらしい。

叙尊率いる西大寺流律宗の活動は畿内に始まる。高弟忍性が東国で弘通につとめ、得宗をはじめとする北条氏一門と結び、その後、西国に教線を拡大する。拡大は市・港・町をねらい(水野 2000)、貿易都市博多に西大寺直末の法皇山大乗寺を置いた。亀山法皇の勧願寺と伝わり、異国降伏祈禱のために建立(再興)されたとみられている。筑前の末寺五箇寺の筆頭寺院であった(川添 1975、松尾 2006)。

律宗は都市をおさえ、交通の要衝を握ると同時に、架橋、作道、鑿井といった土木事業を能くした(吉田 1969)。先にとりあげた成羽川の船路開削は、その代表する例と言える。そうして鎌倉の築港・和賀江島の管轄権が、忍性の止住する極楽寺にあてられていた事実は(斎藤 1995)、港湾整備にも長けていたことをよく示す。この点で、元寇防塁の築造に律僧が関与したとする桃崎祐輔の着想は(山川 2000)、一考の価値がある。

博多と箱崎の地蔵信仰 博多と箱崎の間は2km余で、しかも陸続きであった。朝鮮で15世紀に成立した『海東諸国記』も、「州有博多或称霸家臺、或称石城府、或称冷泉津、或称宮崎津」⁹¹と書くほどである。

近縁性・一体性は、地理的な面に限ったことでない。古くは仁平元年(1151)、大宰府官人による大追捕が博多と箱崎に対して行われたし、綱首謝国明が博多承天寺に買得・寄進したのが、那珂郡内の宮崎宮領であったことも周知のとおりである。元寇後に眼を転じれば、元亨3年(1323)、元の慶元からの船路に沈没した新安沈没船は寺社造営料唐船で、承天寺と宮崎宮などが仕立てたものであった(佐伯 2003、伊藤 2018)。経済的な対立もあったのだろうが、両都市は巧みにそれを管理し、緊密な関係を維持した(服部 2005)。

一体ぶりは心性の部分に及ぶ。福岡市博多区上川端町の大乘寺跡には、康永4年(1345)銘の浮彫地蔵石仏板碑が建つ(興崎 1954、八尋 1991)。先に述べたように、大乘寺は西大寺直末の拠点寺院であり、川添は「大乘寺が地蔵信仰を介して博多住民を基盤にくりこみ寺勢を拡充していたことを示す」(川添 1990:58頁)とみる。地蔵信仰は、とりわけ忍性の系統において顕著であった(川添 前掲1990、清水 1995)。

この地蔵板碑とはほぼ時期を同じくする石造地蔵菩薩坐像が、箱崎キャンパスに隣接する地藏堂に祀られる。福永がHZK1805地点の火葬土坑を報告した際にとりあげたように(第V章)、この地蔵像の位置づけについて桃崎が検討を加えており、周辺に律宗寺院の存在した可能性⁹²が展望されている(桃崎 2013)。地藏堂の建つ地蔵松原に限れば律宗の存否は詳らかでないが、宮崎宮に石清水八幡宮下院の西大寺末寺院・八幡大乘院に造立された石灯籠が移管されている点からすれば(川勝 1957)、少なくとも宮崎宮寺諸坊の一角を律宗寺院が占めていた可能性は高い。

防塁築造という戦略 西大寺流律宗の博多進出が、まさしく元寇と相前後する時期であったなら、期待されたのは何も前線地での異国降伏祈祷だけであるまい。実績に裏打ちされた土木事業のノウハウと、高い動員力の提供こそとめられたであろう。築石に適した石材の産地把握と、搬送ルートの確保は、工と結びつき、作道を得意とし、港湾を整えてきた律宗でなければならなかった。分担国の守護は石築地役の監督者であっても、工事指揮を執り得るわけでない。

指揮を執り、少なくとも博多・箱崎に石材を手配したのは、大乗寺の建立／再興に関与している律僧とみて差し支えないであろう。ただし、その場合に考える必要があるのは、なぜ名高層の礫岩・砂岩でなければならなかったか、である。何とならば、いまは護岸施設説が有力視されている博多遺跡群第68次調査の石積み遺構は、同じ13世紀後半の年代があたえられているにもかかわらず、ほとんどの石材は能古島で獲得されたと考えられている（井澤編 1992）。同地点近傍の第103次調査で検出された石組遺構も、名高層の礫岩・砂岩が使われているようでない（塩屋ほか 1998）。博多で行われる土木事業にとって、名高層は唯一の選択肢でないことを、これは意味している。

律宗の博多進出はもう1点、大陸文物を受容し、それを得宗・北条氏一門へとダイレクトに届けることが期待されていた（川添 前掲1975）。しかし宮崎宮や諸禪寺が利権を掌握する博多において、新規勢力が参入するのは、たとえ得宗の外護があってもそう簡単ではなかっただろう。そのうえ箱崎への働きかけも必要であった。このようにして律宗の置かれていた状況を勘案していくと、礫岩・砂岩を選択し、博多・箱崎の防塁を作ったことの思惑が、飄々ながらみえてくるのである。すなわち第一には、大陸貿易を主導する両地区に対して見える形の貢献を果たすことであり、第二に石材の搬送を通じて、津と航路の利用を既成事実化してしまうことである。礫岩・砂岩産地の多々良川北岸と、そこに向かって延びる箱崎砂丘の先端は、箱崎津への出入口にほかならない。

畢竟、元寇防塁の築造には、もう1つの戦略が埋め込まれていたように思うのである。国際貿易都市の参入を企図した律宗の、それこそ橋頭堡であった。（齋藤瑞穂・三阪一徳・福永将大）

註

- 1) 溝伏遺構・大溝に関する言及を振り返ると、HZK1601地点SD01では、「埋土②」とされているに黄褐色・黄褐色砂層を溝伏遺構の下層、上に堆積した「埋土③」暗褐色・褐色砂層を同遺構の上層としているように読み取れる（福田・森編 2018）。HZK1702地点でも、溝伏遺構SD01はに黄褐色砂を主とする「埋土①」を下層として、黒褐色砂を主とする埋土②を上層として捉えられた（三阪・谷編 2019）。しかしながらこのHZK1702地点の例は上層が下層を切って堆積しているうえに、立ち上がりも明確でない。黒褐色ないし暗褐色砂層とに黄褐色砂の層とが1つの遺構の上下を成すか、あるいは別の遺構であるかは、この遺跡の調査を引き継いだ筆者らに残された大きな課題だったのである。解決に貢献したのは、HZK1803地点であった。叙上の地点でいう「下層」の立ち上がり、「上層」と評された暗褐色砂の立ち上がりは重ならず、ズレがあって、かつ、「上層」が「下層」を切る（第14図8・12層→6・7層、巻頭図版3上段）。すなわち防塁を構成する大溝のうち、現在まで残ったのは、明るい色を呈する「下層」の部分のみというわけである。ちなみに、HZK1805地点で大溝SD11を検出したトレンチ4は（第54図）、HZK1601地点の断面観察点と極めて近い位置に設定された。したがって、SD11がHZK1601地点で報告された溝伏遺構SD01に相当するとみてほぼ間違いないが、HZK1805地点での所見は「暗褐色砂層」がSD11の掘り込みラインを切って堆積していることから、SD11の廃絶・埋没後の所産であることは確実である（108頁）であった。
- 2) 川添（2006）をあわせて参照。
- 3) 第VI章岩永報告「中山平次郎の元寇防塁踏査と石材収集」参照。
- 4) 大塚紀宜は防塁の「地政学的検討」として、「各地点の防塁が担った防衛的機能とその対象となったもの（集落、公的施設など）」（大塚 2013：311頁）を試考した。このうち、今津地区に関する「この地点に元軍が上陸しても、

その進軍は元岡・志摩部方面へ大きく迂回することを要求されるため、この地点へ上陸し軍勢を展開させることは決して有利なものではないと推測される。にもかかわらずこの地点に防塁を築造したのは、今津港の防衛という面を最重要視したことと、あくまでも元軍の上陸を阻止し、陸上戦を避ける目的を徹底させたものと推測される。」(大塚 2013: 312頁) という主張は活潑な議論を惹起するものであり、実際、服部英雄による批判がある(服部 2014)。一方、生の松原地区・蛭浜地区については、「この時代の早良平野は木田開墾と、それに伴う集落の形成が著しかったと考えられ、地域自体を防衛する必要に迫られていたものと推測される。生の松原地区、蛭浜地区はこのような目的を多分に持っていたものと考えられる」と論じるが、果たしてそうだろうか。農村防衛のために防塁を築くのは、コストに見合わない。

- 5) 「元史」巻一百五十四・洪俊奇伝。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、中国史料編99号文書(松田・森福 2010)。竹内栄喜や池内宏が「義海征日本対馬一岐宜賀等島」の「宜賀」が今津を指すことに対して(竹内 1915、池内 1931)、服部英雄は「宜賀等」までが今津を表現しているとする(服部 2014)。
- 6) 『高麗史』巻一百四・金方慶伝。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、朝鮮史料編493号文書。
- 7) 『高麗史節要』巻十九・元宗十五年十月条。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、朝鮮史料編659号文書。
- 8) 『蒙古襲来絵詞』。
- 9) 『歴代皇紀』龜山天皇文永十一年十月条。玉里文庫。
- 10) 広橋本『兼仲卿曆記』文永十一年十一月十四日条(高橋 1997)。
- 11) 筑前中村文書、津宗少弐経資書下。「鎌倉遺文」古文書編第21巻、16224号文書。「注解元寇防塁編年史料」232-233頁(川添編 1971)。川上市太郎も、すでに文永の役直後からこのような措置がとられていたとみる(川上 1941)。
- 12) 『蒙古襲来絵詞』。佐伯(2001)、堀本(2012)をあわせて参照。
- 13) 兵士材料・兵器材料という軍事史的概念については、戸田(1970)に拠る。矢田(1986)をあわせて参照。
- 14) 「元史」巻一百六十五・張瑄伝。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、朝鮮史料編106号文書。
- 15) 其出軍、頭目騎一馬、又有五六疋或三四自隨、常以準備纜索、無者赤一二疋。白石(2017)の読み下しを参照。
- 16) 『高麗史』巻二十八・忠烈王世家一・元宗十五年十月乙巳条。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、朝鮮史料編160号文書。
- 17) 「元史」巻八・世祖本紀・至元十一年三月条。『(元寇) 関係史料集(稿) II』、中国史料編12号文書。
- 18) 育成馬の場合であるが、2haあたり3~8頭収容するのが良いという(沢崎 1987)。志賀島の面積が5.8km²=580haであるから、採食しうる牧草が全島にあつたとしても、2300頭余が限界であろう。また、輸送が馬にかかる負担も小さくなく、振動や揺れはとりわけ大きなストレスとなる(及川ほか 2011など)。
- 19) 『八幡愚童記』類従本。ちなみに、相田はこの論文で、一切愚童記について言及していない。
- 20) 川添昭二「文献からみた元寇防塁」(鏡山ほか(1968)所収)。なおこの表では、川添編(1971)に代表させている。なお、1971年の記述で、「昭和45年1月・3月に再調査・発掘された百道原(西南学院大学体育館南側)の石築地遺構は、本体となる石築地とほぼ同じ規模の土砂の二次的防塁がその背面(南側)に接続しており、これが裏加佐といわれるもの遺構例ではないかと推察される」(117~118頁)という部分もあるが、報告書(柳田編 1970)でこれに相当する説明はない。
- 21) 佐伯弘次「箱崎の元寇防塁と薩摩」(福田・森福(2018)所収)。
- 22) 中山は「八幡愚童記」として史料を提示しているが、本章では「愚童記」で統一する。
- 23) 愚童記がこれまでのように扱われてきたかは、川添(1977)に学んでいる。ちなみに中山は、「先づ土堤を築き次に其頂上に石垣を設計すや、「先づ一定の高さに土砂を盛りて堤防跡地を築き」(中山 1915: 7・8頁)という記述から察せられるように、石積みの基盤である砂堤もまた、人の手で積みあげたと考えていた。これは当時、砂丘の形成・発達メカニズムの研究が進んでおらず(多田 1975)、博多湾岸における砂丘列の群を認識できていなかったことをよく反映する。この中山の理解について、大塚紀宜は「中山は防塁の構造について指摘し、防塁を単なる石垣ではなく高く砂堤を盛った構造物として認め、初めて「元寇防塁」の名称を与えている[中山 1913]。この「高く砂堤を盛った構造物」は、現況で石垣の上部のみが砂の上に露出している状況を示しているものと考えられる」(大塚 2013: 302頁)と解説したが、どの部分を讀むと「砂の上に露出している状況を示していると考えられる」のかが詳らかでない。
- 24) 川上報告もまた件の部分を引用し、「外面急にして、内面は馬に^{ウツ}馳け上る如くとあれば、石垣の内部を數尺土壌にて補強増盛し緩傾斜を与へたものと思はる」(川上 1941: 62頁)と述べている。

- 25) 薩摩川田家文書、島津忠宗覆勅状。『鎌倉遺文』古文書編第22巻、16952号文書。『注解元寇防塁編年史料』242頁。
- 26) 薩摩入来院文書、箱崎要害所石築地配分状。『鎌倉遺文』古文書編第26巻、19749号文書。『注解元寇防塁編年史料』310～311頁。
- 27) 北比島文書、薩摩守護島津氏奉行入違奉書。『鎌倉遺文』古文書編第29巻、22514号文書。『注解元寇防塁編年史料』350頁。
- 28) 薩摩旧記権印文書、薩摩新田宮石築地用途支配状案。『鎌倉遺文』古文書編第21巻、16019号文書。『注解元寇防塁編年史料』228～230頁。
- 29) 福岡市博多区にも須崎町がある。川添も「洲崎をかりに現在の須崎町付近に当てるとすると、薩摩国が分担した宮崎地区の区域が問題になってくる」（川添編 1971：229頁）と書き添え、もう1つの可能性と派生する問題の提示を忘れた。分担区域の問題をひとまずおくと、須崎町は博多造跡群第111次調査で検出された防塁石積み遺構（佐藤編 2002、井上 2008）を西に延長した先にあり、防塁が築造された可能性は充分ある。須崎町で実施された第155次調査で、13世紀以降の整地痕跡が検出されている点も（赤坂編 2007）、福水が問題提起する HZK1805地点の造成との関連で注目しておきたい。
- 30) 肥前深江文書、少式経資石築地役催促状。『鎌倉遺文』古文書編第16巻、12260号文書。『注解元寇防塁編年史料』147～149頁。
- 31) 調所氏家譜、大隅国在庁石築地役支配注文案。『鎌倉遺文』古文書編第16巻、12461号文書。『注解元寇防塁編年史料』164～176頁。
- 32) 種子については、内海泰弘准教授ならびに井上晋氏より御教示をたまわった。
- 33) 肥前武雄神社文書、少式経資書状。『鎌倉遺文』古文書編第19巻、14251号文書。『注解元寇防塁編年史料』186～187頁。
- 34) 『大乗院寺社雑事記』尊尊大僧正記百三十七、長享三年六月廿八日条（辻編 1934）。
- 35) 『大乗院寺社雑事記』尊尊大僧正記百三十七、長享三年八月十六日条。岡本（2006）は、「延徳元年8月16日条」と記すが、正しくない。
- 36) 『大乗院寺社雑事記』尊尊大僧正記百七十八、明応八年二月二十六日条（辻編 1936）。
- 37) 武谷（1921、1922）および堀本一繁「史跡元寇防塁地蔵松原史跡指定地について」（福田・森編（2018）所収）。
- 38) 足立達朗・田尻義了「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」（福田・森編（2018）所収）。
- 39) 箱崎八幡宮司葦津磯夫報告、『伏敵編』巻之三（山田編 1891）。
- 40) 西園ほか（2001）では、「各々の国から人夫を連れて博多に向かうことになっていた」（33頁）と、農民の語が外れている。
- 41) 海東諸国記、〔60〕。岩波文庫青458-L。
- 42) 原文は「箱崎松原にあった宮崎宮末の律宗寺院」である。タイトル及び前後の文脈から、「箱崎松原」は「地蔵松原」の書き間違えと推測した。なお、桃崎は、①和歌山県海南市下津町地蔵峰寺例（元亨3年（1323）、大工薩摩権守行経作）→②福岡市博多区入定寺例→③奈良県奈良市川久保町念声寺例→④箱崎勝馬地蔵の推移を提示する（桃崎 2017）。

引用文献

- 相田二郎 1934 『異国要害石築地の研究』『歴史地理』第63巻第5号 日本歴史地理学会 75～106頁
- 相田二郎 1958 [1982] 『蒙古襲来の研究』増補版 吉川弘文館
- 赤坂 亨(編) 2007 『博多113—博多造跡群第154次発掘調査報告—』福岡市教育委員会
- 網野善彦 1974 『蒙古襲来』小学館
- 荒牧宏行(編) 2001 『国史跡元寇防塁（生の松原地区）復元・修理報告書』福岡市教育委員会
- 池内 宏 1931 『元寇の新研究』東洋文庫
- 井沢洋一(編) 1992 『博多32—博多造跡群第68次発掘調査報告—』福岡市教育委員会
- 伊藤幸司 2018 『中世の箱崎と東アジア』『アジアのなかの博多湾と箱崎』九州史学研究会・勉誠出版 36～53頁
- 井上麻子 2008 『博多の元寇防塁』『中世都市・博多を掘る』海鳥社 48～51頁
- 内海泰弘 2011 『サカキ型（サカキ・ヒサカキ）』『カラー版日本有用樹木誌』海青社 110～111頁

- 及川正明・前田洋佑 2011「競走馬の輸送に伴う生体反応」『産業動物臨床医学雑誌』第2巻第4号 日本畜産臨床学会・大動物臨床研究会 205-210頁
- 大塚紀宜 2013「元寇防塁と博多湾一防塁の構造とその戦略的機能について」『新修福岡市史特別編—自然と道路からみた福岡の歴史—』福岡市史編集委員会・福岡市 302-317頁
- 大塚紀宜(編) 2002「西新地区元寇防塁発掘調査報告書」福岡市教育委員会
- 大塚紀宜(編) 2007「香椎地区遺跡確認調査報告書」福岡市教育委員会
- 岡本省吾・北村四郎 1959「原色日本樹木図鑑」保育社
- 岡本智子 2006「イシクラ」考—織豊期以前の石垣とその工人—『織豊系城郭の成立と大和』大和中世考古学研究会・織豊期城郭研究会 137-153頁
- 岡本智子 2019「南都における石工と石垣積み工人」『中世石工の考古学』高志書院 245-267頁
- 鏡山 猛ほか 1968「生の松原元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の考古学的調査—」福岡市教育委員会
- 鏡山 猛ほか 1969「今津元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第二次(昭和43年度)調査—」福岡市教育委員会
- 川合 康 1991「治承・寿永の「戦争」と鎌倉幕府」『日本史研究』第344号 日本史研究会 60-94頁
- 川合 康 1996「源平合戦の虚像を測く—治承・寿永内乱史研究—」講談社
- 川勝政太郎 1967「日本石材工芸史」綜芸舎
- 川上市太郎 1941「元寇史蹟」地之巻 福岡県
- 川添昭二 1975「鎌倉時代の対外関係と文物の移入」『岩波講座日本歴史』第6巻 岩波書店 41-83頁
- 川添昭二 1977「蒙古襲来研究史論」雄山閣出版
- 川添昭二 1990「南北朝期博多文化の展開と対外関係」『地域における国際化の歴史的展開に関する総合研究—九州地域における—』九州大学文学部 43-66頁
- 川添昭二 2006「元寇防塁が語るもの—福岡市史編さんに備えて—」『市史研究ふくおか』創刊号 福岡市博物館市史編さん室 5-39頁
- 川添昭二(編) 1971「注解元寇防塁編年史料—異国警固番役史料の研究—」福岡市教育委員会
- 川畑和弘(編) 2004「F之郷遺跡確認調査報告書1—第28・29・31・32次調査の報告書—」守山市教育委員会
- 木下謙太郎 1915「元寇防塁の石」『元寇史蹟の新研究』丸善 336-352頁
- 藏富士寛(編) 2019「元寇防塁—調査総括報告書—」福岡市教育委員会
- 黒田俊雄 1965「蒙古襲来」中央公論社
- 小松茂美(編) 1982「春日権現験記録」上 中央公論社
- 斎藤直子 1995「中世前期鎌倉の海岸線と港湾機能」『中世東国の物流と都市』山川出版社 243-280頁
- 佐伯弘次 2001「軍事的拠点としての中世箱崎津」『博多研究会誌』第9号 博多研究会 33-36頁
- 佐伯弘次 2003「モンゴル襲来の衝撃」中央公論新社
- 佐藤一郎(編) 2002「博多85—博多小学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—」福岡市教育委員会
- 佐藤浩司 2011「九州・沖縄(2)一中・近世—」『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海青社 312-320頁
- 淨崎 坦 1987「馬は語る—人間・家畜・自然—」岩波書店
- 塩屋勝利・井澤洋一 1998「博多遺跡群第103次調査(HKT-103)」『福岡市埋蔵文化財年報』Vol.11 福岡市教育委員会 94-95頁
- 清水邦彦 1995「貞慶の地蔵信仰」『倫理学』第12号 筑波大学倫理学原論研究会 29-40頁
- 白石典之 2017「モンゴル帝国誕生—チンギス・カンの都を掘る—」講談社
- 杉山正明 1992「大モンゴルの世界—陸と海の巨大帝国—」角川書店
- 杉原敏之(編) 2009「水城跡」九州歴史資料館
- 高橋秀樹 1997「広橋家旧蔵「兼仲卿曆記」文永十一年」について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第70集 国立歴史民俗博物館 41-77頁
- 竹内栄喜 1915「蒙古軍上陸に関する新研究」『元寇史蹟の新研究』丸善 1-38頁
- 竹田雅弘 1915「史蹟現地講演会記録」『元寇史蹟の新研究』丸善 353-384頁

- 武谷水城 1921『多々良以東に於ける元寇防塁の有無に就て一附 香椎発掘の石塁一』『筑紫史談』第24集 筑紫史談会 32~41頁
- 武谷水城 1922『多々良以東元寇防塁の有無に就ての補足—香椎発掘の石土混塁と地蔵松原発掘の石塁—』『筑紫史談』第25集 筑紫史談会 32~36頁
- 多田文男 1975『日本における砂丘生成に関する研究史』『第四紀研究』第14巻第4号 日本第四紀学会 177~182頁
- 辻善之助(編) 1934『大乗院寺社雑事記』第9巻 三教書院
- 辻善之助(編) 1936『大乗院寺社雑事記』第11巻 三教書院
- 土井忠生・森田 武・長南 実(編訳) 1980『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 戸田芳実 1970『国衙軍制の形成過程—武士発生史再検討の一視点—』『中世の権力と民衆』日本史研究會史料研究部会・創元社 5~45頁
- 中山平次郎 1913a『福岡附近の史蹟—殊に元寇の史蹟—』九州帝国大学医科大學雑誌部
- 中山平次郎 1913b『福岡の石塁(二)』『福岡日日新聞』大正2年6月13日、9面(『古代の博多』に収録、214~236頁)
- 中山平次郎 1913c『福岡の石塁(四)』『福岡日日新聞』大正2年6月16日、7面(『古代の博多』に収録、同前)
- 中山平次郎 1915『元寇防塁址と博多湾沿岸の地形変化(上)』『歴史地理』第25巻第3号 日本歴史地理学会 1~27頁
- 西園禮三・柳田純孝 2001『元寇と博多—写真で読む蒙古襲来—』西日本新聞社
- バツフェンゲル,T. 2014『モンゴルにおける遺跡出土ウマの体高について』『動物考古学』第31号 日本動物考古学会 55~69頁
- 服部英雄 2003『歴史を読み解く—さまざまな史料と視角—』青史出版
- 服部英雄 2005『日宋貿易の実態—「諸国」來客の異客たちと、チャイナタウン「唐房」—』『東アジアと日本—交流と変容—』第2号 九州大学大学院比較社会文化研究院 33~64頁
- 服部英雄 2014『蒙古襲来』山川出版社
- 服部英雄 2017『蒙古襲来と神風—中世の対外戦争の真実—』中央公論新社
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 藤澤典彦 2000『律と石』『叢尊・忍性と律宗系集団』シンポジウム「叢尊・忍性と律宗系集団」実行委員会・大和古中近研究会 31~51頁
- 松田善之・森平雅彦(編) 2010『元寇』関係史料集(横) II—中国・朝鮮史料編— 九州大学大学院人文科学研究会 編
- 古田藤治 1997『終戦のころ、そして箱崎』『九州大学大学史料室ニュース』第9号 九州大学大学史料室 2~3頁
- 堀本一繁 2012『「蒙古襲来絵詞」の復原にみる竹崎季長の移動経路』『交通史研究』第78号 交通史学会 1~18頁
- 松尾剛次 2006『博多大乗寺と中世都市博多』『鎌倉遺文研究』第18号 鎌倉遺文研究会 26~39頁
- 三浦圭一 1984『中世の土木と職人集団』『講座・日本技術の土木史』第6巻 日本評論社 121~156頁
- 三阪一徳・齋藤瑞穂・福永将大・谷 直子・宮本一夫 2019『箱崎地区における元寇防塁の構造と立地環境』『令和元年度九州考古学会総会発表資料集』九州考古学会 80~89頁
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019『九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—』九州大学埋蔵文化財調査室
- 水野正好 2000『叢尊・忍性の考古学』『叢尊・忍性と律宗系集団』シンポジウム「叢尊・忍性と律宗系集団」実行委員会・大和古中近研究会 1~22頁
- 桃崎祐輔 2013『福岡市東区箱崎松原跡軍地蔵石仏と米一丸塚第一宮崎宮周辺の御影石製石造物にみる西大寺律—一条氏との関係に注目して—』『御影石と中世の流通—石材識別と石造物の形態・分布—』高志書院 229~248頁
- 桃崎祐輔 2017『瀕する石工と瓦工—地蔵峰寺の伊豫石地蔵と紀州の中世瓦工—』『紀州地域学共同研究会研究集会』2017年夏・パネルディスカッション A 中世の紀州地域と東アジア海城史 資料
- 山田安楽(編) 1891『伏敵編』吉川平七
- 矢田俊文 1986『元寇の軍事力と戦術』『毛利元就のすべて』新人物往来社 53~73頁
- 柳田純孝 1984『元寇防塁と博多湾の地形』『古代の博多』九州大学出版会 365~394頁

- 柳田純孝 1988「元寇防塁と中世の海岸線」『よみがえる中世』第1巻 平凡社 180～194頁
- 柳田純孝(編) 1970『西新元寇防塁発掘調査概報—鎌倉時代(13世紀)における蒙古襲来に対する石築地の第三次(昭和44年度)調査—』福岡市教育委員会
- 八尋和泉 1991「九州西大寺末寺の美術遺品」『仏教芸術』第199号 仏教芸術学会 32～62頁
- 山内豊穂・巻内勝彦 1972「元寇防塁構造の土木学的考察」『九州大学工学集報』第45巻第3号 九州大学工学部 363～369頁
- 山川 均 2000「西大寺流律宗と開発」『叡尊・忍性と律宗系集団』シンポジウム「叡尊・忍性と律宗系集団」実行委員会・大和古中近研究会 163～191頁
- 山口謙治 2011「九州・沖縄(1) —古代以前—」『木の考古学—出土木製品用材データベース—』海音社 300～311頁
- 奥崎 淳 1954「博多大乗寺跡地蔵石仏」『史迹と美術』第24巻第8号 史迹・美術同致会 311～312頁
- 吉田丈夫 1969「忍性の社会事業について」『日本における社会と宗教』吉川弘文館 99～143頁

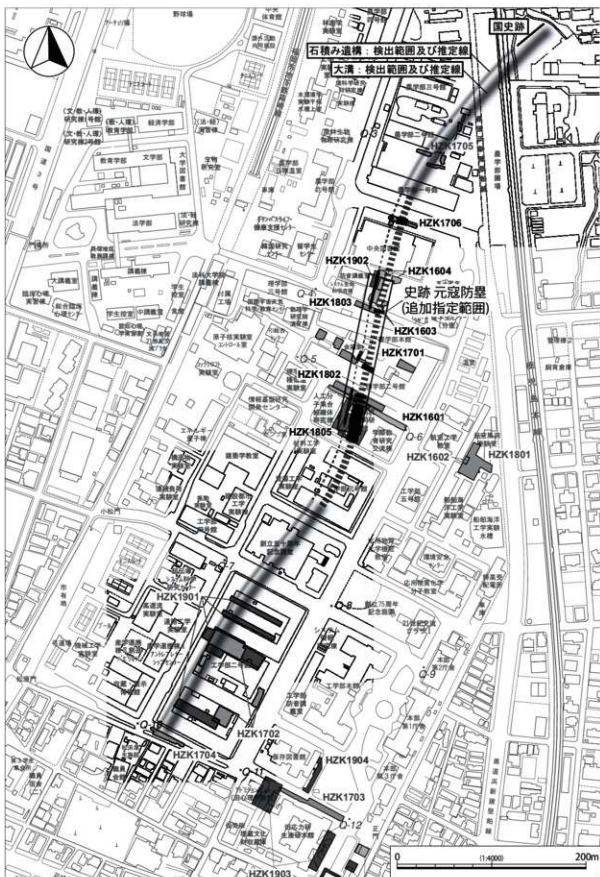
VII 調査のまとめ

2018（平成30）年度ならびに2019（平成31・令和元）年度の元寇防塁関係調査地点は、HZK1802、HZK1803、HZK1805、HZK1902である（第87図）。この内、HZK1803地点とHZK1902地点は中央図書館前南地点、HZK1802地点とHZK1805地点は理学部二号館前南地点の調査である。前者は、中央図書館前南地点で元寇防塁を最初に発見したHZK1603地点の南側の続き部分のHZK1803地点と、HZK1603地点とHZK1604地点の間に位置する防音講義室のHZK1902地点において、元寇防塁遺構を確認するための調査である。後者の理学部二号館前南地点では、2016年の第1回調査であるHZK1601地点で発見された大溝ならびに2017年の理学部本館HZK1701地点で発見された石積み遺構ならびに大溝の元寇防塁遺構が南へ連続する地点を確認するための調査であった。

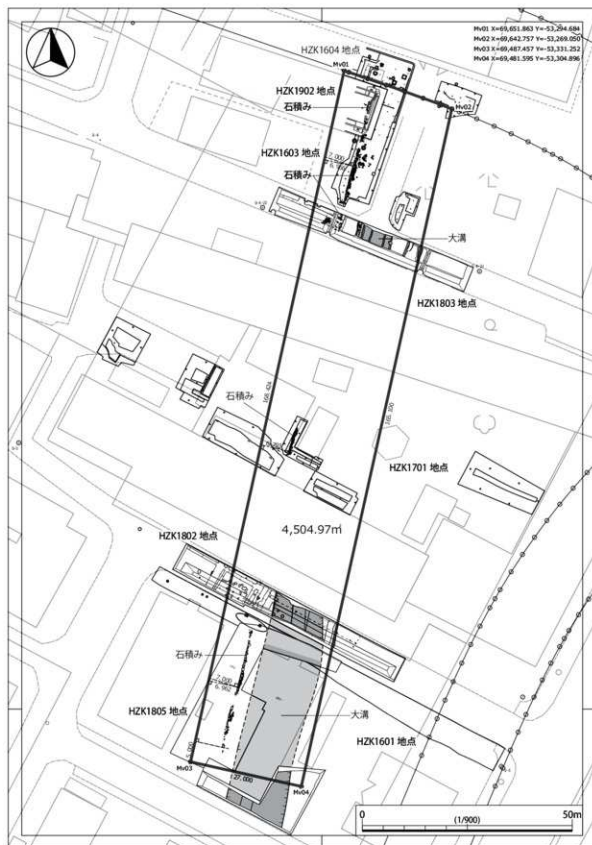
HZK1802地点はHZK1601地点の北側に接して大溝だけでなく、石積み遺構を検出することができた。一方で、工学部三号館内の試掘では建物基礎などによる破壊で元寇防塁は発見されなかった。そこで、HZK1802・HZK1601地点の南側の工学部工学研究科共同研究棟と人工分子集合組織体研究棟の間の通路部分に元寇防塁遺構が存在するかを確認する必要があり、HZK1805地点での調査を行った。この部分の元寇防塁遺構は通路部分にかかっていたこともあり、遺存状況がよく、長さ26mに渡って石積み遺構が連続して存在していた。そのため、2018年度中に調査終了予定であったが、2019年5月まで調査を継続せざるを得なかった。

これらの調査の中でも、特に理学部から工学部にかけては、2019年度前半期までに防塁の範囲を確定し、国史跡元寇防塁の追加指定のための根拠資料を提示する必要がある。その調査結果は、「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡」（三阪・谷編 2019）の「元寇防塁遺跡調査の成果と課題」でまとめ、公開した¹⁾。その結果をもとに、九州大学埋蔵文化財調査委員会として史跡範囲を確定し、さらに福岡市が開催した令和元年度九州大学箱崎キャンパス跡地内遺跡検討委員会で史跡範囲が審議了承された。それらの結果を福岡市が国の文化財審議会文化財分科会に具申し、さらに2019年11月15日に文化財審議会文化財分科会が答申し、2020年3月10日に国史跡元寇防塁の追加指定の官報告示がなされた。

HZK1802地点のジオスライサーでの調査により、大溝が人工的に開削されたものであることが明らかとなった（三阪・谷編 2019）。また、HZK1802・HZK1803・HZK1805地点の調査で、11～13世紀前半の河川成の堆積によって形成された砂州を掘り込んで大溝が形成されるとともに、出土遺物や炭化物の放射性炭素年代から、この大溝の埋没が14世紀代であることが確認された。例えば、HZK1805の大溝SD11の出土遺物は13世紀から14世紀前半である。そして、大溝は石積み遺構の側縁から幅約5mのところから始まり、幅が約9～14mをなす。石積み遺構と大溝はセットをなすものであり、海岸側に「蒙古襲来絵詞」に描かれたような高さ約2mの礫石を6段積み上げ幅約5mの土塁を築き、さらにその背後に大溝を掘った元寇防塁を復元することが可能となった。大溝の深さは約1mであるので、土塁上部と大溝底部の比高差は3mあまりで、防御機能として充分機能する比高差をなす。文献記載によれば、元寇防塁は1276年に修築後、何回かの改修を経て14世紀前葉の鎌倉末期までは存続していた²⁾。約50年間は、防御的な施設として存在していたと考えられていたが、ほぼその期間に元寇防塁が機能していたことが、考古学的にも明らかとなったのである。そこで、石積み遺構から大溝までを含む中央図書館前南地点から理学部二号館前南地点までの長さ約180m、幅27mに渡って、



第87図 箱崎キャンパスの元冠防壁遺構



第88図 追加指定範囲 (福岡市埋蔵文化財課提供図面を一部改変)

国史跡元寇防塁として追加指定することとした（第88図）。なお、HZK1604地点で発見された石積み遺構は国史跡に含まれていないが、建設予定の道路下面に現状保存される。

今後、中央図書館前北地点から農学部にかけての元寇防塁遺構に関しては、2020年度の調査の結果を待って、史跡指定範囲を決定することとしている。なお、HZK1702地点やHZK1704地点のように大溝あるいは大溝が一部残るのみで石積み遺構が検出できなかった地点は、元寇防塁の本体部分が確認できなかったことから、史跡指定範囲とはせずに記録保存とすることとした。また、第VI章の岩水省三による元寇防塁推定線の検討にあるように、今後の工学部二号館や農学部における発掘調査の結果により、元寇防塁の推定位置（第87図）が多少変更される可能性がある。

大溝はHZK1802地点からHZK1805地点では、幅約14mであるのに対し、HZK1803地点では8.8mと狭くなっている。これは「裏加佐」の解釈は別として、土塁部分の補修のためには大溝が何回か掘り返され、それに応じて大溝幅が広がった可能性もある。また、理学部のHZK1701地点からHZK1805地点の大溝からは、輸入陶磁器を始めとして多くの遺物が出土している。このことは大溝より陸側の地点には、何らかの生活の痕跡があることを示している。HZK1802地点からHZK1805地点では、大溝の陸側にHZK1802地点のSD122やHZK1805地点のSD13-15といった浅い溝が存在しており、その溝の埋没はおおよそ14世紀代と考えられている。これら溝の使用時期は13～14世紀代と考えられ、元寇防塁が機能していた段階のものであるところから、元寇防塁と同時期に利用された屋敷地の区画溝と想定している³¹。すなわち、文永の役後の1276年に創建された元寇防塁は、その後、鎌倉末までの約50年間維持管理されていたのであり、その間に箱崎地区の元寇防塁を警護していた薩摩の武士や御家人たちの屋敷地の可能性を考えたい。

また、第VI章で示された足立達朗による元寇防塁の石材分析において、今津、長浜、生の松原の元寇防塁の石材の一部が能古島のものであることが判明した。箱崎地区の元寇防塁の石材の一部は名島産であるように³²、石積み遺構の石材を近隣の石材産地から船で運搬して入手していた可能性が考えられる。また、HZK1702地点で発見された礎石は、その形態や大きさから宋・元代の大型船の礎石である可能性が推測されていた³³。第VI章で述べられた足立達朗による礎石の石材の化学分析により、これら礎石が浙江省から福建省の石材である可能性が示されている。博多綱司などと呼ばれる中国商人が12世紀から13世紀にかけて箱崎にも居住していたことが知られている（佐藤 2013）。また、菅崎宮と関係するとされる新安沖沈没船が寧波から日本に向かって出発したが、1323年である。すなわち、そうした宋や元代の商人たちが、寧波から船出した大型貿易船に乗って箱崎までやって来たことを物語る貴重な資料といえよう。

さらに、HZK1805地点では、元寇防塁から海側の海岸部に、火葬を行った土坑が発見されている。元寇防塁廃棄後、この地が荒蕪化し、火葬場に転じたことを示している。こうした火葬風習は14世紀代には全国的に普及しているようであるが、この時期、箱崎地蔵松原には勝軍地蔵堂があり、14世紀代には禅僧が活動していた。こうした律宗との関係で、火葬が廃棄された元寇防塁付近で行われたとすれば、興味深い事実である。

このように、今次調査では、元寇防塁の存続時期における防塁周辺の土地利用のみでなく、防塁廃棄後の土地利用の変遷も知ることができ、箱崎地域の地域史を探る意味においても重要な成果を得たとすることができるであろう。（宮本一夫）

註

1) 宮本一夫「元寇防塁遺跡調査の成果と課題」（三版・谷編（2019）所収）。

Ⅷ 調査のまとめ

- 2) 佐伯弘次『箱崎の元寇防塁と濠摩』（福田・森編（2018）所収）。
- 3) 宮本一夫、前掲註1。
- 4) 足立達朗・田尻義了「石積み遺構構築石材の岩石学的分析」（福田・森編（2018）所収）。
- 5) 森 貴教「中世礎石の基礎的検討—HZK1702地点出土礎石の位置づけ—」（三阪・谷編（2019）所収）。

引用文献

- 佐藤一郎 2013「箱崎遺跡—古代末から中世にかけて—」『新修福岡市史・特別編—自然と遺跡からみた福岡の歴史—』福岡市 242～247頁
- 福田正宏・森 貴教(編) 2018「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告1 箱崎遺跡—HZK1601・1603・1604地点—」九州大学埋蔵文化財調査室
- 三阪一徳・谷 直子(編) 2019「九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告2 箱崎遺跡—HZK1701・1702・1704・1705・1706地点、付 HZK1802・1803地点概要報告—」九州大学埋蔵文化財調査室



(1) 石積み遺構 SF03



(2) 石積み遺構 SF05



(3) 石積み遺構 SF05
博多湾側堆積状況



(4) 石積み遺構 SF05



(5) 石積み遺構 SF05



(6) 石積み遺構 SF02



(1) 調査区全景
陸側から博多湾方向を撮影



(2) 小礫集中 SX01
石積み遺構 SF01



(3) 基底石と
小礫集中とのレベル差



(4) サブトレンチ西側
(博多湾方面) 断面



(5) サブトレンチ中央部断面



(6) サブトレンチ中央部
大溝 SD01断面



(7) 石積み遺構 SF01 検出状況



(8) 石積み遺構 SF01 (北から)



(9) 大溝 SD01



(10) 自然流路 ND03 検出状況



(11) 溝 SD02



(12) 自然流路 ND03



(13) 鉄貨出土状況



(14) 土師器伏鍋出土状況



(1) 博多湾側から見た
石積み遺構 SF130
小礫集中 SX129



(2) 石積み遺構 SF130
(南から)



(3) 石積み遺構の後背



(4) 調査区北壁 B-B' 断面
(SF130前方部分)



(5) 調査区北壁 B-B' 断面
(SF130周辺部分)



(6) 調査区南壁 A-A' 断面



(7) 調査区南壁 A-A' 断面
(SF130周辺部分)



(8) 調査区南壁 A-A' 断面



(9) 調査区南壁 A-A' 断面
20-1層・22層境



(10) 調査区北壁 B-B'断面 SF130前方



(11) 調査区南壁 A-A'断面 SF130後背部分



(12) 調査区南壁 A-A'断面 大溝SD130清底



(13) 溝SD122



(14) 石片散布 SX127



(15) 石片散布 SX127



(16) 第1遺構面 (20-2層上面)



(17) 調査区全景 (西から)



(1) 石積み遺構 SF00
礎散布 SX08 (上層)



(2) 石積み遺構 SF00
礎散布 SX08 (上層)



(3) 石積み確認面 (南から)

(4) 石積み前面の堆積
B-B'断面



(5) 雑散布 SX08・09
と伏鍋(第40図6)



(6) 埋没進行面 (南から)





(7) 石積み遺構 SF00



(8) 石積み遺構 SF00



(9) 石積み遺構 SF00



(10) 石積み遺構 SF00



(11) 石積み遺構 SF00



(12) 築石の落下



(13) 石積み遺構 SF00



(14) 石積み遺構 SF00



(15) 石積み遺構 SF00



(16) 石積み遺構 SF00



(17) 石積み遺構 SF00



(18) 石積み遺構 SF00



(19) トレンチ4
大溝 SD11



(20) トレンチ4
大溝 SD11



(21) トレンチ4
自然流路 ND18



(22) トレンチ7
大溝 SD11



(23) トレンチ7
大溝 SD11



(24) トレンチ6
大溝 SD11
自然流路 ND16



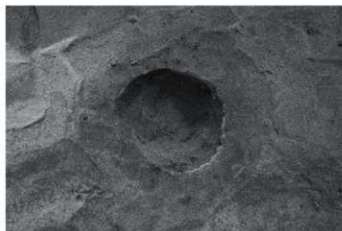
(25) 大溝 SD11の横出



(26) 大溝 SD11



(27) 調査区全景



(28) ビット SP01



(29) ビット SP02



(30) ビット SP05



(31) 土坑 SK04



(32) 土坑 SK06



(33) 土坑 SK12



(34) 土坑 SK14



(35) 溝 SD13



(36) 溝 SD15



(37) 火葬土坑 SK03 (西から)



(38) 火葬土坑 SK03 (西から)



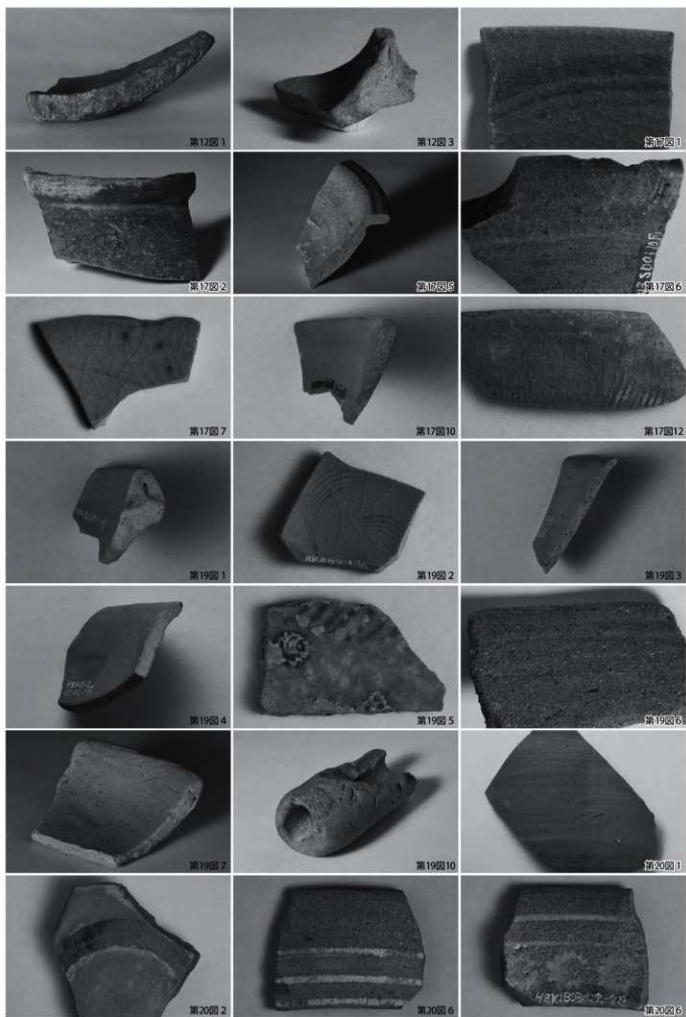
(39) 火葬土坑 SK07 (西から)

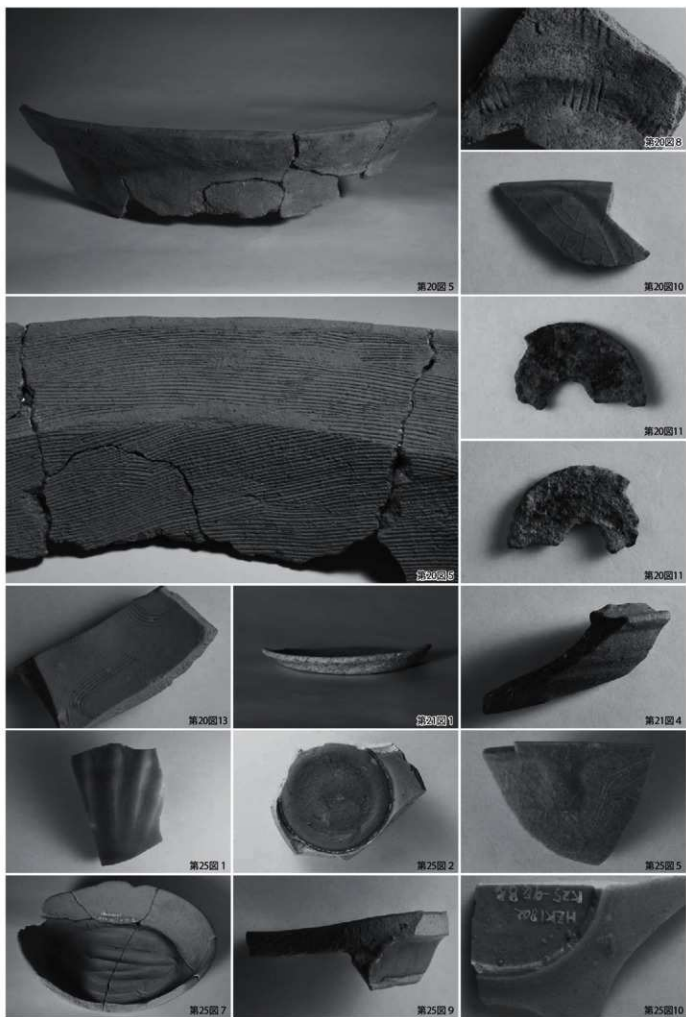


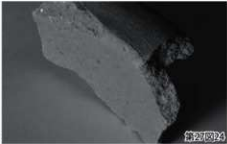
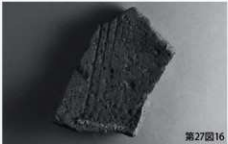
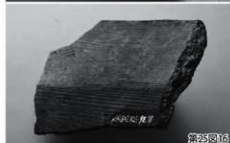
(40) 火葬土坑 SK07 (東から)

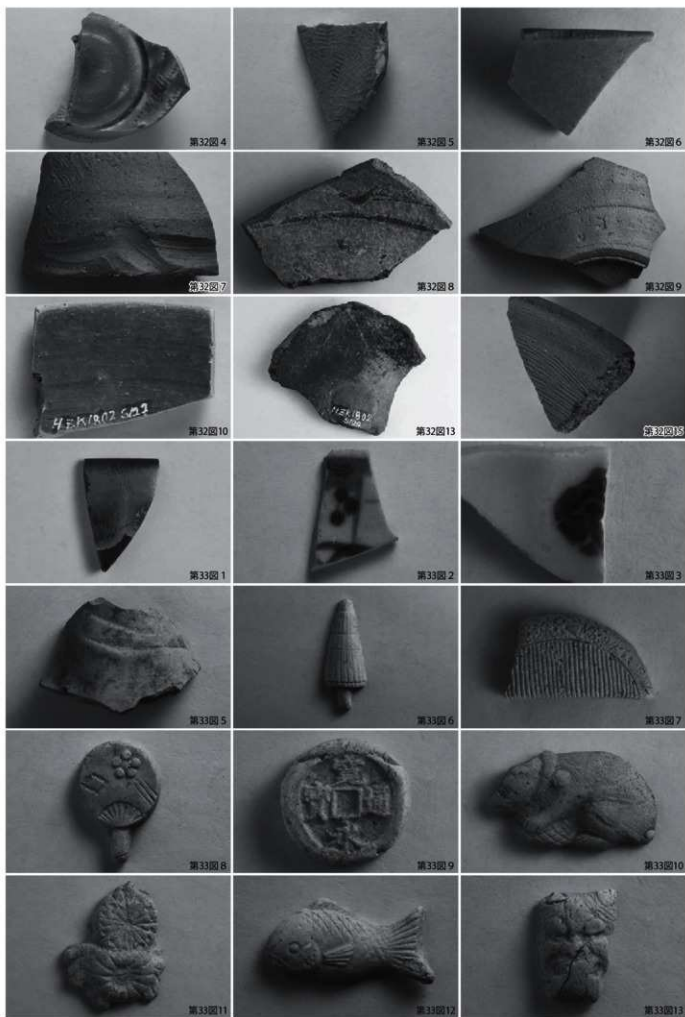


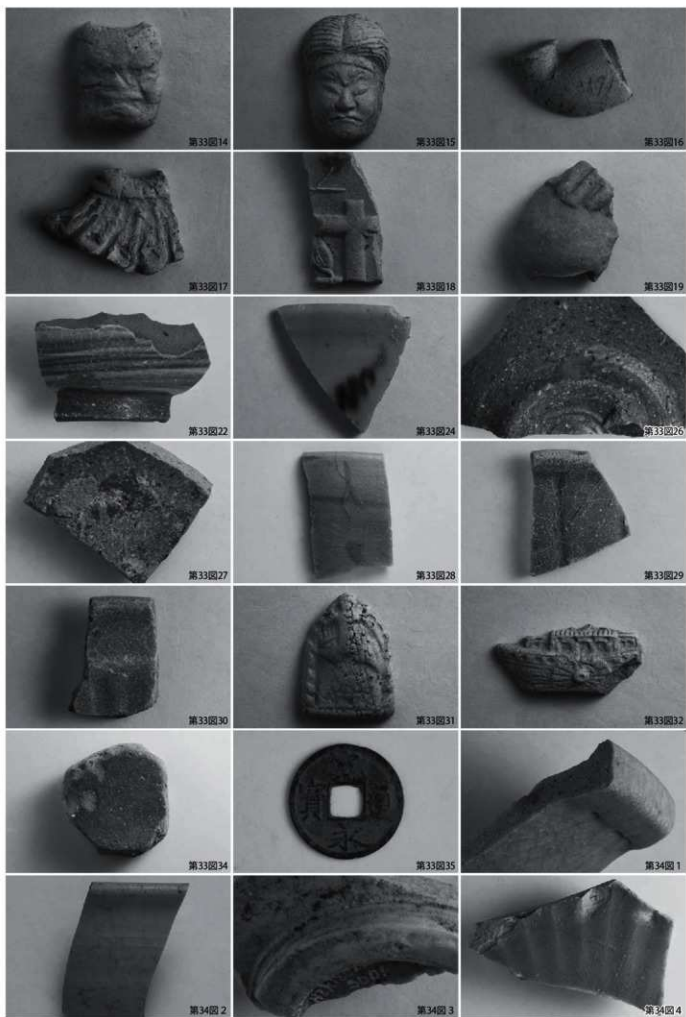
(41) 火葬土坑 SK10 (西から)

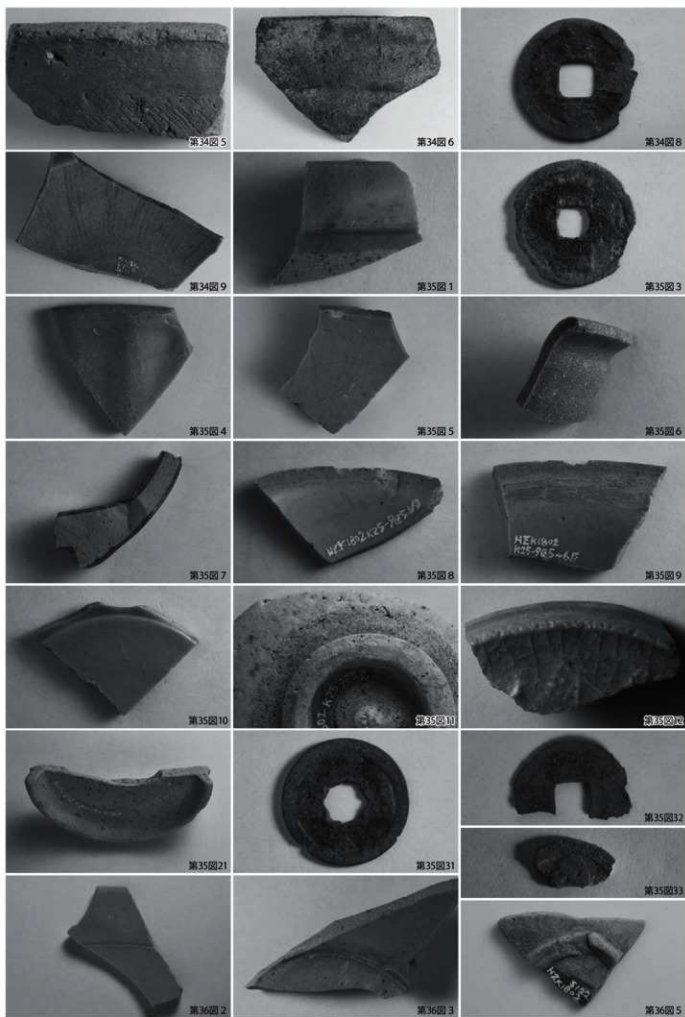


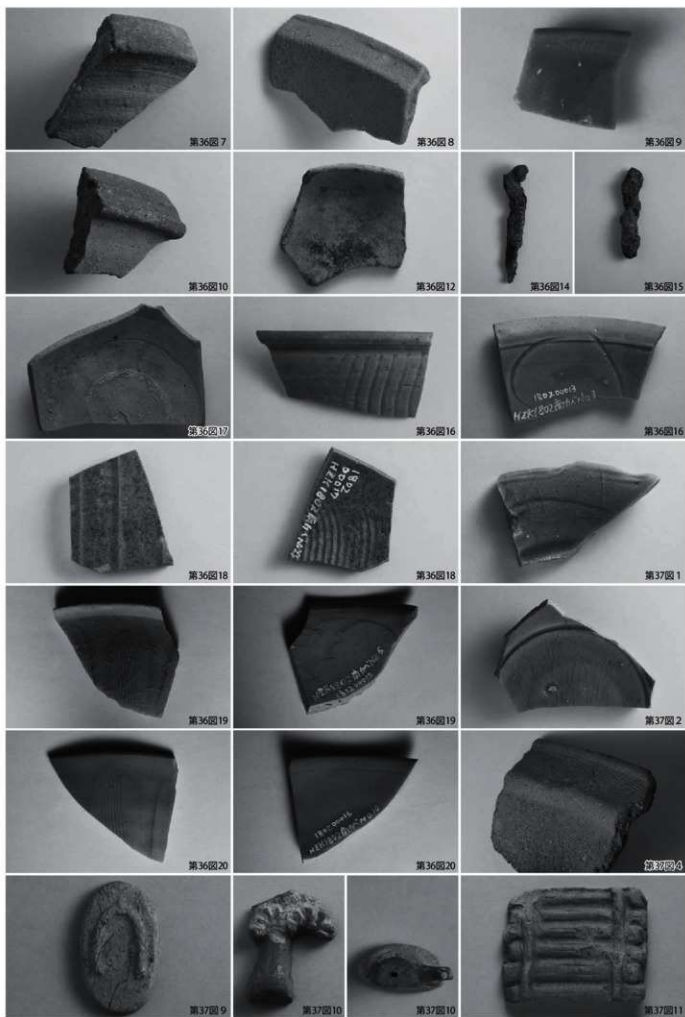


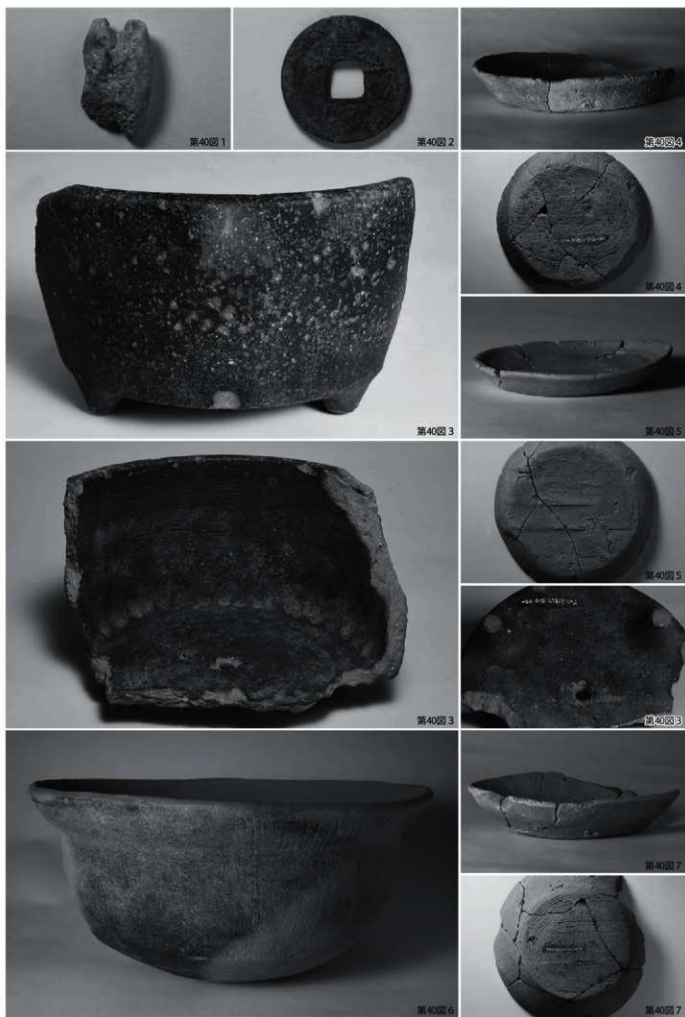


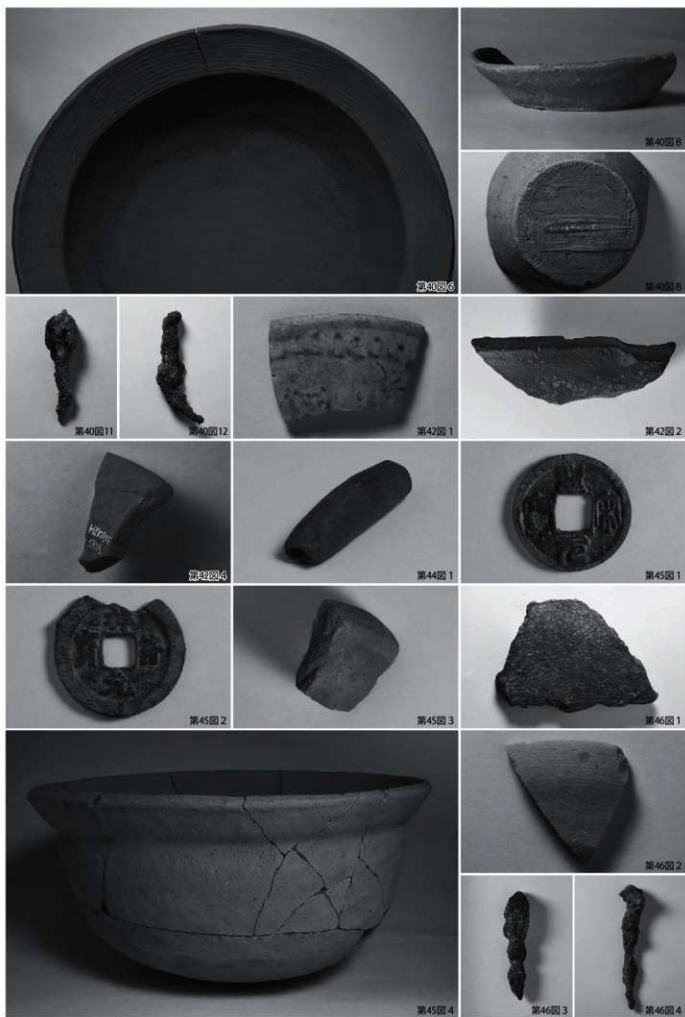














第49図4



第49図1



第49図3



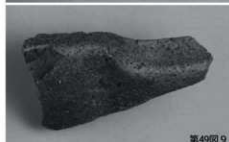
第49図4



第49図7



第49図8



第49図9



第49図10



第53図11



第53図2



第53図4



第53図5



第53図6



第53図7



第53図7



第53図8



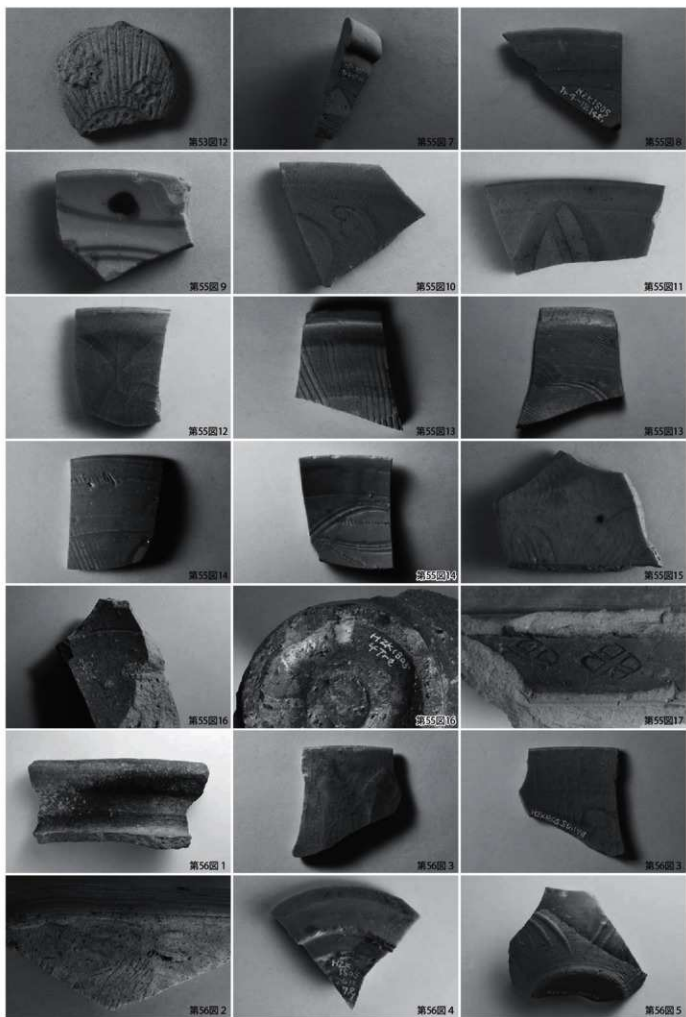
第53図10

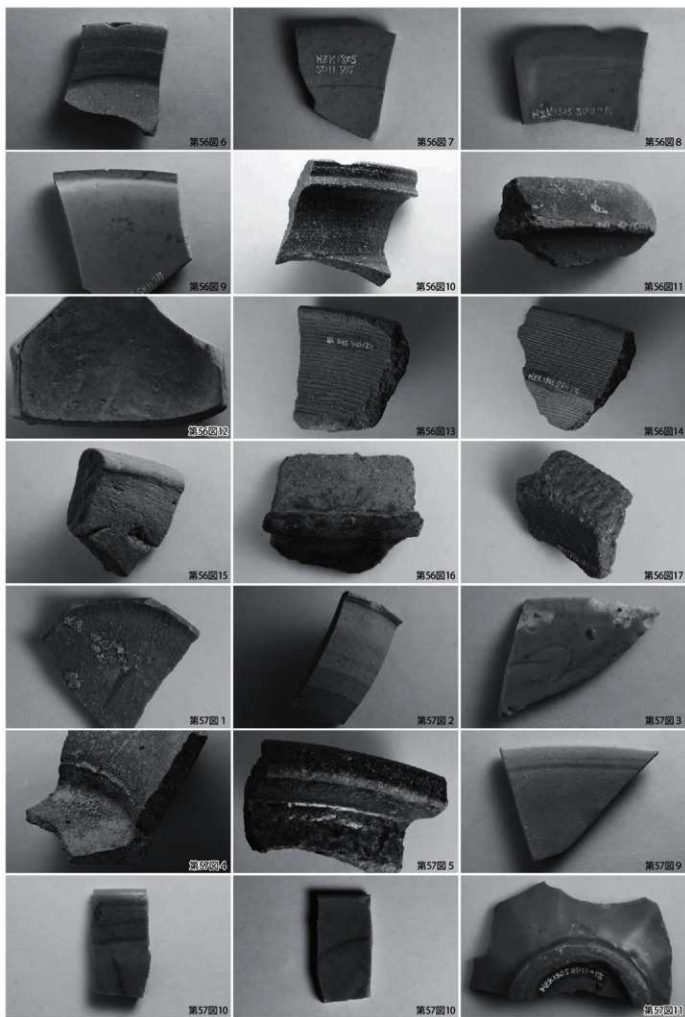


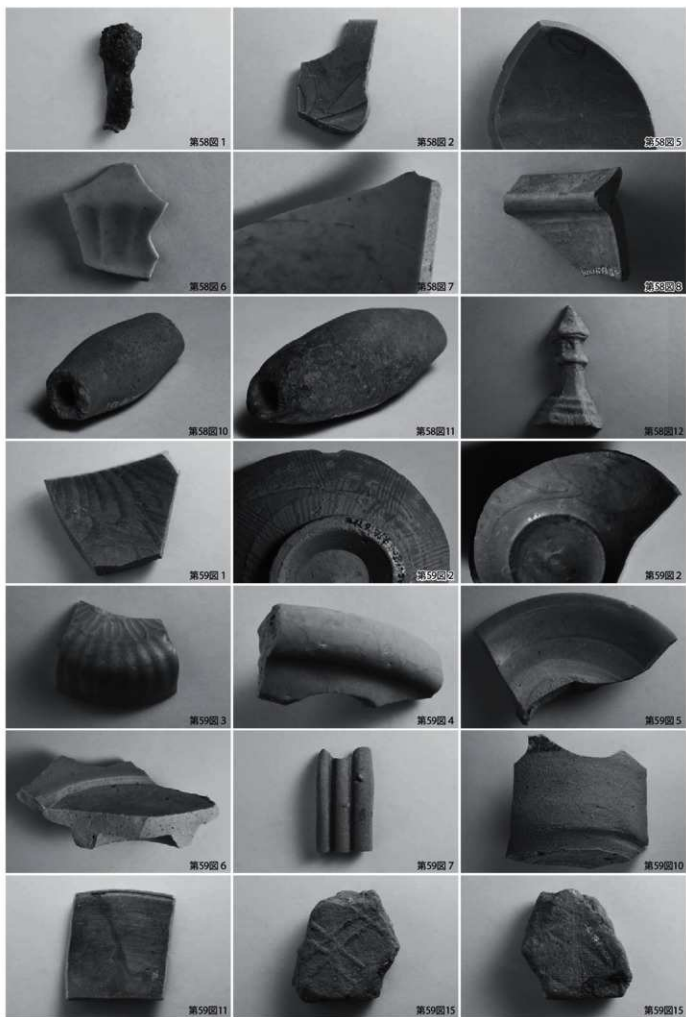
第55図6



第55図6







報告書抄録

ふりがな	はこぎさいせき—HZK1802・1803・1805・1902ちてん一							
書名	箱崎遺跡—HZK1802・1803・1805・1902地点一							
副書名	九州大学箱崎キャンパス発掘調査報告3							
シリーズ名	九州大学埋蔵文化財調査室報告							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	齋藤雄徳(編)・宮本一夫・三阪一徳・福水将大・谷直子・石井香葉・岩永省三・舟橋京子・足立達朗・米元元織・石川健・小林克也・バネオ・ラゾ AMS年代測定グループ							
編集機関	九州大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒812-8581 福岡県福岡市東区箱崎6丁目10-1							
発行年月日	2020年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
はこぎさいせき 箱崎遺跡 HZK1802地点	福岡県福岡市東区箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 32"	130° 25' 31"	20180903 ～ 20181116	400㎡	学術調査
はこぎさいせき 箱崎遺跡 HZK1803地点	福岡県福岡市東区箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 35"	130° 25' 31"	20181017 ～ 20190118	300㎡	学術調査
はこぎさいせき 箱崎遺跡 HZK1805地点	福岡県福岡市東区箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 31"	130° 25' 31"	20190315 ～ 20190510	800㎡	学術調査
はこぎさいせき 箱崎遺跡 HZK1902地点	福岡県福岡市東区箱崎6丁目	40131	2639	33° 37' 35"	130° 25' 32"	20190910 ～ 20190927	100㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
HZK1802地点	城館	中世	石積み遺構、大溝	白磁碗・皿、青白磁合子、青磁碗・坏(龍泉窯系・阿安窯系)、中国陶器(磁甕系黄釉鉄絵陶器盤ほか)、朝鮮王朝青磁・陶器、瓦質土器、土師質土、土師器(瓦質土器、土師器(管杖、北束鏡、模範鏡)、瓦玉、石球		元寇防塁。石積み遺構と大溝とで構成される。キャンパス内各地点で石積みが発出された箇所を繋ぐと、約220mに達する。		
HZK1803地点	城館	中世	石積み遺構、大溝 自然水路					
HZK1805地点	城館	中世	石積み遺構、大溝 礎散布、火葬土坑	古墳時代須恵器、近世染付碗、近世陶器・土師皿、近代朱付(九州大学武蔵)、土師、石鏃、近世銭貨、鉄釘、泥団子、土人形				
HZK1902地点	城館	中世	石積み遺構					
要約	<p>本書は、九州大学箱崎キャンパスで発見され、令和2年文部科学省告示第23号で追加指定されることとなった国指定史跡元寇防塁について、正式報告が未刊行であったHZK1802地点、HZK1803地点、HZK1805地点、HZK1902地点を報告するものである。</p> <p>元寇防塁は博多湾岸20kmに亘って築造されたといひ、福岡市西区今津・今山・長垂・生の松原・向浜・臨、早良区百道・西新、中央区地行、博多区博多、東区箱崎地蔵原で現在・検出されている。九州大学箱崎キャンパスは、このライン上に位置を占めるが、すでに消滅したものと考えられてきた。</p> <p>2016年の工事立会で石の列びが確認されて以来、九州大学埋蔵文化財調査室は、キャンパス内各所で学術調査を進めてきた。その結果、石積み遺構・溝状遺構が並行し、キャンパス内を縦貫することが判明するに至る。石積みは、長らく想定されていたラインよりも陸側を走るものの、直線的な整りがみせ、地蔵原地区に達することが見込まれている。箱崎キャンパスで確認された石積みの、現時点での北端は当調査報告第2集で報告されたHZK1706地点であり、南端は本書で報告するHZK1805地点である。北端—南端間の距離は、220m余りを測る。</p> <p>石積みの背後を並走する「溝状遺構」については、何らかの目的で掘削した「溝」なのか、浜地報部が「溝状」にみえているだけかを判断する決め手が待ち望まれていた。結果として、それを「溝」と決定づけ、石積みにももう一度を論証したのは、本書で報告する各地点である。各地点の大溝とも、防塁築成後における様々な土地利用の影響を少なからず受けているが、おおよそ石積み正面から東へ4～5mの地点で掘り込みが始まり、幅は8～15mほどである。石積みと大溝とで構成されるのは、現在のところ、このエリアのみにもみられる独自の特徴である。</p> <p>本書で報告される各地点では、防塁築成後の土地利用も明らかになった。すなわち管理されなくなった後、防塁を崩し、礎石を割つたらしい雑散布の跡や、3基の火葬土坑が発出されている。また、洪水が頻発し、幾多もの溝状水路が北流するといった、築造以前の状況も判明した。これらの地盤の悪さが築造にあつた影響を解明することが、今後の課題のひとつである。</p>							

箱崎遺跡

— HZK1802・1803・1805・1902地点 —

九州大学埋蔵文化財調査室報告 第4集

令和2年(2020)3月31日

発行 九州大学埋蔵文化財調査室
福岡市東区箱崎6-10-1

印刷 九州コンピュータ印刷
福岡市南区向野1丁目19-1

